著織物、更無勘當、相府被レ申レ不レ可レ有二禁制之由一、亦六位著二紅色一、是皆有二不レ可レ著之仰一、而不レ憚著用強乖二叡慮一、王化之薄歟、甚以歎息、弛張只懸二執權臣之心一、

長元元年十月三日甲子、藏人式部丞經任云、五節有二過差制一、不レ可レ著二綾衣一、衣五外不レ可レ著、

〔榮花物語三十六根合〕殿の大納言〇師實藤原五節いださせ給、皇后宮〇後冷泉后寛子の女房中臈下臈のきたなげなきをもをいださせ給はず、裝束ゆりさまいふかたなし、この御時には制ありて、きぬいつゝなどもあれど、さびしからねば、さるべき所々にはいみじくせさせ給、後一條院の御時こそはかゝりしか、女房童しもづかへの裝束、ひとしくあたりて心をつくすともおろかなり、中宮〇後冷泉后章子より童の裝束たてまつらせ給へり、くれなゐのうちたるに、さくのふたへもんのそのをりえだおりたるあこめ、蘇芳のかざみ、りんだうのうへのはかま、みなふたへもん也、うちたるはかまなどもれいの事なり、るりをもんにおしなどいみじうつくされたり、世中にめづらしき五節のありさまなり、童なども、ひとの程ことなるをえらせ給へり、この御ときは、をかしき事多く、御心やりてなんおはしましなしける、

〇按ズルニ、本文年月詳ナラザレドモ、公卿補任ニ據ルニ、師實ハ、康平元年四月權大納言ニ任ゼリ、而シテ此文ノ下ニ、師實三月ヲ以テ結婚スル事アリ、其次ニ、翌年內大臣ニ進ムノ文アリ、即チ康平三年ナリ、故ニ本文ハ康平元年十一月ノ事ナルベシ

〔類聚雜要抄三〕五節雜事內大臣藤原忠通令二五節進一給定文 別白

一舞姫裝束三具

丑日

赤色唐衣一領　織物褂一領　茜染打袒一領　錦鞋一足

古事類苑

神祇部二十九

新嘗祭下　相嘗祭附

祭殿及節會殿　三九三
祭殿裝飾及調度　三九五
料物用途　四〇七
職員　四一七
神饌及御饌　四二九
酒醴　同
幣帛　四三一
御服　四三二
職員服裝　四三三
叙位　四四二
賜祿　四四三
譴責　四四八
赦宥　同
諸社新嘗　同

臣庶新嘗
雜載
附相嘗祭
名稱
祭日
祭神及幣帛
諸社相嘗

四五四
四五五
四七〇
四七一
同
四八一

古事類苑

神祇部二十九

新嘗祭下　相嘗祭附

祭殿及節會殿

【類聚國史九神祇】天長七年十一月辛卯、天皇御二神嘉殿一、以申二如在一、

【續日本後紀十仁明】承和八年十一月乙卯、天皇御二神嘉殿一行二神事一、

【三代實錄十四清和】貞觀九年十一月廿日乙卯、修二新嘗會祭於神嘉殿一、

【中右記】大治二年十一月十七日癸卯、依二昨日仰一、相具右少辨參二新嘗祭一、但去春神祇官炎上之後於二中院所一被行也、

【年中行事抄十一月】中卯日新嘗祭事（廢務、有二卯用一下、）

舊例有二行幸一、於二中和院一被レ行、近代只上卿已下參入於二神祇官一行レ之、

【續日本紀十九孝謙】天平勝寶八歲十一月丁卯、廢二新嘗會一、以二諒闇故也一、（檢二神祇官記一、是年於二神祇官曹司一行二新嘗之事一矣、）

【續日本紀四十桓武】延曆九年十一月己卯、是日當二新嘗一、而爲二諒闇未終一、於二神祇官一行二其事一矣、

【日本紀略一醍醐】延喜三年十一月十九日乙卯、新嘗會、依二左兵衞陣犬死穢一、於二神祇官一行レ之、

延長五年十一月廿日丁卯、於二神祇官一行二新嘗會一、

【日本紀略二朱雀】承平元年十一月廿日癸卯、於二神祇官一有二新嘗會一、

【日本紀略四村上】天德四年十一月十九日乙卯、於二神祇官一有二新嘗祭一、又於二八省院一被レ發二遣諸社奉幣使一、

【日本紀略十一條】寬弘二年十一月廿三日丁卯、新嘗祭、依二內裏燒亡一、付二本官一、

〔日本紀略十三條〕長和三年十一月廿一日癸卯、於神祇官新嘗會、

〔左經記〕寛仁四年十一月廿日丁卯、新嘗祭、於神祇官被行、上卿中納言（依有憚、不立門外被行事云云、）宰相辨少納言（進御膳等云云、）

〔日本紀略十三後一條〕萬壽元年十一月十九日癸卯、新嘗會、於神祇官行之、

〔左經記〕長元七年十一月十一日丁酉、權辨相示云、新嘗祭日、依御物忌不可有行幸、無行幸之時、於神祇官被行神事、是恒事也、而彼官屋舍、爲八月大風、皆顚倒之後未作立、仍於中院可被行也、而見先例、俄行幸停止之時、於中院被行之例、覺侍、是非俄停行幸、停例定知兼、有儀定歟、被問外記、自勘申歟者、十二日戊戌、

大外記賴隆眞人相示、夜部無行幸之時、於中院被行新嘗祭之例、可勘申者、勘申其例了者、

〔本朝世紀〕久安六年十一月十九日辛卯、今夕新嘗祭也、權中納言藤實經、權少外記中原俊兼右少史同兼遠等參仕、以南舍爲神殿、立幄爲上卿以下座、

〔古記〕治承四年十一月十九日丁卯、今日新嘗祭也、當都（福原）依无其所、於平安神祇官被行之、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十一月十五日辛卯、修新嘗祭、帝不御神嘉殿、親王公卿向宮內省行事、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年十一月十四日辛卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅遣親王公卿向宮內省奉祭、

〔續史愚抄櫻町〕元文五年十一月廿四日辛卯、新嘗祭再興、行幸神嘉殿（以南殿擬之）

〔續史愚抄後櫻町〕明和七年十一月十三日乙卯、新嘗祭、此日於左大臣（命實）第有行幸召仰、向夜行幸中和院（當代第二度）、訖還御、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁三年十一月庚辰、於豐樂院宴五位已上、賜祿有差、

〔類聚國史九神祇〕弘仁十年十一月壬辰、御豐樂殿宴五位已上、奏五節儛、賜祿有差、

天長五年十一月甲辰、御豐樂院、賜宴群臣、賜祿有差、

祭殿裝飾及調度

〔文德實錄四〕仁壽二年十一月丙辰、幸豐樂院、賜宴群臣、亦如舊儀、

〔文德實錄五〕仁壽三年十一月甲辰、幸豐樂院、賜宴群臣、如常儀、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十一月丙辰、是日天皇御紫宸殿、宴于百官、（中略）宴訖賜祿有差、

〔類聚國史九神祇〕承和十二年十一月戊辰、天皇御紫宸殿、宴于百官、日暮賜祿有差、

〔文德實錄六〕齊衡元年十一月甲辰、帝御南殿、賜宴群臣、一如常儀、

〔文德實錄七〕齊衡二年十一月戊辰、帝御南殿、賜宴群臣、一如常、

〔文德實錄八〕齊衡三年十一月丙辰、帝御南殿、賜宴群臣、如常儀、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十一月廿二日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣、如常、賜祿有差、

○按ズルニ、此ヨリ後、辰日節會ヲ紫宸殿ニテ行ハルヽコト恒例トナレリ、

〔政事要略二十六〕中卯日新嘗祭事

中院裝束（神嘉殿裝束未詳、但以東壁爲神殿、以西隔一爲御座、）

神嘉殿西南有四間屋、自北壁下敷小忌親王座（南面）一間南去敷納言座（西面與親王座席）第三四兩間敷辨少納言座（坤東面、與納言連接、經侍從下可著件座、）第三四兩間敷侍從幷中務宮內等省輔座（坤東面、與辨少納言對座、）東庇北第三四兩間壁下、敷外記史中務丞內舍人等座（幷西面北上、當辨座後也、）南庇敷造酒司侍從厨家別當幷召使等座（一列、東上北面、）但侍從厨家豫辨備俎上之物、神嘉殿東南有四間屋、南有四間屋、南方神祇官祇候、辨備供神物、中間大膳職計渡神物北妻宮內采女司采女等祇候南門前、立臺（其親宛如中取、但若雨降可立門中、）積神座、中和門外南腋立七丈幄二宇爲忌座、南北內妻列棟北幄北妻三間敷親王公卿座（北上對座、就中親王東面）同幄北第四五六七四箇間敷辨少納言座（以隔幄、）南幄敷外記史以下座（北上對座、就中外記西面）豫官厨家調備酒食、

〔江家次第十十一月〕新嘗祭神祇官儀

依無中和院行幸於神祇官行之

神祇官齋院北屋爲神殿、坤角有屋（神祇官、井供奉諸司、此屋辨備神饌、）南門內有六間屋（東西間敷廣筵、）東第一間壁下敷親王座（西面）以席一枚張後壁、座前立机二脚、親王入自北面東第一間可著座、近例雖不參猶設其座（若大臣參入者、可著參議座上、頭歟、延喜十九記承平五六、）第二間設上卿座（北面東上、與親王絕席、立机二脚、參議入自南面東第二間著座、若上卿以上不參者、參議二人著北面座行事、）次敷參議座（南面東上、與上卿絕席、立机二脚、參議入自北面東第二間著座、）第三四間敷辨納言中務輔侍從宮內輔等座、（東上對座、立長机四脚、諸大夫自第四間出入、辨者自南著北面、近例或入自第三間、少納言自北著南面、）第四間南邊壁下敷外記史中務丞以下內舍人等座（北面東上、各立机一脚、）上卿座後敷膝突、爲外記執申雜事座、諸大夫座西邊敷長席、以爲造酒司侍從厨家行事所（外記南面西第二間出入、雜人等自王卿未著座前、厨家依例辨備饌物、）西第一間以幕引隔、爲侍從厨家別當大舍人官掌召使等座、

〔儀式五〕新嘗會儀（若有朔旦冬至、候行叙位、）

前一日、所司裝飾豐樂院、構舞臺於庭前（自殿南七尺、高三尺、方六丈、）設樂人幄於舞臺東南角（東去八許丈、南去二許丈、）高御座東第二間設皇太子座（西面）第三四間少南大齋參議以上座（南北面）南廂小齋參議以上（北面西上、自大齋參議以上有差、）西進、有顯陽承歡兩堂六位已下座、式部丞率史生省掌等立標（自顯陽堂北第四柱、西去十五丈、南折二丈、立親王標、次大臣標、次王四位標、次五位標、次六位已下標、自明義堂東去及當柱亦准此、蓋以一丈三尺爲間、）當日寅刻、掃部寮設式部輔以下省掌以上座於興禮門以西壇上（南面）西上輔以下就座、點檢五位以上、平旦掃部寮敷調薦於舞臺上、內藏寮以兩面敷薦上、鐵爲鎭子、次中務省、舞臺以北四丈置宣命版、南去一丈許置、尋常版、

〔延喜式三十大藏〕新嘗會前一日、裝束豐樂院、如常、

〔江家次第十一月〕新嘗會裝束

前一日、裝束司奉仕御裝束、南殿北廂立御障子（於南殿西御膳宿件御障子尋常可立、而近例除南殿有事日之外、放之置御膳宿鏡、內匠寮官人隨身參入開之、立之藏人催之、）御帳懸帷（掃部女孺供奉之、上東巽南帷、垂乾北艮三方帷、藏人催之、）安兩門（令敷沙、左衛門長樂門、右衛門永安門、並裝束使仰左右近衛陣令開閉之、）撤去東西火炬屋（東置月華門北掖、西置紫宸殿西掖、主殿寮役之、）次上南殿格子、掃部女孺供奉、

洒掃殿上（主殿仕女供奉、）

置殿東廂布障子二枚於北廂（掃部寮官人率史生以下供奉、近例無件障子、仍無移置之儀、）身屋九間內四面壁代帷褰之、若天皇不御之時、從身屋東第三間西柱、南北行構簾臺、西六間身屋南同亦懸之、御簾內當御帳東、立亘大宋御屏風、件簾臺木工寮供奉、錦額御簾也、

北障子東戶以北、立御屏風一帖（東西行南向、若皇太子不侍之時、閉戶不立御屏風、）次裝飾御帳帷（掃部女孺供奉見上、）次撤尋常御倚子、鋪唐錦毯代（亦鋪繧繝端織物褥訖也、）立平文歟、天德四年十一月廿日御記、

左右各立置物御机（各一脚、）其中央立風爐一脚、御帳東北去五許尺、屬北障子立大宋御屏風一帖（西面）御帳西北角柱下北障子南去五許尺、西行二間立通障子二枚、

其西一間立大宋御屏風西端折至身屋西第一間東柱下、南行同御屏風三帖、東向、）立御帳後鋪綠端小疊二枚、

通障子北鋪同端長疊一枚、其西立壺床子二脚、其西鋪綠端疊一枚（內侍以下候座、）近例又東向屏風西敷兩面端一枚綠端一枚、爲舞姬髣髴集會座（可敷綠端也、）御帳內御座南立朱御臺盤一脚、御帳南差西去立小臺、北廂御張立之、）上敷兩面端半帖、其上立朱御臺盤一脚、近例件御臺盤上有兩面靶、四角置鱗形鎭子、

其南置綠草蓆（階隥牙女座、）南廂西第二間、差南去東西行鋪簟四枚、（近例依無簟鋪筵訛也、亦有二枚、）

其上雙立朱御臺盤二脚、南臺盤居胡瓶一口、北臺盤置酒海御盞杓等、並金銅
近例件兩臺盤上有兩面杷
四角置鱗形鎮子
南臺盤西南角、立八足机、其上居唐瓶子三口、盛三種御酒
近例不見、仍件御酒等自御膳宿供進之、北臺盤西頭、置水盤幷黒漆炭取火爐等、近例不見
凡件南廂御酒具等、懸御簾時或立之、或不立之、或曰、雖懸御簾、御南殿羞御膳時、可立之云云、仍尋前例、
前例、雖不御南殿、猶有立時云云、慥可尋前例、
北御障子北、東西行雙鋪小筵二枚、其廻立大宋御屏風二帖、東向開戸、其内立赤漆小倚子、爲御裝物所、殿身屋
東第三間西柱北面中央、北去北詣至五尺五寸、設皇太子座、東西行鋪紫綾毯代、立平文小倚子、西面
其上鋪唐褥茵、其前立朱臺盤、
御本書裏了
康保元年十一月廿日御記曰、裝束使安國、今申太子幼稚、雖未始參節會之時所司不設座、
舊例皇太子不參上之時、只立其倚子、不立臺盤、至于加元服之後、縦不參入、猶設其座、但重服不可參上、設座否可蒙處分、仰云、延喜十六年九月九日節、太子參否、仍不可立臺盤、今太子依重服不可候宴、又今日齋内也、所司同可知、其由須不立其座、東第一二三幷三間北障子後設候膳所、第一間西向立棚厨子、第二三間采女所候、
又皇太子未元服之時不設其座、雖元服後有故障時又不立、
近例太子不參上、仍無此北廂裝束、
當御帳東第二中央、東西兩行設親王公卿座、鋪紺布蠻繪毯代、皇太子不侍之時、第二間西柱西進二許尺鋪之、
立兀子獨床子簀子敷床子

北親王參議座、南大臣大中納言三位參議座並西上對座、
近例以件紺布蠻繪毯代敷臺盤下、不敷兀子下、訛也、亦件公卿座指東南斜行立之、仍簀子敷床子南廂
中間南柱各有敷物等、親王大臣料紫色兩面、議散三位者、獨床子、四位參議者、簀子敷床子、並黄端茵、近例不見三位參議者、簀子敷床子、訛也、
親王大臣料兩面大中納言紫訛也、大臣雖員數多、兩面兀子不立於第二臺盤前一、又無親王時不可立北、敷面
其前立朱臺盤五脚、辨備饌儲饌、近例立四尺四脚八尺一脚、第一臺盤大臣親王料、
第二三四納言料八尺參議料、其饌物者中墨物也、以七寸朱漆盤盛菓子、每四尺臺盤六坏、八尺臺盤
十二坏、其菓子加久縄一坏、搗餅、黏臍合一坏、大柑子、一坏、栗、一干柿、一坏、椿餅、一坏、其南北以小土器居腹赤
切幷鹽著等、南廂額間東第三間鋪毯代一枚、立兀子二脚、長床子一脚、小忌親王納言參議座、北面西上、其前立六尺
八尺臺盤各一脚、六尺臺料、八尺參議料、其膳物同上、殿東面階南砌上立兀子、不鋪廬輔、内辨從殿下行事座、
南簀子敷下御階東西、各鋪座二行、東辨少納言外記史内記官外記史生座、件座以東爲上、西殿上侍臣藏人所雜色以下座、
殿東軒廊安殿上酒臺、西第一間第一柱南砌上鋪毯代一枚、其上立案、垂帽額、其上鋪紺布、立胡瓶二口、
西面近例亦有一口、金銅鳳瓶也、其東立樽、
第二柱東立火爐、其頭立臺盤、南堺下置酒器、第三間北頭砌上置漿器、其北堺下立火爐、其東立案、其
東居水器、
宜陽殿西廂北行第四間砌上中央、鋪廬輔、立兀子、内辨大臣座也、近例與柱平頭立云云、左近陣座南庭中央
東西行、曳斑幔二條、一條始從紫宸殿東面北階、南端東行、竟庭中、一條其東端斑幔柱南去三許尺、小
西進立幔柱東行、竟宜陽殿西廂葦、
同殿西廂板敷南西二面張斑幔、
春興殿南廊西面結管貫張同幔、大膳職辨備居所

從校書殿東廂右近陣巽角蔀上北行張斑幔
從射場殿西南角柱東行、到同殿東南柱北折、竟于小廊東第二間西柱下、（自射場殿西南角以東、至于小廊第二間西柱、結管貫、）
自月華門內南掖蔀上南行、張同幔、一條、又從安福殿南廊南行東折、從棚屋東北角南折、至于永安門
西掖張同幔、
尋常版位南去三許丈構立舞臺、（不作音樂時不立）其上鋪鷹加兩面置鎮子、其四面樹梅柳、其東西北面懸亘
帽額、（不隱柄繪、木工寮作、舞左右衛門進、梅柳、）從殿南階西間柱小東進、經舞臺西迄于同坤角、斜敷筵道、
近例不敷件筵道、往年舞姬於舞臺舞、仍有此筵道、近年用雨儀於殿上舞、仍不鋪之、
承明門內東西掖東西行、各立七尺幄二宇、（南北相並）木工寮運調度、大藏省立幄、當承明門東砌西進二許
尺、立東幄西柱、當西砌東進二許尺、立西幄東柱、設諸大夫座、床子幷黑漆臺盤各立二行、辨備饗饌、當
幄北東西行鋪蘆薩一枚、其上立臺、（有臺覆紺布、同帽額、）其上各立胡瓶二口、（北向、東艮當東第二間、西幄當西第二間、）東幄東北、西
幄西北陳列酒樽器、（並北置酒器、次置樽器、）若雨儀、東從春興殿北第二間中央南行、立床子臺盤各二行、西廂南
第三間西向立胡瓶一口、安福殿東廂亦准此、（近例以胡瓶立砌訛也、若立砌無公卿雨儀路、）
當日早朝中務錄入自日華門、尋常版位北去一許丈置宣命版、雨儀置宣陽殿西廂北行第二間中央
砌石上、近例置第三間、
四條記
式部丞錄率史生省掌等、入從永安門立標自尋常版位東去一丈四尺南折一丈、立小忌親王已下參
議已上標、其標東去六尺南折二尺、立親王行立標、南去太政大臣標、南去大納言標、南去
中納言三位參議標、非參議三位標、立此列、今案元日中納言以上七尺爲間、以下八尺爲間、南去四位
參議標、南去王四位五位標、南去立臣四位標、南去臣五位標、南去臣四位標、第三間立臣五位標、
官及小忌四位標、（此標相當四位參議標、）南去王四位五位標、南去臣四位標、南去臣五位標、相去
同

舞臺北立床子、（大歌座料、五節、昇殿之時、大歌頭立之、）絲竹聲比及、（臺東頭立之、）
雨儀標
宣陽殿西廂、宣命版位東去二尺、立親王標、東去三尺五寸大臣標、東去三尺五寸大納言標、東去一尺
五寸、更南去三尺中納言標、其南去四尺、更東去二尺三位參議標、其南去五尺散三位標、其南去三尺
東折一尺四位參議標、承明門東西壇上東西第二間、立王四位五位標、臣四位標第三間立臣五位標、
並西以東爲上、東以西爲上、今案四條記第三間立標云云、
承明門東西內掖各鋪蘆薩、上各置草蓆、（蘭司座、北面、）移鑰鈴印御幸櫃、置宜陽殿西廂板敷、長樂門南面東
掖第一間東柱下、設外辨親王公卿座、東西行立兀子獨床子簀子敷床子、（南面上、）其南壇下庭中立白木
床子二脚、（少納言等座、）
東立二脚、（外記史座、）其東立二脚、（外記官史生座、）並七尺爲間、（西面北上、）雨儀從公卿座差東去立少納言辨床子、其東差
去立外記史外記官史生官掌召使等床子、並西面南上、
承明建禮兩門前差南去東西行張斑幔各二條、長樂永安兩門前差北進、各張同幔各一條、宜陽殿東
庭御輿宿小舍爲皇太子次掃除舍內身屋南方、張承塵、（以帛爲之、）四方曳斑幔、（東南西面、以一面柱爲限、）北立幔柱、
近例依太子不參上、無件裝束、
建禮門內東西掖差東西去各立七丈幄一宇、敷座、東國栖、西俘囚、
裝束畢左右近衛開長樂永安門、
祿床子四脚、預仰所司令候便所、未奏日錄之前、立舞臺乾艮角、乾角二脚、艮角二脚、
運積祿物、雨儀同門東西掖壇上立、南殿南庭當殿東第三間、去砌二許丈以南、立左近次將胡床、其上
覆黃布豹文毯代、（北上四面、）其東立府官人胡床、並無覆、當西第三間立右次將座、（准上可知、）雨儀立平張、（近例不見、仍立
於日月華門北掖訛也、）

日月華門内橋東當北頭立左右次將仗、中將料紫幟各、少將料緋幟各、北上立之、

内裏式、七日豐樂殿儀日、自殿南階南去十一丈七尺構舞臺、舞臺高三尺、方六丈、舞臺北四丈、中務置

宣命版、其南去一許丈、置尋常版位云云、然則尋常版位去殿八丈七尺歟、南殿儀可尋之、

〔類聚雜要抄三〕五節所裝束料雜事

先前日行向五節所、取御簾寸法、但用兩面所有自意可消息也、次差

筵料弘筵又切筵大和十枚許、平筒奴木二三十許、小釘十餘連、三寸釘十餘連、縮槌一柄、例糸卅筋許、

苧糸五十筋許、疊針三許、折敷三枚、薬等少々拭布少々、高足二脚、足桶一口、雜役諸司官人人夫五六

人、次鋪設幷御調度等渡之、燈三口、同料栗形三役燈臺打敷火桶火櫃等渡之、

當日早旦取打覆御清目事、次朝干飯、次饌膳事、次打出、次女房衝重用長櫃姫君御料懸外居用之、凡

自餘日同前也、

一出火桶自右大臣殿令調進給

口徑三尺二寸、外定高七寸、板火桶也廻洲濱形、所々透テ立雲母、殘所以泥淡天山水書、鉢ノ内ニ以銀

打洲濱敷天、其上ニ銀鶴龜形兩三、所々留立之、箸一雙、各本ニ鶴形作付タリ、

〔雅亮裝束抄一〕五せち所のこと

五せち所は、びんぎの所によるべし、うちなかにびんぎのもやひとつぼを帳のまとしつらひて、四方にみすをかけて、そのうちにかべしろをひきまはしておくべし、もやぎはのみすもあけて、二けん三げんありともき丁をたてわたせ、この丁の三方には五尺にても四尺にても、からみやまどゑなりともたてまはして、そのうちにうげん三帖をしく、はしなくらにしくべし、そのまへのひさしに、うげん二帖をしきて、そのうへにりうびんをしく、そのうへにしとねをしく、三尺のき丁をたつ、ひだりみぎびんぎによるべし、四

尺の屏風をたてゝ、ものゝぐおく事つねのごとし、ひさしのてうどのていなり、ずゞりのはこ、けうそく、きやうだいなどはあるべからず、所もせばしだとひあり、ともにかいのしたなどにおくべし、二かいのうへの火とりは、ゆするつきにおきかへて、はしにおきたるものなれば、びんぎよきれうなり、ひさしにはまどゑにき丁をたつべし、かうらいむらさき、所にしたがひてしくべし、さしむしろちんしをおく、ゑんにむしろをしく、さしむしろある所にゑんにむしろしかぬことは、だいきやうの外記史のざにはしかず、まゐりのつぎのあしたに、うちでをはこぶ、又かうらいを一帖、帳のまへにしきて、そのうへにとう京のしとね一枚をしきたり、そのひだりにいだし火をけをおく、ふりうこゝろにあり、だゞしこの火をけ右なりとも、御所につきておくべしといふ人あり、その火をけのまへに、すべなうさうかいを、やないばこのふたにおきて、ゑりぐし、まきぐし、かんざし君のれうなり、ひめ君のれうなり、にしきのへりのしとね三尺のき丁とをぐして、のぼるを、殿上人おの〳〵これをもつ、よごとの事なり、〇中略

ひさしのみすにゑをつけて、ひめ君ののぼる時、びんぎの所をゆくべし、とうろは帳の左右のまの、のきにつるべし、そばにもつるべきところあらば、いくつもつるべきなり、大だいり五せちところ、ざうねいでん〇常寧殿のみなみのにしきたのにし、兩所のわらはこそ、帳だいのこゝろみのよ、なかのつまどよりのぼることにてゐれ、それもなほしもえんよりのぼせて、みなみのめだうのつまどよりのぼるつねのぎなり、

〔定家朝臣記〕康平三年十一月十七日、御前試如恒、殿令開内府給云、出火桶上蔦上卿所不居也、但可隨近例者、仍不居之、

〔中右記〕永久二年十月十九日、向民部卿亭申合五節間事、不可有出火櫃之由所被敎也、

（類聚雜要抄）三五節雜事
（内大臣藤原忠通）令三五節進一給定文一〇中略

一調度
唐匣一具　鏡宮一具　鏡臺一具　泔坏一具　二階一脚　脇息一脚　薫爐一具　打亂宮
行事知信朝臣

一理髮具
末額髮二流末七尺、但不レ注二定文一、内々事也一　簪　釵子　彫櫛二枚　本結　日蔭鬘
行事同人

一裝束
屏風　几帳四尺八基、三尺四基、　簾　壁代　茵三枚　表筵一枚　地敷二枚　繧繝端疊六枚　高麗端疊廿枚　紫端疊卅枚　長筵卅枚　菅圓座十枚　火桶六口見用三口　炭桶二口　炭取二口
燈臺六本加二打數一　燈爐三口
行事前伊與守朝臣〇中略

一盥具
手洗二口大小　貫簀打數　椽二口　手巾宮一合加二手巾一
行事說雅朝臣

一膳所具
臺六本大三本、小三本、　盤四枚大二枚、小二枚、　油單　荷外居三荷　俎板
行事實房朝臣〇中略

一出車
金作檳榔毛一兩　檳榔毛五兩　網代二兩

行事宗國朝臣　盛經朝臣〇中略

一舞師房裝束
疊五帖高麗端四帖、紫端一帖、　半疊一枚高麗端舞姫料、　長筵一枚　簾四枚　屏風二帖　几帳一本在レ帷　燈臺二本　椽一口　手洗一口　臺一本　盤一枚　繪書板火桶一口在レ著　手宮一合在二納物一、紙一帖、針差一、疊紙一帖、物白現一面、墨一挺、筆四管、小刀一柄、油壺一口、粉盤一、櫛六枚、　私宮一合〇中略

一行事所雜物等
臺二本　盤二枚　提五口銀三口、雜衆二口、　高坏廿本　銚子二口　雜衆大提一口　疊　長筵　俎　桶二口各五口　足桶四口　折敷　鍋五口大二口、小三口、　釜口　金輪四口　木鉢三口　叩戸五口　燈蓋三口　包丁刀十柄　荷外居二懸　長櫃　炭　薪　續松　油　紙　白米　土器　鹽　梅　菓子　魚鳥　垂布　屏幔

一可儲本所物
筵道弘筵　同役人府者料、　本結五筋一筋紮絲舞姫料、四筋村濃下仕料、　彫櫛六百枚　差櫛上十二枚、下十二枚、　蒔櫛　釵子十五枚八枚女房料、四枚下仕料、三枚舞姫　行事

一出立所
御簾
行事〇中略

永久三年十月十九日

右永久三年内大臣殿令二五節出給定文之定也、土御門東洞院右大臣家内裏時也、次宮内卿忠長阿波任、令二五節出給度一、〇中略行事所雜物、儲本所物、出立所雜事等、以二此定文一被レ行レ之、

〔山槐記〕永暦元年十一月五日己卯、藏人左近將監來云、內藏寮御櫛生一昨參上、其後令引五節櫛云云、十四日戊子、五節行事小舍人進櫛（彫櫛廿、裏紙、置柳筥、）

〔愚昧記〕嘉應二年十一月十五日辛卯、午時許、頭左中將送消息云、童女御覽如法午刻也、可早參者、可示云、殿上事未終候也、此間頭左中將參入於小板敷言談之間、左府中將來示、頭中將云、殿上事未了歟、所徘徊御後邊也、予又向彼所、左大將在此處、裝束司等奉仕明日節會御裝束、左府令息男中將仰官掌、令敷疊兩三枚於南殿南廂各著之、左府云、是極權儀也、數刻佇立之間、依脚病無術所催行也、戲云、各不可載御日記云々、頗解顏者也、御裝束等物具之中有承足、左府見之云、彼何物哉、左大將云、是裏也、大嘗會御調度、以錦裏之也、

〔玉葉〕建暦二年三月廿二日宣旨（左大臣、右大辨、）

一可停止五節出火桶櫛棚金銀錦繡風流事、

右抑偏以金銀錦繡恣爲櫛棚裝飾、近年之間逐日過差、國家煩費莫不由斯、自今以後、專守制法、不可違犯、兼又於銅者雖非制限、尙隨費用之多少、宜存禁制之弛張、

〔明月記〕嘉祿元年十月十五日壬申、敎雅少將以使者尋、別當五節女房扇二枚可調送由消息、何樣物哉、答云、扇近代檜扇、（細面ト云塗雲母カラチヌルヲ書繪、遠山野之體、野筋若青□、金銅蛟目、以村濃□匂□絲貫之、末結垂物也、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年十月廿四日、今日五節儉約事、爲頭左中辨時高、朝臣奉行、被仰下五節所云云、

一風流櫛、不可交金銀銅飾珠玉之類事、

一薄樣以數重不可進裏事、薄如形可散、以常下品可爲上品也、枚數不可過七枚、

料物用途

一童女扇、可被停止金銀珠玉風流事、

一出火桶可停止金銀銅飾等風流事、

一男女房裝束、兩日之間不可改著事、

一殿上人非禁色之人褂不可用綾事、擣衣唐物之類非制限、

〔勘仲記〕建治二年十一月十二日壬寅、今日祇候御直廬所、五節所打出火桶茵已下如例、但大炊御門宰相中將五節所無出火桶、若彼家之例歟、主上（後宇多）入御御直廬、叡覽五節所、攝政殿幷大納言殿令候給、

〔延喜式（四時祭）〕供新嘗料

絁一丈二尺、絹二丈二尺、絲四兩、調布三端一丈、曝布一丈二尺、細布三丈二尺、木綿三斤十兩、苅柄御刀子二枚、長刀子短刀子各十枚、筥十四合、龍筥二合、明櫃三合、御飯幷粥米各二斗、粟二斗、陶甕五口、平居瓮六口、都婆波酒垂各四口、匜八口、水坩八口、洗盤六口、筥坏廿口、多志良加四口、鉢八口、叩瓮四口、臼二口、土片坩二口、盞十口、小坏十口、高盤廿口、土手湯瓮二口、手洗二口、瓮四口、塙十口、火爐二口、陶坏八口、案十二脚、切机二脚、槌二枝、砧二枚、槲四俵、匏十八柄、小匏二柄、日蔭二荷、鮒鰭槽二隻、油三升、內膳司供雜味物、

右依前件、其御贖大殿忌火庭火等祭料、並准神今食、

〔延喜式（三十四木工）〕下鑿四柄、鑊二口、

右十一月新嘗會御卜料充神祇官、六月十二月神今食亦同、

牀三脚（方四尺、高九寸、廣四尺、高三尺、一脚一丈二尺、廣二尺、一脚積一丈二尺、各長一丈、度別一帖一料、一脚刈同帖一料、並通用之、）御湯殿御座料、大牀二脚、神御帖料、

右十一月新嘗會六月十二月神今食料充掃部寮、

木偶人三百八十四枚（日別四具、日別一具、八枚、）插幣帛木三百八十四枚（日別一枚、八枚、）御輿形六十四具、日別一具、

右十一月新嘗祭從一日迄八日御贖料、六月十二月神今食前八箇日料亦同、

〔延喜式三十五〕新嘗祭料

臼一腰、杵三枚、箕一枚、中取案三脚、八脚机二前、明櫃二合、調布三端一丈六尺、一端八尺納御井中宮御井中宮女丁八人構禊料、御米粟一袋、料二端八尺

右祭料依前件、但裝束等常便用、迄于來六月神今食請替、

〔延喜式三十八〕新嘗會蒼葡酒殿料、苦八枚、殿別四枚、事訖給神祇官、其四枚薦八枚、殿別下形并押榨木工寮辨備之、

右六月十二月神今食新嘗祭供御料

〔延喜式三十六〕新嘗會供奉料中宮准此

沐槽一隻、加案覆絁帷一條、長五尺、廣三幅、浴槽二隻、案覆布一條、長四尺、廣二幅、板蓋十一枚、圓槽由加一口、覆一條、表裏絁各長三尺、廣一幅半、板蓋十一枚、圓槽二隻、覆暴布二條、各長四尺五寸、廣一幅、楉案一脚、覆暴布一條、長六尺、二幅、匏十柄、受八升已上、絁篩六口、圓篩四口各四尺、汁簁一口三尺、油簁一口一尺、洗濯布一條、七尺、筥一合、龕筥一合、御巾紵布六尺、生絲二兩三分、一絇三分、縫雜物料、一兩縫衣裳料、小豆三升、淘豆料、土椀形一口、土唾盤二口、陶鉢三口、叩盆六口、庭火明櫃二合、麻笥三口、燈樓六具、各加案紗四丈八尺、燈臺二基、案三脚、置御巾別脚案一脚、居櫃板案一脚、棚案一脚、油瓫二口、燈盞十四口、六口忌火料、八口解齋夜料、並別加盤、菲三兩、今木人女四人衣裳料、調布五端、各一端五丈、絲一兩、油三升四合、一升八合小齋侍從候所三度料、一升六合解齋夜料、青摺袍廿二領、細布二領、調布廿領、踐祚大嘗會加細布二領、請縫殿寮、

右新嘗會料依前件、其二度神今食者、並用件物更不請料、事訖之後充神祇官、

〔延喜式四造酒〕新嘗會直相日雜器

瓮四口、盛參議已上白貴黑貴酒井煖酒料、炭一斛五位已上煖酒受直買用、酒坏五合、備窪坏九口、加瓮四口、匏四柄已上二位女四人、瓮坏百十九口、加瓮九口、匏廿五柄已上有位女王廿五人、同命婦五十五人料、

〔延喜式十四縫殿〕新嘗會御服

帛袍二領、別一匹一丈五尺、綿六屯、別三屯、襖子二領、別一匹八尺五寸、綿六屯、別三屯、汗衫二領、別三丈七尺五寸、袴二腰、中袴二腰、綿六屯、褌二腰、被二條、綿卅屯、敷被一條、綿廿屯、褥一條、綿十屯、帛帷二條、帛坂枕一枚、四尺暴布軾一枚、唾巾一條、帛袜二兩、綿一屯、帶二條、別五尺、練絲二兩三分、生絲一分三銖、櫛二枚、履一兩、牀鞪帛二條、納服韓櫃二合、敷望陁布二條、暴布綱二條、黑葛筥十四合、紙十張、木綿二分、被麻一兩、

右御服依前件、其丈尺各同上條、十二月神今食通用此服、其縫備所鋪設就所司請、

〔延喜式十四縫殿〕六月神今食中宮料、十一月新嘗會准此、以二數被一代一褥、

被二條、褥一條、軾一枚、調布二端、白揚筥四合、紙十枚、練絲一兩、櫛二枚、履一兩、白木韓櫃一合、

〔延喜式十二中務〕新嘗會

命婦已下今良已上裝束料、絹三百卅八匹、綿六百七十六屯、調布六百卅一端、縹布廿五端、殿司燈守四人、掃司女孺十三人裝束料、縹帛八匹三丈、別三丈、帛八匹三丈、別三丈、綿卅四屯、別二屯、火炬二人、黃帛一匹、別三丈、帛一匹、別三丈、綿四屯、別二屯、

東豎子四人裝束料、人別緋絁四丈、帛二匹、綿四屯、元日亦准此、但五月五日帛一匹、賞布四丈、紅花小二斤、並依內侍司移請充、

皇后宮女孺九十人裝束料、絁九十匹、綿一百八十屯、調布一百八十端、今良十五人裝束料、絁十五匹、人別一匹、綿卅屯、別二屯、縹布七端二丈、

〔延喜式十二中務〕凡新嘗祭小齋諸司青摺布衫者、親王一領、太政官十一領、中務省三領、侍從三領、內舍人四領、內記一領、監物一領、主鈴一領、典鑰一領、中宮十五領、大舍人十二領、內藏四領、縫殿四領、宮內三領、木工五領、大炊二領、主殿廿二領、典藥四領、掃部七領、內膳八領、造酒二領、主水八領、二領中宮左右近衛府各卅七領、各十二領中宮陣四領各中宮四領、藏人八領、御膳前采女氏二領、內豎八領、女孺已上

一百卅領（卅領中宮女孺）

〔延喜式十四縫殿〕新嘗祭小齋諸司青摺布衫三百十二領（細布一百卅領、佐渡布一百卅領、並別二丈一尺、絁紐料四丈、貲布六端一丈二尺、別長二尺、二山藍五十四圍半、模飯料米二斗四升八勺、生絲四絇、紅花大十五斤五兩、薪六荷、藁六圍、酢六升四合、調布一丈四尺、帛被廿五條、別一丈二尺、庸綿三百七十五屯、別十五屯納被、暴布袋五十口、別一丈練絲四兩四銖、生絲五兩三分二銖、布被別四銖、帛別二銖、中宮小齋人青摺細布衫卅九領（亮進闈各一人、左右兵衛各三人、主水司二人、左右兵衛官人二人、緋紐料貲布一端三丈三尺七寸、山藍十五圍、模飯料米七升四勺、紅花大七斤六兩二銖、酢一升九合、薪三荷、藁三圍、帛被十條、綿一百五十屯、布被十條、庸綿一百五十屯、布帛廿口、練絲一兩二分四銖、生絲十三兩五分五銖、

右依前件、但帛布被通用十二月神今食、待內侍處分三年一度頒給、

〔延喜式十三大舍人〕凡供奉諸祭及齋會節會等舍人者（○中略）其新嘗祭幷踐祚大嘗會青摺衫、請縫殿寮、班給小忌人等（彩數隨人）

〔延喜式四十五左右近衛〕凡供奉十一月新嘗會小齋官人幷近衛青摺布衫卅五領（細布五領、佐渡布廿領、但有中官陣之時、加請十二領、並請縫殿寮、

〔延喜式十四内藏〕新嘗會節大歌人等裝束料

淺紫帛二匹二丈八尺、同色綾深綠帛六匹四丈五尺、深縹帛六匹四丈五尺、支子六斗三升、緋紬九匹、黃帛九匹、藍色帛廿五匹五丈四尺（裏料）絲一絇、（琴絃料）紫絲一絇、（阿志須慧料）上蔡物料、絹八十四匹、綿二百十屯、紅花大一斤五兩、酢四升二合、薪六十斤、藁一圍（已上官物）紅紙四張（承琴絃料受藏人所）

右彼所錄色目、申官幷內侍、直受所司充之、

〔延喜式四十造酒〕諸節裝束

十一月新嘗會暴布褌二條（別八尺、酒部二人料、

〔江家次第十一月〕新嘗祭

當日（○中略）行事藏人、令頒小忌於殿上侍臣、官行事所頒王卿辨少納言以下料、（以上新嘗會、相具日蔭奠、

〔延喜式三十大膳〕新嘗祭供御料

鹽二升、東鰒六斤十兩二分四銖、堅魚五斤、鮨鰒煮鹽年魚醬鮒各三升、甘鹽鯛四隻、海松海藻各六斤、十兩二分四銖、干棗子二升、干栗子二升、搗栗子四升、生栗子一斗、椎子菱子各四升、橘子四薦、瓮四口、醬酒各五升、

右夜料

〔延喜式三十宮内〕凡諸節賜群官饗者（○中略）十一月新嘗會等五節、親王已下五位已上及內命婦大歌立歌人國栖笛工、其食法見大膳大炊等式、

〔延喜式三十大膳〕新嘗祭

輿籠二脚、置簀二枚（並供神料）

小齋給食總三百卅四人（五位已上廿人、六位已下二百五十五人、命婦十人、女孺采女卅四人、御巫五人、五位已上一人、醬酢鹽各一合、東鰒七兩、堅魚一兩、烏賊十二兩、蒸海鼠腊各五兩、海藻四兩、鮨六兩、韮搗五勺、漬菜一合、二合六勺、六位已下一人、醬五勺、鹽五勺、東鰒七兩、蒸海鼠腊各五兩、海藻四兩、鮨八兩、海藻十二兩、漬蒜房蒜英各二合、漬菜一合、韮搗

右依前件、其男辰日旦、女卯日夕辰日旦給之、

同小齋解齋給食總二百廿七人（五位已上卅人、六位已下百八十七人、五位已上一人、醬五勺、鹽二合二勺、東鰒二兩三分、隱岐鰒二兩、烏賊十二兩、蒸海鼠二兩、雜魚楚割二兩二分、紫菜海松各三分、海藻十一兩、漬蒜房蒜英各一合、韮搗五勺、漬菜二合、六位已下一人、醬五勺、鹽一合二勺、大鯖三兩三分、東鰒二兩三分、海藻十一兩、

右依前件、辰日夕於省家給之、

同會皇后宮小齋人卅二人、命婦并女孺廿人、舞與丁已上十六人、外記已下主水官人已上六人、五位一人、醬五勺、鹽一合、東鰒七兩、烏賊十二兩、蒸海鼠五兩、腊五兩、海藻四兩、漬菜蒜房蒜花韮搗各二合、六位已下一人、醬鹽各五勺、東鮑六兩、蒸海鼠四兩、鯖六兩、鰯三兩二分、海藻四兩、

同宮神態直相給食卅七人、后宮亮一人、進已下諸衛府舍人已上卅六人、五位一人、醬五勺、鹽一合二勺、東鮑二兩二分、烏賊四兩、烏賊一斤八兩、隱岐鮑四兩、雜魚楚割五兩、海藻十一兩、鮑二兩三分、鰯三兩二分、海藻十一兩、

宴會雜給

親王以下三位以上幷四位參議

人別餅料粳米糯米各八合、糯糊三合、糖二合六勺、小麥四合、大豆二合、小豆二合、胡麻子二合、油一合、

韲酒酢各四勺、醬二合、鹽四合、豉一勺、東鰒二兩、隱岐鰒二兩一分、堅魚一兩二分、烏賊一兩一分、蒸海鼠繩貫鰒各二兩二分、押年魚四兩、與理刀魚五兩、鮭二分隻之一、雜魚臛楚割各五兩一分、雜腊鮨各二斤、堅魚煎二勺、鮮物、充直紫菜二分、海藻二兩、生栗子一斤、搗栗子椎子各四合、橘子十顆、

四位五位幷命婦

人別餅料粳米糯米各四合、糯糊一合、糖一合五勺、小麥二合、大豆小豆各一合、胡麻子一合、油一合韲酒酢各四勺、醬一合、鹽二合、豉一勺、東鰒隱岐鰒堅魚烏賊蒸海鼠各一兩、繩貫鰒一兩、押年魚二兩、與理刀魚二兩二分、雜魚鮨各四兩、紫菜一分、海藻二兩、鮭六分隻之一、腊一斤、生栗子五合、搗栗子椎子各二合、橘子五顆、

大歌立歌

人別鹽二勺、東鰒一兩、大鰯一隻、雜腊四兩、海藻二兩、正月七日諸司主典已上食法准此、

國栖笛工

人別鹽二合、雜鮨四兩、鮭六分隻之一、海藻二兩、

明櫃八合、叩盆五口、麻笥盤三口、由加洗盤各四口、陶高盤大盤各十口、盛小齋三位已上菜子料、絹篩六口、別四尺折櫃五十合、命婦料、但廿合數布、別三尺、食籠百八十四合、筋竹二百卅株、已上雜物通用、料理所燈油四升、

右新嘗會宴食料依前件、其雜器、親王已下三位以上同、諸節亦同、已上朱塗、四位五位幷內命婦大歌別八合、笛工國栖親王三位以上並朱漆椀、五位以上葉椀、命婦三位以上白餘諸節亦同、四位五位幷內命婦大歌別八合、笛工國栖歌立歌國栖笛工並葉椀、五月五日菁柏、七月廿五日荷葉、餘節干柏、

〔延喜式三十內膳九〕新嘗祭供御料

米一斗、糯米二斗、粟子糒二升、小麥四升、胡麻子二合、堅魚五斤、海松六斤十兩二分四銖、海藻十兩四分八銖、鮨鰒煮鹽年魚醬鮒各二升、干羊蹄一籠、干棗干栗子各二升、搗栗子四升、生栗子一斗、干柿子二連、椎子菱子各四升、橘子四薤、柃橘子十枝、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坩七口、筥坩六口、酢坩十口、土蒸堝卅口、大洗盤小洗盤各四口、大盤八口、火蓋十二口、瓮十口、松明八束、炭四石、薪六百斤、供奉官人二人、膳部六人、各給衫褌、

右豐樂料

鹽二升、東鰒六斤十兩二分四銖、堅魚五斤、海松海藻各六斤十兩二分四銖、鮨鰒醬鮒煮鹽年魚各二升、干羊蹄一籠、搗栗子四升、生栗子一斗、椎子四升、菱子二升、橘子四薤、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坩七口、筥坩六口、酢坩十口、洗盤十二口、臼八口、土蒸堝卅口、大洗盤小洗盤各

四口、大盤八口、火盖十二口、瓮十口、松明八束、炭四石、薪六十斤、

右同中宮豐樂料

〔延喜式三十九内膳〕新嘗祭供御料

米二斗、糯米二斗、糯粟子等糯各二升、糯稻十束、小麥四升、大豆二升二合、小豆一升六合、胡麻子二升八合、荏子三升、清酒濁酒各一斗、醯醬各五升、鹽二升、東鰒一斤十兩二分四銖、薄鰒十三斤五兩一分二銖、隱岐鰒二斤五兩一分二銖、煮堅魚螺各十三兩一分二銖、烏賊十兩二分四銖、腊五升、紫菜十兩二分四銖、海松海藻各六斤十兩二分四銖、干薑三兩、干羊蹄一籠、干棗二升、搗栗子六升、干栗子二升、生栗子二斗二升八合、干柿子四升、菱子蓮子各二升、橘子廿四蔭、梓橘子十枝、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坏七口、筥坏六口、醢坏十口、洗盤十二口、爐瓮臼各八口、土熬塙卅口、大洗盤小洗盤各四口、大盤八口、火盖十二口、瓮十口、塙五十口、〔大十二口、小卅八口、〕柏卅二俵〔一度總請用七節〕

右解齋料、但雜器年中七節通用、〔次條准此〕

〔延喜式四十主水〕同祭〇神今食解齋御粥料新嘗會亦同

鮑二斤、堅魚八兩、和布一斤、鹽五合、塙二口、

右自内膳司受之供奉、但米用旦供内、

〔左經記〕長元七年十一月十七日癸卯、大夫史義賢朝臣、來門外、令申云、太宰府今年年貢解文等、持到左大辨御許、而被仰云、依爲輕服今日不出仕、可持到愚許者、但被仰云、昨今御物忌歟、然者明日被申有何事乎、是恒事也者、取入件解文等、早旦仰可申殿之由返却了、太宰府進上當年新嘗會料調絹千匹、綿百屯事、〇略中但物實未來云々、十八日甲辰午刻參殿、申太宰解文等、仰云、自此令奏之由、内々示頭辨可付者、未刻許御共參内、於陣腋附太宰解文於頭左中辨頃之辨云、奏解文奉下、殿仰云、令檢納者、但綿停代革、以見綿可進之由前年給宣旨了、任宣旨儲進見綿乎可令問者、即問義賢朝臣、申云、物實未來、且進解文也、已注見物、不注代物、仍不問其案内於納言處有代物可申事由也者、即以此由觸頭辨了、

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、早旦自田原供御所持來生栗三十籠、〔上十、中廿、〕以供御人彼沙汰人忠節所進也、有解文不給返抄只留了、五節之時爲恒例持來兩貫首之許云々、

〔康富記〕文安四年十一月十一日己亥、十五日新嘗祭、外記卜合權少外記康繼也云々、御訪百五十匹、自員弘許今日到來了、

寶德元年十一月十二日丁巳、新嘗祭御訪百五十匹、自町口判官員弘許到來、遣人請取了、史兼帶外記之故也、〇略中

請取申御訪事

合壹貫五百文者

右新嘗祭參役外記御訪所請取申狀如件、

寶德元年十一月十二日　　少外記康顯判

三年十一月十一日丙午、新嘗祭卜合、三鬮外記康純也、御訪百五十匹、自堀川判官許請取也、

〔續百一錄〕寛保三年十二月廿八日、新嘗會下行、銀子五拾七匁壹分貳厘、七斗三升九合代、殘リ深尾氏かり也、四年正月七日、深尾良豐入來、新嘗會御下行代殘り、銀拾匁九厘、壹石七斗三升九合、二ツ割八斗六升九合五勺、此代六拾七匁貳分壹厘、石ニ付七拾七匁壹分貳厘、舊冬御渡シ申候、殘リ拾匁九厘、

延享元年十一月廿三日、出納家へ下行之なしの儀、書付ニ而願上候、出納家へ利房參候、書付は同役持參候、

口上之覺

新嘗會御再興以後、年々參役被仰付、尤時々御下行頂戴被仰付難有奉存候、依之此度恐多御願ニハ御座候得共、都而兩人儀ハ、御下行一列之輩一人へ被下候御下行、兩家へ頂戴仕來候付、先年御願申上候得共、末御沙汰にも不被爲及候趣承知仕候、依之此度乍恐卯日兩人へ被下候御下行壹石二斗ニ而御座候、是を一人へ八斗ヅヽ、合壹石六斗頂戴仕候樣ニ奉願上候、右之通被爲分聞召、宜御沙汰被下候ハヾ難有可奉存候以上、

十一月　出納殿

十二月九日、同役被參候、左書付昨日參候旨、口演

申達シ候義有之候條、明日巳刻過同伴御入來可有之候以上、

臘月八日　出納

深尾縫殿屬殿

山本内藏屬殿

出納家へ同役同道ニテ參ル

新嘗會御下行之儀御願申上候處ニ、御下行帳相シマリ申候ニ付、相定リ申候事ゆゑ御タシ被下候儀ハ成不申候間、左樣ニ相心得可申候也、去かしながら御下行ニ殘米も有之候間、兩局出納ニあひはからひ遣可申候、尤殘米有之候間、來年トテモ又々如此出納へ相こゝろ付申候樣ニ被仰付候間、每年御下行相願可申候事、

右之御禮ニ、傳奏久我大納言樣、葉室前大納言樣、新嘗會御奉行烏丸頭辨樣へ御禮ニ參申候、同役同道にて參る、

職員

新嘗會御下行壹石二斗兩人壹人分六斗、豐明六斗兩人、壹人分三斗、右之內ニ今年より新嘗八斗、壹人分、豐明節會三斗壹人分、合壹石壹斗也、

〔令義解二神祇〕凡大嘗者每世一年、國司行事、以外每年所司行事、（謂所司者、在京諸司、預祭事者也、）

〔延喜式三十宮內〕供奉新嘗小齋

命婦已下宮人已上卅四人、御巫五人、采女十人、

已上給食二度

直相五位已上廿八人、六位已下二百五十五人、兆人樂工上卅人、下百八十七人、左右近衞府、將監各一人、府生各一人、近衞各十人、

已上給食一度

中宮職、亮一人、進一人、屬一人、史生二人、舍人十人、（女孺已上十七人、駕輿丁各八人、）左右兵衞府、尉各一人、兵衞各三人、

已上給直相食

同宮兆人卅二人（女五位三人、史生一人、）（記一人、史生一人、主水司二人、）

〔延喜式十太政官〕凡鎭魂新嘗等諸祭之日、竝辨及史等向祭所加檢挍、（略）中新嘗者、中卯祭之、齋日申官如常、致齋之日、諸司各宿本司、仍錄名申官、至夜左右史生等分頭巡檢、若有不宿、依法勘當、（臨時行幸應經宿者亦准此）辰日賜宴於五位已上、大臣行事如常、（事見儀式一）

〔延喜式四十一彈正〕凡十一月中卯日、應宿官人歷名上左辨官、

〔延喜式四十三春宮〕凡十一月中卯日、大宿官人歷名申辨官、

〔延喜式十三中宮〕凡新嘗祭日、小齋官人率史生舍人等向宮內省、下食如神今食儀、訖著青摺衣、昏時入候閤內、大齋人等自內裏退出、小齋官人俱入、辰日暮向宮內省、解齋和舞、（人數次第亦同鎭魂儀）

〔江家次第十一月〕新嘗會（中院）

前一日令ト殿上侍臣合不、差小舍人一遣於神祇官(出納書藏人頭御厨子所別當並可供奉御湯殿上人不入ト串、近代藏人又不ト)或中務省就神祇官、令ト小忌侍從以上云云、當日輔若丞傳内侍奏云云、當日早旦令ト供奉内侍女藏人等(藏人書女藏人夾名云云、至内侍不ト由見四條記、以女官送夾名、或諸司六位以下、今日同ト云云、)内膳司以兆人簡付内侍令奏覽、畢返給、(内侍不候者、或付藏人、○中略)

節會次第

以小忌人爲祿所勅使例

承平五年(參議内辨　九條殿右大臣)

大將不候、參議中將稱警、(同上中略)○

無小忌參議(同上○六年、中略、)承平

大忌少納言召公卿、(天曆五年)

小忌參議一人參新嘗會例

延喜十一年十一月廿二日　參議悅(○據公卿補任源悅延喜十九年任參議、恐有誤)

長保元年十一月　參議懷平

中納言一人例

寬弘四年十一月　中納言俊賢

(年中行事加茂氏保隆所傳)十一月中丑日ト小忌納言參議少納言事

中寅日ト殿上侍臣事

藏人仰少納言、殿上侍臣交名送神祇官ト、令不、但藏人頭可奉仕、理髮之人可奉仕、御湯殿之人御厨子所別當不ト之、

卯日早旦令ト女房事(無行幸一時不ト之)

(夕拜備急至要抄上十一月)新嘗祭

上卿　宰相　辨　少納言(已上ト舍、若有障者催他人、)　内侍　官外記

(朝野群載六神祇官)神祇官

請特蒙天恩因准先例依年勞恪勤次第轉任官人等狀(○中略)

一請被以龜ト長上正六位上ト部宿禰兼繼拜任少史致政申祐替事

右得兼繼款狀偁、(○中略)以前轉任之旨甄錄如件、抑月次新嘗會幷臨時神事等、官人不足、殆可闕怠、望請天恩依年勞次第被轉任者、將竭奉公之節、仍勒在狀、謹請處分、

從五位下行權少副ト部宿禰(○下略)

長治二年四月五日

(西宮記六月)神今食

弘仁七年六月廿二日宣旨云、左大辨秋篠朝臣宣、右大臣宣、頃年之間應供奉新嘗會神今食、小忌參議ト定一人、催備神事、其人有故交致闕之、自今以後、ト定數人、備于所闕、少外記坂上忌寸今繼奉、

同十年十一月廿日宣旨云、右大辨良岑朝臣侍殿上宣、承前供奉新嘗會神今食等、小忌參議已上只一人也、自今以後定中納言已上一人參議一人幷兩人、若中納言已上未食ト者、定參議二人、少外記高岳宿禰潔門奉、

(三代實錄四十陽成)元慶五年十一月廿三日丁卯、新嘗祭、所司供祭如常、公卿以下諸衛府舍人以上不ト、但供奉神事諸司七十二人ト食著青摺衫、神祇官三十二人、縫殿寮四人、宮内省二人、主殿寮五人、大炊寮二人、掃部寮七人、大膳職一人、内膳司八人、造酒司二人、采女司二人、主水司六人、内侍司一人、准據承和七九兩年諒闇之例也、(○又見政事要略)

(日本紀略三村上)天曆二年十一月廿二日丁卯、新嘗祭、天皇幸中院、今日小忌卿相之外諸卿或觸穢、或治病、或物忌、奉暇文不參、中納言師尹、參議保平朝臣應召參入、十二月一日乙亥、官奏此日去月廿

二日新嘗祭不參諸卿被蒙勅問、十三日丁亥、此日仰掃部寮大膳職召過狀、是去月新嘗祭日掃部寮筵道遲供、大膳職忌火遲出故也、

〔北山抄十一月〕辰日節會事

天曆三年十一月十七日、〇辰丙小忌參議庶明爲宣命使、參議保平爲大歌別當代、依无納言也云云、

〔政事要略二十六〕十一月中卯日新嘗祭事

延長六年十一月廿一日、新嘗祭、余當小忌、參入著左近陣座、大忌公卿一二先在、少將伊扶進請云、府將監等皆有障不參、行幸契陣將用誰人、公卿議云、度用右近將監是便也、因仍右陣官人、而右陣小忌將監有一人、卽仍召右大忌將監用意候、卽仍小忌納言奏、其小忌八條中納言、仍藏人頭時望朝臣奏之、勅旨雖大忌官人候不可奉仕神事、須以左府小忌將曹仍奉仕、卽將曹尾張遠岑仕小忌座三獻後、左少辨元方請中納言召請諸司、左衞門督仰於宰相座北圍碁唯一番而已、

天曆三年十一月十七日、上〇村上又臨軒、施龍南殿、中納言〇源清蔭原顯忠、皆重服、民部卿元方不參、左衞門督高明卿稱病早退故也、

〔年中行事秘抄十一月〕新嘗節會小忌不候例

小野記云、天元五年十一月十六日、〇辰甲豐明節會、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿一日乙卯、入夜有仰、參神祇官行新嘗祭事、右中辨當御卜、而辨自今朝有所勞云云、仍忽被召仰也、上新中納言宰相不參當卜伊勢權左忽申障、仍不參、供夕膳、御膳了上下分散、

〔中右記〕天永三年十一月十四日丁卯、今夕新嘗祭、上卿宰相中將家政、右中辨爲隆朝臣著行云云、少納言三人故障、定通輕服日數中、宗忠時年六十六、申返事云、先被尋例之處、延長天喜之比、神今食无少納言、辨兼行也、於新嘗祭日、已无所見之由外記所勘申也、從兼日被問人々、依彼神今食例兼行云云、是神今食新嘗祭同儀之故也、

十五日戊辰節會、內御物忌也、仍不出御、又私物忌也、仍不參仕、後聞秉燭之後事始、內辨內

大臣、小忌大宮權大夫忠教卿、〇略中少納言定通著大忌夜前不參新嘗會之故、先著大忌勤此役云云、

或人談云、大歌別當不參、代左兵衞督能俊卿、宣命使、御酒勅使、宰相中將實隆兼勤、大歌別當事、左宰相中將家政雖小忌勤之、大藏卿向五節所之間、他宰相不候座之故也、祿所左大辨云云、

元永元年十一月廿日戊辰、臨晩景參內殿下御宿所藤大納言被參、入夜參集仗座、〇略中今夜公卿纔九人也、年來未有如此事、云云、卿人數廿人也、而節會之日九人參內希事歟、

〔長秋記〕大治二年十一月十四日、今日人々云、新嘗祭上卿中納言以故障、大納言御所勞、參議一人行例近在民部卿參議時也、件人語云、著南面座無上卿時、參議可行由被仰時、更經殿東著北面座、行次第事、

〔中右記〕大治二年十一月十六日壬寅、巳時許、頭中將送書云、

今夕新嘗祭、上卿卜合人治部卿〇源俊實病惱也、爲乙卜合所勞由雖聞食相扶可參仕、不然者神事欲闕、必可參勤者、依院御氣色、上啓如件、

予〇權大納言藤原宗忠時年六十六、申返事云、

七十衰老、風病更發、極寒之比終夜之役、非可堪忍、雖然重仰候、相扶可參勤、若有不堪者、爲曉膳有其恐歟、早以此旨可令奏聞給之狀如件、

近代中納言六人、中五人輕服日數之中、殘一人顯隆卿不堪行步、大納言五人之中、予乙卜合、治部卿丙合見病惱、民部卿丙合無沙汰歟、爲最下臈之上、年非老者、何不參勤哉、十八日節會、戌刻御出、殿下有障不參給也、內辨內大臣、小忌宰相師時、予不參、仍師時召少納言忠宗、相公執笏奉拜、外辨民部卿忠教白黑酒右衞門督實行別當代左兵衞督實能左宰相中將宗輔左京大夫經忠散位三已上七人、近代殊不見、四年十一月廿三日、新嘗祭、〇略中近代公卿人數少之上、或所勞、或服暇、纔六七人參仕、未見此事、太奇悋歟、內侍召內辨、謝座著座歟、

〔長秋記〕大治四年十一月廿四日戊辰、後聞別當實行卿夜前勤新嘗祭參仕、明朝奏請上皇云、今日可參節會、而於小忌左兵衛督可著由可被召仰、前々雖參夜祭、節會以他人改著小忌是常例也者、上皇被仰左武衛令奏云、如仰可著、但上卿宰相有故障不參常例也、乍參以他人爲代例不聞候、乍知食此旨、尚著小忌可參由御氣色候歟、無左右可參仕者、仰云、無先例何著小忌哉云々、依遂別當著小忌參仕、先之參議長實卿謝座了、堂上三獻後、別當著小忌參、以內豎觸內辨、未左右進著小忌座云々、條々希代也、仍記之、

五年十一月十七日丙辰、臨晚參節會、〇中略仰云、大歌別當代皇后宮大夫藤原朝臣不參、代官誰人可任哉、〇中略仰云、大歌別當皇后宮大夫藤原朝下官、宰相中將忠宗卿不居陣、依著小忌歟、小忌不居陣事、近代謬說也、

〔水左記〕承曆五年十一月廿二日甲辰酉刻許、著束帶與新中納言參內向陣、〇中略召宰相中將公實卿賜見參、此間右大將春宮大夫云、小忌人向祿所、近代不見之事也、可被用他人歟、予〇源俊房答云、前々小忌人所役常事也、何不著祿所哉、博陸〇藤原師實自簾中被示云、小忌人所役有前例、何難之有哉、仍著祿所了、

〔台記〕康治三年〇天養元年十一月廿一日戊辰、光房來云、今上〇近衛御時、節會未出御、依幼少也、今度初可出御、〇御歲六歲左大臣〇源有仁稱疾在仁和寺、必可參者、對曰、夜間所惱待減、但鼻塞聲枯、內辨可招喚、且又先例參入之人、猶依咳病免內辨退出、光房復來傳法皇〇鳥羽勅曰、始出御下臈奉仕內辨不隱便、慥可參、微音何事之有哉、對曰、可參者、戌刻參內奉仕內辨、舍人侍座微言、衆人定解頤乎、

久安三年十一月廿日庚辰、今日新嘗會、戌刻參內、〇略今日余一上後初行內辨失禮四、就中不敷軾召外記、謝座之時先北行大失也、勤眞信公以後臣之先祖居一上之任者三人、貞信公、〇藤原忠平法成寺入道前大相國〇藤原道長京極前大相國〇藤原師實等也、皆德充海內、世推其仁、未有如臣不肖者居此任焉、是故上以逆天心、下以乘人望、天人不與、故有此失、恥而有餘、歎而無益、嗚呼哀哉、

參入公卿節會

攝政〇藤原忠通　余　左衛門督公敎　權中納言公能　參議右中將經定　同敎長小忌

除內辨幷小忌之外唯三人、群卿之不忠可彈指、可謂指就中權大納言伊通、皇后宮權大夫成通、不候節會、供奉行啓、非唯無忠勤之志、抑亦有嫺詔之心、詩曰、相鼠有皮、人而無儀、此之謂也、

〔山槐記〕永曆元年十一月一日乙亥、未刻參大納言殿〇藤原宗能、申承雜事、次參大殿〇藤原忠通、申條々、一中院行幸〇新嘗祭事雖可申沙汰、五節臨時祭奉行事繁多、被仰付五位藏人、如何、仰云、被仰五位藏人何事之有哉、但經奏聞可隨勅定、可隨勅定、

此旨付內侍奏聞、仰云、早可仰付五位藏人、

九日癸未、藏人少納言示送云、中院行幸御湯殿役可勤仕者、予申承了之由、此事觸山蔭後胤之人勤仕、實家朝臣當時服暇云々、

來者也、予外戚所觸也、近來左府〇藤原伊通黨勤仕、實家朝臣當時服暇云々、

〔愚昧記〕仁安二年十一月十四日戊寅、未刻許、召使持來新嘗會祭卜串、予〇藤原實房乙卜合、藤中納言新中納言丙合、藤宰相左大辨丙合、右大辨乙卜合、而藤宰相服日數內、右大辨熊野詣、仍左大丞可參云云、予可參之由答了、卽可調小忌之由下知了、

嘉應二年十一月十六日壬辰、未刻許、自左府〇藤原經宗示給云、今日相扶所勞雖參內、早出無疑事也、爲用意所申案內也、右內兩府幷左大將不可參云々、答云、可參內之由存候、但中宮權大夫參內者、不可出仕候、所相憑之朝宗可被招取之故也者、卽又被示云、重光早可召也、自是其由下知了、何ニモ可有御參內、奉公ハ不空事也云々、答云、如只今者二人候、若闕如者可申請、只今令參上事也可承云々、卽著束帶帶劒等如參左府亭、尋申不審事等之儀、參內頃之左府參著仗座〇中略問外記云、大歌別當中宮權大夫歟、今日不參內歟、然可申代官件事官被管也然而只仰外記、或又不仰外記、只告其人歟、頼業云、代官事不被仰官、或仰外記、或只告其人也、左府云、保延元年四條民部卿忠敎爲內辨件人大歌

別當也、仍以中納言師時卿爲代宣、件度只告其人也、後日於式所、一日節會失錯等有其沙汰之時、於件條者、難否之條不見也、先此令頭左中將令奏外任奏、此次被申大歌別當事、〇略中中將云、大歌別當事聞食了、參入人々之中、相計可被用也、左府云、指其人可被仰歟、內辨難自由歟、誰人トモ自上可被仰下也、多下蔭歟者、〇略中左頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內承安四年十一月廿一日甲辰、新嘗節會也、戌刻許參內、〇略中頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內辨事歟、仍著陣座、〇略中問外記云、大歌別當誰人哉、源大納言之由覺悟、然而爲知定說所問也、俊國申不覺悟之由、仍問大外記仰可申之由、俊國退去、則歸參申云、源大納言云々、次令官人喚頭中將、中將則著軾、予授外任奏、此次申大歌別當代事、少時返給外任奏、予結之、頭中將仰云、令候列、又仰云、大歌別當代中宮權大夫者、〇略中源納言云、中宮權大夫俄有障小子有事之由、自里亭告來云々退出、其外納言不被候、外辨事誰人可行哉、予招大外記問云、小忌上卿之外、外辨有納言不著之例哉、以小忌納言爲大歌別當代例如何、賴業云、小忌上卿行外辨事之例、只今不覺悟、爲大歌別當代之例候歟、予又招頭中將申此子細、中將奏聞了歸來云、兩事小忌上卿可勤仕於大歌別當代事者、外記申有例之由、至行外辨事之條、長元之比有其例之由覺悟御云々、是關白命歟仍源納言以下出外辨了、〇略中奏宣命返給之時、頭中將云、雖不知子細事、內辨甚以優歟、人々褒譽云々、初度內辨也、無殊失錯遂了、爲悅々々、參內之次先參向殿舍申承作法、召舍人召刀禰幷侍座事、又練歩事等、於御前勤仕了之後參內也、先年雖習申臨期猶以尋申了、

〔玉海〕承安四年十一月廿一日甲辰、豐明節會、內辨三條大納言奏外任奏了、人々欲著外辨之時、納言一人不候、于時右衞門督中宮權大夫在藤壺云々、雅賴進申內辨曰、外辨事小忌可奉行歟、將參議歟、內辨付頭中將奏請之被問歟、大外記賴業申云、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〇藤原基房仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別當也、仍以中納言師時卿爲代宣、件度只告其人也、後日於式所、一日節會失錯等有其沙汰之時、於件條者、難否之條不見也、先此令頭左中將令奏外任奏、此次被申大歌別當事、〇略中中將云、大歌別當事聞食了、參入人々之中、相計可被用也、左府云、指其人可被仰歟、內辨難自由歟、誰人トモ自上可被仰下也、多下蔭歟者、〇略中左頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內承安四年十一月廿一日甲辰、新嘗節會也、戌刻許參內、〇略中頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內辨事歟、仍著陣座、〇略中問外記云、大歌別當誰人哉、源大納言之由覺悟、然而爲知定說所問也、俊國申不覺悟之由、仍問大外記仰可申之由、俊國退去、則歸參申云、源大納言云々、次令官人喚頭中將、中將則著軾、予授外任奏、此次申大歌別當代事、少時返給外任奏、予結之、頭中將仰云、令候列、又仰云、大歌別當代中宮權大夫者、〇略中源納言云、中宮權大夫俄有障小子有事之由、自里亭告來云々退出、其外納言不被候、外辨事誰人可行哉、予招大外記問云、小忌上卿之外、外辨有納言不著之例哉、以小忌納言爲大歌別當代例如何、賴業云、小忌上卿行外辨事之例、只今不覺悟、爲大歌別當代之例候歟、予又招頭中將申此子細、中將奏聞了歸來云、兩事小忌上卿可勤仕於大歌別當代事者、外記申有例之由、至行外辨事之條、長元之比有其例之由覺悟御云々、是關白命歟仍源納言以下出外辨了、〇略中奏宣命返給之時、頭中將云、雖不知子細事、內辨甚以優歟、人々褒譽云々、初度內辨也、無殊失錯遂了、爲悅々々、參內之次先參向殿舍申承作法、召舍人召刀禰幷侍座事、又練歩事等、於御前勤仕了之後參內也、先年雖習申臨期猶以尋申了、

〔玉海〕承安四年十一月廿一日甲辰、豐明節會、內辨三條大納言〇實房也、外辨闕如云々、源納言注送云、內辨三條大納言奏外任奏了、人々欲著外辨之時、納言一人不候、于時右衞門督中宮權大夫在藤壺云々、雅賴進申內辨曰、外辨事小忌可奉行歟、將參議歟、內辨付頭中將奏請之被問歟、大外記賴業申云、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〇藤原基房仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別當也、仍以中納言師時卿爲代宣、件度只告其人也、後日於式所、一日節會失錯等有其沙汰之時、於件條者、難否之條不見也、先此令頭左中將令奏外任奏、此次被申大歌別當事、〇略中中將云、大歌別當事聞食了、參入人々之中、相計可被用也、左府云、指其人可被仰歟、內辨難自由歟、誰人トモ自上可被仰下也、多下蔭歟者、〇略中左頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內承安四年十一月廿一日甲辰、新嘗節會也、戌刻許參內、〇略中頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內辨事歟、仍著陣座、〇略中問外記云、大歌別當誰人哉、源大納言之由覺悟、然而爲知定說所問也、俊國申不覺悟之由、仍問大外記仰可申之由、俊國退去、則歸參申云、源大納言云々、次令官人喚頭中將、中將則著軾、予授外任奏、此次申大歌別當代事、少時返給外任奏、予結之、頭中將仰云、令候列、又仰云、大歌別當代中宮權大夫者、〇略中源納言云、中宮權大夫俄有障小子有事之由、自里亭告來云々退出、其外納言不被候、外辨事誰人可行哉、予招大外記問云、小忌上卿之外、外辨有納言不著之例哉、以小忌納言爲大歌別當代例如何、賴業云、小忌上卿行外辨事之例、只今不覺悟、爲大歌別當代之例候歟、予又招頭中將申此子細、中將奏聞了歸來云、兩事小忌上卿可勤仕於大歌別當代事者、外記申有例之由、至行外辨事之條、長元之比有其例之由覺悟御云々、是關白命歟仍源納言以下出外辨了、〇略中奏宣命返給之時、頭中將云、雖不知子細事、內辨甚以優歟、人々褒譽云々、初度內辨也、無殊失錯遂了、爲悅々々、參內之次先參向殿舍申承作法、召舍人召刀禰幷侍座事、又練歩事等、於御前勤仕了之後參內也、先年雖習申臨期猶以尋申了、

〔玉海〕承安四年十一月廿一日甲辰、豐明節會、內辨三條大納言奏外任奏了、人々欲著外辨之時、納言一人不候、于時右衞門督中宮權大夫在藤壺云々、雅賴進申內辨曰、外辨事小忌可奉行歟、將參議歟、內辨付頭中將奏請之被問歟、大外記賴業申云、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〇藤原基房仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別

當也、以小忌上可令奉行者、著外辨座了、雖然大歌別當猶勤仕候口、其後按察使參著外辨座了、雖按察參仕若依本勅歟者、余案之雖有本勅、大忌人參仕者、內辨申事由、以按察卿用大歌別當代也、小忌勤三方役希代事歟、凡見任納言十七人、外辨闕如之條、未曾有事也、可彈指云々、

治承二年十二月四日癸巳、今日於內裏左大將〇藤原實定語云、去豐明宴會、內辨所存無殊者、但以小忌參議實宗用宣命使、其故見參參議加小忌四人家通、實定、賴定、實宗、須以實宗可爲御酒勅使、而忘却仰家通、仍以實守可用宣命使之處、先例家禮之人不用宣命使故實也、而實宗有父子之儀、仍不能賜宣命、又家通不可兼行、賴定卿向祿所、仍依有例示合人々、以實守爲宣命使也、人定加誘難歟然而小忌勤宣命使、其例太多云々、三年十一月十四日戊辰、此日豐明節會也、〇略抑見參參議四人家通、實宗、光能、賴定、實本所思定宣命使家通、御酒勅使賴定、召大歌實宗、祿所光能也、而家通早出了、依余著端座之間不知之、仍召大歌之時、須用光能也、而召實宗之間、宣命使祿所依難相兼上蔭勤之、兩役尤無心也、實宗賴定云々、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〇藤原基房仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別當也、仍以中納言師時卿爲代宣、件度只告其人也、後日於式所、一日節會失錯等有其沙汰之時、於件條者、難否之條不見也、先此令頭左中將令奏外任奏、此次被申大歌別當事、〇略中中將云、大歌別當事聞食了、參入人々之中、相計可被用也、左府云、指其人可被仰歟、內辨難自由歟、誰人トモ自上可被仰下也、多下蔭歟者、〇略中左頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內承安四年十一月廿一日甲辰、新嘗節會也、戌刻許參內、〇略中頭中將來云、上蔭不被參云々、可奉仕內辨事歟、仍著陣座、〇略中問外記云、大歌別當誰人哉、源大納言之由覺悟、然而爲知定說所問也、俊國申不覺悟之由、仍問大外記仰可申之由、俊國退去、則歸參申云、源大納言云々、次令官人喚頭中將、中將則著軾、予授外任奏、此次申大歌別當代事、少時返給外任奏、予結之、頭中將仰云、令候列、又仰云、大歌別當代中宮權大夫者、〇略中源納言云、中宮權大夫俄有障小子有事之由、自里亭告來云々退出、其外納言不被候、外辨事誰人可行哉、予招大外記問云、小忌上卿之外、外辨有納言不著之例哉、以小忌納言爲大歌別當代例如何、賴業云、小忌上卿行外辨事之例、只今不覺悟、爲大歌別當代之例候歟、予又招頭中將申此子細、中將奏聞了歸來云、兩事小忌上卿可勤仕於大歌別當代事者、外記申有例之由、至行外辨事之條、長元之比有其例之由覺悟御云々、是關白命歟仍源納言以下出外辨了、〇略中奏宣命返給之時、頭中將云、雖不知子細事、內辨甚以優歟、人々褒譽云々、初度內辨也、無殊失錯遂了、爲悅々々、參內之次先參向殿舍申承作法、召舍人召刀禰幷侍座事、又練歩事等、於御前勤仕了之後參內也、先年雖習申臨期猶以尋申了、

〔玉海〕承安四年十一月廿一日甲辰、豐明節會、內辨三條大納言奏外任奏了、人々欲著外辨之時、納言一人不候、于時右衞門督中宮權大夫在藤壺云々、雅賴進申內辨曰、外辨事小忌可奉行歟、將參議歟、內辨付頭中將奏請之被問歟、大外記賴業申云、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〇藤原基房仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別

〔吉記〕治承四年十一月七日乙卯、早旦藏人佐隆職宿禰等入來、世上事歎息之外無他、各謝遣之後、先參殿下、〇略中付信廣申入條々事〇略中

帳臺御出童女御覽等可參公卿等事

仰云、御物忌之間、今日不御覽交名、明日可申、

八日丙辰、先參殿下、令參新院給云々、仍逐參直申五節間事等、

新嘗祭小忌上卿以下豐明節會難參會哉否事右大外記賴業師尚等、幷公卿五人左右兩府左大將師家大納言堀河中納言等申狀、

院奏之處、人々計申之上、殿下可令定給由有仰、殿仰云、被相分之條猶無謂、神事可早參之由可

令〇令一本作有下知、不合期者、其時可有沙汰歟、兼不可分者、〇中略

帳臺御出并童女御覽日公卿事

昨日仰殿下可令計給、殿仰猶可奏院、仰云、左府以下可令計給、又右大將尤可參、寬治仁安例、并可然人々注二申之一、

廿日戊辰、秉燭之後參內、上下漸參集、〇中略於二兩都一被レ行之間、小忌卿相已下難二參會一事、兼被レ尋二大外記賴業師尙等之後一、被レ問二左府右府左大將帥大納言堀河中納言等一、各申狀并外記勘文在レ別、雖レ有二一人不參例一、令レ無二兩人不參例一、每事違例只在二兩都一歟、

〇按ズルニ、此時新嘗祭ハ京都ノ神祇官ニテ行ハレシナリ、

〔玉海〕文治五年十一月廿三日己卯、頭中將成經申云、新嘗祭上卿宰相、相共以闕如云々、各仰可レ催之由也、余退出之後、子刻來示二猶闕如之由一、仍侍男一人令レ騎二御廐馬一、馳二遣兼忠卿許一、申可レ參之由、是雖レ不レ可レ然、爲レ不レ闕二公事一也、後聞、兼光卿又參入云々、

建久三年十一月廿一日庚寅、頭中將實明朝臣來云、明日新嘗祭行事、左少辨宗隆卜食也、而稱レ病、仍可レ催二親經之由仰一之、件宗隆春日祭非二巡勤一之、大原野祭依二巡勤一之、兩箇重役、其程近之也、不レ可二譴責一也、

〔明月記〕承元二年十一月廿日、自二十七日一五節、今日節會云々、廿三日、節會事、

內辨出著座、大歌別當誰人乎由令レ問二資實卿一給、件卿一人著陣、中納言也、答云、右衞門督存ジテ候歟、此事無レ謂、不レ著二陣座一、大歌別當、先是更無二起座人一、此時資實卿俄起座、奔降勤仕其後事由被レ仰、三獻訖內辨召二定通卿一、令レ召二大歌別當事之不可思議□□□□博陸殿下〇藤原家實備行事給、主上〇土御門入二御御殿之後一、歸來御座御帳之中、高聲被レ行二一事以上、但違失多一宇治左府年十六、始勤二內辨一給、法性寺殿云、兼日能加二敎訓一、著座之後一言不二加給一、自二御帳之中一內辨行事未レ聞事歟、謝座舍人等之間甚美麗、經通下二外任奏之間一クトイヘ事ヲ云懸、上卿聞之後結文、其事不レ得レ心、若外任奏有レ過歟不レ知レ之、依下二簡公信ヲ被一仕、及三獻□□無二便宜一、三獻了後、博陸乍レ座卜命給、腋御膳同被レ催、公宣不レ聞入而在レ座、其事久不レ催之間博陸又腋御膳卜被レ仰之間、ヤガテ腋御前ヲ被レ催、內辨紛熟之間博陸進物所御厨子所ハイカニト被レ仰、采女等無左右一居之、次第違亂非一、

〔玉葉〕承久二年十一月十八日、此日豐明節會也、入夜欲二參內一之處、九條大納言自二內裏一送二消息一云、今夜無二他參入之人一、有レ奉二仕內辨之志一依可レ蒙二御免一、生涯之恩有二此事一云々、仍不二參內一、此條頗不二普通一、須雖レ不レ可レ然、諾、聊風病相侵、仍讓與了、後聞、右府〇藤原家通參入爲二內辨一云々、關白〇藤原家實聞レ予〇藤原道家不參之由、召遣云々、比興事也、亞相支度相違、頗鬱陶云々、或人云、內辨失禮多端云々、未レ供二御膳一以前催二臣下一飯汁、又未レ居、汁以前申二上下御著一、依レ關二白命一更令レ居レ汁云々、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿日癸卯、新嘗祭也、上卿權中納言清原宗業眞人、卜不合權右少辨藤原經直、奉行權右少辨少外記清原親種、乙合卜右大史安倍盛久、分配召使宗岡行繼、宮主卜部兼興、內侍等參官云々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十四日己酉、藏人右中辨俊國送二御敎書一曰、

新嘗祭御卜合候、御參事可レ奉レ存候、仍上啓如レ件、

十一月十三日　　右中辨俊國

謹上中山宰相中將殿

返答曰

新嘗祭參向事、卜合之上者尤可二存知一之處、旁故障候、可レ然樣可令二申沙汰一給候也、謹言、

廿日乙卯、今日新嘗祭也、藏人右中辨俊國奉行也、上卿按察大納言資家、參議四條宰相隆盛、辨□□云々、予爲卜合之由再三有其催、然而申故障之趣於院、□仍所被催免也、

〔康富記〕寶德元年十一月廿二日丁卯、新嘗祭也、上卿花山院中納言定嗣卿、卜合坊城宰相益長朝臣、右中辨冬房朝臣、藏人頭正四上少外記康顯、卜合右大史員職、分配召使秀國、內侍出車可卜尋之、部□□等參行之、辨少納言著南廳座之時辨先進、少納言後著座、北廳前儀、上卿參議列立如常、辨少納言不及列立、各一人宛臨其役、參進了、廿三日戊辰、豐明節會停止、平座被行之、○略內豎遲參之間、可爲不參歟、不參例幷何樣可被行哉、代官可用誰人哉有尋沙汰、雖然深更內豎參入了、應永五年十月二日不參也、代事可尋之、

〔元文五年新嘗會次第〕新嘗會

小忌公卿　一條　右大臣道香公　河野　權中納言實惟卿　梅園宰相久季卿

少納言　五條　爲成朝臣大內記　辨　日野西　豐尙左少辨　次將左　家季朝臣中將　飛鳥井　雅重朝臣

中將　右　綾小路　有美朝臣少將　風早　公金少將

大忌公卿　三條大納言利季卿　柳原　左兵衛督中納言光綱卿　廣幡　新大納言長忠卿　權中納言同上

豐明節會公卿　右大臣同上　三條大納言同上

萬里小路中納言　右衛門督維房卿　左兵衛督同上　宰相實積卿　梅園宰相同上　宰相中將

重熙朝臣

少納言　爲成朝臣同上　辨　豐尙同上

次將左　鷲尾　隆熙朝臣中將　園　基望朝臣中將　家季朝臣同上　雅量朝臣同上　石山　基名少將

右　小倉　宣季朝臣中將　正親町　實連朝臣中將　有美朝臣同上　難波　宗城少將　公金同上

傳奏中山中納言榮親卿、奉行姉小路頭中將公文朝臣、

今上皇帝○櫻町御再興、于時元文五、十一月卯月廿四日御當日也、同廿五日豐明節會、

〔續史愚抄後櫻町〕寶曆十三年十一月六日己未、於神祇官代、有新嘗祭小忌卜定、權大副二位兼雄奉仕、十四日丁卯、新嘗祭、無中和院代行幸、掌侍藤原治子參向、小忌上卿中山中納言愛親宰相已下參仕、自今年被罷小忌大臣出仕、再興後大臣或所出仕也奉行藏人頭左中將隆望朝臣、

明和二年十一月十三日乙酉、於神祇官代、有新嘗祭小忌卜定、自今年加侍從、卜串再興、權大副二位兼雄奉仕、

〔續史愚抄後桃園〕安永三年十一月十六日乙丑、於神祇官代、有新嘗祭小忌卜定、新卜二位兼隆奉仕、十八日丁卯、新嘗祭、○略小忌上卿新中納言愛德、宰相已下參仕、大忌公卿右大將前豐著關腋入大失已下二人依無行事、空退出、奉行藏人頭左大辨光祖朝臣、十九日戊辰、節會、內辨左大臣尙實陣後早出、西園寺大納言實季外辨新大納言愛親已下十一人參仕、大歌別當申代官、西園寺大納言雖爲大歌別當依續內辨也被仰新大納言愛親、先例多用中納言、但嘉保及正治二爲大納言之由見明月記、奉行藏人頭左大辨光祖朝臣、

〔延喜式三十宮內〕凡神今食新嘗祭夜丞錄各一人、與神祇官共侍內裏、檢按御膳進退、

〔政事要略二十六〕十一月中卯日新嘗祭事○略中

又十姬供奉高橋安曇兩氏供奏同六月其供物盛陶器納於筐、第一姬執入筐、神食薦、次御食薦、御飯四盛、菜羹二口、同菓子四種八干物四種六、鮮物口種七、葉盤三、次御盛菓子十二度、天皇白黑酒瀉神食上四度、次供御酒入坏、自餘皆同神今食、

〔玉海〕建久三年十一月廿二日辛卯、入夜左中辨親經朝臣來、新嘗祭神服神饌等闕如事、各可譴責之由仰也、廿三日壬辰、親經參來申云、○略中諸國不濟神饌、然而內膳司如形勤仕之云々、

〔延喜式三十宮內〕凡醸新嘗黑白二酒者、每年九月二日、省與神祇官共赴造酒司、卜應進酒稻國郡、記省丞以奏狀進內侍、內侍奏了下官、官卽仰下、其料用田稻、其供奉酒部以下亦用卜食者、

神饌及御饌

酒醴

〔小野宮年中行事九月〕朔日奏可醸新嘗黒白二酒事

宮内省與神祇官共赴造酒司、下造酒殿地及進酒稻國郡、訖付内侍奏之、覽了返給、内侍下辨官、

〔北山抄十二月〕二日、奏可供新嘗祭官田稻粟卜定文事、内侍奏之、下辨官、

〔年中行事秘抄九月〕二日新嘗會酒料文事、付内侍所奏之、主上召殿上辨下給、辨等不必申、唯依官符、仍有兩說、〇又見年中行事抄、

〔延喜式二十民部〕凡十一月新嘗會黒白二酒料米、九月下旬、省下符畿内、卽春省營田稻送造酒司、

〔延喜式四十造酒〕新嘗會白黒二酒料

官田稻廿束、識内所進、絁大篩三條、一條飾、二條飾、酒別五尺、酒缶一口、別二丈、一尺、甕一口、調布二條、別六尺、取甕二人調布衫二領、別六尺、裨一條、潔襦一條、手巾調布一條、長二尺、縫絲二鉄、韓櫃二合、甕二口、由加二口、缶六口、四口納酒、二口汲水、小坏四口、小匜四口、明櫃三合、中取案一脚、臼一腰、杵四枚、箕二枚、槽二隻、韓篩二具、

右九月二日、省幷神祇官赴集司家卜定、酒部官人仕丁各二人、若當子日、聽者處分、其負名官人在者、先卜官人、後及酒部、舂稻仕女四人、卽祭其殿地神、所須五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿一斤五兩、庸布一丈四尺、鍬一口、東鰒十兩、堅魚一斤五兩、腊二斤、鹽二合、海藻一斤五兩、米酒各二升、祭訖木工寮造酒殿一宇、臼殿一宇、竝間三、麹室一宇、草葺、構以黒木、掃部寮以苫八枚、葺四枚、十月上旬、擇吉日始釀、十日内畢、酒部二人官人各給潔衣、料絁一匹、綿二屯、仕丁二人各庸布一段、調布頭巾六條、別尺二、裨六條、別尺六、釀酒日給間食、舂稻女丁亦同、其造酒者米一石、令女丁舂、以二斗八升六合爲糵、七斗一升四合爲飯、合水五斗、各等分爲二甕、甕得酒一斗七升八合五勺、熟後以久佐木灰三升、採御生和方木和合一甕、號神黒貴、其一甕不和、是稱白貴、其踐祚大嘗會、遣酒部二人於二國齋場院、以預其事、人又酒一石、均入二缶、並齋會夜幷解齋日供之、畢後二殿給神祇官副巳上中臣、一室給宮主、

諸節會料酒

十一月新嘗會四斗、若可過此限聽辨官處分、

〔類聚符宣抄四〕太政官符民部省外　御稻

應進上新嘗會御酒料屯田稻貳拾束事

定山城國愛宕郡

右得造酒司解偁、來十一月新嘗會白貴黒貴御酒料、依例所請如件者、省宜承知、依件宛之、符到奉行、

左大史

左中辨

天曆四年九月廿三日

〔年中行事秘抄十一月〕無新嘗會時白黒御酒事

長保三年十二月十二日小野記云、御膳次白黒酒、依無新嘗會也、是見九條相府記、

〔延喜式二四時祭〕新嘗祭奠幣案上神三百四座　並大

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍桙一竿、

社別庸布一丈四尺、裏葉薦五尺、

前一百六座

座別幣物准社法、但除庸布、

右中卯日於此官〇神祇齋院官人行事、諸司不但須幣及造供神物料度、中臣祝詞料准月次祭

忌火炊殿祭

五色薄絁各四尺、倭文二尺、木綿五兩、麻一斤五兩、鍬四口、米酒各四升、鮑二斤、堅魚海藻雜海菜各四斤、鹽二升、坏四口、坏四口、食薦一枚、庸布二段、

右新嘗祭時先新造炊殿、依件鎭祭、宮主行事、其舊殿者壞却給宮主、

御服

〔政事要略二十六〕十一月新嘗會裝束

天皇服帛御衣

〔蓬萊抄〕十一月中丑日夜帳臺試事

舞姫裝束了後、主上渡二御御帳臺一、御直衣織物御指貫淺履也、或召二深履一云々、

〔年中諸公事裝束抄〕十一月五節丑日（號二參入一）

主上御直衣御指貫をめさる、御半靴淺沓兩說也、

〔公事根源十一月〕五節

中丑の日をば、五節帳臺試といふ、〇中略主上御直衣に御指貫にて御沓をめさる、主上の御さしぬきをめさるゝ事は、この時の外はなし、但御鞠の時は、帳臺試に准じてめさるゝ也、

〔中右記〕寛治四年十一月十七日、五節參入、〇中略御元服之後、〇堀河初有二御出帳一代、御直衣出衣淺履、

〔續世繼六唐人の遊〕右のおとゞ宗忠の御子は、宗能の內大臣と聞え給、〇中略やすきことなれども、をさなくおはしますみかどなど、常には五せちの帳臺の心みなどに出させ給ことまれなるに、ぬきの御かた、〇榮德おとなにならせ給て始めて出させ給しに、御さし拔は何のもむといふことも、をさめどのゝ藏人おぼつかなく思へるに、おられぢにくわんのもんぜかしなど、くら人の頭におはせし時、の給なぞして、さやうのことは、一年に只一度ぞおはしませば、おぼつかなくおぼしめすらんとぞきこえし、

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、舞姫參入、〇中略綾紅打御淺御沓、今夜出御無二例儀一也、

〔愚昧記〕嘉應二年十一月十三日己丑、五節舞姫參入也、戌刻終參二大內一、（前驅二人）先是左大將〇藤原師長參仕、於二清涼殿廣廂一暫談話、〇中略被示云、帳臺御出之時、主上〇高倉可二著半靴一御一歟、予云、不二同候一歟如何、將軍云、其程遠之時、著二御半靴一、近時淺履云々、然者御二大內一之時可二著半靴一御之由、先人所レ被二申候一也、予云、尤有二其謂一、有二興事一歟、

〔玉海〕承安二年十一月十二日、此日五節參也、主上〇高倉始出二御帳臺一、〇中略五節參了、於二朝餉一召二御裝束一、（邦綱卿實守卿等候レ之、又時忠卿候、攝政余候）大盤所御直衣也、（御指貫紅打御衣、實守卿申二攝政一云、令レ引二上御指貫之時、出衣チバ可レ籠レ前歟、可レ出レ後歟、攝政被レ答云、出レ後無下之レ例上歟、）

治承元年十一月十八日癸丑、此日五節參入也、〇中略主上於二額北間一召二御沓一、（實宗朝臣獻レ之、攝政奉レ持レ之、）御指貫蹈入給也、

衣、〇中略少時出二御帳臺一、二年十一月廿日己卯、主上〇高倉始出二御帳臺一、〇中略五節參了、於二朝餉一召二御裝束一、

建久二年十一月廿日乙丑、五節參入、〇中略主上〇後鳥羽出二自北鳥居障子一、於二同西面北一間長押上一、（進二額間一也）

著二御履一、（實明朝臣奉レ之）御指貫蹈入御沓給也、深沓淺沓雖レ有二兩說一、今夜召二淺履一也、近代多如レ此、其程遠之時召二深沓一云々、〇中略今日主上御裝束、

小葵綾御直衣、同文白御衣二領、同單衣、紅打御下袴、白檜扇、淺御沓等也、

〔玉蘂〕承久二年十一月十五日、此日五節參入也、〇中略主上〇順德自額間出御、〇中略御裝束御直衣如レ例、（小葵文□裏濃色帳）紅打御出衣（不レ入レ綿）半色浮文織物御指貫（地窠文有二腹白一）

〔明月記〕寛元元年十一月十五日己卯、童御覽、〇中略御裝束了出御、（白御衣、紫衣、出衣厚衣、）

〔西宮記臨時四〕新嘗祭

小忌王卿以下、當色青摺日影、赤紅懸二衝脯大右肩一、

豐明

王卿如例節會（但小忌著二青摺日影級赤紅等一、非二侍從著一魚袋一、先例云々、著二青摺衣一者著二赤紅一、）

〔政事要略二十六〕十一月新嘗會裝束

職員服裝

小忌王卿以下、著青摺布袍幷日影縵淺履等、扈從乘輿、小忌近衛將以下、幷殿上侍臣同著青摺日影縵諸衛服上儀、但大忌王卿以下如恒例、衛府公卿以下不論小忌帶弓箭、

豐明日裝束 辰日

王卿著魚袋靴等、但小忌王卿著青摺布袍赤紐日影縵等、諸衛督將佐捨仗、又著靴魚袋等、番長以下服上儀、

〔次將裝束抄〕節會

豐明十一月中辰日

垂纓闕腋袍、半臂、巡方帶、付魚袋、螺鈿細劒、靴、

隨身垂袴、舊老公卿將隨身、或著染袴垂袴、下官用此說也、〇中略

五節之間

丑日、參入直衣、古人不刷、寅日、殿上淵酔直衣、出衣隨々、布衣帶劒、

年之輩者不出衣、昨日不出仕人、或出衣、昨日雖不出仕、不出又無難、同夜〇卯日有中院行幸時、

卷纓綾縫腋、丸鞆帶、細劒、時繪壺弓、著小忌之人、袍上著小忌、小忌帶前後各押入、諸司小忌トテ不法物也、以紙捻閉之、

辰日節會、見上

有中院行幸、著小忌之裝束、大嘗會時、三々夜著也、侍從猶帶劒、同將佐、冠垂纓、日蔭有心葉、付糸紐、小忌袍白布、以草摺之右方、下尻均緊、例半臂下襲表袴袿單衣、以下皆如例、巡方魚袋螺鈿細大刀、著靴引陣也、

〔世俗淺深秘抄上〕新嘗會時有行幸翌日節會、侍臣著小忌是例也、但次將少年輩可著之、多不可著之、可相交歟、多著之混大嘗會、故必少々不著之也、不依中少將幷位高下、年若輩著之、

〔蓬萊抄〕十一月中丑日夜帳臺試事

五節等參入、殿上人引群行向、一家公卿若受領獻之時、依其語扶持也、著直衣裝束、雖非雜物、頗可用、

心歟、又必可著深沓云々、是舊例也、而近代令多用淺履、狹指貫之後頗不穩事也、但可依時歟、獨醒有何益乎、於雨雪夜者、尚必可用深履也、〇中略之外漸以不著、陵遲之基也、

寅日事

兩貫首以下、早旦參殿上、各著楚々直衣、出褂如常、

卯日事

殿上淵酔如常日、無禁制之時、人々改昨日裝束、

〔年中諸公事裝束抄〕十一月五節丑日、號參入

扈從公卿、直衣束帶に劒思々なり、殿上人今夜は所役ある程に束帶なり、藏人頭は直衣也、

寅日殿上淵酔

藏人頭以下殿上人みな直衣、出衣あるべし、靭負のすけ束帶布袴衣ないす兩說也、六位衛府官を帶したるは闕腋の袍衣冠出衣をせず、文官の人縫腋袍出衣あるべし、

同夜院淵酔

公卿ことにその人を清撰せらるゝ事也、直衣、出衣殿上人おなじく直衣なるべし、

同夜御前試

貫首束帶、殿上人直衣をあらためて、束帶を著して參內、隨身をめしぐすべし、

卯日殿上淵酔

藏人頭直衣、きぬの妻をいださず、殿上人おなじ、所々の推參今日はあるべけれども、時によりてさだむべからざる也、

童御覽

公卿御點をもて相催べき也、其人を清撰せらるべきなり、公卿直衣出衣あるべし

辰日豐明節會代始は辰巳午三ヶ夜、節會次將必小忌を著也、

諸卿束帶、有文帶飾劒靴、新嘗會の上卿辨少納言、必小忌を著する也、侍從縫腋のはし、巡方帶魚袋を付、近衞次將闕腋袍巡方帶魚袋螺鈿劒、近衞佐近衞司におなじ、

〔年中行事裝束抄〕五節

丑日帳臺ノ出御ノ人々、殿下以下五六人バカリ直衣ナリ、アルヒハ衣ヲイダシ、アルヒハイダサヌモアリ、殿上人兩貫首直衣以下人々、アルヒハ直衣、アルヒハソクタイナリ、六位ハコヨヒハイツカウニソクタイニテアルベシ、

寅日、貫首以下一向直衣ニ冠ナリ、六位オナジク衣冠ナリ、タヾシアヲイロヲキルベシ、式部丞アヲイロニ火イロノシタガサ子、衣冠ナラバウキモンノサスベシ、アヲイロヲキルベシ、他ノ藏人ビレイノ裝束ヲキルトイフトモ、アヲイロオリモノヽサシヌキヲキルベカラズ、貫首以下ミナキヌヲイダス、アルヒハウチギヌ、アルヒハオリギヌナリ、ウチギヌニモ、中年人ハツタヲイル、夜ニイリテノチ、ナヘラカナルソクタイヲシテ、御前ノコヽロミニマキル、

卯日、今日モ殿上ノエンスイナリ、貫首以下直衣、諸大夫殿上人ハ衣冠ナリ、六位又衣冠ナリオホヨソハ殿上人モ六位モ、ヲサナキニハコキシヤウゾクトテ、エビゾメ、或モエギウチサシヌキニ、ウチギヌモサシヌキモ、デイニテダミカヘシテ、ウラコキスハウノキヌ、コキヒトヘ、コキシタノハカマナドキルナリ、アヲノキヌハ、ワカキ人ハキヌトゾマヲセドモ、近代ハワカキ近衞司ナドモキタリ、藏人アヅカリ布袴アヲイロ火イロノシタガサ子、エビゾメノウキオリモノヽサシヌキ、アルヒハアヲイロニカタモンノオリモノヽサシヌキ、紅ノウチギヌヲイダス、コレモン官ナリ、ヱウ府○衞ニオキテハウチギヌヲイダサズ、コメテキルベシ、ケビキシハ殿上ノエンスイ、ワラハ御覽ノアヒダ、ソウゾクタイヲスベシ、タヾシアヲイロヲモチキルベシ、承曆二年平時範布袴ヲキル、アヲイロニモエギノハンヒナリ、コレ平行親例云々、他ノ藏人ラ、寅日ノ裝束ノゴトシ、タヾシ六位ダシギヌヲコムベシ件日中院ノ行幸アルトシハ、ワラハ御覽ノノチ、秉燭ニオヨブアヒダ、殿上人藏人ソクタイニテ行幸ニグブス、小忌ヲキル、日蔭ヲカク、タヾシコケナリ、ゾモ〳〵御ウラニアハザル侍臣、コトニ行幸ニ供奉セズ、コレヲミヲキザルユエンナリ、タヾシ殿上ノ職事十人ハ、御ウラニアハズトモ、カナラズ小忌ヲキルベシ、

辰日節會、人々ミナソクタイナリ、タヾシ預藏人、朝ハ宿衣ヲキルベシ、アヲイロナリ、モクランヂノオリモノヽサシヌキニ、ダシギヌ歟冬ヲモチキル、タヾシケビキシハアヲハカマニ一コンゾメ、ウツベキカ衞府ハキヌヲイダサズ、剋限ニ小忌ヲキ、ヒカゲヲカク、イトノイロ人ノ心ニアルベシ、シロキヲヨキトス、ウキモンノハカマ、イロコヽロニアリ、文官儀式官オナジ、衞府ニオキテハ弓箭ヲタイス、ヒラヤナグヒナリ、アヲカハタチカハシリザヤヒラヲヌノオビシガイナリ、ゾモソモ中院ノ行幸アルトシ今日小忌ヲキズ、タヾシ小忌ヲキルトキハ、式部丞シリヲヒキ、ヒタヒアテヲハナツ、廷尉オナジクシリヲヒキ、儀式官文官トイフトモカナラズハンヒヲキル、コレ小忌ワキアケナルニヨリテナリ、又ヲミヲキル日、ビレイヲコノム人、ソノハカマフタヘオリモノヽハカマナリ、タヾシ廷尉ニオキテハ、コノカギリニアラズ、シロキウキモンノハカマナリ、ヲミノウヘニキウゼンヲタイス、節會ノアヒダ童下仕ニツクナリ、マタ式部丞藏人小忌ヲ著ナガラ點標、當時無二此事一而近代之例定事也、射場殿ヨリオデヽ列ニクハヽルナリ、

〔後水尾院當時年中行事〕十一月、○中略二番の丑の日、今夜より女中あかき衣しやうをきる、當日かならずこうばい二をかさねてきるなり、明日よりは何にても著用なり、

〔法成寺攝政記〕寛弘三年十一月十四日癸丑、五節參二一條院一、十五日甲寅、六位等依二美服一有二勘當一、

〔小右記〕萬壽五年〇長元元年十一月十四日甲辰、豐明節會、仍參二內待賢門一、諸卿未レ參、左府生爲弘布袴執二膝突一、敷二節會日不一レ束二帶事一、不レ可レ然令二追却一、外記所レ可二咎仰一也、

〔中右記〕嘉承元年十一月十四日、晩頭依レ召參二中宮御方一、新大納言、經源中納言、顯通出レ衣左宰相中將、忠京大夫、顯皆直衣被參會、予獨衣冠、依レ爲二大辨一也、晩頭殿上淵酔了、

永久二年十一月廿一日壬辰、節會也、著二小忌一、秉燭之間參內、〇中略著小忌人、强不レ可レ著二仗座一由有二口傳一、是不レ可レ著二人々下一故也、

裏書云　赤紐付右

小忌長下襲黑半臂申二殿下一也、飾劒有文帶魚袋著レ靴固文表袴紅袿不レ可レ及二打袿一也、爲二檢非違使別當之人强裝束不レ及二美麗之故也一、

〔長秋記〕元永二年十一月十一日、五節參入、〇略中依二御物忌一無二帳代一出御、〇鳥羽依二賀茂火事一童御覽停止、仍雲客不二放遊一云々、〇略中納言問二下官一云、侍從明日裝束如何、下官答云、五節殿上人不レ待二雜袍宣旨一、直著二直衣一云々、不レ知二子細一、可レ被レ尋二問時儀一者也、仍以レ侍尋二遣藤中納言一許、返事、尋常儀三箇日間所著束帶也者、著二束帶一、令レ候給何事有哉、不レ待二雜袍宣旨一、著二直衣一參事不レ慥覺、但丹波前司季房朝臣五節昇殿、不レ待二宣依一彼人命著二束帶一可レ被レ候也、是尋常儀也、著二直衣一參事三日昇殿、初參三个日已過了、而及二五節一著二束帶事無一レ便宜、旨著二雜袍一云々、下官又如レ此、共非二吉例一、不レ可レ被二准據一、重相尋可レ有二左右一事也者、後日以二此旨一申二左大臣殿一、仰云、猶三箇日著二束帶一參事尋常儀、於レ汝者三日昇殿、初參三个日已過了、而及二五節一著二束帶事無一レ便宜、又著二衣冠一無レ指故、仍觸申故大殿之處、雜袍宣旨不レ可レ被レ待、只令二著何事有哉一、隨可レ被レ下二其宣旨一也者、仍隨二彼命所一レ令レ著用一也、於二季房朝臣時事一者、不レ知二子細一者、

大治二年十一月十七日癸卯、新嘗祭中和院儀也、〇略中上卿以下群行出二待賢門一、上卿相語云、今夕參內不定也、存二其旨一可レ令レ披二露於所勞由一、□是鬢髮蒼浪著二小忌一事、爲レ身爲レ朝可レ爲二恥辱一故也云々、

〔中右記〕大治四年十一月廿二日丙寅、殿上淵酔、盃酌及二三獻一、其後人々參二女御殿御方一、各々分散、人々不レ著二出衣一、但年少人々兩三人著之云々、

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、戌刻參內候二小板敷一、催遣五節、〇略中雲客列二立神仙門外一、瀧口皆悉來二殿上口一、上勞三人水干袴著二狩襖一、四勞博聽色著二狩胡籙一、恒例也、〇中略上下裝束、自關白出二白浮文厚衣一給、右大臣、內大臣、已上餘フクサ上下、著二濃打衣一、頁二狩衣一、直衣別當、束帶帶劒笏、十六日庚寅、未刻參內候、直衣薄色浮文織物、奴袴白括緂文、裏濃紅梅出レ袿入レ綿、薄色衣二紅單赤下袴一、申終始二殿上事一、依二五節一也、〇淵酔

〔愚昧記〕仁安二年十一月十六日庚辰、戌刻許、著二小忌新調也、日景糸借二六角宰相一、飾劒魚袋有二文帶一、參內、〇中略進二祿所一給レ祿、向二御所一一拜了退出日華門、

嘉應元年十一月十五日丁卯、今日童女御覽也、童女下仕等早仰可二參內一之由、申刻著二直衣裏增乃紅梅敦衣一參內、〇略今日攝政候二簾中一、內大臣、薄萌黃左大將、御衣大宮大夫、紅梅予左衞門督、裏吹山大理不レ出レ衣例也、

二年十一月十三日己丑、五節舞姬參入也、戌刻終參二大內一、前駈二人、先是左大將參仕、於二清涼殿廣廂一暫談話、大將云、一日內府云、白衣不レ可レ用出衣之由所二習傳一也者、先賢多用之、此事頗不審也、仍引二勘家日記一之處、保延六年故左府于時爲二內大臣一、歲廿出二白衣織堅文物一、又著二淺黃指貫一者、予云、古賢用之否條不レ覺悟、近去年春、高野御幸之時、前大相國用之歟、予云、貞信公餘流不可著山吹衣之由云々、此事如何答云、故禪門此由所レ被二示候一也、於二由緒一不レ知給一也、予云、下襲同前歟、將只出衣許歟、答云、定可レ用歟、但康和二故宇治殿被レ著云々、〇略中又云、今夜可レ著二咎否一、先例多ハ著之、或又不レ著歟、無レ可レ取二咎人之輩一似レ無二便宜一歟、〇略中博陸著座、頃之起座、相率向二給帳臺一、其儀如レ常、但左大將已上著二咎左內兩府各子息持來也、大將隨身持來也、〇中略予幷左衞門督不レ著二咎一、去年又如レ此、

十五日辛卯、午時許、頭左中將送消息云、童女御覽如レ法午刻也、可二早參一者、可二早參一之由答了、未刻許、著二直衣一付二青裏一也、薄色綾奴袴、脇如レ白也、參內、〇略中左大臣、出衣唐物也、白地有二香文一、付二沸青裏一、右大臣、織物柳衣、濃色指貫、左大將、織物白衣、淺黃綾指貫、右衞門督、唐物白地有二青文一、付二二藍裏一、

〔玉海〕嘉應三年〇承安元年十一月十九日己丑、此日五節參入也、主上〇高倉略〇依御物忌、不出御帳臺、〇中亥刻著直衣〔不出衣、主上出御之時多出之、執柄出之時不知、然說、爲決疑令中女院御方、仰云、於今夜者、強不出衣可宜者、隨仰不著用之、凡上萬井宿老之人、強不出之歟、只可被□人之意、參內、

承安二年十一月十二日、此日五節參也、〇中略依先日催、亥刻著直衣〔出唐綾柳厚衣、去年不出衣、今年主上私出御、仍頗可刷歟、申合攝政、非宿老之人可出之由被命、予雖年少官已高、然而先年二條院之御時、故攝政被出也、宿老□不可過執柄歟、仍所出也、綾指貫也、參大內、

〔山槐記〕治承三年十一月十二日丙寅、今日殿上淵醉也、少將兼宗參內、龜甲裏欵冬衣掛薄色衣紅單半色奴袴、檜橫目扇、隨身蘇芳卷染上下黃衣青單、童一人青卷染上下欵冬衣黃單、今一人童依重服不召具、牛童萌黃上下黃衣、事了歸來、相具侍從忠季、紅打出褂蘇芳匂青單半色奴袴、椙橫目扇、童貫布紅梅之上下萌黃衣蘇芳單、牛童赤色上下欵冬衣、

〔玉海〕治承三年十一月十三日丁卯、此日童女御覽也、〇中略今日關白〇藤原基房淺黃綾指貫、不破出衣、自餘皆出之、他殿上人皆不出之、但時宗獨出之、

〔吉記〕治承四年十一月十七日乙丑、舞姬等參入、〇中略次殿下于時御殿上、御直衣表唐綾、□梅出衣、保安例云々、別當右宰相中將源宰相中將等扈從、十八日丙寅、今日殿上淵醉也、仍未刻參內、直衣、唐綺萌黃裏增敦綿出衣薄紅梅衣二、同單薄色蘇丸堅織物奴袴中略頭亮著奧座、堅織物直衣黃櫨紅葉五倍衣著長濃蘇芳唐綺萌黃裏增敦綿出衣薄紅單薄色蘇丸堅織物奴袴、〇頭亮著奧座、綺裏增萌黃衣三、紅單薄色浮文織物奴袴、予著短座、左中將泰通朝臣、唐紅出衣二、同單、右中將隆房朝臣、唐紅出衣紅單十九日丁卯、今日五節童女御覽也、仍未刻參入、裝束如昨日、但不出褂、〇中略頭重衡朝臣在奧座、淺直衣堅文奴袴、自餘如昨日、兩日被改著已破禁制者歟、

〔玉海〕文治二年十一月廿三日丙寅、此日御前試也、入夜參內、直衣指貫、不出衣、半蔀車、隨身上臈冠、

建久二年十一月十一日丙辰、實明朝臣來、申五節之間殿上人出衣、可用唐物哉否事、可隨新制、又可奏之由仰之、十五日庚申、實明朝臣申、〇中略殿上人出衣事、唐綾和綾共可用云々、廿日乙丑、五節參入、〇中略

余綾指貫不出衣、左大臣同前、右大將薄色指貫、不出衣、左大將堅文織物、薄色指貫、出蒲萄染打出衣、

左衛門督同右大將、

〔明月記〕正治二年十一月十三日、入夜束帶參上、今夜束帶甚以見苦、古賢所戒也、其理不可然、但貧乏之間、無直衣故著之、深更御參內、今夜無御出衣、尋常御直衣也、〇中略五節參了云々、

建曆三年十一月十二日、五節參入、〇中略戊終許、侍從又參內、早速也殿上人廿餘人云々、親平少將打衣、以金銀鍊置菊、華基保掛三格子唐織物、中將家嗣朝臣掛入綿、伊時朝臣柳厚衣、兩頭紅梅厚衣、頭中將固文指貫、

嘉祿二年十一月十八日、夜前節會、〇中略小忌具實、蘇芳裏下襲、著小忌時稱我家說ニ是例下襲ヲ蘇芳下襲ト書故實ヲ父卿依不受、有識口傳不知之任盜取家文書蘇芳ト得心歟、無疑事也、

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十二日、此日五節帳代試也、〇中略戊刻著直衣淺黃織物、指貫、唐物、枯色厚衣、相伴新大納言紫織物指貫、紅打出衣、大納言後直衣始通用之、仍帶劍笏、參內、予前駈六人、大納言前駈四人、隨身布衣冠、〇中略不經幾程右大臣參入、薄色織物指貫、紫織物厚衣、十四日丁卯、童御覽也、〇中略此間予著直衣參御前、淺黃綾指貫打出衣、〇中略召顯定朝臣仰可召諸卿之由、次右大臣、花山吹織物、出衣入綿、薄色織物指貫、共浮文也、右大將出薄紅梅厚衣、新大納言、紫織物指貫、文濃紅梅、出衣不入綿、出浮文也、著御前座、〇中略今日新嘗祭上卿、權中納言爲家參議實持云々、少將師繼著二藍單指貫、裏紅打出衣、是不禁色、人難盡口口著單指貫云々、父大宮中納言著此指貫云々、可尋、十五日、此間豐明節會也、戊刻著束帶、節劒代、紫緒也代也、平緒、右府節劒、紫染平緒、大納言節劒代緒地緒、相伴參御前、

〔平戶記〕仁治元年十一月十三日壬寅、今日殿上淵醉如例云々、頭辨經光朝臣著堅織物奴袴黃ニ青裏出衣薄色褂裏白一領白單衣云々、是兼日示合也、年齒壯齡也、雖不可強然去年著浮文了、大辨又異他仍所折中也、去年參入之時著綾奴袴云々、是又所示合也、十五日甲辰、今日豐明節會也、頭辨今朝問云、朝間有可出仕事、可用九輛歟、可用巡方歟者、猶可用巡方、是爲定例由答了、

叙位

〔勘仲記〕弘安七年十一月十六日庚寅、殿上淵酔也、午剋令出立筑前○前一作後前司邦良令出來副、衣冠掛、今度依制符被止織物、綾并練貫等、不可有苦之由、有其沙汰、予紅梅志々貳練貫、男色々糸置直垂、厚裴薄色衣一領、紅單、堅絲物、藤丸奴袴依為初度、尤雖可著浮文、為表宿老前疎中納言所相計也、仍隨被所命、小袖練貫五重著之、駕新車、侍一人童一人萌黄單衣、大帷萌黄單狩衣、所召具也、予行粧殊守儉約、○中略予、藏人大進定光、貳青裏掛面志々貳練貫藏人大輔仲兼、蘇芳面志貳練貫、〔續史愚抄後桃園〕安永三年十一月十八日丁卯、新嘗祭、○中略大忌公卿右大將、前豐、著圖脫袍、入、大失、〔師遠年中行事十一月〕中辰日節宴事

辰日節會給位記

〔續日本紀三十九桓武〕延暦七年十一月戊辰、宴群臣、賜物有差、大歌彈琴人正六位上巨勢王、甘南備眞人國成、大宅朝臣廣足、授從五位下、

〔類聚國史九神祇〕延暦十一年十一月戊辰、宴群臣、賜帛有差、從四位上和氣朝臣廣虫、授正四位上、无位藤原朝臣名子從五位上、外從五位下刀佩首廣刀自從五位下、

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年十一月甲辰、宴群臣、賜帛有差、從四位上和氣朝臣廣虫、授正四位上、无位

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十一月十六日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣、賜文武官爵、

〔左經記〕長元四年十一月十六日己丑、早旦敷設等送五節所、及昏黑令參舞姫、○中略頃之叙位之人々被退出云々、○中略傳聞、四位從上一人、新叙一人、五位正下四人、從上六人、入內一人、新叙廿人、外位二人、

〔中右記〕寛治二年十一月十七日、今夜帳臺出御以前有叙位之儀、太政大臣藤信長被叙從一位、此外如例歟、

〔平戸記〕仁治元年十一月十五日甲辰、今日豐明節會也、○中略今夜有加叙云々、藤相公信盛叙從三位、

賜祿

云々、四位宰相三人一度叙三品、布代事歟、

〔延喜式十內藏〕供奉新嘗祭人等祿

宮主一人絹一匹、中宮亦同、采女一人絹四匹、六位已下三匹、並新嘗祭、中臣一人絹四匹、六位已下三匹、忌部一人、御巫一人、各三匹、座摩一人、御門一人、生嶋一人、各二匹、中宮御巫一人二匹、已上官物、東宮准此、

〔延喜式三大藏〕正月七日節、十一月新嘗准此、○中略

六位、女王純二匹、綿四屯、女王明日給之、新嘗會亦同、

○按ズルニ、皇太子以下ノ祿數ハ、歲時部白馬節會篇ヲ見ルベシ、

〔延喜式三十宮內〕凡諸節會、吉野國栖獻御贄奏歌笛、每節以十七人爲定、國栖十二人、笛工五人、但笛工二人、在山城國綴喜郡、其十一月新嘗會各給祿、有位調布二端、无位庸布二段、

〔延喜式十八式部〕凡正月七日、拜新嘗會等祿、召名札、令大藏省寫取、

〔延喜式十八式部〕凡十一月新嘗會日、諸司六位已下官人給祿、若蕃客來朝可會賀正、正月七日給之、

凡施藥院司給新嘗會祿、

〔延喜式十八式部〕凡正月十七日、五月五日、兩度節不參五位已上、待兵部移、無預新嘗會、六位已下官人奪季祿、

〔延喜式二十兵部〕凡正月十七日、五月五日、七月廿五日三度節不參名簿移送式部、五位已上莫預新嘗會節、六位已下奪季祿、但兵庫全守本庫、不在貢限、

〔世俗淺深秘抄上〕一豐明節會時、參議無人數故、小忌參議有勤仕祿所事、其時ハ雖爲小忌、先不拜領、最末給之、一拜卽退出、

一節會時勤仕祿所參議ハ、令奉行祿事也、而豐明夜、若小忌以前有欲取祿令退出人者不可給也、必先給小忌也、近代無案內卿等、恣小忌以前來祿所取之云々、甚奇怪事也、內辨不著祿所時、間有此例、

〔日本書紀清寧三年十一月戊辰〕宴二臣連於大庭一賜二綿帛一、皆任二其自取一、盡力而出、

○按ズルニ、本書新嘗ノ明文ナシト雖モ、類聚國史新嘗祭ノ條ニ掲グルヲ以テ此ニ收ム、

〔日本書紀二十九天武六年十一月己卯〕新嘗、辛巳、百寮諸有二位人等一賜レ食、乙酉、侍二奉新嘗一神官及國司等一賜レ祿、

〔續日本紀二十稱德九神護景雲二年十一月壬辰〕設二新嘗豐樂於西宮前殿一、賜二五位已上一祿、各有レ差、

〔類聚國史九神祇〕延曆十六年十一月甲辰、宴二五位以上一賜レ祿、如レ在、壬辰、宴二五位已上於內裏一、賜レ祿有レ差、癸巳賜二女王內外命婦一祿、

〔文德實錄〕嘉祥三年十一月辛卯、帝以二諒闇故一、不レ親二祭事一、壬辰、右大臣〇藤原良房於二侍從局一錄二親王已下五位已上見在座者一奏レ之、癸巳依二大臣所一レ奏簿錄、准二新嘗會宴一賜レ祿有レ差、

〔北山抄十一月〕辰日節會事

延喜十一年十一月廿四日、依二內裏觸穢一、新嘗祭停止已畢、上卿仰二外記一、於二外記局一令レ記二五位以上見參一、又仰爲二濟攝政一入京國司等、幷內藏頭藤原高階朝臣、武藏介高向朝臣利春、散位藤原朝臣實賴三人、可レ預二今日見參之由一、〔實賴朝臣侍二亭子院一、宜下免二雜役一預中節會上者、〕

〔政事要略二十六〕奉二左金吾藤納言〇定方藤原書一

某謹言、伏聞今年依レ穢停二止新嘗會事一、准二先例一於二外記局一點二諸大夫見參一、可レ充二給其祿一、伏以所レ謂先例、頗異二當時一、何者彼例偏是有レ穢停レ會、卽爲二優恩一、隨二其見參給祿而已一、今年疫癘流行、庶□苦沈、其五位以上、或其身困篤、或妻子喪上、纔得二痊癒一者、容顏氣力猶未レ如レ人而剋二期點參一者、必忍二病扶一力、爲レ祿妄進、恐犯二禁忌一、重招二憂患一、恐沈困之人、不レ勝二冠帶一、若求二見參一則此賜無レ單、此非二朝恩惻隱之本意一也、加以近日京洛之中、家々有二死喪之穢一、縱令二貪求之輩一、忍レ穢猥著二外記之座一者、恐重妨二今月廿八日之神事一也、伏見近有二

恩赦一、已蕩二大辟以下之罪一、由是諸大夫雜怠事無二大小一、不レ可二責求一、然則除レ未レ得二解由之外一、唯隨二歷名一充二給此祿一、不レ更點二其見參一、庶幾雨露恩漏、病樹更榮、吹煦仁深、枯骨再肉、伏惟台閣聊以奉レ幸令二施行一、此則聖朝寬弘之美、台閣陰德之至也、某謹言、

延喜十五年十一月廿一日

左金吾大將軍幕下

式部大輔三善朝臣〇清行

〔北山抄十一月〕辰日節會事

天曆元年十一月十八日、外記朱雀院所レ賜、殿上大夫夾名申二大臣一、院仰云、申二日上一、可レ入二見參一者、大臣許レ之、

康保元年十一月廿日、右大臣奏二見參一、令レ爲二光仰一、大臣云、廣平親王〇村上皇子不レ候レ座、在二御後見儀一、而載二見參一如何、令申云、問二外記懷之一、申云、憖不レ尋二舊例一、開二參入之由一入二見參一、令仰以不レ候二座親王一、不レ蒙二處分一、輒預二見參一不可然云々、

〔小右記〕寬仁二年十一月廿二日庚辰、今日節會、〇中略左大辨道方云、庭積絹綿之由、一上下宣旨而不レ被二參入一、經奏問可下給也者、余答云、上達部手祿絹率分也、奏下彼手祿絹之由有二古傳一、如何、大辨云、卽是其絹也者、重不返答、〔異手祿文歟〇中略〕余退下著二陣座一、召二外記一令レ進二見參一、外記順孝奉之、見參簿注二參議通任一、不參之人也、問二其由一、左右無所申、仍返賜見參祿目錄等一、令レ改直、

三年十一月廿五日丁丑、大藏史生某九進豐明節會祿、〔絹二匹疋三枚〕唯節祿絕歟、申云、卿所定者解文只注絹二匹大革三枚、仰云、手祿如何、申云、只今可レ奉者、率分絹也、予今不レ奉太不便事也、少時持來、

〔左經記〕長元四年十一月十九日壬辰、舞師以下等給レ祿、屯食等有レ差、舞師絹六匹、綿代信乃六段、前料絹十匹、小師絹二匹、綿代信乃二段、理髮絹二匹、綿代信乃二段、琴師絹一匹、綿代信乃二段、祿信乃六段、〔各二段〕御門守二人各匹絹、小歌絹

一匹、藏人所小舍人絹二匹、髮上祿絹三匹（褐袴料）六府陣各屯食一具、小歌所大破子二荷、掃部主殿內侍所玄輝門朔平門和德門瀧口陣腋陣中宮廳等、各大破子一荷、（皆令二分給一了）〔康富記〕應永廿九年十一月廿一日甲辰、豐明節會停止、平座被行之、○（略）中殿上見參不及乞取之、遲々故□□□□此見參祿法、淨居庵御草也、祿□□□四位之綿三十屯、歟、然五十屯令□□□、予明日尋申入候處、嘉慶度舊章、四位□五十屯ト在之、彼本予見了、其外度々舊章引勘之處、四位三十屯ト見了、如何、尙可尋申勘之、向後可書五十屯也、

文安四年十一月十六日甲辰、豐明節會停止、平座也、○（略）中見參祿法奏下如例、是日大見參也、不分二次非一之處、上卿被不審、見參一通不足也云々、二孟重陽者、分次侍從非侍從、至豐明平座者不分次非、只一通、大見參ハ元日節會、又分次非之由返事申之、上卿返答云、中古豐明平座時、當分次非之由存候、雖然近年儀如然歟、又可意得之由返答有之云々、見參被返下、外記（少納言不參祿法故也云々）祿法被下、辨、辨被下、史了、○（略）中

今夜大見參也（不分二次非一）

合見參五位已上

從一位

權大納言藤原朝臣宗繼

從四位下平朝臣時兼

從五位上藤原朝臣永繼

文安四年十一月十六日

近衞殿（前關白太政大臣）未令レ蒙二內覽宣旨一給、仍不レ奉レ載之、去重陽平座同之、貞治御例也、

寶德元年十一月廿三日戊辰、豐明節會停止、平座被行之、○（略）中

關白太政大臣

從四位上藤原朝臣資綱

正五位上藤原朝臣親長

合見參五位已上

關白太政大臣

參議藤原朝臣俊秀

從四位上藤原朝臣親長（辨也）

菅原朝臣爲賢（少納言）

寶德元年十一月廿三日

合見參五位已上

大臣一人料、絹五十匹　綿四百屯

參議一人料　絹二十匹　綿百屯

五位一人料　絹五匹　綿二十屯

應下

絹二千匹

綿一萬屯

用

絹百二十四匹

綿八百七十屯

殘

絹千八百七十六匹

綿九千百三十屯

寶德元年十一月廿三日

權中納言藤原朝臣持季

正四位上藤原朝臣冬房（奉行）

從四位下平朝臣時兼（殿上見參許入レ之）

正五位下藤原朝臣永繼（殿上見參許入レ之）

中納言一人料絹二十五匹　綿百五十屯

四位四人料　絹二十四匹（各六匹）　綿二百屯（各五十屯）

（日本紀略三村上）天暦三年十一月十七日丙辰、豊明宴、天皇不御南殿、十八日丁巳、賜女王祿、

（日本紀略十一條）寛弘元年十一月十九日己巳、女王祿、

○按ズルニ、女王祿ハ節會ノ翌日賜フ例ナリ、

（延喜式四十造酒）年料醸酒數

御酒料二百十二斛九斗三升六合九勺九撮、山城國六十石、八斗七升二合四勺七撮、大和國廿五石、和泉國廿石一斗二升五合、攝津國七十九石二斗二升二合五勺、並數隨時增減、就中割二十石付東酒殿、但山城攝津國省營田稻、大和河内國正稅稻、和泉國三石一斗二升五合國營田稻、十七石正稅稻、

御井酒料十九石五斗

穊槽料卅八石○略中

右穊槽以上三種料二百七十五石一斗、白米就中儲米十五石、畿内諸國所進、起七月下旬限九月下旬、司家檢納隨事出充、若有未進申省移式部省不預國司於新嘗會節、

（日本紀略三村上）天暦二年十二月一日乙亥、此日去月廿二日新嘗祭不參諸卿被蒙勅問、十三日丁亥、此日仰掃部寮大膳職召過狀、是去月新嘗祭日掃部寮穿道遲供、大膳職忌火遲出故也、

（山槐記）永暦元年十一月十七日辛卯、巳刻參內、○略中催人々、未始刻且始殿上事、今日預不出來、二藏頼保饗應殊甚也、事畢廻五節所、如昨、瀧口五六人許參會、自餘遲參、仍召籠畢、又本自不參輩同召籠、但依重科不入上日、

（日本紀略九一條）正暦四年十一月十五日戊辰、節會、詔徒罪以下原免、常赦所不免者不赦、又賜人爵如先例、

（日本紀略十四後一條）長元四年十一月十九日壬辰、節會、詔大赦天下、徒罪以下原免、常赦所不免者不赦、

（大社志）祭禮年中行事

十一月中卯日新嘗會（兩國造詣神魂社行之、國造自是食新祭、）

諸社新嘗

敘宥

讀賚

（懷橘談下）粢築○略中

十一月中の卯の日、新嘗會は、大庭にて遂行、

（懷橘談上）大庭の保○出雲にいさなみの宮あり、十一月中の卯の日に新嘗會を遂行はる、

（出雲國意宇郡大庭神社新嘗會神事記）やくもたつ、いづものくに、をふばのやしろは、あたかひのむなつぎより、たつみのかたにあたりて、みちのりいちりばかり、をふくさがはのつゝみづたひ、いなむら、をふくさのさと、いさなみのやしろをへて、をふばてふむらあり、このところにて、ないねん宮ういちぐわつ二をめの卯の日に、きづきのくにづくり、せんけ、きたじまきたりたまひて、にぬなべの宮んじおこなはる、ふたかたのいへともにぎしきおなじとぞ、よてやつがれがみはべる、せんけの宮んじをもて宮るす、まづくにづくり、をふばのべつくは、あきあげゆふのすけてふものゝやかたにぬなして、その夜のいつゝときごろより、ぎ宮きはじまりぬ、かめだゆふ宮んしとて、ちかきむらなる、かめだゆふてふもの、はくちょうゑぼしにて、人ふたりめしつれて、火きりのいたてふものを、こもにつゝみもたせきたりぬ、さてきづきの宮やにん、をふばの宮やにん、わわせて六たり、はくちょうゑぼしにて、ようふくくわんてふがくゐる、かぐらぞのにゐつまりなみ居けるときに、へぎにさかなをのせ、さけなどいでければ、みな〳〵ふためぐりくみはべる、うのゝちかめだゆふ、かの火きりのいた、うつ木のつへをとりいだし、きづきの宮やにんにわたしはべれば、うけとりて、いたのよしゐしをいふて、なんじはべる、やうやくして、宮うのふし、宮きかはとりいだし、そのうへに、ほう宮ようのかみ二をひしきて、いたをのせ、宮やにんみたり、ふくめんして、火をきり、くだんのかみにつゝみ、くにづくりのかたへもちゆきはべる、かくのごとくすることみたび、さんをいのいたとともに、おなじ宮わざなり、

それより、かのかめだゆふへいたのむくいとして、もち、そのほか、さけさかなのあたへたまわりける、

かめだゆふ、きづきのおやにんにいふよふ、このもち、こぞよりはまたちいさくしてうすし、いにしへよりのさだめにて、おらけ二斗のもちなり、このおもさ貳斗目はなきよふにおぼゆなど、さまざまいふてなんじけることやゝひさし、これもむかしよりのならはせとぞ、そのうちに、けふせんとて、へぎにいゝをうづだかくもりいだせば、またかめだゆふいふよふ、このいゝは、ひとりへ、壹おふ貳がうのさだめなるに、はなはだすくなしとて、これもおなじくなんじければ、ひくわんのものども、なたいゝをもりかさねけるに、やう〳〵にかのもちは、こもにつゝみ、いゝはふくろにいれければ、ぞふに、すひもの、さけなどを出しはべるとかくして、ときうつるうちに、おくのかたよりごしようでん〳〵と、ふれければ、くだんのふたおなはつれたるひとにになはせ、かめだゆふはかへりける、それより、くにづくりは、ながへのこしにて、ともをまわりぐして、をふばのやしろへのぼりたまひ、ひやくばんのをひにいなべの衣んじめり、ほどなくかへりをして、をたようふくくわんにても、おなじぎしきめり、まづくにづくり、くろのみころもかんむりにて、ただか間にいでゐまし、みぎには、をふばのかんぬしあきわけだいせん、べつくわ、このふたりは、おろきねりぎぬのさいふくにかんむりし、ひだりのかたには、きづきの衣ようくわん、おなじい衣ようにただをぼしきてゐはべる、そのつぎには、ちうぐわんひだりおりにだまむしのほひにてなみゐけるときにながへ、くわへのてふし、かわらけなどとりいだし、くにづくりへみきすゝめはべる、おはりて、おかまの衣んじてふものはじまりぬ、かまのうへに、たわらをのせ、へいはくをたてならべ、べつくわ、いなたばと、わけのへいじとをつき、かなへのほとりをおらたなし、おらたなしととなへて、三たびめぐりはべる、此かなへは、ほひのみこさあまくだり給ふ時より出きにけりとぞ、それよりやつかしきのつくへに、きんらんをうちかけて、くにづくりのおまへへすゝめ、またことのいたてふものとりいだしはくちようの衣やにんとうたり、さゆふになみゐ、またひとりはさかきをもちいづる、これよりひやくばんのまひはじまる、

さかきの葉二まいづゝ、かみにてまつゐたるを、べつくわより、くにづくりへまいらす、さゆふのみてもちながら、つくへのうへにて、ふたたびづゝ、さゆふの葉をわわせたまいて、衣ようくわんへわたし給ふ、このぎしき、はしまるとひとしく、かのなみゐたる衣やにんことのいたを、むめのづわへにてたゝきうたふ、そのうたにいわく、

發聲　カッカッとなふ、そのよの衣やにん、クウクウといふ、カッカッククウ、カッカックウ、かくとなふること、すじうへん、いそじばかり、さかきの葉とりたまふとおぼしきころ、くにづくりたちたまへば、すむかみのうたぞはじめける、そのうたにいわく、

發聲　すむかみを、よき日になつりし、あすよりも、あけのころもに、けごろもに、

同聲　あすよりも、あけのころもに、けごろもに、

（やつがれ按ずるに、此うた梁塵愚抄神樂歌に、弓立てふ中に、すべ神はよき日まつなれば、あすよりはあけの衣なけ衣にせんと、其注にすべ神は皇神なり、よき日は吉日也、あけの衣は五位のきぬ也と、又魚彦が說には常衣也、萬葉集に秋風は日にけに吹ぬるといい、今俗にけにもはれにもなどいへるも同じ、不斷著衣にせんとなり、）

かくうたふことなたす衣うへんにして、さかきのまいもすみはべれば、うたもやめ、かのつくへもとりおきける、それより衣きがはとりいだし、くにづくりのまへに衣きければ、やがてみそ衣ばかりのおの子、みずをよくし、はだかにて、衣ろきふをしにふくめんして、衣はうのせんに、おらひよねをのせてまいらせける、はしとり、なめそめたまひて、間もなくべつくわかんぬし、かわるがわるひきりのいたをいだしければ、くにづくり、ふんでをとりて、新嘗會御神事御火切板、又裏ニ寛政七年卯十一月廿日と、しんぎようさふにて、さんまいのいたにかき給ふ、またかのしはふ

のせんをいたゝきたなへば、まちゐたるはだかおの子、せんとりかつ手へ入るかくてめでたく、玄んじもおわりける、これやつがれが、見きくまゝを志るすのみ、たがひあらば、のちのかうじ、たゞしたまへかし、

田代恒親書

寛政七年卯十一月廿日

〔懐橘談上〕佐久佐〇出雲の里に八重垣の明神在す、十一月中の卯の日には、八重垣を毎年修理し奉り、東西に榊を立、清酌を灌奉る、

〔張州府志五熱田〕熱田社四序祭奠略

十一月新嘗祭儀同二新年祭一上酉日祠官等散齋、神明及鳥居、插二榊同一、二月、丑日國府宮獻二麻紙米錢一同二寅日時亥大宮進饌同二二月一、但供二新穀飯及新酒一、卯日新嘗祭、謹案新嘗者所二以報一賽田事一也、然異邦報二田社一先レ農則以二秋冬一、見二詩豐年集傳一、我邦亦然矣、伊勢皇大神宮神嘗祭用二秋九月一、朝家及諸社新嘗以二冬十一月一、

〔御園皇大神宮記〕尾張國中嶋郡清須中嶋宮御園神明

十一月十五日神嘗之神事、是則當國ヨリ寄所神領初納ヲ以神供トシ執行事也、

〔張州府志二十津島〕牛頭天王社

秋縣祭十一月中丑日、時方仲冬、謂之秋縣者、蓋以此年秋米薦之神故耳、春縣與此祭、祈年新嘗之遺意也、

〔尾張名所圖會後編一中島郡〕正一位眞墨田神社

新嘗會十月晦日より十一月三日まで、祈年祭に同じ、新嘗宴祈年祭に同じ御神樂同夜所々に影燈を設け、神前に庭燎をたき、笏拍子和琴笛等を吹、酉刻よりはじめ、丑刻に終る、

〔尾張名所圖會後編二中島郡〕尾張大國靈神社

新嘗祭九月十八日子刻に行ふ、神主神官社僧神前に出仕、神主内陣に新穀の大御饌を調進す、

〔鹿嶋大神宮恒例祭事之次第記〕當社年中行事

八月廿七日大宮祭〇中略

右外有新嘗會之祭事、八月始之丑ノ日始テ新米之御供、付醴酒奉供神前、大宮司祭也、沼尾坂戸息栖三社ニテモ、早朝大宮祭畢テ、沼尾坂戸兩社ヘハ、大宮司神前與利直樣出仕ス總役者之社家、大禰宜大祝部等皆出仕之事、息栖宮ヘハ、檢非違使宮介總追中神大神小別當三禰宜出仕ス、如御本社之、右於三社モ、今日始テ新米之口神供新嘗會祭、是時御本社仁慈門外柱左右付、竹ニテ高七尺ニ棚結、幣六本宛左右ニ十二本相立ル、棚結立ル竹之數モ六本宛十二本、其竹ノ末口ニ幣ヲ付ル、棚ノ幣串六本之内備神供御酒是則大嘗會之時、悠基主基兩神殿之廳立、天神地神ノ有御祭事例表スル乎、子細多ニヤ略之、

〔香取志上〕祭祀之事

新嘗八月初子日也、正殿御扉を開奉、五箇度大祭祀の一也、其式既に擧が如し、俗是を古飯（フルイヒ）神事と云ひ、丑日を新飯（ニヒイヒ）神事と云は誤れり、然ど丑日祠職家より始て、遠近村里の民に至迄、當年の新稻を持來て奉事夥し、依て世俗新嘗と思へり、〇略中此日側高社に新嘗祭あり、神宮のは既に云へるが如く子日也、正月七日神符を奉て是を祭る其文に八月新飯御祭禮之事とあれば論なし、然ど此夜の祭祀に當年の新穀を不レ奉は、何時より誤り來にけむ不知、口訣に十一月中卯日、奉二新稻於三百四座一云、新嘗祭是は內裏の新嘗祭也、

〔善光寺道名所圖會二〕武水別神社

抑當社年中行事の中にも、例年八月放生會、十一月新嘗會は大祭なり兩月ともに朔日より十五日迄神主齋あり、氏子十三ヶ村の內にて、十一月は頭人五人を定むこは每年十一月十五日の夜に入り、神圖を以て翌年の頭當りを撰む、當れる輩御供田として米を作る、凡五斗俵百俵餘、耕作以下俵に納る迄、婦人の手をかけず、不淨の肥しを不用といふ、神酒は手作にて醸らぬ酒なり、

臣庶新嘗

〔日本書紀二神代〕高皇産靈尊、〇中略取矢還投下之、其矢落下、則中天稚彦之胸上、于時天稚彦新嘗休臥之時也、中矢立死、

〔日本書紀通證六〕今按、新嘗祭名、是借朝家也、〔中略〕稚彦欲奪葦原中國、而私納其貢税、妄譬新穀、歎天罰上、神其歆之乎、

〔書紀集解二神代〕按、嘗新穀以祭諸神、天子之事也、天稚彦已叛、潜行此禮、

〔古事紀傳八〕大嘗、〇略中書紀に、天稚彦新嘗休臥と有は、爾比那閉は上下なべてするわざなること、上に云如くなれば、天稚彦もしつるなり、新嘗字は姑く借るのみぞ、然るを此神借朝家之儀と云る説は、古に昧し、

〔日本書紀二神代〕一書曰、時神吾田鹿葦津姫、以下定田號曰狹名田、以其田稻釀天甜酒嘗之、又用淳浪田稻爲飯嘗之、

〔常陸國風土記〕筑波郡

古老曰、昔祖神尊、巡行諸神之處、到駿河國福慈岳、辛遇日暮、請欲寓宿、此時福慈神答曰、新粟初嘗、家内諱忌、今日之間、冀許不堪、〇中略更登筑波岳、亦請容止、此時筑波神答曰、今夜雖新粟嘗、不敢不奉尊旨、爰設飲食、敬拜祇承、

〔丹後國風土記〕田造郷

所以號田造者、往昔天上降臨之時、豐宇氣大神教而天香語山命與天道姫命、共祭大神、及欲新嘗、井水忽變而不能炊、神饌放云泥、其名井、於是天道知命拔葦以占大神心、故名云葦占山也、

〔日本書紀二十皇極〕元年十一月丁卯、天皇御新嘗、是日皇太子大臣各自新嘗、

〔萬葉集十四東歌〕下總國相聞往來歌

爾保扶里能、可豆思加和世乎、爾倍須登毛、曾能可奈之伎乎、刀爾多氐米也母、

未勘國相聞往來歌

多禮曾許能、屋能戸於曾夫流、爾布奈未爾、和家世乎夜里氐、伊波布許能戸乎、

〔萬葉集略解十四下〕にふなみはにひなめなり、十一月公の新嘗祭有時は、國の廳にても同じ祭すれば、其國の里長よりは、皆廳に集ふべし、去かればその里長などの家にても、妻の物忌して在を、忍び來る男の戸をおしひらかんとする時、其妻のよめる也、上にかづしかわせをにへすともよめるは、家々にて爲なれど、事はひとし、

〔袖中抄十六〕かづしかわせ

顯昭云、かづしかわせとは、下總國にかづしかと云所あり、其所のわせと云也、〇略中

今按、〇略中にへすともとは、ゐなかにはじめてわせをかりてものして、里などなりのものゝつぎりてくふをば、にへすともと云也、

〔古事記傳八〕大嘗、書紀には新嘗とあり、〇略中萬葉十四下總國歌に、爾保杼里能、可豆思加和世乎、爾倍須登母、曾能可奈之伎乎、刀爾多氐米也母、歌意は、かの爾倍をする節は、いみじく齋慎て、門も閉て、外人をかたく入ず、されどもかなしく思ふ男の來なば、門外に立せてはおきたらじ、内へ入てむと、泣のせめて深きよしなよめるなり、書紀に齋庭之穗とあるも、新嘗はいみじく齋慎むゆゑにいふなり、と詠る如く、元は朝家のみならず、下々なべてなべて爲事なり、〇中略萬葉十四東歌に、多禮曾許能、屋能戸於曾夫流、爾布奈未爾、和家世乎夜里氐、伊波布許能戸乎、爾布奈未の未は、米の誤か、爾比那閉を、東詞にかく云るなり、〔中略〕歌の意は、かの爾閉をする所へ夫をやりて、妻の家にて、家の戸なさして慎齋ふこと、さ皆めたるなり、この爾布奈未は爾比那閉の東言にて、上に引る下總歌の爾倍と、全同事と聞ゆるを以て、爾閉は新嘗の約言なるを知べし、

〔政事要略二十六〕中卯日新嘗祭事

延長四年十一月十五日新嘗祭、乃立園基局親王座東、辨元方召掃部令鋪疊於局東、侍從厨盛居大

藏卿與元方賭牛、與左馬頭賭馬、此時少納言伊扶因勸坏著座、見後別座、左右隨勝行酒、

〔江家次第十二齋王卜定事〕

十一月中卯日以前、不食新年穀米事、

〔日本諸手船四〕釋詁、十一月中卯日新嘗會也、初奉新穀於上下神祇、秋稼至此齋王禁新、良有以哉、

吾神宮祠官等、九月十六日十七日已前固禁止之、制限有差、理則無違、可不戒愼乎、

〔錦屑譚下〕典略云、嘉禾始熟、而農夫先嘗其粒、此乃惟農夫の事のみ、有志の士豈其ゑからんや、孟秋天子嘗新、月令廣義云、沈約四時珍新、未曾得薦祠者、不得嘗、況神國之人乎、鎭座本紀云、未至新嘗會、不食新穀、蓋古之制也、

〔薩戒記〕應永卅二年十月廿三日己丑、左頭中將隆夏朝臣示送曰、內膳司申、御膳屋幷御膳具等、去月廿四日燒亡了、大炊御門可新造之間、御訪事申狀、如此事貫首可申沙汰哉、如何、予答曰、尤可被申沙汰也、以件申狀可被奏院也者、

內膳司御炊岩屋又丸謹申

右每日不闕朝餉御膳屋、幷家具私廳屋等造御訪事、去月廿四日類火ニ悉炎上之間、每日調進神供之上者、一日モ無御膳屋者、爲神事有恐、有其憚者哉、所詮十一月朔日忌火御膳也、依無御膳屋、神供家具等之忽可及闕如間、造可被下御訪於由預申御沙汰、爲全日供神事、言上如件、

應永卅二年十月日

廿六日壬辰、左頭中將隆夏被來示曰、先日所示合之內膳司御炊事、昨日伺申院之處、仰云、此事公家不可知食、可申入道殿者、爲之如何、予云、然者貫首不可被知之、付武家奉行可申之由、可被仰御炊也者、中將云、此事我執申之條不叶叡慮云々、此事何事乎、只依忌火御膳可及違亂、爲貫首身周章許也云々、

〔明月記〕正治二年十一月廿二日、今日予尾以狀隨身男申無衣裳由、五節染衣著用何事有哉之由下知之間、帶劒參院御所、不見相具之、一町許出門外之後見之、令解弃、北面物等見了、心浮恥也、淺猿淺猿、

建曆三年十一月五日、五節於高陽院殿可被行之由、今日有御消息云々、兩童定御覽歟、是中院行幸料云々、於中院行幸者已絕久、於事便宜者、適被摸大內節會歟、他所太無益歟、是只末代之猶不應歟、八日、自大內出御之時、大忌陣不供奉、自里內御時、大忌近將參之由有沙汰云々、又卯日著小忌人、辰日著位袍出仕有其例由有沙汰云々、如此事總不知及之、偏以仰天之由答了、十五日、雖異樣所乞取櫛十裏裹薄樣進入於五節所、乞得之由申也、實風流櫛殘等也、殊有恩容云々、十六日參內候鬼間方、以治部大輔知長給櫛數裹、已爲每年事、依承此事所參入也、幷悅退出、

嘉祿元年十一月七日、參室町殿、〇略中仰云、大將〇藤原敎實、時年十七、五節出仕、被催參入御覽、可出仕歟、參入夜進退頗有煩哉、申云、少年御出仕、御共得心之人少、而物忩夜陰、於事不審候、只御覽日御出仕可宜候歟、殿上人不廻北陣之間、殿上邊極物忩、旁難叶候歟、大略申止之、晚陰退出、二年十一月十五日

丙寅、蒙衣法師昇五節所、東北門武士搦取剱衣可打付宿所由稱云々、

寬喜二年十一月十九日丙午、夜深宰相〇藤原家來、五節之間日夜寓直、頻參御前、晝東淵醉日連枝兩納言不出衣、其衣遠而不委見、白色歟例衣歟、不見分、二獻盃、左府被奉讓右府之間、忽被參御座邊間失度蹲居云々、參入夜亂舞、依貫首賞甄資雅朝臣出白薄樣云々、此事實俊頗不同心、只可歌由示合有何事乎、諸事之間、蒙衣狂女等、稱弟子參內云々、奇怪也、卯日三方御隨身殊折花列居、左大將御隨身裝束甚以不法云々、節會訪五節所歸著之間、內辨被催一獻之間、通方卿立揖退出、見之公氏欲競立、內辨咳止給、家例不吉由微音雖申、不聞入、退出給之間、愁行其後事、不似年來之體、勤此事、彼人身之高名也、但不下小忌大褨、不移大歌座云々、宣命使依夜深略曲折揖早速步、內辨不異舞妓拜、拜了見宣命、是初度之義存歟資雅出仕殊叶叡慮、於事有其譽云

云、寅日持二夏扇一（赤扇也）此事頗拔群事歟、予有レ所レ聞、今年頻示二合宰相之由一聞レ之、彼中將只可レ持二由一、一日密
密所相計也、今日猶參内、殊候二御前一賜レ櫛云々、殿下北政所（若君）今夜御退出云々、親長依俊櫛好交衣、昇
殿入二東階間一、經二臺盤末一著二奥座一、總不レ及二進退之沙汰一、只如二田夫野人任意之道路一也、如レ此者爲二公卿名字一
不便事歟、因レ茲實世朝臣不二昇殿一、公長又在二御後邊一伴二五節所一云々、今年露臺不レ敷二假板一、欄檻之内簀子、
殿上人二行相對立而舞、依宮御方御簾之前、雜人不レ立、而太嚴重云々、隆綱朝臣調二進御服一、打御衣之
體異樣奇怪之由被二咎仰一、俄調改云々、參入夜、紫御指貫（御衣出）淺御沓、寅日於二二條小門内妻戸一御覽、祖、
殿下令レ候給、宰相候二近邊一云々、實俊相具力者法師三人、實持之下人、腰令レ指二竹筒一、殿上淵酔亂舞之時、重長云、今年自
下侍踊昇絶二其藝一云々、

〔平戸記〕仁治元年十一月十五日甲辰、今日豐明節會也、十七日丙午、申刻許、依二都督亞相招引一行向、
是五節櫛棚可レ見之由先日令レ示也、先是大府卿幷舍兄三品等會合、見二風流櫛棚等一、但内裏大殿殿下
入道殿御方等皆以二昨夕一進了云々、餘所未多少了、又進見了之後、聊羞（坏酌五節童女（即仕者云々、上
重紅單衣、紅織生袴、取レ杓、下仕神崎遊女等又召寄、各給二櫛棚一、坏酌レ之、童也、著二柳和五
柳筥二數帖一、樣二薄樣一、只如二五節所一、兩人之分分別如レ此、是又童女持來也、其後尚又被出口櫛、已及二深更一、大府卿歸了、其後遊
女等歸了、

〔明月記〕承元二年十一月廿三日、傳聞事、（中略）伊時解レ紐、雅行節會夜出仕舞云々、皇后宮淵酔、公卿以
下不二入與一由上皇（後鳥羽）有二逆鱗一、右大將（藤原公繼）閉門、定輔卿突鼻、殿上人（忠清、信能、範茂）、少々恐懼云々、今年五
節總非二無爲歟一、

〔百練抄（七六條）〕仁安三年十一月廿一日、内大臣、被レ解二帳臺試一也、

〔雲州消息（中末）〕上啓

右五節之間、何等事候哉、江州舞姫如二洛妃一云々如何、新宰相童女被二相挑一之由承之、君霜物緒奈止樣
乎令レ思給一、返々鬱申侍、暇限未レ滿、不レ能二參内一侍、對二寒月一不レ寢想像侍、心靜參謁可レ盡二心事一也、可レ然之時猶
可レ有二恩向一也、謹言、

十一月日　　侍從源

謹上　新少將殿

五節之間、指無二別事一侍、江州舞姫如二洛妃一、新宰相童女被二相挑一之間、已背二先例一乎、此間之事等誰人説乎、
尤不審也、且又尊下無二參内之間一、無二其興一之由人々被レ申侍、承二御暇日數可一レ參啓侍、謹言、

左近衞少將平

即時

〔安齋隨筆（前編三）〕五節の繪　五節繪に薄青の裝束の端袖白きを著たるあり是は冠直衣とて、冠
に直衣を著したる也、裝束拾要抄云、直衣は禁色を聽たる人著之、春冬表向キ志々羅有レ裏、又云、裏
何れも平絹、若年の人は紫、成人の時次第に薄くなし、あるひは薄縹にもする也云々、彼繪は直衣
の表白きに、薄縹の裏付たるが、裏の縹色白き表にうつりて、薄青に見ゆる也、端袖は白き衣を半
幅折返して、直に裏に用ゆるゆゑ、表裏うつり合て、端袖は半幅白く見ゆる也、又舞姫顔に扇をか
ざしたるが、扇すき徹りて顔の見ゆるあり、是を透扇とて、扇の板を切りぬきて紗を張りたるな
り、透扇の事雅亮裝束抄飾抄等に見ゆ（以上貞丈云）又衣冠の人袍を肩ぬぎ、裾を大脇帶に狹み、立舞ふ
たりに、色々彩色したる小さき香包の如くなるもの多く落散たる體也、是は舞姫の童御覽の時、ツ
ゲの櫛を色々の紙して包たるを、舞姫が持て御前にさし置を、御目の留なりたる童の櫛をば召
留られて、其外は其儘にてさし置れたる體也、是紀ノ宗直（御厨子御預リ高橋若狹守）が説也、右の繪は平家時
代の古書なり、

〔今物語〕近き御代に、五節の頃ゆかりにふれて、だれとかやの御局へ、或女のやんごとなき忍びて

参りたりける事ありけるを、ちときこしめして、いかで御覧せんと思しけるまゝに、俄におしいらせ給ひけり、とりあへずともし火を人のけちたりければ、御ふところよりくしをいくらも取いでゝ、火びつの火にうちいれ給ひたりければ、おくまで見えて、よく〳〵御らんじけり、御心のふせい興ありていとやさしかりけり、

【菜花物語七　鳥邊野】八月〇長保二年ばかりになれば、〇中略うちわたりには、五節りんじの祭などうちつづき、いまめかしければ、それにつけてもむかしわすれぬ、さべききんだちなど參りつゝ、女房などの物がたりしつゝ、五節の所々のありさまなどいひかたるにつけても、清少納言など出あひて、せう〳〵のわかき人などにもまさりて、をかしうほこりがなるけはひをなほすてがたくおぼえて、二三人づゝつれてぞつねにまゐる、

【枕草子五】宮〇一條后定子の五せち出させ給ふに、かしづきのいひなどす、五せちのつぼねをみなこぼちすかして、いとあやまくてあらする、いとことやうなり、其夜まではなほうるはしくこそあらめとのたまはせて、さもまなばさず、きちやうなどものほころびゆひつゝこぼれ出たり、小兵衛といふがあかひものとけたるを、これをむすばゞやといへば、さねかたの中將よりてつくろふにたゞならず、

あし引の山ゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらん、といひかく、年わかき人のさるけせうのほどなれば、いひにくきにやあらん、返しもせず、そのかたはらなるおきな人たちもうちすてつゝ、ともかくもいはぬを、みやづかさなどはみゝとゞめてきゝけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたよりいりて、女ばうのもとによりて、などかうはおはするなどさゝめくなるに、四人ばかりをへだてゝゐたれば、よく思ひえたらんにもいひにくし、なしてうたよむときゝたらん人の、おぼろげならざらんは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ、よ

む人はさやはある、いとめでたからねど、ねたうとこそはいへと、つまはじきをしてありくもいとをかしければ、

うすごほりあわにむすべるひもなればかざす日がげにゆるぶばかりを、と辨のおとゞいふにつたへさすれば、きえいりつゝえもいひやらず、なをか〳〵とみゝをかたぶけてとふに、すこしことゞもりする人のいみじうつくろひ、めでたしときかせんと思ひければ、えもいひつゞけずなりぬるこそ、中々はぢかくす心ちぞてよかりしか、おりのぼるおくりなどに、なやましといひいれぬる人をもの給はせしかば、あるかぎりむれたちて、ことにもにずあまりこそうるさげなめれ、ざひびめはすけまさのむまのかみのむすめ、そめどのゝ式部卿の宮〇爲平親王の御おとうとの四のきみの御はら、十二にていとをかしげなり、はての夜も、おひかづきいくもさわがず、やがて出ゞう殿よりとほりて、清涼殿のまへのひがしのすのこより、ざひ姫をさきにて、うへの御つぼねへまゐりしほどをかしかりき、

【增鏡八　飛鳥川】又の年〇文永八年正月に、出のびて新院〇後嵯峨御負なれば、御勝むかひに上達部みな五節のまねをして、色々のきぬあつ妻にて、おもひの川に舟のよれかしとはやしてまゐる、新院引つくろひてわたり給ふ、御みきいくかへりとなくきこしめさる、

【今昔物語二十八】尾張守〇〇五節所語第四

今昔〇〇天皇ノ御代ニ、〇〇ノ〇〇ト云フ者有ケリ、年來舊受領ニテ、官モ不成テ沈ミ居タリケル程ニ、辛クシテ尾張ノ守ニ被成タリケレバ、喜ビ乍ラ任國ニ忩ギ下タリケルニ、國皆亡ビテ田畠作ル事モ露无リケレバ、此ノ守本ヨリ心直クシテ身ノ辨ヘナドモ有ケレバ、前々ノ國ヲモ吉ク政ケレバ、此ノ國ニ始メテ下テ後國ノ事ヲ吉ク政ケレバ、國只國ニシ福シテ隣ノ國ノ百姓雲

ノ如クニ集リ來テ、岳山トモ不云、田畠ニ崩シ作ケレハ、二年ガ内ニ吉キ國ニ成ニケリ、然レバ天皇モ此レヲ聞シ食テ、尾張ノ國ハ前司ニ被亡サレテ、无下ニ弊ト聞食スニ、此ノ任二年ニ成ヌルニ吉ク福シタナレト被仰ケレバ、上達部モ、世ノ人モ、尾張吉キ國ニ成タリトゾ讃ケル、然テ三年ト云フ年五節被宛ニケリ、尾張ハ絹糸綿ナド有ル所ナレバ萬ヅ不乏、況ヤ守本ヨリ物ノ上手ニテ、物ノ色共打目針目皆糸ト目安ク調ヘ立テ奉ケルニ、五節ノ所ニハ常寧殿ノ戌亥ノ角ヲゾシタリケル女房ノ衣共微妙ク縫重子タリ、此コソ色弊カメレト見ユル无シ、然レバ極カリケル物ノ上手ニコソ有ケルナリト皆人モ讃ケル、傳童ナド他ノ五節ヨリモ勝リタレバ、殿上人藏人ナド、常ニ此ノ五節所ノ内ニ、守ヨリ始メテ子共類親共皆屏風ノ後ニ集ヒ居タリ、而ルニ此ノ守不賤ヌ人ノ流ニテハ有ケレドモ、何ナル事ニテカ有ケム、此ノ守ノ祖モ此ノ守モ、藏人ニモ不成ズ、殿上モ不許ザリケレバ、内邊ノ事ヲ傳テモ不聞ズ、況ヤ見ル事ハ无カリケリ、然レバ子共モ露不知ザリケリ、其レニ殿共ノ立樣造樣、宮々ノ御方ノ女官共ノ唐衣襷袴著テ行キ、殿上人藏人ノ出シ掛ヲシ織物ノ指貫ヲ著、樣々ニ裝ゾキテ通ルヲ、此ノ五節所ノ内ニ集リ居テ、只此等ニ目ヲ付テ追シラガヒテ、簾ノ許ニ出重ナリテ見ケルニ、殿上人近ク寄レバ屏風ノ後ニ逃隱ルヽ間、前ニ逃ル人ハ後ニ逃ル人ニ指貫ヲ被蹈テ倒ルヽニ、後ノ者モ亦躓テ倒ル、或ハ冠ヲ落シ、或ハ先ヅ我レ疾ク隱レムト迷キニ、亦少ノ者モ渡レバ追シラガヒテ出テ見ル、然レバ簾ノ内ヒ入ル、入ナバ然テ曲リ居タルベキニ、此ノ樣惡キ事无限シ、若キ殿上人藏人ナド此レヲ見テ咲ヒ興ジケリ、而ル間若キ殿上人共宿直所ニ居テ各云合スル樣、此ノ尾張ノ五節所ハ、物ノ色ナド微妙クシ立タル物カナ、童傳モ今年ノ五節ニハ此レゾ勝レタル、但シ此ノ守ノ一家ニ内邊ノ事ヲ未ダ聞ニモ不聞ズ亦不見ザリケレバ、露ノ事ヲ戀ガリテ追シラガヒテ出テ見ル、亦我等ニ恐レヲ近ク寄レバ隱レ騷グハ、嗚呼ニ極キ物カナ、去來此レ謀テ彌ヨ恐迷ハサム、何カ可爲キト、一人ノ殿上人ノ云ク、亦或ル殿上人ノ云ク、恐シ樣有リト、何ニ云ハムト爲ルゾト問ヘバ、彼ノ五節所ニ行テ、得意立テ可告キ樣ハ、此ノ五節所ヲバ殿上人達極ク咲フゾ、然カ知リ給ヘ、此ノ五節所咲ハムトテ殿上人達ノ謀ル樣ハ、有ト有ル殿上人此ノ五節所ヲ恐サムトテ、皆紐ヲ解テ、襴表衣ヲ脫下テ、五節所ノ前ニ立並テ、歌ヲ作テ歌ハムト爲ル也、其作タル樣ハ、鬢タヾラハアユカセハコソヲカセハコソ愛敬付タレト、此ノ鬢タヾラト云ハ、守ノ主ノ毛清ク鬢ノ落タルヲ、此ル鬢タヾラシテ五節所ニ若キ女房ノ中ニ交リ居給タルヲ歌ハムズル也、アユカセハコソ愛敬付タレト云ハ、守ノ後向テ歩セ給カ口口ヤカナルヲ歌ハムズル也、此ク告申ス事ヲバ實トモ信ジ不給ハジ、其レハ明日ノ未申ノ時許ニ殿上人藏人ノ有ル限リ、皆褊テ襴表ノ衣ヲ皆腰カヲミテ、長若キトモ不云ズ、此レヲ歌ヒテ寄來ル者ナラバ、此ニ申ス事ヲ實也ケリト信ジ給ヘト告ゲムト思フゾト云ヘバ、異殿上人、實ニ和君行テ利口ニ云ヒ聞セヨト云ヒ契テ散ズ、此ク云フ殿上人、寅ノ日ノ未ダ朝彼ノ五節所ニ行テ、守ノ子ナル若キ者ニ會テ、得意立此ノ謀ツル事ヲ細々ト語リ聞スレバ、極ク恐タル氣色ニテ聞キ居タリ、云畢ツレバ益无シ、君達モゾ不意ニ見ル、和ラ密ニ返ナム、此ク告聞エタリト異君達ニナ努々不宣ソト云テ去ヌ、此ノ子祖ノ許ニ、新源少將ノ君コソ御シテ此ル事ヲナム告給ツルト云ヘバ、祖ノ守ノ主此レヲ聞クマヽニ、然々テトテ云マヽニ、只振ヒニ振ヒテ、頭ヲワナヽカシテ、夜前君達メノ此ノ歌ヲ歌ヒシヲ、何ニヲ歌フニカト怪ク思ヒシハ、然ハ翁ヲ歌ヒケルニコソ有ケレ、何ノ罪ノ錯ノ有レバ、此ク翁ヲバ歌ニ作テハ可歌キゾ、尾張ノ國ノ代々ノ國司ニ被亡テ失ニタルヲ、天皇ノ弃ガテニ成給ヒタレバ、何カハセムト思テ、極キ術ヲ深キ吉キ國ニ愈立テ奉ルガ惡キカ、亦此ノ五節奉ル事ハ、己ガ好テ望テ奉ルカハ、天皇ノ押宛テ被責レバ、難堪ケレドモ奉ニコソ有レ、亦鬢ノ无キ事ハ、若ク盛ナル齡ニ鬢ノ落失タラバコソ嗚呼ニモ可咲クモ有ラメ、年ノ七十ニ成タ

レバ、蠶ノ落失タラムハ可咲キ事カハ、然レバヤハ、蠶ダバラトハ可歌キ、亦己ヲコソ、憚クハ打モ殺シ、蹴モ蹈マメ、何カデ帝王ノ御マス王宮ノ内ニテ、紐ヲ解キ褊テハ狂ヒ可歌キゾ、更ニヨモ然ル事不有ジ、其レハ其ノ少將ノ君ノ、和主ノ出立モセズ籠タレバ、恐サムトテ虚言ヲ被云ルナリ、近來ノ若キ人ハ、思遣モ无ク、此ク虚言ヲ爲ル也、然様ニハ異人ヲコソ恐シ謀ラメ、己レハ賤クトモ、唐ノ事モ此ノ朝ノ事モ皆吉ク知ル身ヲバ、然モ否不知給ジ、若キ君達ノ口ニ任セテ恐シ給フナメリ、異人ハ被謀ルトモ、翁ハ更ニヨモ不被謀ジ、若シ恐スラム様ニ、實ニ王宮ノ内ニテ、然カ紐ヲ解キ腰ガラミシテ狂テバ、己ニ依テ其ノ主達ハ重キ罪ニ當ナム者ヲ、穴糸惜ト云テ、糸筋ノ様ナル脛ヲ股マデ褰ゲテ、扇ギ散シテ嘆リ居タリ、此コソ腹立トモ、夜前東ノ面ノ道ニテ此ノ君達ノカタヘシ氣色ハ、然モシテムカシト思ケレバ漸ク未ノ時ニ成ル程ニ、何カ有ラムト胸ツブレテ思ヒ合ヘリケルニ、未下ル程ニ、南殿ノ方ヨリ歌ヒ喧テ來ル音ス、ソヽ來コタナリト、集テ舌ヲ丸カシ、顔ヲ振リツヽ恐居タルニ、南東ヨリ此ノ五節所ノ方ニ押凝テ來タルヲ見レバ、一人トシテ尋常ナル者无シ、皆襴表ノ衣ヲ尻許マデ脱下タリ、皆手ヅカラカヒツヽ寄來テ寄懸リテ内ヲ臨ク、五節所ノ前ノ疊茵ニ、或ハ沓ヲ脱テ居、或寄臥シ、或ハ尻ヲ懸ケ、或ハ簾ニ寄懸リテ内ヲ臨ク、或ハ庭ニ立テリ、亦皆諸音ニ此ノ鬢タバラノ歌ヲ歌フ、此ク恐ス事ヲ知タル若キ殿上人四五人コソ、簾ノ内ニ有ト有ル者ノ恐ヂ迷フ氣色ヲ可咲トモ見レ、案内モ不知ザリケル長殿上人共ハ、此ク此ノ五節所ニ有ト有ル者共ノ恐テワナヽクヲ、極テ怪ト思ヒケリ、然テ守ハ、然コソ然ル事不有ジト道理ヲ立テヽ云居タリツレドモ、有ト有ル殿上人藏人ノ皆褊テ此ノ歌ヲ歌ヒテ寄來ル時ニ、此ノ少將君ハ幼ク御スレドモ、人ノ爲ニ後安キ心御シケレバ、實ヲ告給フニコソ有ケレ、此ク告ゲ給フ事无カラマシカバ、我ガ事トモ不知テ耆居ラマシ、哀也ケル君ノ御心カナ、千年萬年平カニ榮エ給ヘトテ、手ヲ摺テ祈リ居ルニ、此ノ君達一人直キ者モ无ク、醉様垂テ褊タル人共

ノ簾ノ内ヲ臨ク時ニ、守今ゾ我ハ被引出テ老屈被蹈折ルト思ヒケレバ、迷テ屏風ノ後ニ這入テ、壁代ノ迫ニワナヽキ居タリ、子共親シキ族ナドハ、皆重ナリテ逃隱テ篩ヒ居タリ、然テ殿上人皆殿上ニ返ヌ、其ノ後ニ尚若君達ヤ有ニト見セテ、一人モ无ク皆御シヌト云ケレバ、其時ニゾ守ワナヽク〳〵這出デヽ、篩音ニテ、何ヲカ翁ヲコソ咲ヒ給ハメ、帝王ノ御爲ニ此ク无禮ヲ至セルハ奇異キ事也、此ノ主達ハ必ズ事有ナム者ゾ、吉シ見ヨ、己等天地日月明ラカニ照シ給フ神ノ御代ヨリ以來此ル事无シ、國史ヲ見ルニ敢テ不記サズ、極ク成ヌル世ノ中カナト仰ギ居タリケリ、隣ナル五節所ノ人共ノ臨テ可咲ト思ケルマヽニ、後ニ關白殿下ノ藏人所ニ參テ語ケルヲ聞繼テ、殿原宮原ニ聞エ畢テ被咲ケル事无限シ、其ノ比ハ、人二三人モ居タル所ニハ、此事ヲナム語ラ咲ヒケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔本朝無題詩二〕見五節舞姫　法性寺入道殿下〇藤原忠通

豐明之會其來尚、仙樂聲々依舊齊、金翠粧嬌琴曲奏、綺羅衣重舞腰低、禮儀堂上霜初白、罷宴樓前月欲西、不醉此中爭去得、黃醅清酒足相携、

〔榮花物語三十六根合〕ながれてはやき月日にて過もてゆけば、五節〇天喜四年に中宮の女房、梅けいせちをふくんでといふ詩をさうぞきたり、梅のおり物香染こうばいのくれなゐに匂ひたるなど也、みどりのもんをおびたりとて、衣たるみどからぎぬのひもなどにやがてこのしをむすびたり、やへこうばいのからぎぬなど色々にをかし、

〔和漢朗詠集上〕紅梅

梅含雞舌兼紅氣、江弄瓊花帶碧文、

〔萬葉集十九〕天平勝寶四年十一月二十五日新嘗會肆宴應詔歌六首

天地與、相左可延牟等、大宮乎、都可倍麻都禮婆貴久宇禮之伎、

右一首大納言巨勢朝臣

天爾波母、五百都綱波布、萬代爾、國所知牟等、五百都々奈波布、

右一首式部卿石川年足朝臣

天地與、久萬氐爾、萬代爾、都可倍麻都良牟、黒酒白酒乎

右一首從三位文屋智奴麻呂眞人

島山爾、照在橘宇、受爾左之仕奉者、卿大夫等、

右一首右大辨藤原八束朝臣

袖垂而伊射吾苑爾、鶯乃、木傳令落、梅花見爾、

右一首大和國守藤原永手朝臣

足日木乃、夜麻之多日影、可豆良家流、宇倍爾、也左良爾梅乎之奴波牟、

右一首少納言大伴宿禰家持

〔古今和歌集十雜七〕五節のまひ姫を見てよめる　よしみねの宗さだ

天つ風くもの通ひぢふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

〔後撰和歌集十雜五〕五節のまひ姫にて、もしめしとゞめらるゝことやあると思ひ侍けるを、さもあらざりければ、　藤原滋包がむすめ

くやしくぞあまつをとめと成にける雲ぢたづぬる人もなき世に

〔金葉和歌集九雜〕源頼家が物申ける人の、五節に出て侍けるを聞て、まことにやあまたかさねしを

み衣とよのあかりのくもりなき世に、とよみてつかはしければ、返しによめる、　源光綱母

日かげにはなき名たちけりせみ衣きてみよとこそいふべかりけれ

〔年中行事歌合〕三十番　右　五節十一月中丑　經賢僧都

たち出る乙女の姿あらはれて月にたぐらぬ雲のかよひぢ

右五節と申は、清御原の天皇〇天武吉野の宮にましましゝ時、天女くだりて琴の音を感じて、五度袖を返して舞ふて歌をうたふ、是五節の始なるにや、

三十一番　右　豐明節會十一月　薀堅

新嘗や昨日のはつは納置て今日御酒給ふ雲のうへ人

右豐明節會と申は、今年の稻を神に奉て、其後君もきこしめし、臣にも給故に、節會を行はるゝ也、凡豐明とは、總じて節會の名なり、今日に限べからず、

〔續古事談一王道后宮〕五節ニ上東門院〇一條后彰子ヘ人々參テアソビケルニ、右大辨定頼朝臣カハラケトリテヨメル、

日影サス雲ノ上人コザリセバトヨノ明リヲイカデシラマシ

〔江談抄一公事〕五節時瀧口殊令饗應事

又問云、五節時瀧口殊令饗應事何故、被命云、無指例、只周防守通宗、通後兄也獻五節之時、相語瀧口等、以美麗裝束等各令與也云々、爲仕五節之役也、

〔空穗物語菊の宴〕左大將ぬし五せちいだし給て、うちよりまゐりの夜、

もゝしきにさふるをとめの袖のいろもきみしそめねばいかゞとぞみる、かひなきものになむときこえ給へり、あて宮、

ひとしほもそむべきものかむらさきの雲よりふれるをとめなりとも、おぼしかくるこそなめけれなどのたまふ、兵部卿みこ、をみにあたり給て、うちより、

いろふかくすれる衣をきる時はみぬ人さへもおもほゆるかな、いづれのをりにかはわすれきこえむ、あないみじやとなむきこえ給へり、あてみや、

あだ人のさはにつみつゝすれる色になにゝゝあやなくおもひいづらむ、なれならではえの給はじかしなむきこえ給ふ、

〔嘉永年中行事〕十一月新嘗祭、中卯の日なり、十月晦日晩より御神事にて、祭の二日前より御潔齋となる、當月朔日清涼殿にて忌火の御飯を供ず、前日に兼て、祭につかうまつるべき諸臣を神祇官にトはしめ、卜合の人々に小忌の衣を給ふ、當日戌刻許帛御袍をめされ南殿に出御なる、額の間より蕊華輦にめし、月花門中和門代をへて、神嘉殿に入御なる、職事御湯殿の事を奉仕す、小忌の公卿神座を設く、亥刻許神事の御服に改められ、御巾子に幘を引廻さしめ給ふ、御手水ありて神殿の御座に著しめ給ひて、夕の神饌を奉らせ給ふ、終りて內に入御なり、丑刻許二たび出御なり、曉の神饌をはり、小忌の公卿神座を撤す、夫より本宮に還幸なる、月花門迄の間、道すがら近衛千歳を歌ふ、朝餉にて解齋の御粥を供ず、事をはりて常御殿へ入御なる、此間御神事を解るなり、新嘗祭は朝家の大祭にて、昔より祭の事はあれ共、其始詳ならず、中古より絶たりしを、元文五年十一月廿四日再興せらる、されども神嘉殿はなくて、紫宸殿にて行はれし、寛政三年神嘉殿を立られて初て行幸あり、

〔おもひのまゝの日記〕十一月一日ごろより五節のひしめきまた世のいとなみに見えたり、新嘗祭の行幸、そむ膳の儀ことにとゞのへさせ給、大みの屋に暮うちなど、ふるきためしいとおもしろし、中のうしの日は五節のまゐりなり、公卿のも受領のも、みなみめかたちをえらばせ給へば、えならぬ舞姫どもおほし、やがてうへ宮仕さいはひひきいづるためしいとをかしき事どもなり、御前の心み御覽の日などはえ〳〵しくもてなさせ給、東宮中宮のえんずいとおもしろし、

色々のくしどもかざりたるたなどを、心もことばもおよばず、

〔歌林四季物語十一冬〕新嘗のまつりも、この月の公事にとりかさねていみじく、ことしのいねこめ神明にさゝげ、御門もきこしめしあぢはひ給ふ事、やんごとなしや、神樂のいみじさよ、さへのをのこ朝倉の男などそれ〳〵のかずさだまり、主上もならせおはしまして、內侍所の御拜などある御事なり、所作の陪從人長などたち申て、櫻人あさくらふたつがひつかうまつりて、すけのないし祿のことを奏したてまつる、とりものからかみの拍子などありて勸盃あり、さてこもまくら千歳早歌などを有て、おの〳〵所作いみじく神さびたり、かねて云がくなどいふ事侍るもたゞならぬ事なり、とよのあかりのせちは元日のをも申せど、うちまかせて豐明の節會にこそ侍れ、

〔長明四季物語〕十一月、〇中略とよのあかりの御節には、御神樂とてめでたき御おほせごとなるに、才のをのこ神々しき出たち、ゑきくわんのひぢもちいかめしき物から、さくら人朝倉うたふ聲も雪をふくみたる舞人のよそひ、さゆる夜半の空、さらでも神わざはおはれふかゝるべきに、いみじうあさまし、きまで神さびたり、明ゆくまゝにみいらかのともしも、かげは日のにほひにとられ、たきすさみたる衞士のたく火さびしう見ゆる物から、ひんがし山にし山、物のくまながら、はづれ〳〵より見えて、山はかゞみをかけたるやうに、雪も朝日にひかりわたりて、そゞろさむき朝氣の空なり、こゝらゆきかふ人のかほも、すべの事にたづさはるかぎりおもひやられて、目もまみもはれて、ゑぼうし打かたぶきたる、かぶしかたちをかしき物なるべし、

附相嘗祭

相嘗（アヒニヒナメ）ハ相新嘗（ニヒナメ）ノ略語ナリ、新嘗祭ニ先チテ新穀ヲ神祇ニ供セラルヽ祭儀ニシテ、大神宮ノ神嘗ニ同ジ、神嘗ヲモ相嘗ト云フニテ知ルベシ、祭神ハ京中及ビ山城大和河內攝津紀伊ノ五國ニ在ル所ノ七十一社ナリ、十一月上ノ卯日、神祇官人諸社ノ祝ニ幣帛ヲ頒チテ、各〻其社

名稱

ニ奉ゼシム、而シテ祭祀ノ料ハ、各、其國ノ正稅及ビ其社ノ神稅ヲ用ヰシム、此祭ノ始メテ史ニ見エシハ天武天皇ノ五年ニ在レドモ、朝綱ノ弛廢ト共ニ、此祭祀ノ禮典モ早ク衰ヘシニヤ、後世ハ僅ニ賀茂社、齋院及ビ日前國懸、住吉等ノ諸社ニテ行ハレシ事ノ見エタルノミ、齋院ノ相嘗ハ少シク異ナル所アリ、翌日御神樂ヲ行ヒ、公卿殿上人參集シテ饗饌賜祿等ノ事アリ、

〔伊呂波字類抄〔安諸社〕〕相嘗祭　アヒニヘ

〔類聚名義抄十〔雜〕〕相嘗　アヒムベ

〔公事根源十一月〕相嘗祭

相嘗と書て、あひむべの祭とよむなり、

〔玉勝間〕中臣壽詞

相嘗は阿比爾閉と唱ふべし、爾閉を牟倍と唱ふるは、後世の音便にくづれたる唱也、大嘗も大爾閉なるを大牟倍といふと同じ、さて此相嘗は、天皇と相伴に新饗し奉る意の名にて、俗にいはゆる相伴のこゝろばへなり、さる故に、此祭は必しも其神社の尊き卑きにもよらず、必預り給ふべく思はるゝ神にも、預り給はぬ多し、これ殊に故有て預り給ふなるべし、其神七十一座おはしまして、四時祭式に見えたり、其中に上に引たる左京二條坐二座神は、大社の列にだに入給はざるに、此祭に預かり給ふこと、新嘗に殊なるゆゑある神なるべし、

〔倭訓栞前編安〕あひむべ　令式等に相嘗と書り、あひむべとよむべし、公事根源に見えたり、むべはにへなり、中にあるには多くむといへり、恐らくは神嘗大嘗なぞの間に行はるれば、もと間嘗の義なるべし、相も間も義通へり、又公にては其諸神を皆親く祭りなしぬるよりいふ歟、令に、季秋神嘗祭、仲冬上卯相嘗祭、下卯大嘗祭と見え、式に載する所七十一座、其社の神主各自

祭日

祭神及幣帛

に官幣を受て祭る也、後漢書の注に、正祭外、十月嘗稻等、謂之間祀と見えたり、九月神嘗祭を、相嘗と記せるあり、桓武紀に、延曆九年九月、奉伊勢大神宮相嘗幣帛と是也、中右記に、相嘗祭供當年新穀事也、是神今食新嘗祭同儀之故也と見え、令義解に、新嘗謂嘗新穀以祭神祇也、朝則諸神之相嘗祭、夕則供新穀於至尊也と見ゆ、

○按ズルニ、後漢書章帝紀ノ注ニ、正祭外、五月嘗麥、立秋嘗粢盛酎、十月嘗稻等、謂之間祀トアルハ、卽チ四時祠祫ノ外ノ祭祀ヲ云フ、倭訓栞ニ、此ヲ以テ間嘗ノ義ニ引證セルハ誤ナリ、

〔日本書紀通證三十四〕延喜講書私記曰、調庸荷前先祭神祇號相嘗祭、後奉山陵號荷前也、

〔令義解二神祇〕仲冬上卯相嘗祭

〔拾芥抄中末中行事〕十一月上卯日相嘗祭

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

相嘗祭神七十一座

太詔戸社二座〔坐左京二條〕

絹四疋、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鰒一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、凝海藻六斤、鹽二升、海藻四斤、筥二合、瓮缶水瓷山都婆波小都婆波筥瓼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各四口、酒稻百束〔神稅〕

鴨別雷社一座

絹二疋、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤、凝海藻三斤、鹽一升、筥一合、瓮缶水瓷山都婆波小都婆波筥瓼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏酒盞筥坏陶臼各二口、酒稻五十束〔神稅〕

鴨御祖社二座

絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八升、鹽二升、宮二合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶曰各二口、酒稻百束、神稅

鳴川合社一座

絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、宮一合、海藻凝海藻各二斤四兩、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶曰各二口、酒稻五十束、神稅

松尾社二座

絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、宮二合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶曰各二口、酒稻百束、神稅

出雲井上社一座

絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、堅魚二斤十兩、鮑十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、腊四斤、鹽一升、宮一合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶曰各二口、酒稻五十束、神稅

水主社二座

絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、堅魚五斤四兩、鮑一斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、腊八斤、宮二合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶曰各二口、酒稻百束、神稅

片山社一座

絹二匹、絲一絢一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布二段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏酒坏陶曰各二口、酒稻五十束、神稅

木嶋社一座

絹二匹、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤四兩、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏陶曰各二口、酒稻五十束、神稅

已上八箇社坐山城國

大和社三座

絹六匹、絲八絢四鉄、調布十二端一丈六尺、庸布三段二尺、木綿八斤四兩、鰒二斤、堅魚九斤四兩、腸魚十九斤十四兩、海藻凝海藻各十三斤四兩、鹽二斗、宮三合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤宮坏小坏片盤短女坏陶曰各四口、酒稻二百束、神稅

石上社一座

絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤一兩、鮑十斤十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、宮一合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤短女坏小坏酒坏宮坏陶曰各二口、酒稻五十束、神稅

大神社一座

絹三匹、絲三絢四鉄、調布六端八尺、庸布一段一丈四尺、木綿四斤二兩、鰒一斤五兩、堅魚五斤、與理刀魚三斗、鹽一斗、腸魚海藻凝海藻各六斤十兩、宮二合、理缶水瓮山都婆波小都婆波宮廻酒垂匝等呂須伎高盤片盤小坏短女坏宮坏陶曰各二口、酒稻二百束、神稅

宇奈足社一座
絹二匹、絲一絢一兩三分、二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、海藻二斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

村屋社一座
絹一匹、絲一絢三分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚三斤、腊一斤、海藻一斤十兩、鹽一升、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼高盤片盤短女坏宮坏小坏酒垂匜等呂須伎陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

穴師社一座
絹二匹、絲一絢一分、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿一斤、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤、鹽一升、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

卷向社一座
絹二匹、絲一絢一兩三分、調布三端四尺、庸布一端一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

池社一座
絹二匹、絲一絢一兩一分三銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽一升、宮一合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

多社二座
絹二匹、絲三絢四銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、宮二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

葛木鳴社二座
絹二匹、絲三絢四銖、調布六端八尺、庸布三段、木綿一斤十兩、腊四斤、鮑十兩、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽四升、宮二合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼高盤片盤酒垂匜等呂須伎短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、神稅

飛鳥社四座
絹八匹、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊二斗、海藻八斤十兩、鹽四斗、宮四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏酒坏陶臼各八口、酒稻二百束、百八束神稅、九十二束正稅

甘樫社四座
絹八匹、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊五升、海藻八斤十兩、鹽四斗、宮四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏酒盞陶臼各八口、酒稻二百束、正稅

高鴨社四座
絹八匹、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤十兩、鹽四斗、宮四合、廻缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏酒盞陶臼各八口、酒稻二百束、正稅

高天彦社一座
絹二匹、絲一絢一分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、綿三屯、木綿十三兩、鮑十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、筥一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
金峯社一座
絹二匹、絲一絢一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、筥一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
葛木一言主社一座
絹二匹、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鹽一升、鮑一斤十兩、腊四斤、堅魚二斤、海藻凝海藻各二斤、筥一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
火雷社二座
絹四匹、絲二絢、綿六屯、調布六端二丈、庸布二段二丈八尺、木綿二斤四兩、鮑二斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八斤、鹽二升、筥二合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、神稅
已上十七箇社坐大和國
枚岡社四座
絹八匹、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、堅魚八斤八兩、腊二斗、海藻凝海藻各八斤八兩、鹽四斗、筥四合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片

盤短女坏筥坏小坏酒盞陶臼各八口、酒稻二百束、正稅
恩智社二座
絹二匹、絲三絢四銖、調布三端四尺、庸布一端一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四升、海藻二斤六兩、鹽一升、筥二合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
弓削社二座
絹四匹、絲四絢、綿四屯、調布六端、庸布四段、木綿二斤、鮑一斤四兩、堅魚二斤、腊四升、海藻四斤、鹽四升、筥二合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各四口、酒稻二百束、正稅
已上三箇社坐河內國
住吉社四座
絹四匹三丈、絲四絢八兩四銖、綿三屯三兩、木綿三斤十兩、調布八端三丈四尺、庸布一段一丈三尺、齋人潔衣純二匹、鮑二斤八兩、堅魚六斤十五兩、腊一斗、鹽五升、海藻九斤十兩、凝海藻九斤十五兩、筥四合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各八口、酒稻二百束、神稅
大依羅社四座
絹八匹、絲十二絢、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鮑二斤八兩、腊五升、堅魚八斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波筥韮酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各八口、酒稻二百束、正稅
難破大社二座

絹四匹、絲六絢、綿六屯、調布六端、庸布一段二丈三尺、木綿二斤、鮑十兩、腊五升、鹽一斗、堅魚四斤四兩、海藻四斤四兩、凝海藻四斤四兩、宮二合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤宮坏小坏短女坏陶臼各六口、酒稻百束、正稅
下照比賣社一座
絹二匹、絲三絢、綿三屯、調布三端、庸布一段一丈七尺、木綿一斤八兩、鮑十兩、堅魚十兩、腊五升、海藻二斤十兩、凝海藻二斤二兩、鹽一升、宮一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、正稅
新屋社一座
絹二匹、絲三絢、綿二屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十斤三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、海藻凝海藻各三斤十兩、腊四升、鹽四升、宮一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波宮廼酒垂匜等呂須伎高盤片盤宮坏短女坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、正稅
廣田社一座
絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、宮一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
生田社一座
絹二匹、絲一絢二兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、宮一合、韮缶水瓮山都婆波小都婆波高盤片盤短女坏匜等呂須伎酒垂宮廼宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
長田社一座

絹二匹、絲一絢、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、宮一合、海藻二斤十兩、韮缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂匜等呂須伎宮廼高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅
已上八箇社坐攝津國
日前社一座
絹四匹、絲三絢四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、神稅
國懸社一座
絹四匹、絲三絢四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、神稅
伊太祁曾社一座
絹二匹、絲三絢調布三端一丈七尺、木綿十三兩、酒稻百束、神稅
鳴神社一座
絹一匹、絲三絢、調布三端、木綿十三兩、酒稻五十束、神稅
已上四箇社坐紀伊國
右預相嘗祭之社、如前、十一月上卯日祭之、其所須雜物、預申官請受付祝等奉班、酒料稻者用神稅及正稅

〔延喜式三踰時祭〕凡因幡伯耆兩國所進相嘗祭料、荒宮八十八合、國別四合、別冊每年以神稅交易、十月以前差使進上、

〔令義解二神祇〕仲冬上卯相嘗祭、謂大倭、住吉、大神、穴師、恩智、意宮、葛木、鴨、紀伊國日前神等類是也、神主各受官幣帛而祭也、〇中略

〔公事根源十一月〕相嘗祭

前件諸祭供神調度、及禮儀齋日、皆依別式、

上卯日

神祇令には、大倭住吉、大神、穴師、恩智、意富、葛木鳴、紀伊國日前等也、神主おの〳〵官幣をうけて、と
りおこなふ、ちかき比は絕てさたなし、

〔日本書紀二十九、天武〕五年十月丁酉、奉(○奉原作レ祭、據二書紀集解一改)幣帛於相新嘗諸神祇、

㊟按ズルニ、相新嘗トハ卽チ相嘗ヲ云フナリ、

〔東大寺成巻文書寸〕大倭國天平二年大稅帳

城上郡(○三字缺今補レ之)

大神神戸(○略)中　合肆仟肆佰伍拾陸束肆把、用肆佰伍拾陸束肆把、(祭神卅六束、新嘗酒料百束、○中略)

穴師神戸(○略)中　合壹仟肆佰參拾陸束、用漆拾肆束、(祭神廿四束、神酒料五十束、嘗酒料五十束、)

十市郡

太神戸(○略)中　合壹萬陸佰玖拾束玖把、用伍拾捌束、(祭神八束、神嘗酒料五十束、)

城下郡

池神戸(○略)中　合漆拾漆束、用伍拾肆束、(祭神四束、神嘗酒料五十束、祭神四束、神嘗酒料五十束、)

村屋神戸(○略)中　合伍拾肆束貳把、用伍拾肆束、(祭神四束、神嘗酒料五十束、祭神四束、神嘗酒料五十束、)

山邊郡

大倭神戸(○略)中　合壹仟肆拾壹束、用壹佰肆束、(祭神四束、神嘗酒料百束、祭神四束、神嘗酒料百束、)

添上郡

菟足神戸(○略)中　合壹佰壹拾束參把、用伍拾肆束、(祭神四束、神嘗酒料五十束、)

○按ズルニ、大神、穴師、太、池、村屋、大倭、菟足ノ七社ハ、上文所收延喜式ニ見エタル如ク、相嘗祭ニ預ル神ナリ、此餘大稅帳ニ、添御縣、往馬、龍田、巻向、長谷山口、志癸御縣、忍坂、他田、生根、佐爲、十市御縣、石村山口等ノ神戸ヲ載セタレドモ、神嘗酒料ヲ注セズ、延喜式ニ據ルニ、皆相嘗祭ニ預ラザル神ナリ、由テ思フニ、本文神嘗トアルハ蓋シ相嘗ノコトナルベシ、而シテ本書振神戸ニ神嘗酒料ナキモノハ、當時未ダ相嘗ニ預ラザリシナルベシ、姑ク附記シテ後考ニ備フ、

諸社相嘗

〔朝野群載八別奏〕民部省符　山城國司

應宛正稅稻貳佰五拾束

右被太政官去月十七日符偁、得神祇官解偁、來十一月三日(○丁卯)祭、相嘗料、依例所請如件、省宜承知依件宛定者、國宜承知依件宛之、符到奉行、

從五位下少輔兼内記藤原朝臣良文、

延喜十九年十一月一日

正六位上行少錄奉

〔延喜式六齋院〕相嘗祭(若七月以前定二齋王一者當年祭之、八月以後者待二明年一祭、)

神座二前(下上兩社料、)

五色帛各四尺、酒二斗(供二神料一請二所司一)

裝束料

小忌宣旨采女各一人、別絹一匹、綿三屯、貲布一丈五尺、采女代七人、絹三丈、貲布一丈五尺(並用二下司食者一)、

人三人、貲布一丈五尺、

使院司一人(ト食)絹一匹、綿三屯、布一端、宮主絹一匹、綿一屯、舍人一人布一端、仕丁一人庸布一段、

右每年十一月上卯日、鷄鳴齋王潔齋、遙拜奉幣於神社、夕時設上件神座於齋殿、座別設齋王供承座、祭之、奉幣使廻後、院司幷宮主各給衣一領、明日夕給酒饌於院裏、男女賜祿各有差、勅使至社奉幣之後、於社前給兩社禰宜祝及忌子等祿、同四月祭例、其用途料、絹廿匹、調綿二百屯、布卅端、預前申官請大藏省、

〔師遠年中行事十一月〕上卯日相嘗祭事(齋王遙拜事、明日齋院神樂事、)

（中右記）寛治八年〇嘉保元年十一月七日、今日以往去月八日以後、世間有穢、疑是左大將殿小兒非常之間、其穢遍滿天下云云、而有御卜處、穢氣者、仍以往神事皆延引、宇佐例幣、五日〇卯發齋院相嘗、今日山科祭、皆以延引、十八日、酉時許、著小忌參內、節會御裝束如常、〇中略殿下仰云、今夕齋院相嘗、御神樂如例、新大納言家也、殿上人多可參入者、式人召人仍多參齋院、予依入召人召、著小忌、令參入、御神樂如例、新大納言家節會了後、令陰陽寮勘申廿二社奉幣日時、明後日未二點、予雖爲行事、依參齋院語付藏人辨時範云々則奏者、夜半御神樂了後歸家、

天永二年十一月廿五日、參院、付家光、取御氣色、齋院相嘗、今日依世間穢氣延引、來月三日依當上卯欲申行處當國忌、准據之例尋大外記師遠處、國忌日无行神事例、申卯十五日可行之由奏聞、仰云、尤可然、件十五日可行者、十二月三日、〇卯辛今日齋院相嘗、依當上卯雖可被行當國忌仍延引、中卯日可行之由下知本院了、去十一月間依世間穢延引也、但先尋例之處、十二月无相嘗例然而又无止神事不可默而止、仍十二月可被行之由先日議定了、三年十一月一日甲寅、晩頭藏人辨來云、夜前川合社廻廊中門等燒亡、寶前一宇雖免炎上、御體早奉渡貴布禰社中了、但下社氏人等皆穢了、又歸參下御社奉每日御供了、仍下御社穢了然者明日相嘗可被行哉可延引哉、可量申由有院宣也、雖申殿下、今日御著陣之日也、不內覽不吉事、仍院令沙汰御也、予申云、本社穢了、不可延引歟、但有穢之時、有相嘗例可被尋問歟、以此旨可被奏之由答了、是被問人々云々、又藏人辨送書札云、只今可馳參院者、仍著直衣馳參、則大藏卿爲房參入、仰云、相嘗祭事、更〻不思食得、爲沙汰遣召左大臣民部卿之處有所勞、但可被尋例由雖申、已先例不詳也、今間召上下社司等、被問例處、申云、本社相嘗、全不覺、延引事、但於齋院相嘗者、齋王有月障時、或用中卯例事也、近者去年依下野守明國穢、十二月被行也、於本社相嘗者、全不延引之由所申也、重仰云、然者本社有穢之時、有行相嘗例哉、社司等申云、件例又不慥覺者、但於四月祭者、雖有穢供齋不止、於公家使々齋王參者所被止也、准彼例行相嘗可宜歟、就中四月祭ハ重事也、相嘗ハ次事也者、付此說引勘文德實錄第六之處、仁壽四年齊衡元年也四月癸酉、以有穢事、停賀茂祭、但山城國齋供如常者、件穢ハ下社中死人之由、又見外記勘文也、依彼例去康和二年四月、下御社穢時止公家祭、本社供祭如本者、可依彼例由、予大藏卿共所申也、重仰云、止相嘗祭、與穢人供齋之間、更不思食得如何、重可量申、先被問明法博士信貞之處、燒亡穢ハ无甲乙、仍件氏人等雖參本社於社者不可有穢、但觸失火所人、忌神事七ヶ日見式文、今度社司氏人等一人不殘、乍驚參川合社間、觸失火穢也、仍不可供奉神事也、然者以上社氏人、令勤下社相嘗如何、社司等申云、上下社作法各別也、隨又氏各異也、古今未有其例、全不可有之由所申上也、如此之間事未決、予申云、早被行御卜、可被決事歟、神慮難知、人力不可及也、大藏卿同此定、仰云、夜已及深更、諸司相叶哉如何、申云、早々被催何不參仕哉、就中相嘗明日上卯也、卯時進神供之由社司等所申也、仍今夕事可決歟、重仰云、早々可被行軒廊御卜者、唯今大外記依召所候也、早可催諸司由且以下知了、逐電退出、則著束帶參內、史俊兼所召具也、神祇祐兼俊、陰陽助家榮所參入也、中臣官人被行常例也、藏人辨來仰云、鴨御祖社司幷氏人等皆以觸穢而明日本社相嘗祭被行歟、延引如何、宜令神祇官陰陽寮卜申者、件仰詞藏人辨書下也、予令敷膝突、召藏人辨仰可敷座之由、前庭敷座了、居水火令召官寮、大外記宣入從西中門、官寮著座、先召兼俊下仰詞、仰可卜申由、召家榮朝臣、以詞委仰件旨仰可占申之由、兼俊持來御卜形、披見之、明日被行吉也、被延引不快也、事已分兩方、但若官寮相異者、可被依神祇官御卜由兼申請也、其故者如此神事、先可用本官御卜之故也、藏人辨仰云、上御社相嘗可止哉否事、重可令卜者、是下社一定可止之故、上社一所被行、頗有其疑也、以詞仰下之所、又官卜申云、如初被延行吉也、寮占申云、如初明日被行吉也、已又相異也、御卜形四通、召外記筥入之、付藏人辨令奏、但今日殿下御著陣日也、先申吉書一通之後、申案內可內覽之由示含了、及曉更內覽奏院了、仰云、上下社相嘗幷齋院相嘗可用中卯日被仰下

丁、社司等候陣頭、承件旨、退歸了、相嘗祭ハ、隨本社祭、可被行之故、无
論被延了、十四日丁卯、今日賀茂上下社行相嘗、但齋院相嘗延引、依齋王月障事也云々、
元永二年十一月朔日癸卯、今日依相嘗供新穀、二日庚辰、臨未刻、右大臣〇源雅實内大臣〇藤原忠通右大
將〇藤原家忠右衞門督、治部卿別當、右兵衞督、左大辨、參集仗座、予加其座頭、辨顯隆朝臣、下社〇賀茂解并
官外記勘文云、可定申、右大臣給之、一々見下、予披見之、社解云、去夜戌刻、火出從御庫及正殿、中門廻
廊舍屋廿宇已燒了、〇中略今日齋院相嘗後朝御神樂延引云々、
大治二年十一月五日辛卯、齋院相嘗也、御所盛重堀川宅也、有奉幣云々、使阿波守有賢朝臣、陪膳頭
中將忠宗朝臣、役送右少辨宗成者、
主典義基云、卜定七月以後時、明年四月有此事、四月以前有卜定時、當年十一月有此事也、仍此齋
院當年十一月相嘗被行也、
四年十一月十一日乙卯、賀茂相嘗也、十二日、今夕齋院相嘗後朝御神樂云云、午後雨止、雖有其儀、
稱所勞由不參也、是御寺追補之由、藤氏人心中大歎之故也、
右少辨示云、御神樂依雨止之、但左衞門督、左兵衞督、左宰相中將、右兵衞督參仕、給社司祿、入夜退
出、
廿四日戊辰、今夕齋院御神樂、去辰日依雨延引也、依催參齋院、左衞門督實行卿、改小忌著位袍被參、
左兵衞督、左宰相中將、大貳、先於東廊北座有饗饌事、上達部殿上人著此座、三獻汁物等事、諸大夫口
□□□□以下著南簀子敷座、敷圓座於南階以東、□□間之東并西打出、阿波守有賢所課神殿南庭敷御神樂座、南屏
北邊敷殿上人座、大略如內侍所御神樂、東西對座、砌下儲庭燎、召人殿上人左中將宗能朝臣、本拍子、庭火朝倉反、右少將
公敦朝臣、末拍子、今度初取之、強無相違歟、同公隆朝臣、左少將忠基朝臣、笛丹後守資賢、庭火琴能登守季兼、庭火篳篥地
下、元仲資補清仲弟朝倉反、兵庫助經基琴、近衞舍人、近方忠方助定遠方公方兼利人長兼信、人々著座、先三獻取物了一獻前張

星令歌其駒之後、殿上人取祿給之、月漸昇事了退出、當齋院初御神樂、五年十一月四日癸卯、賀茂
相嘗依式日被行也、五日依有院宣、申時許參齋院、相嘗後朝、社司參進御棚二荷、長官有賢以下職
事昇之、立御所東面方、社司著客殿、長官同著之、給祿及深更、於神殿南庭有御神樂、忠方近方執拍
子、予依神身屈、觸人々、早以退出、向一條留、予著束帶參入、追而左兵衞督著直衣、但直衣可參事云々、
〔吉記〕治承四年十一月十六日甲子、齋院相嘗會後朝去八日御神樂、依雨延引、次辰日來廿日可相行之由、
前治部卿被申之、予依服暇不及申沙汰、示付藏人少輔了、
〔山槐記〕治承四年十二月二日庚辰、齋院相嘗御神樂云々、去月延引、自新院〇高倉被催、上達部殿上人、
可取拍子云々、依上皇〇後白河御子、有嚴重儀歟、後聞中御門大納言實家右兵衞督家通參入云々、
〔仲資王記〕元久元年六月九日、明年四月入御〇賀茂齋王諸司、明後年入御本院、即可有御參社、其間事見
式幷儀式云々、委旨彼院主典亙爲重代之者、相嘗祭幷鎭魂祭間子細可被召問歟之由被申之云々、
〔薩戒記〕應永卅三年十月廿七日丁亥、今日左近大夫景藤來曰、來月二日相嘗祭也、先自明夜有神事、
件時奏樂笙篳篥笛、各第一者奉仕之流例也、故景秀死去之後、景清爲政乎、當時第一者在吉仍用代、勤一役
至去年無相違而當年景房第二者也相語社務、欲勤之、去廿日也景親景清景藤景興等、皆從彼社神事之間、觸彼穢畢、相嘗忽可及闕如歟、此上者景房爲第二、可
勤其役之由觸社家云々、無左右不在子細之由出折紙、持參件折紙於院申、既依及闕如、社家申旨如
此、早可令景房勤此役之由、可被成院宣於社家之由仍卽可仰遣社家之由、以女房奉書被仰出藏人
右少辨經直賀茂奉行也、但經直近日不出仕、然仍被仰前中納言經興卿云々、此事景房
造意甚奇怪、於景清景興者、依北野神事當番已觸穢了、於景親景藤者、依可勤八幡幷相嘗事、更以不
觸彼穢之處、忽申成之條濫吹至極也、無左右勅許、爲之如何、所詮以此趣欲預奏聞云々、予答云、今夜
可參院、有便者可申出者、秉燭之後參入、仍候御前之時申出此事、仰云、景親景藤等不觸穢之儀之由

被聞食了、但相嘗笛事、第一者代官景清穢觸之上者、爲第二景房競望、非無其理歟、予重奏云、一旦之理雖可然、近年當道傍例皆以不然、第一者故障之時又用代之例也、年中神事公事不可限之、何於此一事、今更景房可申所存哉、只任傍例可有其沙汰歟者、其後無殊仰、翌日以此趣召仰景藤了、此事大略四辻宰相中將申沙汰歟云々、廿八日戊子、左近大夫景藤來、相嘗祭笛事、勘修寺前中納言委細尋沙汰、景房奸計之至落居了、然而猶院仰、老者忽失面目之由歟申、不便之至也、爲三箇夜之儀（子日午日卯日等也）者、其內一夜存別儀、以景房可令勤之由可仰社家云々、此事猶雖不可然、勅定上者不能左右之由前中納言命云々、後聞樂人等悉觸穢之由沙汰出來、今度相嘗無樂云々、所詮雖產穢可有甲乙儀云々、未曾有聞事歟、十一月二日辛卯、今夜相嘗、樂人悉以觸穢、仍大神景康一人、爲景清代參勤筆簟等不參云々、

〔日前宮神事記〕十一月一日、日前宮相嘗御祭忌固祭事、

其次第、先祭方人母、於酒殿廳前立並榊勤解除、次酒一獻（酒殿守役）其後於神領界立榊東西北界（東太湯橋高橋一本、西雜賀界一本、北加納北有二本界一本、四本立之）御供頭人大內人實房、朔幣十列如常、

同日粟島祭次第、兩人母、中臈、案主、神子、皆參彼社、先於本腋海邊立御神木御鉾、有解除（號風祭）御荷前供之、白酒一瓶子充、折櫃三合充（折一餅入三充入）兩人母役、柑子橘各百計出納役、彼納禮人母已下給之、此內酒一瓶子、餅一合、橘等浦人給之、浦人雜紙一帖出之、其後參粟島社、御荷前供之、酒一瓶子（酒殿守役也）餅柑子橘等也、飯者上白冠米七升出之、土師末案主等炊之、人母唱唹聲、又小飯三折敷、小瓦氣盛之、二折敷八盃備之、一折敷六盃備之、內人役也、次八津伊加和羅氣有之（八津伊見二相嘗御祭段一）次彼社禰宜申祝詞、（但近來相次於彼所申言社申祝詞、）人母、中臈神人皆各小紙袋入白米二充持之、一者粟島社祝詞時、一者彼中言社祝詞時、給之於禰宜、次有中臈、案主等舞（皆同時舞）人母唱御歌（无二和琴一）次巫女有里神樂、其饗膳勸盃有之、饗膳清酒等、禰宜役有料田、又自本荷前納所米納斗一石六斗三升下行之、自粟島鹽

四俵彼納所進之、相嘗御祭時細々用之、又禰宜酒外酒殿守役有之、其座次第、於彼拜殿（以西爲上）敷薦席、人母著之、疊上敷筵、其上敷皮用、中臈二行著用疊、人母以下饗菜皆六種也、人母者六種、外前物魚有之、肴四種、二折敷充也、中臈神人皆同、魚三種、精進一種、神子饗菜二種、總一權一者三種也、彼饗米自荷前納所、國本斗三斗禰宜請之、酒禰宜役、一宿之後早旦又饗勸盃如夜前有之、其後退歸下、向之時、於木本山案主等取臭木（クサキ）相嘗御祭時燒之於灰、奉入御酒、

上卯日、鳴神社祭總官一度參詣、行事一人代官也、

定相嘗御祭日次事

三日、相嘗御祭慶盃造事、

五日、同慶盃伏（アセノ）事、土師以糠燒之、次進酒、次三反遶之、御酒造夜燒之、

六日、御供頭人吉田行事料田、（五反、大田之鄉之御房田一反屋敷同鄉、）

七日、同慶盃起（オコシノ）事、土師起之進酒、次三反遶之、（其後起之）

九日、同御穗下（オホシタロノ）祭事、

十一日、同御麹合（アハセノ）祭事、

十三日、同白御酒造祭事、但此等日依撰御解除日、无定御牒面、如此書載之畢、

十五日、御供頭人上白冠、荷前里神樂事、

相嘗御祭黑御酒造祭事（撰吉日臭木灰小麥毛也支御酒合事歟）

御供頭人　大案主久元

建長五年十一月十六日

同御殿開祭事、御供頭人大案主近久

建長二年十一月十八日

國造俊長之代始之

國造宣親始之

國造宣親始之

御荷前事

同御解除祭事　撰吉日、御供頭人東人母荷前事、

第二日、同玉殿莊祭事、御供頭人案主安長荷前事、

建永元年十一月

第三日、同小集祭事、御供頭人相見爲久御荷前事、

文治二年十一月

第四日、同大集祭事、國衙供奉有官幣、御供頭人酒殿守御荷前事、

同庭立祭事御荷前事

廿六日、御供頭人大案主近吉、

晦日、御供頭人相見守秀御荷前事、

十二月

一日、國懸宮相嘗御祭忌固祭事、其次第與十一月相同、

自三日慶盃造祭至白御酒造祭、與十一月相同、

十五日御供頭人鳴神行事、御荷前里神樂事、

御酒水迎事、自解除日隔中三日、假令十六日、御解除者十二日夜也、

相嘗御祭黑御酒造祭事、撰吉日、御供頭人案主等、主等寄合勤之、

建長五年十二月十四日

御殿開祭事、御供頭人火燒景安、御荷前事、

建長二年十二月十七日

御解除祭事、撰吉日、御荷前事、

國造宣宗始之

國造宣俊始之

國造宣親始之

國造宣親始之

御供頭人　案主等寄合勤之

第二日、同玉殿莊祭事、御供頭人東人母、御荷前事、

建永元年十二月

第三日、小集祭事、御供頭人權內人貞近、御荷前、

文治二年十二月

第四日、大集祭事、國衙供奉有官幣、御供頭人吉田行事、

御荷前事

庭立祭事、御荷前事、

同廿七八日比、依月大小歟、月大者廿八日、小者廿七日、白冠御荷前御酒進之、其次第與三月朔日上

白冠薦引儀同、

晦日、御供頭人大內人守繼御荷前事、

季祭事、今日中言社頭人二人御荷前御酒進之、其次第與九月頭人薦引儀同、今夜兩宮南北御戶寶

藏東西中門中言社嬬御前屋神子等燈油別而進之、小土器入之、兩土師役屋神子者酒殿守、今夜總

官參籠西廳之時、下白冠紙立五盃餅二盃木菓三坏也、酒一瓶子進之、當參近習者行也、

相嘗御祭次第

撰彼御祭日次、其次第先於酒殿廳、十一月上旬吉日行事、開酒殿御樋、取出御牒本、授人母、座上人母持

之參本亭、總官出對于公卿座、被定仰日次、人母書御牒、開御樋指請印、元者白冠相共參、今者人母一

人也、御牒渡之於廳次々々送之於在廳十一十二兩箇月日次同時書之間、十二月无此儀又此外人

母兼日遣書狀於在廳方、其儀與調庸御祭時同、其後人母歸酒殿廳、勘盃一獻有之、酒殿守役也、肴膾

一種、精進一種、慶盃造以下下宮御酒造、於祭方忌殿行之、其次第與都鎭部御祭御酒造儀同、但御酒

水社内井水用之、下宮御酒造者、御殿開前日也、上宮御酒造次第、御供納禮給之後、上白冠甫人母中臣神人參田宮南向著座、以西爲上、用薄蓆、相見用鋪設、火燒取御穗入御酒臼、舂之、其間神人等壞本御穗木、土師申御先三度燒之、即奉造御社、次作件御酒、奉籠彼御社内、以高坊領二枚、編竝引廻其外、彼高坊領一枚、本荷前一枚、瀦荷前納所出之、一枚、正月十六日總官假屋一枚、九月十五日草宮廳南裏引之、進御荷前、白冠申祝詞、次酒菜各行之、上宮御酒造者、御殿開、中一箇日隔之、

御殿開次第、與都鎭部御祭御殿開次第相同、自御殿開至小集御祭、十一月上宮中言祝詞、上白冠申之、十二月下宮中言社祝詞、下白冠申之、但十二月祝詞、元者非祭方人母申之、近年一向下白冠申之、又御供納禮、自今夜至大集御祭、於祭方忌殿支配之、非祭方白冠與雨行事等者、御供祝詞訖後退出、御供納禮爨膳神人送給之、爨膳菜五種內、精進一、

御解除祭日、總官浴海水乘手輿須々丸、近來酌若浦潮、人母祭方勤解除、總官出時雨行事著直垂、垂烏帽子、帶弓矢、相交青侍供奉、

御解除夜次第、相見非祭方申總官迎、總官衣冠參宮經御拜石於中間御垣際北向立給、座上相見進本前祭方白冠御手登申、次案主奉出御鉾御神木、申御先、神官中臣神人行列如常、於中間御垣邊机上置小土器八、白冠兩人母以笏落之、如正月十六日儀也、於芝原乘馬、白冠祭方計也、行事後陣供奉著狩衣、於禊戸總官用手水相見進之、次有解繩、又白冠有解繩人母勤之、十一月吉田河原南、十二月紀三所河原上畠也、下向之時、總門內備和迎酒殿守役、總官以笏落之、即著西廳進廳飯、白冠一人非祭方人母二人著北座、行事二人著南座、中臣南北座、如常有勸盃總官二獻、神官一獻也、白冠飯酒之後、御手登申、神官中臣等有小饗、作丁役、案六種毛見鄕、取廳之物之後退出、先人母中臣等罷立、次白冠行事召近習者退、

今夜奉飾神殿次第、與都鎭部御祭同、但菓子中與米、浦役雜色請祭方御供者進、進御供、於內宮祭方

人母申祝詞、御祭畢後、下宮御祭ニハ上宮以御供廳進之、下宮御供以忌殿送之、上宮御祭以下宮御供廳進之、上宮御供忌殿送之、次相見非祭方申迎、總官參宮布袴、祭方行事於西廳巽角讀御札、次總官東中門與御墳中央上對丑方著敷葉薦、祭方白冠申祝詞、御字諒祝詞ト曰、相見非祭方進、總官本前、次白冠參內宮、次總官參入之時、祭方相見於南御戸內外敷葉薦、總官於御戸外蹲居于葉薦上、祭方相見結總官木綿、次以御幣授總官座上、人母於內宮申祝詞、總官再拜、次相見取彼幣伏置玉殿南壁下、次總官參內宮、於南莊絹下一拜、一拜之後聊敬屈、一拜之後敬屈者總官白冠人母等皆每度同有之、次於人母座前邊奉向玉殿方一拜敬屈、其後著座、次相見取御戸內外葉薦、置南御戸西腋、次中臣各次第參、兩人母祭方相見、幷案主等本自所令參入也、但上宮白冠欲參之時也婦多義有之、宵曉御祭每度有之、ヤフタキトハ、祭方土師、兼テヨリ土ヲ以テ九ニ作テ、其中ヲ少々窪燒固タリ、是搗御前折敷上神木葉敷、其上居土師是ヲ持員十六也、白冠誦文アリ、白冠葉薦下宮无此儀、次祭方人母於南莊絹下一拜、一拜敬屈即御琴登申、人母非祭方撥和琴三度、出嗚聲、次人母於玉殿御前、一拜祈念之後、奉開玉殿御戸、奉開之後、又有祈念、即一拜、又如本於莊絹下一拜、次白冠於莊絹下弁玉殿御戸前一拜祈念之後參玉殿內、東簀著敷二重筵次祭方相見於莊絹下一拜、於玉殿南裏取御手洗草枕、御手洗自粉川進之、有料田云々、授巫、巫置之於玉殿御戸前三度參、其間人母鳴和琴絃、次祭方土師於南御戸困外祝土器廩盃是也、左手捧黑御酒、右白御酒也、盛御酒面授悠紀、申御先三聲、四箇度進之、御酒第一時右手一ヲハ白冠手水盛之、四度時又如此、白冠後樣進之、人母撥和琴唱御歌、次巫賜御手水草枕三度參渡相見、次相見於莊絹下一拜之後復本座、次白冠出玉殿內一拜祈念又有之、次人母奉收御戸一拜祈念有之、次祭方土師持玉物角瓶子、入酒也、參內宮閤之、一拜玉物置折敷上也、參請之三度灑天塚灰也之時、人母撥和琴出嗚聲、次土師非祭方酒殿守荷前參內宮、自東第二間北壁下置之、次案主中臣有舞、次兩土師酒殿守等三人、同時三廻舞、此舞間座上人母撥和琴唱御歌、次祭方

相見進㆓總官本前㆒、上宮祭方土師片手以㆑杓汲㆓瀉内酒㆒、片手持㆑盃置㆓折敷㆒勸㆓白冠㆒、白冠請持之、座上人母讀㆓宣命㆒、讀畢白冠飲之、新米酒也次中臈自㆓末座㆒退出、次相見如㆑初、敷㆓葉薦於御戸内外㆒、總官退出之時如㆑元又於㆓二所有㆑拜、又於㆓戸外㆒一拜、次相見解㆓總官木綿㆒、次總官下㆓自㆒御撫㆒、次巫、次悠紀、次白冠、次座上人母、次座下人母、次退出、次末座案主荷㆓御供御長櫃參㆒忌殿㆒、曉御祭次第如㆑先、但相見勤之、悠紀巫之役、次神官已下於㆓祭方忌殿御供納禮給㆒之、又於㆓西廳總官前㆒、近習青侍等御供納禮支配如㆑常、自㆓今夜㆒至㆓小集夜㆒三箇夜如㆑此、

第一玉殿莊日朝蹲鴟毛立、第三小集日朝餅味曾水、第四大集祭日朝又蹲鴟毛立、於㆓祭方忌殿㆒神官中臈行之、自㆓今夜㆒至㆓小集㆒三ヶ夜㆑、今夜御祭畢後祭方人母田子御酒一瓶子餅二盃木菓四合進㆓之廳㆒、又翌日水鳥一羽御酒一瓶子同進㆓本亭㆒、

第二玉殿莊夜内宮次第同前、今日祭方火燒奉㆑掛㆓莊絹㆒、同日中言社御荷前酒一瓶子、酒殿守役餅餉與米皆十五充備進、祭方土師役也、

第三小集御祭、今日祭方火燒奉㆑開㆓菅原御戸㆒、又御祭以前祭方人母奉㆑向㆓轉御前㆒申㆓祝詞㆒、次座上人母撥和琴唱㆓御歌㆒、中臈皆同㆑時舞、次内宮御祭次第如㆑先、但兩土師酒殿守舞之後總官前餅大餉與米等備之、相見進之、祭方土師役也、又進㆓本前㆒卽取㆓上之㆒、次人母唱㆓菅原御歌㆒、巫悠紀於㆓南飾絹下㆒舞卽退出、次座下人母有㆑舞、次總官有㆑舞、其間人母座上撥和琴唱㆓御歌㆒、禮畢退出、其後神官以下於㆓祭方忌殿㆒、御供納禮給之、神子驗子參㆓忌殿㆒有㆓御神樂㆒、酒餅有㆑之、

第四大集御祭、先備㆓御供㆒、兩人母於㆓兩社㆒申㆓祝詞㆒、祝師計參、次中言社祝詞也、其後於㆓祭方忌殿㆒中言片宮納禮神官已下給㆑之、今夜祭方土師御壇東面下結㆓竹、稻五束奉掛㆒之、御正作稻奉㆓置㆒内宮㆒、卅五束内也、今夜不㆑申㆓總官迎㆒、總官束帶袍白著祭方女客殿、在㆓廳書生同著㆒、相見帛衣、座上結㆓總官冠木綿㆒、又掛御蔦一者掛㆑冠、一者掛㆑肩、次有㆓芝手水㆒、結蔦結付幣串也、次有㆓官人書生等芝手水㆒、官人一人、書生四人、

次飾馬、十一月出㆓西中門㆒、南廻、自㆓東中門㆒入、一反、十二月出㆓西中門㆒、北廻、自㆓東中門㆒入、兩人母中臈案主等皆行列、次官人讀㆓御札㆒、十一月石疊許、十二月東簀傍官人不㆑讀者、相見讀㆑之、其後總官於㆓東中門內㆒、西向著、敷㆓葉薦㆒、申㆓祝詞㆒、以㆓本申之㆒、人母申㆓再拜㆒、次官人有㆓奉幣㆒、土師取㆓彼幣㆒、立㆓懸稻許㆒、次末座中臈荷田子御酒參㆓内宮㆒、玉殿南裏置之、又案主持㆓神木同參㆒、神木枝掛㆓御蔦㆒、土師申㆓御先㆒、次十二月上宮御祭、兩相見持㆓御鯢御鹽㆒、自㆓東中門㆒參、土師又申㆓御先㆒、御鯢御鹽奉㆑立置御寶藏東邊懸稻、如㆓本奉㆑納内宮㆒、次總官又著廳、官人書生同又著廳、饗膳以下自元備置之、次夜津伊加和羅氣有㆑之、八對土器卜ハ、折敷上皿八居、中一置、中ノ皿ニ箸ツキアリ、座上相見持之、座下相見八之皿ニ酒ヲ入、座上相見八之皿之酒ヲ中ノ皿ニ入テ總官ニ進之、又官人之八對土器、末座大案主勤、次勸盃三獻、次官人於㆓廳前㆒有㆑舞敷㆓長筵㆒、次總官有㆑舞同筵引直敷之、其間人母於㆓東中門腋㆒撥和琴唱㆓御歌㆒、次十一月ニハ上宮並中言社ニ於テ總官有㆓奉幣㆒、十二月下宮中言社ニ於テ有㆑之、次總官參㆓内宮㆒、其次第如㆓前々㆒、但國懸宮ニハ、宵御祭案主中臈舞後有㆓殖榊之儀式㆒、案主勤之、帶㆓屐下宮无此儀㆒、次白冠爲㆓御酒直出㆒内宮㆒、祭方土師御酒奉㆑入㆓呂子㆒、持㆓白冠先立㆒忌殿參㆓御酒奉㆒、取替、白冠手水仕、上宮ヤフタキ在、下宮無之、次曉御祭アリ、宵曉一度次被㆑行之、人母於㆓南飾絹下㆒並玉殿御前禮拜祈念如㆓先、參㆒玉殿内㆒、下宮御祭悠紀進御酒、第四度之時、左手仁捧橘前童持之、上宮御祭、座上相見持㆓御鯢㆒、座下相見持㆓御鹽㆒、悠紀仁津禮天暫候、玉殿御前、座上人母禮拜等如㆓先、於㆓玉殿御前㆒、御琴曳登三聲申之、座下人母取㆓和琴㆒、授㆓大内人㆒、座上大内人玉殿御前持參北腋、白冠下宮御祭橘、上宮御祭以㆑土入物造㆓御鯢御鹽取、後樣進㆓上之㆒、有㆓祈念㆒、橘三六度、御鯢御鹽四々度、人母撥和琴吟聲出三聲、充㆓六度㆒、次上宮相見、取㆓御鯢御鹽㆒、土師返賜、下宮橘返給悠紀悠紀悠紀渡㆓土師㆒、次白冠出㆓玉殿内㆒、次人母祭方取㆓出青筵㆒、白冠座也、神人請取之、次人母奉㆓下御帳㆒、次奉㆓収御戸㆒、次上宮神人取㆓殖神木而出㆒、今夜曉御祭、案主中臈無㆑舞、次土師持㆓御酒㆒、入㆓呂子㆒參㆓内宮㆒、次末座大案主於㆓南御戸許㆒、奉㆓玉殿方向㆒一拜、次召㆓官人㆒二聲、官

人被參候〻又一拜、次神人持官人之敷物、鋪設、裏付荒薦置火燒之、東邊官人衣冠、於莊絹許一拜敬屈、次著座、次案主四人、立座持神木、二人充蹲居天塚東、神木者自玉殿南裏取之、次官人讀御葛申、官人不讀者、祭方相見讀之、次相見以御酒納禮進總官、又獻御葛、次土師以御酒納禮、與官人、次取神木、授官人、官人持之一拜敬屈而退出、於飾絹許又一拜、官人潔文曰、日數不滿者立下陣、次土師以御酒納禮獻白冠以下神官中臈、又神人同賜之、悠紀巫等同之、禮畢退出、今夜御祭以前申作、饗、神官下人各給之、菜三種如形有之、立御祭御殿鎮次第、與都鎮部御祭御殿鎮儀同、但菓子與米也、次祭方火燒、以御葛奉掛御殿棟、其後於酒殿廳有解除、次勘盃一獻以西爲上、次白冠有御冠上、於寶藏前有之、祭方人母勤、次於忌殿、祭方人母奉向婦御前申祝詞、有荷前、次申粟島祝詞有荷前、次座上人母撥和琴、唱御歌、中臈等皆對粟島方同時舞、次末座中臈唱歌不撥和琴、學粟島船漕之樣、次有饗膳勘盃、祭方土師役、其後退出、立日總官祭方白冠人母中臈神人等、用行水之後精進、神官已下者、撫髮、今夜於中言社有鼎祭、其次第見調庸御祭、相嘗御祭間、兩行事候御供局、自御解除夜、至小集御祭夜、每夜自役、神人方炭油有之、以下之人又自酒殿守方、清酒一瓶子充各有之、解除取之、肴海藻、若大根盃折敷同有之、又御供納禮、自忌殿祭方神人送給之、又立御祭日早旦、以下人御供納禮田子御酒等請取之、下人以瓶子請之、又其日飯菜魚類二種无汁並皮煎一盃計、但生鳥也、神人送給之、同時有饗菜五種汁

一、

〔住吉社諸神事次第〕十一月

相嘗御祭、丑日齋戶祓、於神館行之、橫座總官、（淨衣布衣）神館北中間疊取也、居散供机、社司前居酒肴、權少祝居、神酒入之、禰宜參申祝言、時、酒自机取下也、次禰宜座〻供祭解文覽也、總官披見解文袖〻可成、返抄之由連書也、位署加判返給也、次一獻畢退出、（或北座權官下客殿北座神官、同南座總官侍著座、）即自今夜參籠、

寅日、酉刻當色饗膳行也、橫座總官、（布衣北座權官、同氏人、南座氏人、下客殿南北氏人、神寶等下橫座、神官（北上勘所司屋（東左勾當勘所司著座、一獻之後男雜仕田邊御料鯉鮒以下自南面參通造合、渡上御厨、權少祝以尺差鯉寸法入見參、次居饗、定文大海社司覽也、兩官連加判返給也、饗立著一獻畢撤也、各退出、勘所司定文押下客殿北壁、

卯日、戌時社祭御供備進、先權少祝申、御座（是案內也）自神館少文疊二帖出也、下客殿敷也、橫座總官南座（權官座勘所司八人（衣冠）南北（東西行）著座、（數繩筵）巫女同著座、子時正權官（東帶）被著座、酒一獻、總官被取盃之時、神官等天平瓮通造合進也、一獻畢撤也、勘所司以下退出、次兩官手水、（氏人下臈）手布（上臈）進也、次木綿手繦同氏人勤仕也、其後立座列立南門前、氏人南北二行、（氏人北東上）神官一切經會殿上、西（南上西向）御供奉舁立之時、所司申前舁調之後、權少祝參向蹲踞之時、各參御前、神官勘司所等先行、總官庭上著座、（筵上數一疊座）權官（筵）氏人、（繩筵數也）幣殿左右上高机勘所司荒薦置也、又勘所司比悉目器等、勘所司取〻渡權少祝、權神殿御分薦比悉目器等、勘所司取〻渡權少祝、權勘所司自御料舁手御供請取、渡權少祝、其後又著座、御供備進之後、神官等自御殿退下、禰宜參神前、權少祝幣持參、總官取幣、禰宜申再拜四度、後權少祝返給也、授禰宜祝言申也、齋童自御殿退下、權少祝閉御戶向總官御前蹲踞之時退出、二三四御供座所南〻東總官、西權官、（用二床子一）氏人等自著座（不西〻著用二床子一）侍氏人參二人、社司木綿襷等取也、氏人木綿自身取也、其後經二三四神殿間、自南脇門退出、

辰日、辰時侍者卸前御供備進之、神館北格子上也、中間疊取也、御戶開也、橫座總官（衣冠北座權官同氏人、東著座）南座氏人、下客殿氏人著座、神官等參內陣御供二前、權少祝等備進也、次御酒壺奉出也、自神官等退、社司氏人立座著座庭拂座、（兼寶藏前數繩鏡總官座置圓）入手權少祝請取〻置下客殿東間（數臈）次申祝言、神座〻東上北面、神官等參候下客殿東（用二床子一）權少祝机上抔入神酒、禰宜參御壺前申再拜之時面々抔取

天盃机下、次酒一獻畢歸著神舘（此間神舘北格子下也）早飯（高月白三總官至三氏人）次居御井（同）次飯汁（歯重）小樋三獻（總官權官者一獻同衙重）次湯漬（總官權官酒三獻、家司乘輿）一進也畢退出、

酉時國祭、各著座神舘、（横座總官東帯）北座權官（同）氏人（布衣）南座氏人（上首）下客殿、氏人勘所司屋、勘所司八人（衣冠）巫女庭上、（寶藏北）著座酒肴之時、天平瓮進也、如去夜、一獻畢撤也、手水手巾（侍氏人勤仕之、自總官至三氏人）社司木綿手繦（同氏人役）天平瓮備進之後、神官等經神舘著座前、自西中門御田殖屋前西行、西門前北行向祓戸、國方御幣神馬在廳舞人陪從兼參向、禰宜遂祓、其後自西四足門入、經三四神殿間、自南中門參入、神官自脇門向下客殿之時、各立座列立南門、如去夜、各參一御前入南中門之時、於廻廊發歌曲（歌和琴笛）各著座、御供備進畢在廳奉幣、神馬四匹引廻之時、所司前ヲ申、二三四御供如例、四神殿神馬引廻之時、前不申、御供畢社司木綿手繦明衣等取也、（如去夜）其後各參一御前、社司幣殿西庇著座、（幣殿小文疊引下之數也、幣殿未作之時、神殿北脇連候用床子）神官幣殿南脇著座、總官著座時幔門氏人上也、横座總官、南座在廳、北座國掌、下横座神官、一獻之後饌居也、解文覽也、在廳加判、次一獻畢撤之退出、

戌時、御神樂、於南門坂迎、次御神樂衆著座（南北行東向）總官（布衣）同東南北二行氏人（西上）北落板敷勘所司下氏人等著座、幣殿、其後社司氏人等參也、北座西横座、南座西横權官（布衣、南北行東向）同東巫女神官等著座、酒肴一獻（自三總官至氏人、歯重、次御神樂始也、唐神之後、中臣勘所司下氏人等參也、次連ムトウ、先神大海社司以下折數）次御神樂始也、唐神之後、中臣勘所司下氏人等參也、次連ムトウ、先神官、次社司氏人參也、御神樂畢巫女等著座舞也、事畢各退出也、

巳日、酉刻後宴饗膳行也、各著座神舘、社司布衣冠或著座、如當色一獻之後饌居也、自上御厨肴進也、立著三獻畢撤也、次神樂酒肴行也、机酒肴之時、勘所司勾當渡下客殿著座、次小格子上也、中間疊取也、東遊陪從寶藏前列立、東遊舞也、次御神樂衆著座、侍者御前壇上巫女著座、中臣連ムトウ、次第（如去夜）事畢退出也、

神祇部三十

鎮魂祭　齋戸祭　招魂祭附

名稱　四九八
起原　四九八
祭神　四九九
祭日及時刻　五〇〇
祭式　同
鎮魂歌　五〇一
行祭宮内省　五〇九
行祭神祇官　五一〇
延引　五一一
停祭　五一二
再興　五一三
用途　同
鋪設　五一五
職員　五一六
　　五一八

服裝　五二一
賜食　同
雜給　五二二
中宮鎭魂祭　五二四
東宮鎭魂祭　五二五
院鎭魂祭　五二七
雜載　五三〇

齋戶祭

神殿　五三二
料物　同
祝詞　同

招魂祭

名稱　五三五
每日招魂祭　同
百日招魂祭　同
臨時招魂祭　同
病中招魂祭　五三六
死後招魂祭　五三九
たゞむすび　同
雜載　同

名稱　五四四
祭日　同
祝詞　同
幣帛　五四五
祭使　同
雜載　五四六

鎭花祭

名稱　五四八
祭神　同
祭日　同
幣帛　五五〇
祭使　同
雜載　五五一

道饗祭　四角四境祭附入

名稱　五五二
祭日　五五三

祝詞　五、五四
幣帛　同
祭使　同
臨時疫神祭　五五五
四角四境祭　同

大殿祭

名稱　五五九
起原　同
祭神　同
祭日　五六〇
祭式　同
祝詞　五六一
用途　五六二
臨時大殿祭　五六三

神祇部三十

鎭魂祭　齋戸祭　招魂祭附

鎭魂ハタマシヅメト云フ、天皇ノ御魂ヲ鎭安シ、以テ御世ノ延長ヲ祈リ奉ル祭ナリ、神武天皇元年、宇摩志麻治命ガ、其父饒速日命ノ、天ヨリ將來セシ十種ノ瑞寶ヲ獻ゼシヲ以テ起原トス、史ニ天武天皇ノ爲ニ招魂ストアルハ、卽チ鎭魂祭ナリ、文武天皇ノ令ヲ制スルニ至リテ、日時ヲ定メテ十一月中寅ノ日ヲ用キラル、其祭神ハ、神魂、高御魂、生魂、足魂、魂留魂、大宮賣、御膳魂、辭代主、大直日ノ九座ニシテ、祭場ハ宮內省ノ廳ニ設ク、但シ本省事故アル時ハ、神祇官ニ於テ行ハル、

當日神祇官ノ笛師ハ笛ヲ吹キ、琴師ハ琴ヲ彈ジ、神部及ビ雅樂ノ歌人ハ、相和シテ歌ヒ、御巫ハ拍子ニ隨ヒテ舞フナリ、既ニシテ御巫ハ宇氣槽ヲ覆セ、其上ニ立チテ、桙ヲ以テ撞クコト十箇度、度ゴトニ神祇伯ハ御玉緒ノ絲ヲ結ブ、女藏人モ節ニ應ジテ、御衣ノ筥ヲ持チテ振リ動カス、此日中宮ニモ亦此祭アリ、東宮ニテハ中巳ノ日ニ之ヲ行ハル、後世ニハ上皇宮ニテモ亦之ヲ行ハレタリ、

中古令制廢レテヨリ、鎭魂祭ノ儀モ大ニ往時ト異ナリ、加之宮內省神祇官モ荒廢シケレバ、纔ニ其舊地ニ假幄ヲ設ケテ之ヲ執行セラル、而シテ後花園天皇ノ文安寶德ノ頃マデモ、尚告朔ノ餼羊ヲ存セリシニ、其後途ニ中絕セシコト幾ト三百五十年、光格天皇寬政九年ニ至

名稱

リテ再興セラレタリ、

【名目抄恒例諸公事】鎮魂祭（タマシヅメノ）

【日本書紀二十九天武十四年十一月丙寅是日爲天皇招魂之（ミタマフリス）、

【釋日本紀二十一秘訓】招魂（ミタマフリス）

【釋日本紀十五述義】象方案之、十一月寅日也、今鎮魂祭也、

【令義解一職員】神祇官

鎮魂謂鎮安也、人陽氣曰ㇾ魂、魂運也、言招ニ離遊之運魂一、鎮ニ身體之中府一、故曰ニ鎮魂一、唯祭ニ魂爲ㇾ例、則有ㇾ魄可ㇾ知、故不ㇾ曰ニ魂魄一、

【令集解二職員】鎮魂召ニ復離遊之運白一、今ㇾ鎮ニ身體之中府一、故曰ニ鎮魂一、唯祭ニ魂爲ㇾ例、則有ㇾ魄可ㇾ知、故不ㇾ曰ニ魂魄一、鎮殿也、言如ニ前駈後殿之殿一也、凡人之陽氣曰ㇾ魂、魂運也、人之陰氣曰ㇾ魄、魄迫也、言迫ニ其遊散一也、

【鎮魂傳】此鎮魂の謂、義解の說、信に盡されたりとも見えず、集解はさらなり、古事記天石屋戸段の傳に、伏汗氣云々の事につきて、此物後世鎮魂祭儀に遺れり、鎮魂に此段の義を用らるゝは、日神のこもり坐るを、招きまつりし心ばへをもて、遊散する魂を招き鎮むるなるべしといはれたり、さはいへど、此事の幽理、たやすく說述べきにあらず、よく其故事を温ねあきらめて、おのが玄ゝ曉るべき事にこそ、遊離運魂と云るに似てきこゆるいにしへの言ぞも、狹衣に、物おもふにたましひもあくがるゝとはまことにこそ、今はうつし心もなき心ちして云々、また歌に、あくがるゝ我たましひもかへりなむ思ふあたりにむすびとゞめよ、たましひのかよふあたりにあらずともむすびやせましと、伊勢物語におもひあまり出にしたましひ下がひのつま、

るならむ夜深く見えば魂むすびせよ、源氏物語葵巻に、物思ふ人の魂はげにあくがるゝものになむありけるとなつかしげにいひて、なげきわび空にみだるゝわが魂をむすびとゞめよ下がひのつま、細流に、魂の出ぬるを、結びとむる事あればなり、むすびとゞめよとは、うかるゝ心を本心にかへし給へとかこつ心なり、袋草紙に見人魂歌、たまはみつぬしは誰ともあらねどもむすびとゞめつ下がひのつま、三返誦之、男は左、女は右のつまを結びて、三日を經て解之云々、洞物語國讓巻に、さもせんかたなく、まどはれ侍りしかば、魂をあつめんとたび〳〵たゞ御ふみ一くだりを見たまへと云々、後藍巻に、熊の出て、子をくはんとする時、子の熊に向ひて云ば施しおるべし、足なくてはいづくまでかありかむ云々、日なくてはいづくにかこいろのあらん、千載集に、左兵衞佐隆房、繼死なばうかれんたまよあらばしだに吾思ふ人のつまにとゞまれ、なた皇太后宮の小侍從、君戀ふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまにむすばれぬらむ、後拾遺集に、和泉式部、物おもへば澤のほたるも我身よりあくがれ出るたまかとぞ見る、○略中四時祭式に鎮魂祭の鎮魂にオホムタマフリ大嘗祭式にと訓をさしたり、これ古語にて古本印本ともにかく假字をさしたり、天武紀に、招魂なほよめるも、此鎮魂の稱によれるなり、此事は下にあげつらひ辨ふべし、但し四時祭式に、カホムタマシヅメ、またタマシヅメ、とよめる處もあり、其も又の稱なり、その由は下に云ふべし、釋日本紀にも然訓り、○略中鎮魂を四時祭式にオホムタマシヅメと訓をさしたる處も見え、又鎮御魂齋戸祭祝詞式にもタマシヅメと訓り、古は二樣にも唱へたりしなるべし、但しカホミタマフリと云ふは、後の音便の例なり、さて又ミタマフリと云ふは、御衣を御魂實として振り動かし來る事のうへより云ひ、ミタマシヅメは、然爲して御魂を鎮め奉ろうへより云ふ稱なり、

【先代舊事本紀七天皇】辛酉爲元年、○神十一月庚寅、宇摩志麻治命奉ㇾ齋殿內於天璽瑞寶、奉ㇾ爲帝后崇鎮御魂祈禱壽祚、所謂御鎮魂祭、自ㇾ此而始矣、凡厥天瑞、謂宇摩志麻治命先考饒速日尊、自天受來天璽瑞寶十種是矣、所謂瀛都鏡一、邊都鏡一、八握劒一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂

比禮一、品物比禮一、是也、天神敎導若有㆓痛處者㆒、合㆓茲十寶㆒、謂㆓一二三四五六七八九十㆒、而布瑠部、由良由良止布瑠部、如此爲之者、死人返生矣、卽是布瑠之言本矣、所謂御鎭魂祭是其緣矣、○又見㆓本書天神本紀及令集解㆒、

〔鎭魂傳〕江家次第に、神祇官一人進結㆓絲於葛筥㆒、自㆓一至十㆒、此間女官撫人開㆓御衣筥㆒振動、小野宮年中行事、政事要略に、藏人開㆓御服㆒、箱振動、深山御記に、解㆓御衣筥綱㆒、以蓋開覆（頻開㆑之、次第振動置㆑之、）如拍子、宮主秘事口傳に、女官御衣筥置㆓八足上㆒云々、女官立㆓筥蓋㆒、少開違へテ令㆓振動㆒、など見えたり、（萬葉集十五卷の歌に、たまもかるめはしたゆふべに多麻布禮ごとよめるは、もしくは鎭魂の事にはあらじ歟、なほよく考ふべし、）これかの義解令に、招㆓離遊之運魂㆒、鎭㆓身體之中府㆒、と謂へる、神傳の鎭魂の厭術なり、然るにこゝに事本紀○先代舊如是爲之者、死人反生矣といへるは、その鎭魂の効驗を尤しく稱たる言にて、實に命死（イノチシニ）終（ハテ）たる者の再活くといへるにはあらず、病に犯され、或は身體を傷めなどして、氣息閉塞て幾死ぬべくなれる者も、蘇生（イキカヘリ）なむ者ぞといへる語なり、件の神寶の中、死反玉とてあるも、然るかたに主と効驗あるよしの名にて、幽理ある事なるべし、

祭神

〔令集解㆓職員㆒〕神祇官

伯一人掌鎭魂祭（問鎭魂祭何神、答神祇官式云、鎭魂祭神八座、神魂、高御魂、生魂、足魂、魂留魂、大宮女、御膳魂、辭代主、○下略）

祭日及時刻

〔延喜式㆓四時祭㆒〕十一月祭

鎭魂祭（中宮準㆑此、更不㆑給㆓衣服㆒、）

神八座（神魂　高御魂　生魂　足魂）

魂留魂　大宮女　御膳魂　辭代主

大直神一座

〔令義解㆓神祇㆒〕仲冬寅日鎭魂祭

〔儀式五〕鎭魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准㆑之、但東宮用㆓巳日㆒、）

祭式

〔北山抄十一月〕中寅日鎭魂祭事（若有㆓二寅㆒、下寅行㆑之、有㆑例云々、然而新嘗會前可㆑行㆑之由見㆑式、）

〔江家次第十一月中寅〕鎭魂祭（十一月中寅、若有㆓二寅㆒、行㆑之有㆑例云々、）

〔公事根源十一月〕鎭魂祭　中寅日

〔年中行事秘抄〕諸祭刻限

十一月鎭御魂

酉一點庶事辨備訖、二點參議以上著㆓座行事㆒、

少外記都宿禰廣田麻呂奉

以前右大臣（○藤原冬嗣）宣、永以爲例、

弘仁十四年十二月廿八日

〔儀式五〕鎭魂祭儀

酉二點、大臣以下就㆓西舍座㆒、神祇伯以下、率㆓琴師御巫神部卜部等㆒、著㆓榛摺衣㆒、令㆑持㆓供神物㆒、左右相分入立㆓庭中㆒、神部昇㆑自㆓東階㆒、置㆓神寶於堂上㆒、次昇㆓神机㆒、昇、御巫從㆑之、次神部四人各持㆓琴、左右相分昇置㆓堂上㆒、神祇五位已上官人昇㆑自㆓西階㆒、六位以下昇㆑自㆓西側階㆒、就㆑座、伯以下使部以上東面南上、御巫南面東上、次大膳職造酒司供㆓八代物㆒、縫殿寮率㆓婦（○婦恐㆑誤）女昇㆑自㆓東側階㆒、就㆑座、次內侍令㆓賚㆒御衣匣㆒、自㆓大內㆒退出、昇㆑自㆓東階㆒、就㆑座、治部省率㆓雅樂寮歌人歌女等㆒、昇㆑自㆓西側階㆒、就㆑座、訖大臣出㆑自㆓西舍㆒、昇㆑自㆓西側階㆒、就㆑座、喚㆓召使㆒稱唯、趨出立㆓南外㆒、喚之、丞已上一人入就㆓版位㆒、大趨就㆑版、大臣問阿誰、召使稱㆓姓名㆒、大臣宣、喚㆓式部㆒、式部召使稱唯出復㆓本列㆒、仰云、令奉入㆓刀禰㆒、錄稱唯、喚㆓省掌㆒、省掌稱唯、錄仰云、奉入㆓刀禰㆒、丞稱唯出復㆓本列㆒、仰云、令奉入㆓刀禰㆒、錄稱唯、喚㆓省掌㆒、名省掌稱唯、錄仰云、奉入㆓刀禰㆒、省掌稱唯退、丞率㆓掌等㆒參拜、五位以上先入就㆓堂上座㆒、外記史率㆓史生官掌等㆒出自㆓西舍㆒立㆓於屛下㆒、待㆓式部省相引入㆒、就㆓東舍座㆒、訖大臣喚㆓召使㆒、召使一音、召使稱唯趨㆑版、大臣問阿誰、召使稱㆓姓名㆒、大臣宣、喚㆓大藏省㆒、召使稱唯退出喚之、丞稱唯進就㆑版、大臣問阿誰、丞稱㆓官姓名㆒、大臣宣、賜㆓蠶木綿㆒、丞稱唯退、丞率㆓錄史生藏部等㆒、實㆓木綿於筥㆒入、先賜㆓神祇官人㆒、次丞賜㆓大臣㆒、錄賜㆓五位已上㆒、次史生賜判

官以下主典以上、藏部賜史生以下、（主典已上安綿木綿、訖神祇伯喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、伯命琴笛相和、（詞云、美許登賀世、）四人共稱唯、先吹笛一曲、次調琴聲、訖琴師彈弦、與神部共歌二成、次雅樂歌人同音歌二成、神部一人候拍子、御巫始舞、每舞巫部舉舞三廻、（擧云、阿加奈遮伯、）大藏錄以安藝木綿二枚實於筥中、進置伯前、御巫覆宇氣槽立其上、以桙撞槽、每十度畢、伯結木綿鬘、訖御巫舞訖、次諸御巫媛（媛恐猿誤）女舞畢、次宮內丞一人、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人、舞訖復本座、

〔延喜式（四時祭）十一月祭〕

鎮魂祭（略）中

右中寅日晡時、（中宮鎮魂同日祭之）五位已上及諸司官人參集宮內省、式部依例檢列、大臣若參議已上就西舍座、神祇官人已下神部已上著青摺衣（官預備頒給）率御巫等入就廳上座、（御巫南面、伯以下使部以上東面南上、）內侍持御服自內退出、大膳職造酒司供八代物、（同時參中宮東縫殿寮令猿女參入、）即大臣昇就座、（北面東上、）喚召使宣喚式部、召使稱唯、退出喚之、即判官已上一人進就版位、大臣宣、諸司令參入、即稱唯退出令參入、（五位以上就廳座北面、六位以下分就東西舍座、）大臣命召使令喚治部、令歌女參入、又喚大藏省令賜鬘木綿、（並如上儀、）訖神祇伯召御琴（二人共稱唯）次喚笛工某甲、（二人共稱唯）又命云、御琴笛會之、（四人共稱唯）先吹笛一曲、即調御琴、歌者始奏、神部於堂上催拍手、御巫及猿女等依例舞、訖即神祇官五位六位各一人、（中臣忌部）及侍從五位以上二人、宮內丞一人、內舍人二人、大舍人二人、以次進舞於庭、訖就本座、

〔北山抄十一月（中寅日鎮魂祭事）〕

上卿入自宮內省南門、著西細殿座、（北壁下南面設座）治部雅樂同著、內侍女藏人御巫子等又就堂上、外記申諸司代官等、訖上卿幷辨昇自西階、著座、（東第三間、）召使申職姓名、上宣式部省召、丞以上一人參進、上宣誰曹、稱官姓名、上宣刀禰奉入、（末津禮云々、可然、）輔率五位、著堂上座、丞率六位、著東細殿、（外記史座定上宣召使召

召使、召使參入、（同上）上宣召大藏省、丞參入、（同上）上宣藏木綿賜戶、稱唯退出賜之、（丞奉上細取之結冠額、錄授之、）次神遊（衛字氣間、女藏人開御服箱振動、○中略）神樂畢倭舞、

〔政事要略二十六〕清涼記中寅日鎮魂祭事（中宮同日行之）

當日薄暮內侍經奏率藏人一人御匣殿藏人女孺洗人等、（內侍式云、率命婦女藏人二人、諸官女孺各二人者、近代所行、載此具、）令內藏寮持御服置机上、向宮內省衝宇氣之間、藏人開御服箱振動、訖歸宮、則旦奏返事、

〔江家次第十一月（鎮魂祭）〕

上卿以下入自宮內省南門、著曹廳、須先著西細殿、召外記問諸司具否、召辨問祭物具否、後著曹廳也、（○中略）上官不著座在幄外、若辨參著之後上卿參、辨揔隱幄西方後著、

上卿幷北向、自餘西向、

內侍乍乘車立幄北、（難須著幄座、近代如件、）

女官持御衣匣、置東第二間、

須五位藏人奉仕也、然而近代如件、

次上卿召召使、（二音）召使稱唯、進立庭中、

上卿宣誰曹、召使申官姓名、

上宣、刀禰入末津禮、

召使稱唯出召之、諸司須此後著座之、

上宣召使如前、

上宣、大藏省召（世）、召使稱唯出召、

次大藏丞立庭中、名謁如例、

上宣、藏木綿給、

丞獻二上卿一、上卿取レ之結二冠額一、近代結二巾子一
錄獻レ辨、史生分二諸司一、
次神祇雅樂神樂
次御巫衝宇氣（ウキヤウケ）神琴（師彈二和琴一衝二宇氣一、神遊儀也、神代上卷ウケ船フミトドロカス義也、以二賢木一衝レ之也、上也、結レ絲自レ一至レ十、宇廼志麻治命十種神寶振レ之返レ死之緣也、用レ絲自レ一至レ十計レ之也、）
次神祇一人、進結二糸於葛宮一、自レ一至レ十、
此間女官藏人開二御衣宮一振動、畢神祇官著座、〇中略
次有二倭舞事一
南庭敷筵（東西妻）其前置レ机、机上置二寶木一、神祇官一人、史一人、宮內丞一人、侍從二人、內舍人二人、大舍人二人、宮內進一人、舍人二人次第舞、
次辨召二官掌一、〔音〕官掌立二庭中一、辨問曰誰曾、官掌申二官姓名一、
辨宣、宮乃內乃省召世、官掌出召、宮內丞立二庭中一、辨宣、誰曾、丞申二官姓名一、辨宣、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、
唯出、次大膳屬進二庭中一、申云々、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、
〔宮主秘事口傳〕中寅日鎮魂祭
宮內省儲幄二棟一、以二東西一爲レ妻、
次上卿辨參著、上卿北面、辨其西方北面、內侍幄北方南面西上、〇略中先內御方御衣、藏人女官相具、
次上卿召二召使一、〔音〕唯稱召人、召使南壇下ニシテ、織部司織部司ト二音召之、
次上卿召二召使一、〔音〕仰云召二大藏省一、
次召使如レ先、大藏省大藏省ト二音召レ之、
次大藏丞參二南壇下一、仰云申二上姓名一、
次可レ進二縵木綿由被一仰、其時廻二西方一入二西幄門一、自二北方一進二縵木綿一、先上卿次辨已下、

次辨召二官掌一、〔音〕官掌參二辨被一仰云誰、官掌申レ名、
次諸司可二著座一之由被レ仰
次中臣官人宮主同著二幄西東面南上一、
次御巫女參立
次雅樂司參著、始二御神樂一、
次宮主取二內御方御玉緒糸一、置二上卿座前一、
次歸二著本座一、
次中臣官人進寄、十結令レ結、于時神琴師引レ琴、計（カゾヘ）一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十ト、十結也、中臣歸二著本座一也、〇略中此間女官御衣宮置二八足上一、此八足與二上卿座一對座、取員之間、女官立宮蓋少開違令レ振動也、但近年此儀有名無實也、內御方事畢、宮主進寄取二件糸一、返給二史生一、
〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅、鎮魂祭也、本自下官分配也、〇略中戌刻參二神祇官一、〇略中下官先傳二召使一、外記豫下官座後置二膝突一、外記就レ之畢、問二諸司一、諸司具否、皆具云々、次辨問二神物一具否、皆具云々、但內裏御衣、拜藏人未レ來云々、相待間、且召二外記一、仰可レ申二代官之由一、外記稱唯退出、下官失、又誡哉ヤト仰、乃又々候與仰、是忘失也、次喚二召使一、〔音〕參進就レ版、下官顧仰、見參具否、問云、誰曾、召使申二職姓名一、次仰云、式省召ヤ、唯稱退出、頗進レ南召レ之、〔音〕其詞式省召爪、省丞口正文參入、丞代也、暗不レ見、下官又問、省史參入儀不、見、又召二召使一、問二姓名一、如レ前、次仰云、大藏ノ省召ヤ、召使稱唯、退出如レ前召、次大藏參入立レ版、次上卿問、申二官職姓名一、次上卿云、臺木綿給ヘ、次給二木綿一、丞奉レ上二上卿一、上卿取レ之結二巾子一、口授、辨事了相待處、及二半夜一、藏人不レ來、以二官使一申云、尋二內意一、藏人盛時已退出云々、然而猶不レ見、及二曉更一、或人云、內藏寮下部立二御衣案於郁芳門跡一、守護候云々、聞二此告一、以二女官一迎取、立二御机西邊一、其西立二皇后宮御衣案者一、女官具レ之、

次始神樂、總琴笛許也、神官唱一二曲、一人進御棚前、魂結爪、御巫於供神物棚下被舞、女官取御衣筥蓋上下振動、事了又皇后宮鎮魂、其儀如前、次倭舞、其儀暗不見纔聞妙曲聲許、其曲如田樂、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮、宮內省行鎮魂祭事、○略中上官不著座、在幄外北屋、辨余著之後上官參著、辨默立隱幄西方、上卿著後、辨復座、今夜上卿無參仕人、仍辨可兼行由勘先例、藏人次官宣下、仍下官直著座行之、□內侍之車乍乘引立幄北、內中女官持御衣匣、置東第二三間、二內、三中宮、□□□□□內藏人橘親長中宮權大進資泰等副內侍□□□□□徘徊不著座、次下官召召使、二音召使稱唯、進立南庭中、下官問云、タソ、召使申官姓名、仰云、刀禰仕レ、召使稱唯、出召之、次又召召使、召使作法如初、仰云、大藏省召ヤ、召使稱唯、出召之、次大藏丞立南庭問之、名謁如初、仰云、鬘木綿給ヘ、丞退入持參下官拍手取之、結冠巾子、史生分諸司、次神祇雅樂奉仕神樂、神琴師彈和琴、御巫子衝宇氣、小賢木上也衝次神祇一人入結糸於葛筥、置下官座前、御神樂之間、又參進結之、自一至十滿百、事畢還本座、先內、次中宮、次此間女官開御衣筥、振動畢、次諸司著、饌盡柏葉手居葛筥並次造酒勸盃三獻、下官不擬飲之、次神樂間南庭敷筵、東西行　其前置机安贄木、次神祇官人以下奉仕和舞、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、予○藤原忠親定親爲分配、仍戌刻參宮內省、○中略權少外記中原業俊參入云々、令召使召之、自西方來著膝突、所司膝突、不數之、予仰召使、令掃部寮數之、予問云諸司候哉、申云皆候、但式部丞不候、錄參入者、小揖許、外記稱唯退歸頃之右中辨朝方朝臣參入著座、予問辨曰、供神物具候哉、辨召官掌問之、此後皇后宮內侍大宮內侍參入、已上乘毛車、宮侍四人著東帶、取纓松前行、又有綱代車一兩、女官乘之、車也此間予召召使、代官可申之由傳仰外記、外記來申、式部丞造酒不參也、予向座下方仰曰、誡ヤ、リ外記申云、誡テ候、予又仰云、令候ヨ、外記稱唯退、次內侍悉皆乍乘車立幄北是例也、女官等取御衣、置八足也自東第三間西行並立、隱參上立令立也、立之、女官在其北、次予正笏召召使、二音召使於幄巽方稱唯、來跪擅上、予示令立版位、予問云、誰曾、召使申官姓名、予仰云、式省召、召使稱唯、退出召之、引音召之、於南門外可召之歟、於西細殿可召也、近例歟、次式部錄參入立版、予問曰、誰曾、錄申官姓名、予仰曰、刀禰奉入、只垂音仰之諸司可著座也、而近代無此事、次予召召使、如前、予仰云、鬘木綿給、大藏稱唯、退出持參木綿、折數上置麻一筋、持參予後、示仰令入幄西方、自座前持來、予取木綿結巾子、巾子下結之、只一結也、辨以下神祇官神宮主卜部兼敎以下也、等同如此、此間神祇官雅樂等著座、兼可著座也、次予示辨令始神樂、只琴笛許也、此間神祇官下部取槽、其體如平懼高三四寸、弘二許尺、令數薦一枚、置山西方、次御巫自東北方來、置槽上北面立、次又下部以御玉緒糸、以葛圓結中、縱橫繫付白絲一也、授兼敎、兼敎插笏取之、並置西第三間毋屋程、拔笏退入、次親隆進寄件筥前、跪指笏取絲結一結也、此間御巫以梓柄合琴笛音、突槽上、內女官又起解御衣筥綱、以蓋開覆頗開之、次第如振動置之、拍子、親隆結絲了拔笏退入、琴笛止、御巫退入撤御結緒、女官撤御衣筥、內侍歸參、次大宮、次皇后宮、已上略之、次予示辨令居饌、此間又示辨令催和舞琴笛如先、次神祇官下部他下部兩三人進出南庭和舞、兼立机置榊也、事體有若亡、近代如此云々、仍不能張行、有三獻、○中略予拍手以下如此歟、只如拱手也、伏箸取笏揖起座、召使二人、取松明前行追前、此間雜色至都芳門取鬘木綿懷中、

又今度借請或人之次第曰

於宮內省跡儲七間幄屋、東第一間儲山立八足、上卿辨東北面上置式於上卿前、神祇官二人、南東面上其東儲三間幄屋、外記史、北西面上各參著之後、上卿召召使、召外記問諸司、次上卿召召使、召大藏省召鬘木綿、則進之、上卿以下面面懸冠、次大膳職居饌勸盃、次神祇官人大和舞、雅樂寮吹笛如例、內侍女官等參入、女官結御絲授神祇官人、神祇官人於山前申祝言了傳女官、女官進內侍、了其後上卿以下退出、○略中

已上次第記六等舊例如右、以件等趣、予省略草、次第一本、然而今夜猶以簡略不及用之、相構可張行事也、件新作次第云、

上卿辨著座（東上北面）

上卿以召使召外記、問諸司、仰辨問祭物具否、

辨不參者、以召使召史問之、

次女官置御衣筥於案上、

次上卿召召使（二音）仰云、式省召、

式部立版（以召使爲式部代）上宣刀禰奉入ヨ

次上卿召召使（二音）仰云、大藏省召、

大省藏立版（以召使爲代）上宣鬘木綿給ヘ、

丞持參也、上卿取之結巾子、

次神祇官（以召使爲代）參進案下、結絲、禮了著座、女官撤御衣、授內侍各歸參、

次居饌

次獻盃（○中略）

後年以此次第、與行、不可有煩者也、

戌剋沐浴束帶、乘八葉車參宮內省（○中略）

次予進寄座後、揖脫沓著座、揖直裾、

次女官一人入御衣於廣蓋、持來、置件案上、乍入蓋置之也、取出御衣許可置之歟、

次神祇官（所謂召使行繼也）進寄著案前軾上、取御衣歟、取小刀於傍人、此後作法依暗不見及、定有口傳之子細歟、可尋事也、事了授女官、女官取之參進、入內侍車內退入、

次大膳職官人居饌於予前（○下略）

〔康富記〕寶德三年十一月十九日甲寅、鎮魂祭也、右大辨宰相敎忠卿辨不參、權少外記康純召使秀國（兼神祇官宮主）、內侍等參行云々、著座儀宮內省同、上卿北面、外記其西方、北面一列（東上）、宮主西方東面著座云云、本儀外記著東舍、西上南面也、

其儀委見所持長寬上卿記記錄了、近例不可說云々、獻盃二獻有之、無鬘木綿云々、

〔年中行事秘抄〕鎮魂歌

アチメ一度　オヽオヽ三度

サユラカス　カミワガモ

キユラナラ（ナラ一本作カスバ）　振

イソノカミ　上社

ソノタテマツル　奉

アチメ一度　フルノヤシロノ

持有木　眞弓　奥山

モタキノマユミ　オクヤマニ

アチメ一度　オヽヽ三度

御魂　欲　金　矛

ミタマホス　モトハカナホコ

オヽヽ三度　ミワヤマニ

何時　將　榮

イツカサカエム」　アチメ一度

穴　師

アナシノ山ノ　山ノヤマモト

アチメ一度　オヽヽ三度

タマチトラセヨ　御魂　上

今　來　坐　ミタマガリ

イマゾキマセル」　アチメ一度

天　地　玲　瓏

アメツチニ　キユラカスハ

カミコソハ一　キ子キコウ

アチメ一度　オヽオヽ三度

大刀欲得　願　兒

タチモガモ　子ガフソノコニ

オヽヽ三度　薩雄等

御　持　爲　弓　珥　見

ミカリスラシモ　ユミノハズミユ」

上　坐　豐　日　靈

ノボリマス　トヨヒルメガ

末　木　矛

スエハキホコ」　アチメ一度

今　不　榮

アリタテルチカサヲ　イマサカエデハ

オヽヽ三度　吾　妹子

ワギモコガ

人　見　歟　深山　綬　爲

ヒトモミルガニ　ミヤマカヅラセヨ」

魂　匝　木　綿　鎭

タマバコニ　ユウトリシデテ

魂　上　罷　坐　神

タマガリマシヽカミハ　同　上

オヽヽ三度　ミタマガリ

アチメ一度

去坐神イマシヽカミハ　今來坐イマゾキマセル　魂匣持タマバコモチテ　去御魂サリタルミタマ
魂返爲タマガヘシスナヤ」
次一二三四五六七八九十
十度讀之、每度中臣玉結也、

〔鎮魂傳〕鎮魂歌八首ハ、神樂歌なり、歌の初に、アチメオ々と云へるは、神樂歌に唱ふる例の詞なり、其を阿知女法とて、古本の神樂譜に見えたり、さて此歌どもの中に、神樂譜に見えたるは、イソノカミ云々の歌は、神樂次第の本歌に伊曾乃加美、不留也遠止古乃、多知毛可奈、久美乃遠志天々、美也知加與波牟、と見えたるが似てきこえ、結句のソノさいへる言きこえがたし、但しこの歌、いはゆる石上社の劒に由あるか、ツヲラガの歌は、譜の裏書に見えたる弓の末の歌に、二句毛多世乃末由美、とあり、ワギモコガの歌は、葛の本歌にて、終句たゞに山加川良世與、とあり、さてタマバコニ、ミタマガリとの二首は鎮魂の意の壽歌なり、よく讀あぢはひて其意を曉るべし、

行祭宮內者

〔延喜式十一太政官〕凡鎮魂新嘗等諸祭之日、並辨及史等向祭所加檢校、其鎮魂者十一月中寅、於宮內省祭之、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十一月十四日庚寅、於宮內省修鎮魂祭如常、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿日甲寅、入夜參宮內省、爲行鎮魂祭事也、右大辨被參著、外記申代宜、式部丞代用內舍人、是則去長保五年例云々、事畢歸參內、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮內省行鎮魂祭事、

〔山槐記〕治承四年十一月十二日丙寅、今夜鎮魂祭也、獻出車於內侍、依可向宮內省也、今朝中宮屬資忠來候、予依爲權大夫有此催也、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、略中參宮內省、略中宮內省中、古猶以無一屋

行祭神祇官

云々、況於于今乎、略中仰諸司令裝束、略下

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十五日丙寅、於神祇官修鎮魂祭、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月十七日甲寅、於神祇官修鎮魂祭、

〔江家次第十一月〕鎮魂祭
宮內省有穢、於神祇官行之、天慶八年

〔北山抄二十一月〕中寅日鎮魂祭事
天慶九年宮內省有穢、於神祇官行之、

〔日本紀略四村上〕康保二年十一月十二日戊寅、鎮魂祭、於神祇官祭之、

〔中右記〕大治二年十一月十六日壬寅、頭中將送書云、鎮魂祭、宮內省有穢、以元慶天慶等例、於神祇官可被行也、而彼官燒亡之後、神事等被移中院、於件院可被行歟、但宮內省雖無一舍、以平張令行云々、神祇官無實、可令其妨歟、只依舊例、尙可被用神祇官歟、將又炎上之後、未復舊儀、可無便哉、宜令量申給、依御氣色、上啓如件、進返事云、於中院可被行可宜歟、宮內省平張無便歟、又神祇官未復舊儀、頗有其障也、諸神事、被移中院、仍中院可宜歟、鎮魂祭、遂於神祇官被行云々、皇后宮權大夫師時、左少辨實親

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿一日戊寅、初雪下、鎮魂祭也、略中依深雪被用雨儀、於神祇官北門下被行之、上卿辨外記東上北面一列、神祇官東面、內侍車向南被立之、玉緒等被置、上卿東方以上北門下也、閉扉纏木綿、上卿無召仰、又外記不置式筥、近年略儀也、

例
永享三年十一月十七日、依雨鎮魂祭於神祇官北門下被行之、今夜參議不參、辨長淳參行也、著座如宮內省云々、

文安四年十一月十四日壬寅、鎮魂祭也、○略中宮内省跡、近年不及、崛沙汰、依深雪地濕、不敷得座之間、被用雨儀、於神祇官北門下行之、上卿辨外記東上北面一列、神祇副官東面著之、内侍車立北邊向南、宮主代於艮方居御棚、立榊勤其役、大藏省召仰籾盃、宮内省召仰等、如例云々、

依雨雪於神祇官北門下被行例　辨行事

永享三年十一月十七日

嘉吉二年十一月廿一日

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

延引

依穢延引例〔康保二、十一、十、延引時勘日時、天永二年、〕

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十一月十八日庚寅、停鎮魂祭、十二月十三日甲寅、於宮内省修鎮魂祭、仁明順子崩故、十一月不修此祭、今日行之、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十六年十一月十六日辛丑、先是十月二十七日、木工寮史生出雲島成死、喪家東宮鎮魂同日行之、以太皇太后○文德后明子皇太后○清和后高子入寮、寮官人參入内裏、由是平野、梅宮、春日、大原野、園韓神、鎮魂祭等諸祭皆從停廢、十二月十五日己巳、欲修鎮魂祭、而十二日皇太后宮犬死、今日内裏犬產、神祇官卜云、園韓神、今年春秋不祠仍成祟、十七日辛未、於宮内省修鎮魂祭、皇太后宮東宮鎮魂同修焉、

〔三代實錄三十陽成八〕元慶四年十一月十六日丙寅、停鎮魂祭、以禁省有犬產穢也、廿二日壬申、鎮魂祭、去十六日依穢停止、今日行之、

〔三代實錄四十陽成四〕元慶七年十二月廿四日丙辰、於宮内省修鎮魂祭、太皇太后○文德后明子皇太后○清和后高子兩宮鎮魂、此夜同修焉、十一月十五日戊寅、依人死穢停止此祭、故延而行之、

〔日本紀略一十條〕長保三年十一月廿六日癸巳、東宮鎮魂祭也、而依内裏燒亡、内裏幷諸宮鎮魂祭一度可行之由被仰下之、十二月十九日丙辰、鎮魂祭、式日依内裏燒亡延引、

〔康富記〕寶德元年十一月廿一日丙寅、鎮魂祭式日也、○略中坊城左大辨相公送消息、鎮魂祭他月例、幷上卿不參、辨行事例、内侍不參例、納言上卿例等令尋給、註獻之、

停祭

再興

鎮魂祭他月例

長保三年十二月十九日丙辰、鎮魂祭事

天永二年十二月八日丙申、鎮魂祭也、昨日被勘日時了、

〔北山抄二十一月〕中寅日鎮魂祭事

諒闇年停否例〔延長八年不行、天曆八年、康保四年行之、〕

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

諒闇之時、或行或不行、延長不行、天曆康保行之、近代皆行之、

〔年中行事秘抄十一月〕中寅日鎮魂祭事

諒闇時停否不同〔延長止之、天曆康保行之、但无和舞、〕

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月廿日丁丑、停園韓神祭、自此之後、鎮魂新嘗等諸祭皆停止、

〔日本紀略三村上〕天曆三年十一月十五日甲寅、鎮魂祭、○略中而依中宮○醍醐后穩子御惱停止、

〔日本紀略十二條〕寬弘八年十一月廿一日庚寅、鎮魂祭停止、

○按ズルニ、此年八月文德天皇崩ジ給フ、故ニ停止アリシナラン、

〔日本紀略十二條〕長和四年十一月廿日丙寅、鎮魂祭停止、

○按ズルニ、此年十月冷泉天皇崩ジ給フ、故ニ停止アリシナラン、

○按ズルニ、此月十七日内裏燒亡アリ、故ニ停止セラレシナラン、

〔勾光卿記〕寬政九年十一月十三日、今日於伯亭、鎮魂祭之儀被行之例年伯家雖修之、内々沙汰也、今度安倍家雅樂助季康朝臣、恐失其傳再興、伯資延家執奏申之間、伯資延卿祭主之次官延世、

禰宜祝部平孟雅　祝師神學師源家榮
神官門生三善亮壽　神膳司小野久視　下毛野敦光　紀智昌　神饌師清原武眞　藤原久信
藤恭高　三善亮禮
神庫司源常盛　物忌源廣住　平勝安　神部藤都平　源順行　藤正房　源伴貫　源乘詮
神兒源廣住女　神人五人　樂所季康朝臣　維寧朝臣　忠職朝臣　忠勇　高美　季良
次第伯卿備忘

當日早旦令神部掃除齋場南廊祓所等、次神官等參集奉仕御裝束等、刻限已前、齋主已下沐浴著新衣、其儀如式、先各到祓所修禊、尊者設幄、自餘設圓座、有解除之儀、如式、刻限祭主著南廊座、次召神部、神部稱唯參軾、次祭主仰物忌召、稱唯出召之、物忌參軾、次祭主仰祭物具候哉、諸官具候哉、物忌每度申云、具候布、了退出、次祭主移著外院座、次諸官參入、次祭主召神部、稱唯參軾、祭主仰物忌召、稱唯出召之、物忌參軾、次祭主令物忌催御衣事、其儀近代其由許、次各著座、次祭主召神部、稱唯參軾、仰猿女百歌女入禮、末津稱唯出召之、次猿女率百歌等參入、次吹笛工吹神笛一曲、次神琴師調神琴一曲、次阿知女作法、次笛琴會奏、猿女唱神歌、次神庫司供八代物、次神庫司召、稱唯出召之、神庫司參軾、次祭主仰髣木綿賜倍止、稱唯退出、更參入獻木綿、祭主取之纏巾子、次神部分木綿諸官退出、次祭主進神前著座、次奉幣、如式、次祭主八度拜、次諸官再拜、次祭主讀祭文、諸官伏面、次諸官復座、次御玉緒供奉于齋場、其儀別記、次神部催拍子、次八開手、諸官應之、次神兒衝宇氣、此間神笛神琴會奏、次猿女發布瑠言本歌、次祝師著座、諸官相從、諸庭中蹲居、次祭主結糸於葛筥、此間猿女發布瑠言之末歌、次祝師讀祝文、諸官伏面、次御衣筥振動、物忌仕奉、此間發神歌、笛琴會奏、次奏大直日神歌、次祭主兩段再拜、次諸官兩段再拜、次倭舞、此間有行酒事、次祭主以下拜舞、訖而就本座、次神部催拍手、次祭主已下拍後手、次御玉緒還御本殿、此間發神歌、笛琴會奏、次撤御衣筥、次撤高坏物等、次撤八代物、次小拜、次起座

川途

一揖退出、先薦下次祭主昇殿上著座、次次官宣諸官可昇殿之由、次諸官昇殿上著座、物忌已下著簀子、次直會有三獻之儀、次賜錄、次諸官下殿上拜舞而退出、

〔延喜式二四時祭〕鎮魂祭中宮准此、但更不給衣服、○中略

大刀一口、弓一張、箭二隻、鈴廿口、佐奈岐廿口、絁一御飯筒一合、御食料稻二束、案一脚、宇氣槽一隻、臼一口、堝四口、裏葉薦一枚、

右其日御巫於官齋院舂稻、簸以爨筥、炊以韓竈、訖即盛藺筒、納櫃居案、神部二人執向祭所供之、

〔延喜式三大藏〕鎮魂祭於宮內省懸幔、結魂料木綿二兩、預送神祇官、祭日輔率屬官、須給髣木綿所、須安藝木綿二斤、凡木綿卅斤、中宮減安藝木綿二斤、凡木綿十斤、東宮減安藝木綿一斤、凡木綿廿斤、

〔延喜式三十二鎮魂皇后宮亦同東宮亦同大膳〕

大直神一座○大直神上恐脫神字、八座三字、
座別東餝十三兩、大直神加鹽一合八勺、堅魚六兩二分、大直神加十分一鮭一隻大直神陪鯛臘二斤五兩、八直神陪烏賊三兩一分、大直神加十分一兩二分、堅魚六兩二分、大直神加十分一鮭一隻大直神陪鯛臘二斤五兩、腊三斤二兩、大直神陪海藻十兩、大直神加十一兩、鹽一合八勺、糯米三升、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、生栗子三升、搗栗子二升、干柿子一升二合、橘子二薦、已上七種、神四座、菓餠料、自餘不須之、酒四座別罌一口、各受四斗、四座別坩一口、各受五升、大直神一缶、受五升、木綿二分四銖、龕筥十三合、各長一尺四寸、廣一尺二寸、深三寸、食薦五枚、居神筥料、輿籠二脚、納筥料、置簀二枚、槲二俵、

右職司料理、與神祇官供之、

〔延喜式三十五大炊〕鎮魂祭東宮亦同

神八座
大直神一座

鋪設

右座別米一升（用官田稻二束付神祇官）

供奉諸司、人別米八合（人數見薪式）、薪一百五十斤、

〔延喜式三十六主殿〕鎮魂料（東宮亦同）

榲桲油二升四合、燈盞八口、油砚一口、燈炷布二寸四分、

〔延喜式四十造酒〕鎮魂祭料（東宮亦同）

酒二斛（一石一斗神料、九斗雜給料）、座、結飾缶、木綿大一斤、播磨槲一俵三把、都婆波四口、坩四口（別受土盞四口、小五升）、

匙四口、缶一口、篦竹六株（已上供神料）、窪坏卅口（加盤飽十二柄已上雜給料）、東宮竝以此器通用、

〔延喜式三十六主殿〕鎮魂料（東宮亦同）

〔儀式五〕鎮魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准此、但東宮用巳日、）

其日所司預敷神座於宮內省廳事、次設大臣以下座於西舍南少西設、辨大夫座、其南外記史座、其南太政官及左右史生座（共東面）、其南少東官掌（北面）、東舍有座三列、北第一間設外記史式部丞錄座（第二間太政官幷左右史生式部史生座、第三間官掌省掌座（北面西上）、

〔延喜式三十大藏〕鎮魂祭、於宮內省懸幔、

〔延喜式三十掃部〕十一月鎮魂祭日、於宮內省廳設大臣已下歌女已上座、

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

上卿以下入自宮內省南門、著曹廳、（略）而近代彼省無一屋、仍曹廳跡立平張行之、東第一間立楉棚、置祭物、又倚付鈴賢木、其西安木觴（覆置）、上卿座第三間、辨座第四間神祇幷治部雅樂座西第一間、

〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅鎮魂祭也、本自下官分配也、秉燭間、以消息相尋、頭中將云、昨日園韓神祭、依宮內省穢延引云々、鎮魂祭如何、返事、鎮魂祭事一定可被行也、但祭庭事未一定、相尋可告也者、良久外記來云、今夜鎮魂祭事可被行、互雖承之、可被行之諸司未知何所、若有聞承歟、案內、罷向可催促諸司者、下官云、不知其所、早詣頭中將亭、案內可來告云々、外記退出歸來云、此夕巳仰左少辨實親了、於神祇官可被行也云々、仰云、早向彼所催具諸司可相待、只今可著也、此間皇后宮進櫛櫛毛車、內侍料也、戌刻參神祇官、此官燒亡後未被修造、仍門內立輕幄爲祭庭、風力甚強可倒、座席大略如忘、威儀神祇官北門跡、皇后宮內侍（綱代雙車）、立輕幄東著座北面、下官座西方儲辨座、其西南上儲神官座、上座東北立供神物棚、此外諸司座不見、辨云、此夕神祇官立輕幄可爲祭庭之由蒙仰、向此所見地形、多是荊棘之地也、其間不清物滿、然而忽不能掃除、仍儲此所也云々、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮內省、行鎮魂祭事、其儀曹廳路東西妻立五間幄一宇、東第一間立楉棚等、安祭物、又併付鈴賢木、其西覆置木觴、第三間敷上卿座、第四間敷辨座（已上半帖、各北面東）上、西第一間敷神祇幷治部雅樂座（南上東面）、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、（略）中

深山御記云、長寬二年十一月十六日、今日鎮魂祭也、予爲分配、仍戌剋參宮內省、於郁芳門下車、入省南門、召使二人來向、取隨身之所持之松明、前行追前、隨身在予後、經西細殿東方、自廳西方壇上東行著座北面、廳屋又無實、仍立幄、（略）中

戌剋沐浴、（略）中參宮內省、於郁芳門跡（於今者礎石一無之、仍於大宮相計其程、欲下車之處、內侍未參入云々、仍乍乘車相待也、及亥半剋、內侍參云々、仍下車、宮內省中古猶以無一屋云々、況於于今乎、當神祇官北春日小路融也云々、則向乾有斜路、予經路一許町斜行、召使示其所、仍立留、無立幄之沙汰、剩不及引幔也、召使行繼仰諸司令裝束、

其儀

路頭中央敷上卿座（南面）、當上卿座坤去一許丈敷薦、其上竝立案二脚、其上又敷薦一枚（以一枚懸案之上也）、

當上卿座西方立內侍車（東面）、

此儀相違予所存、仍仰召使令改直也、

職員

上卿座儲北面、辨座同西方、北面當上卿座北去一丈餘立內侍東面當上卿座北去五許尺立件入足、

〔延喜式十一太政官〕凡鎮魂新嘗等諸祭之日、並辨及史等向祭所加檢校、其鎮魂者、十一月中寅、於宮內省祭之、大臣以下趣祭所、中宮亦同、但東宮用巳日、

〔延喜式十二中務〕凡鎮魂祭前五日簡點和舞人侍從四人、其名移送式部、餘祭不須、內舍人大舍人各四人、園韓神平野等祭儛人准此、令趣宮內省、祭畢卽諸司依次奏舞、神祇官先舞、次宮內省、次侍從、次內舍人、次大舍人云々、

〔延喜式十式部〕凡鎮魂祭夜、省率諸司參入之時、外記史屏下相待、就列而入、

凡中務所移鎮魂儛人侍從、若有不參者、勿預大嘗會節、諸祭和儛人亦皆同

凡御幷中宮鎮魂所、辨官中務輔和儛侍從四人、式部輔治部輔雅樂頭大藏輔宮內輔及預御膳諸司五位巳上、令必參集、若闕怠者停預節會、其有障者先申其由、東宮准此

〔延喜式十九式部〕鎮魂祭

其日所司依例供備、各有常儀、是日晡時、輔巳下就宮內省南門外座、省掌置版位五位巳上受點如常、事見儀式

〔延喜式二十雅樂〕凡園韓神平野等祭、幷御及中宮東宮鎮魂祭、省丞錄各一人、率允屬各一人、歌人歌女等供奉、鎮魂祭、五位巳上各一人供之、

〔延喜式三十宮內〕凡新嘗會解齋幷鎮魂東宮亦同園韓神祭、丞已上一人與諸司共和儛、

〔延喜式三十大藏〕鎮魂祭、○略中祭日輔率屬官須給鬘木綿、

〔北山抄二十一月〕中寅日鎮魂祭事

延喜御記云、內裏有穢、不可用御匣殿御衣、內藏寮人、夜中皆在內裏饗所、仍仰縫殿寮受大藏御服帛、忽調御服御衣筥、卽彼寮送宮內云々、又內侍藏人皆參侍內裏、仍仰以女史命婦安部靜子爲內侍代、

壹志厚子爲藏人代云々、無年月

〔小野宮年中行事十一月〕中寅日鎮魂祭事中宮鎮魂同日行之

弘仁神祇式云、前五日簡點和儛侍從內舍人大舍人各四人、令赴宮內省、參議已上就同省祭、○略中又掌侍有障之時、以中宮掌侍爲代官之、

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

內侍女藏人皆有障、以女史爲代官、

行事藏人雖參不著座、乍立行事、

清涼記云、當日薄暮內侍經奏、率藏人一人、御匣殿藏人、女孺洗人等、內侍式云、率命婦二人、近代所行減此員、令內藏寮侍御服、置机上、

〔夕拜備急至要抄上十一月〕鎮魂祭中寅日

上卿　辨　內侍　官外記

〔古語拾遺〕凡鎮魂之儀者、天鈿女命之遺跡、然則御巫之職、應任舊氏、而今所選不論他氏、所遺九也、

〔鎮魂傳〕天鈿女命之遺跡云々とは、鎮魂祭の時の神樂に、御巫の宇氣槽を覆せて云々して、仕奉り來れるは、高天原にて、天照大御神の御窟閉の時、鈿女命の神樂仕奉りて、招出し奉れる尊く、めでたき儀を、遺跡のまゝに、代々相嗣て仕奉り來れる由なり、もはら漢文のまゝに鎮魂之儀とは意得べからず、

〔先代舊事本紀七天皇〕辛酉爲元年○神武十一月庚寅○中略其鎮魂祭日者、猨女君等率百歌女擧其言本、而神樂歌儛尤是其緣者矣、○又見本書天神解、○本紀及令集解、

〔左經記〕寬仁三年十一月十四日丙寅、參鎮魂祭、以內舍人藤爲親爲式部丞、宮內丞大藏丞等代官、但申外記代官之時、以造酒佑大原辰延申可爲件司々代官由、而辰延不參、若是外記內々所行歟、爲奇

不少、上卿左兵衛督、

〔中右記〕大治五年十一月十五日、鎮魂祭、左大辨雅兼、左中辨師俊勸之云々、

〔康富記〕應永廿九年十一月十九日壬寅、鎮魂祭也、參議藤光卿、右少辨俊國、召使行繼宮主代内侍等有參行云々、外記不參、二藏人卿雖爲分配不參云云、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十九日甲寅、今日鎮魂祭也、九條宰相清房參向云々、辨藏人右中辨俊國歟可尋、奉行藏人左少辨資親也、卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、〇中略予招召使密々問云、當時所參入諸司誰誰哉、召使云、外記治部雅樂皆不參、大膳職官人掃部寮官人等、如形有其代、於神祇官人所使者、我爲其代云々、抑又今日辨不參、經直爲分配之處、所勞不快復之故也、仍被尋不參之例、不被催他辨也、

貞元元年十一月十六日戊寅、鎮魂祭也、辨有障不參、仍以縫殿頭清忠王爲辨代、

天養元年十一月九日丙寅、同祭也、辨不參、

久安四年十一月十八日壬寅、同祭也、參議藤原爲家卿參行、辨不參、

已上爲清宿禰勘申

應永十二年十一月廿二日鎮魂祭、參議藤原滿親卿、辨不參、

師勝朝臣注進

〔管見記〕永享十年十一月廿一日、今日鎮魂祭、〇中略參議中山宰相、辨左少辨資任以下參向云々、

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿一日戊寅、鎮魂祭也、上卿參議隆遠卿左少辨資重、藏人權少外記康顯分配召使寬繼、神祇少副卜部兼香、内侍等參之、

寶德元年十一月廿一日丙寅、鎮魂祭式日也、〇略中坊城左大辨相公送消息、鎮魂祭他月例、幷上卿不參辨行事例、内侍不參例、納言上卿例等分尋給、註獻之、〇略中

上卿不參辨行事例

永享三年十一月十七日

同九年十一月十六日

文安五年十一月十九日

内侍不參例

延文四年十一月廿五日、右少辨顯知一人參候、内侍不參、女官一人參向之、納言上卿例不得所見候、

權大外記中原康富

服裝

〔延喜式二四時祭〕鎮魂祭、中宮准此、但更不給衣服、

官人以下裝束料、中宮准此、中宮主、

伯已下史已上七人、宮主一人、已上擂盤、蔡龜卜長上二人、彈琴二人、巫部神部一人、各賜青摺袍一領、袴一腰、史生四人、神部十三人、卜部十二人、使部三人、各青摺布衫一領、已上縫賜、御巫一人、中宮東宮御巫准此、生島巫一人、各青摺袍一領、表裏別帛三丈、綿二屯、下衣一領、表裏別帛三丈、綿二屯、單衣一領、表裏別帛三丈、表裏料一丈、綿二屯、下裙一腰、表裏別帛三丈、裏料一丈、袴一腰、帛三丈、綿二屯、單袴一腰、帛二丈、帔一條、帛二丈、襷一條、緋帛四丈、紐一條、錦三丈、髻髮幷襪料細布一丈、領巾紗七尺、櫛二枚、履一兩、座摩巫一人、青摺袍一領、表裏別帛二丈五尺、綿一屯、單衣一領、帛二丈五尺、綿一屯、下衣一領、表裏別帛二丈五尺、表裏料一丈、綿一屯、下裙一腰、表裏別帛三丈、腰料一丈、袴一腰、帛三丈五尺、綿一屯、單袴一腰、帛一丈五尺、綿一屯、單衣一領、表裏別帛二丈五尺、表裏料一丈、綿一屯、下裙一腰、表裏別帛三丈、腰料一丈、袴一腰、帛三丈五尺、綿一屯、單袴一腰、帛一丈五尺、帔一條、帛一丈、襷一條、緋帛一丈、紐一條、錦一丈、領巾六尺、襪料細布五尺、履一兩、

〔延喜式十四縫殿〕鎮魂齋服、新嘗祭同用之、

神祇官伯已下彈琴已上十三人、榛摺帛袍十三領、別一丈二尺、袴十三腰、別三丈、綿五十二屯、袍別二屯半、袴別一屯半、絲三兩一分三銖、猨女四人、綠袍四領、綠別三丈、表帛裏帛、綿八屯、別二屯、兩面紐四條、別長一尺九寸、廣五寸、汗衫四領、別三丈、綠裙四腰、綠表帛裏帛、裙腰料縹帛四條、別一丈五尺、綿八屯、別二屯、下裙四腰、裙別三丈、腰別一丈五尺、袴四腰、別三丈、綿四屯、

賜食

別一縹帶四條、別長六尺、廣四寸五分、細布髮髻四條、別尺二緋帔四條、緋表帛裏、別尺五尺、別細布袜四兩、別尺三線鞋四兩、

〔延喜式十二中務〕凡鎮魂祭、〇略中其神祇官榛摺帛袍十三領、袴十三腰、青摺布衫卅二領、預前給之、

〔小野宮年中行事十一月〕中寅日鎮魂祭事中、宮鎮魂同日行之

弘仁神祇式云、〇略中彈琴巳上摺袍白袴、史以下摺布衫、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、〇略中戌剋沐浴、束帶、無文帶、蒔繪劍、乘二八葉車一、不二差縄一、牛童遣レ之、須レ乘二毛車一也、而近代法、以二參省略一爲レ先、隨身一人、如レ恒、雜色一兩在レ共、以二參宮内省一、〇略中次女官一人、小舎人二人、舞訖復二本座一、辨大夫喚二官掌一、二音官掌稱唯、退喚二音、丞稱唯就レ版、辨大夫問阿誰、丞稱二官姓名一、辨大夫命御飯早速令レ賜、丞稱唯退出喚二膳部一、五六人共稱唯、丞仰云、賜二御飯一、膳部共稱唯、大膳進就レ版、申云、御飯賜畢、共拍手三度、先後稱唯、觴三行、亦拍レ手一度、不二稱唯一、訖各退出、

〔儀式五〕鎮魂祭儀

大舎人二人舞訖復二本座一、辨大夫喚二官掌一、二音官掌稱唯、趨就レ版、大夫問阿誰、官掌稱二姓名一、辨大夫命喚二宮内省一、官掌稱唯、退喚二音、丞稱唯就レ版、辨大夫問阿誰、丞稱二官姓名一、辨大夫命御飯早速令レ賜、丞稱唯退出喚二膳部一、五六人共稱唯、丞仰云、賜二御飯一、膳部共稱唯、大膳進就レ版、申云、御飯賜畢、共拍手三度、先後稱唯、觴三行、亦拍レ手一度、不二稱唯一、訖各退出、

辨官命二官掌一喚二宮内省一、令レ賜二酒食一、行酒三杯以後拍二後手一退出、

〔延喜式三十宮内〕凡神今食解齋及春日、大原野、園韓神、平野、鎮魂祭等日、辨官令二官掌一召レ省、錄稱唯進就二版位一、卽宣レ令給二食錄一、稱唯差退、唱二膳部一二聲、膳部稱唯、錄宣給レ食、卽給饌行酒、

〔北山抄十一月〕中寅日鎮魂祭事

所司羞饌如常、事畢中宮同行、神樂畢倭舞、次辨召官掌、令召二宮内省一、官掌參仰云、誰レ、申二姓名一、次召二宮内省官掌宮内省卜音二畢由一、上卿以下退出、

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

諸司供レ膳、居葛筥蓋一

次造酒司獻レ盃三獻

上卿不レ擬レ飲之

次後宮行レ之、儀同上

宮司用二居机一、二人舁之、

次盃酌三獻〇略中

次辨召官掌、二音官掌立二庭中一、辨問曰誰曾、官掌申二官姓名一、辨宣、宮乃内乃省召世、官掌出召、宮内丞立二庭中一、辨宣誰曾、丞申二官姓名一、辨宣御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、唯出、次大膳屬進二庭中一申云、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、

〔宮主秘事口傳〕中寅日鎮魂祭

辨召二辨侍一、可レ居二饗之由一被レ仰、三獻畢辨召二官掌一、二音官掌參、仰云誰レ、申二姓名一、次召二宮内省官掌宮内省卜音二召之一、參仰云誰レ、申二姓名一、仰云可レ候、此他唯稱、其後各退出、

〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅、鎮魂祭也、〇略中次羞二膳籠一蓋居レ之、次柏裏之菜、又裏レ柏指串、造酒司進レ酒不レ傳レ盞、諸官勸盃不レ見、次辨召官掌、二音也稱唯立二版一、辨問、官掌申二職姓名一、辨仰云、宮内省召レ七、官掌稱唯召レ之、如召使、次省立レ版、辨問申二職姓名一、辨云、御飯カタラカニ給ヘ、稱唯出、次召二膳部一、二音大膳屬稱唯就レ版、申云、御飯給ハス、下官拍手、辨不レ拍不知故各退出、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參二宮内省一、行二鎮魂祭事一、〇略中下官召二官掌一、二音官掌國成稱唯立二庭中一、下官問レ之、官掌申二官姓名一、下官仰云、宮ノ内ノ省サ召セ、官掌出召レ之、宮内丞立二庭中一、下官問レ之、丞申二官姓名一、下官仰了オモノカタラカニ給ヘ、丞稱唯出、次大膳屬進二庭中一、御飯堅ラカニ給畢由申レ之、以下揖起座、女官等奉二出御衣一、内侍等歸參、藏人官司等相具、上卿不二參仕一之、次第大概如此、上卿參勤之時、任式可二存行一之、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅今日鎮魂祭也、○略 中

深山御記云長寛二年十一月十六日今日鎮魂祭也予○忠親 藤原 爲分配仍戌刻參宮內省、○略 中 次予示辨令居饌、○略 中 有三獻造酒令史獻盃唱乎二獻立簀次辨伏簀取笏召官掌二音 官掌稱唯立版辨問云、誰官掌申官姓名辨仰云宮內省召官掌稱唯出召之宮內錄立版辨問之次仰曰御飯固給錄稱唯退入次大膳屬參入立版申云御飯固給了予拍手以下如此歟、○略 中

戌刻沐浴束帶乘八葉車參宮內省、○略 中 次大膳官人 小童頂冠役之 居饌於予○藤原 定親 前 如神今食等饌 次造酒司役如前取瓶子幷盃勘予予置笏右膝下取盃如飲返賜之 此間問獻數予答一獻之由上可爲一獻 次予置笏如立簀則披置也取笏次予召召使 二音同前 仰云召使 候予後 宮內省召 セ、召使稱唯退則進立申固給畢由次予置笏如拍手取笏揖起座退出

〔康富記〕寶德三年十一月十九日甲寅鎮魂祭也、○略

〔延喜式 三十 大膳〕鎮魂 皇后宮東宮亦同

雜給料

參議已上

人別糯米一升四合大豆一合八勺七撮小豆二合一勺二分隱岐鰒五兩堅魚二兩一分二銖烏賊二兩蒸海鼠三兩二分與理刀魚五兩二分鮭二分隻之一雜魚楚割三兩堅魚煎二兩二分鮨二斤四兩雜鮨十一兩紫菜海松各三分海藻二兩漬菜二合漬蒜房蒜英韮搗各二合生栗子一升四合搗栗子六合干柿子三合橘子卅三顆木綿二分四銖

五位已上卅八

人別糯米七合五勺大豆七勺小豆一合五勺醯酒三勺酢一合醬二合鹽二合九勺東鰒一兩二分隱岐鰒四兩二分堅魚二兩一分二銖烏賊二兩蒸海鼠三兩二分與理刀魚五兩鮭二分隻之一雜魚楚割三兩堅魚煎二兩一分鮨二斤二兩雜鮨十一兩紫菜海松各三分海藻二兩漬菜二合漬蒜房蒜英韮搗各二合生栗子一升搗栗子六合干柿子三合橘子卅三顆木綿二分四銖

六位已上卅八

人別糯米六合七勺大豆四勺七撮小豆六勺醬五勺鹽一合七勺東鰒二兩堅魚二兩一分二銖鮨二兩鮭三兩二分海藻二兩漬菜二合生栗子三合橘子五顆

龍宮十五合 膳笥九合 菜俎笥四合 納肴籠笥二合 各長一尺四寸廣一尺二寸深三寸 陶高盤大盤各十口 參議已上盛二菜子料 槲三俵食籠二百六十合 各長一尺二寸廣八寸深二寸 箸竹二百六十株 筥杯二百卅口 參議已上五位已上別八口 別五口、

右依前件其五位已上食並盛筥菓子雜肴盛以干柏結以木綿六位以下食用籠 其籠山城國所進

中宮鎮魂祭

〔延喜式 十三 中宮〕凡鎮魂祭日亮及進屬史生各一人舍人二人入候戌刻內侍令史生幷召繼舍人持御服案 盛卒筥一合綠帋四人扶案稱唯 內侍一人藏人一人女孺等列立案後雜使二人秉燭分左右立案前史生立其陣列向宮內省入自南門就於廳座御巫等受御服案如常祭畢以次和舞 先奏祇宮次宮內亮次內侍次亮次內舍人次進次大舍人次職舍人次廻儀如前、

〔延喜式 三十 五 大炊〕中宮鎮魂

官人已下雜色已上料米五斗四升四合 別八合 薪卅斤、

〔江家次第 十一月〕鎮魂祭

后宮懷妊尚祭 元慶元、十七、

中宮御輕服間中宮御鎮魂祭如例 承平六、十一、十七、

〔小野宮年中行事 十一月〕中寅日鎮魂祭事 中宮鎮魂同日行之

皇后雖懷妊猶行件祭是延長三年天德二年例也、

〔年中行事秘抄十一月〕中寅日中宮鎮魂祭事皇后雖二懐妊一猶有レ之
弘仁式云、大臣以下趣二祭所一（中宮亦同）
〔宮主秘事口傳〕中寅日鎮魂祭
宮主取二后宮御方絲一同置レ之、此儀如二先度一、是一二三四五六七八九十云結也、
后宮内侍取入、幄、各別也、北砌ニテ御玉結畢、賜二后宮内侍一、
〔公事根源十一月〕鎮魂祭
東宮中宮にても、年々ある事なり、
〔日本紀略四村上〕應和二年十一月十日甲子、中宮（安子）輕服之間、鎮魂祭例被レ勘レ之、依二先例一可レ行之由被レ仰了、十二日丙寅、鎮魂祭、中宮同、
〔日本紀略六圓融〕天祿二年十一月廿二日甲寅、鎮魂祭、中宮（昌子）同祭、去月式日、依二本宮穢一延引也、
〔日本紀略七圓融〕天元元年十一月廿一日壬寅、鎮魂祭、皇太后宮（冷泉后昌子）同祭、五年十一月十四日壬寅、鎮魂祭、皇太后宮（冷泉后昌子）同之、
〔日本紀略九條〕永祚元年十一月十三日庚寅、鎮魂祭、太皇太后宮（圓融后遵子）中宮（一條后定子）同之、
正暦三年十一月十三日壬寅、鎮魂祭、太皇太后宮（圓融后遵子）皇后宮（一條后定子）同之、
〔左經記〕長元元年十一月一日辛卯、以二屬爲信一令レ申二大夫一云、宮鎮魂祭可レ有二哉否一如何、尋二先例一、御輕服幷御懐妊時皆被レ行、又諒闇時或被レ行、或不レ被レ行、諒闇是御心喪之儀也、非二正御服一、又御輕服時例不レ可レ准、此度后宮重服之時被レ行之例不レ見、爲レ之如何、被レ仰云、重服時无二被レ行之例一、不レ可レ被レ行者、可レ停之由仰二爲信一了、十二日壬寅、今夜无二中宮鎮魂祭一、是依二重服御坐一有レ定、被レ停也、
〔中右記〕大治五年十一月十五日、中宮鎮魂祭、依レ催二進檜榔一、是本宮大夫所レ役也、

東宮鎮魂祭

〔台記〕久安六年十一月十八日庚寅、皇后宮雖二輕服一有二鎮魂祭一、依二先例一也、
〔延喜式二四時祭〕巳日晡時、供二東宮鎮魂一、
〔延喜式四十春宮三〕凡東宮鎮魂日、所司裝二束宮内省同御戌刻主膳監官人二人（佑已上一人、令史一人、）率二膳部八人一昇二御膳高机二脚一、主藏監官人二人（佑已上一人、令史一人、）率二舍人八人一昇二御服高机二脚一、坊官二人（進闕各一人）行列、主殿署官人二人、秉燭相從、左右兵衛各四人陳列前後、向二祭處一、入自二南門一、到二堂南東階前一而留立、舍人昇レ階、陳二高机於東壁前一、訖官人以下相率而出、宣旨量時乃參就レ座、式部引二刀禰一參入就レ座、坊官已下相從就二東細殿所司給一、移就二堂東廂神祇官二人、宮内丞一人、侍從二人、坊進已上一人、内舍人大舍人坊舍人各二人和舞、訖坊官已下、率二舍人一參入立二階前一、令二舍人昇レ机、退出如二初儀一、（絲綿賜二御巫一、御衣奉レ返二御匣殿一、高机取レ坊、）
〔江家次第十一月〕春宮鎮魂
上卿著レ座、外記申二代司一（其詞曰、司司乃申障レ世留代仁、其司屬其姓名、其詞曰、司司乃申障レ世留代司給其牟、）上卿答云、誠多リヤ外記云、其司丞申、障世留代仁、其司屬其姓名、辨仰云、宮内省召レ世、唯天出天召須、省進立、辨問、申二姓名一、辨云、御飯早給へ、錄唯天出津、召二膳部一、大膳屬進出天申云、御飯加太良加仁給畢、上下各分散、
〔東宮年中行事十一月〕なかのみの日鎮魂の祭の事
この日のゆふべ、ないし代うちにはないしゆきむかふ、東宮にはないしなし、さかればだいをも

ちゐる、そのかはりつとむる人は、くらゐの御時なきしになるべき人をだいにもとめらるゝなり、大夫ごむの大夫のゐひだの、びろうにのりて、宮ないしやうにむかふぎやうじのくら人ゐひだたがふぎよいは、ころもばこのふたに入たてまつりて、御つゝみにつゝみて、やつゐしのうへにおく、御たまゆひのいとをぐしたり、やつゐしかゝるゑろきぬおはひあり、ながさ一ぢやう五ゑやく、またゐしなきのぬのあり、御ころもばこをば、みちのほそおとさゞらんがために、やつあしにむすびつけたり、そのゆひをばゑやうにまうく、きぬをはそくたゝみたる也、によくわんこれを申てたゝむ、れうのきぬ二疋なり、によくわんどもゐひそへり、又さうのひやうゑおのおの四人、ぐゑ所のゑゆ八人、そくたいしてせんくうす、たちはき一人いくわんにて、くるまのしりにゐりて、くないゑやうにいたりて、ふるくはないしだいくるまよりおる、きんだいはおりず、によくわん二人ぎよいのわんをかきてたつ、神祇のくわんにん御たまゆさのことをつとめてのち、ゑやうけい山とまひをゆす、まづ神づかさ、次に内舎人、つぎに宮づかさ、このゐひだゑよしれいにまかせてきやうをそなふ、宮のちやうよりもこの事をなうけたり、ゑやうけいには宮づかさくわむばい、くら人へいしをとる、ことをはりてぎよいをゐひぐしてないし代かへりまゐる、

今按ぎやうじのくら人ありといへども宮づかさたる人にたづねさたすべし、ふるくはゑんがのでん上人どもをもよほしつかはす、近代は宮司大しん少しんのゐひだに一人ゆきむかふ、つぶさにはうしきにみえたり、たゞしきんだいのれいにかなはず、

〔年中行事秘抄十一月〕中巳日東宮鎮魂事

東宮鎮魂内裏爲神事依遣勅使歟内侍參入、又上卿參御服時猶被行、御衣遣白衣云々、

〔夕拜備急至要抄上十一月〕一春宮鎮魂祭午日

上卿　辨　東宮　内侍　宮司　沙汰　官外記

○按ズルニ、此文ニ據レバ、後世ハ午日ニ行ヒシモノナルベシ、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年十一月廿六日乙巳、東宮鎮魂祭

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

東宮御輕服間、東宮御入鎮魂如例、〔天慶七、十廿四、〕

〔日本紀略四村上〕天德元年十一月廿三日乙巳、東宮依伯母服鎮魂祭延引、

〔九曆〕天德元年十二月廿九日、東宮鎮魂、小野宰相爲上、去月依爲御輕服不行、仍今日所行也、

〔日本紀略四村上〕應和二年十一月十五日己巳、東宮鎮魂祭延引、依桂芳坊犬死穢也、廿七日辛巳、於宮内省東宮鎮魂祭、

〔日本紀略六圓融〕天延元年十一月十九日己巳、東宮鎮魂祭、三年十一月廿五日、東宮鎮魂祭、依本宮重服不被行、

〔日本紀略十四後一條〕長元五年十一月廿四日壬辰、東宮鎮魂祭、

〔左經記〕長元七年十一月十九日乙巳、著東宮鎮魂所、宮内廳去八月大風顚倒、仍其所立五丈幄二宇、字合以東一間爲神殿、中間諸司座、西妻諸司饗所、又南庭立幄一宇、爲辨以下座、余直著座、右少辨同著、幄南廂東二間　上座三間、辨座四五間、内舎人大舍人並北面東上、母屋東三間、神祇官人座四間、同官史生官掌等座並南上東面　五間、饗所主殿所口主、大立燈盞明火　余先召外記、余座長有膝突、外記爲經著膝突、問諸司參否、申云、式部丞本省丞等雖申參入之由未參、自餘諸司皆是具者、仰云已及深夜、又々令催、遂不參入、可申代官者、外記唯起頭之申代官、兩丞代主殿允久頼者　余召召使、二音召使唯立南庭、余問使申姓名、余宣式部省召セ、丞立、余問丞申姓名之處非久頼、驚令尋其由、大藏錄者、仰召使令卻之後、令召使仰外記云、非久頼者、任意令參入之由如何、兼以錄有爲丞代之例哉、令申云、久頼承在東宮饗所之由所申請也、今令尋問

屬忠信宿禰參入者、仍欲申事由之處、大藏錄無音參入、又吉田祭以造酒史令爲宮內丞代之例所覺也者、重仰云、其年日記可進者、其後良久無令申歟、相待間已及曉更、令案式文、式部丞以上一人進立者、依以上字、以忠信宿禰爲少輔代行了、又以大膳屬行孝爲宮內丞代、其雖無指例已及曉、仍相量所行也、不可守株歟、抑外記爲經不足言也云云、歸宅之後爲經來令申云、爲令出日記、向局令尋求之間、事了御出者、爲申參入、但以造酒令史爲宮內丞代之例、先年吉田祭左大辨被行者、仰聞了之由、

〔師守記〕曆應二年十一月廿六日辛巳、今日被行春宮鎮魂祭、上卿不參、參議藤原實繼卿右中將同宗光卿、外記中原利顯、史不參、召使助豐、官掌國友等參陣、本宮使權大進藤原兼綱云云、依雨儀、於神祇官北門被行之、

院鎮魂祭

〔江家次第十九〕院鎮魂

立幄於此中門北東西行幄、東北西三方引幔、

第一間立棚伏槽

第二間立案置御衣

以幄東第二間、當車寄戶立、

第三間設公卿別當座其後數帖

第四間設四位別當座座前設火櫃

第五間設判官代座座前設火鉢

第六間設神祇官五位座

第七間設同六位座

以上各先居饌、並立燈臺、判官代以上机、神祇官衝重、

於殿上相尋事具否於行事之後著幄

判官代以上東上北面

神祇官南上東面二行

召主典代、不高聲召之在座之人傳召之、

主典代著膝突、仰神祇官以下可著由、

神祇官著座

女房候車寄戶下

又召主典代、如初參入、仰可給髮木綿由、

主典代參入獻之、廳官以下入折數、自餘人々、○以下恐脫文

次神遊、御琴師歌女奉仕、

御巫於棚下舞

中臣一人結絲

衝宇氣間、女藏人開御衣箱振動之、

年々女官振之如何

差饌判官代役送

勸盃大夫判官代獻之

神樂訖

鋪棧舞座北庭鋪莚、立八足机二置榊枝二、

神祇副史判官代舍人

給神祇官人祿有差

雜載

官人以上絹五位或加〇以下恐脫文

自餘布各一段

御玉結絲、令入御竈神之鍋、宮主付封、件鍋二口也、隔年入之、

〔公事根源十一月〕鎮魂祭

此祭を如法におこなはるれば、殊勝の御祈と成べきにや、されば白川院は御脫屣の後も、院中にて猶行はれ侍き、

〔日本書紀二十九天武〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田直金鍾於美濃、令煎白朮、十一月丙寅、法藏法師金鍾獻白朮煎、是日爲天皇招魂之、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年二月庚戌、典闈建部千繼被充春日祭使、聞平城松井坊有新神託女巫、便過請問、女巫云、今所問不是凡人之事、宜聞其主、不然者不告所問、仍述聖體不豫之狀、卽託語云、歷代御宇天皇、以慇懃之志所送納之神寶也、今踐穢吾庭、運收不當、所以唱天下諸神、勒諱贈天帝耳、登時入京密奏、卽詔神祇官幷諸司等、立二幄於神宮、御飯盛銀筒、副御衣一襲、並納御辨、差典闈千繼充使、召彼女巫令鎮御魂、女巫通宵忿怒、託語如前、遲明乃和解、有勅准御年數、屈宿德僧六十九人令讀經於石上神社、

〔江家次第十一月〕鎮魂祭

內裏有穢不用內藏寮御匣殿御衣、仍縫殿請大藏御服帛綿、忽調御服御衣筥、

依諒闇不用歌舞元慶五、十二、

東宮御輕服間、御衣遣白、

〔公事根源十一月〕鎮魂祭

天安二年にとゞめられ侍しを、興行せられて、貞觀元年十一月神祇官にて行はる、今は年々の事

になれり、

〔鎮魂傳〕天安二年に鎮魂祭を停られたるは、諒闇の故にて、翌の貞觀元年は、古に復して常例の如く行はれたるなり、更に興し行ひ給へるにはあらず、但し神祇官にて行はれたるは新儀なり、其は宮內省に障る事なぞのありしなるべし、同二年宮內省にて行はれて、如常と記されたるにて知るべし、公事根源にゑるされたるは、實錄を粗に讀みて誤り給へるなり、

〔吉記〕元曆元年十一月十七日壬寅、鎮魂祭、左大辨奉行、雖申服暇之由、非神事之由、外記勘申云々、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十日己亥、左頭中將被乞請鎮魂祭消息案、

鎮魂祭任例可被致沙汰之狀如件

十一月十日　　左中將判

藏人中務丞殿

鎮魂祭任例可被致沙汰之狀如件

十一月十日　　左中將判

四位大外記殿

四位史殿

鎮魂祭御分配候歟、御參向事、又可承存候也、仍執達如件、

十一月十日　　左中將判

謹言

宰相殿

鎮魂祭御分配之上者、必可令參向給候哉、仍執達如件、

十一月十日　　左中將判

謹言

鎮魂祭内侍出車、可令獻給之由、被仰下候也、仍執達如件、

十一月十日　　左中將判

謹言　六條中將殿

十三日壬寅、左頭中將今日可進散狀於兩御所、件書樣不審之由、被示予、答曰、可書參議歟、可書上卿歟、先々有不審事也、而上卿與參議兩人參向事、上卿有障、參議行事之時、猶書參議、本自參議爲上卿事、雖參議書上卿之例也、又上卿一人參行事、納言等有障之時、以參議爲代者、同可書上卿也、假令釋奠上卿不參之時、參議一人參行者、可書參議也、自餘以之可准知也、

鎮魂祭

上卿

中山宰相中將

辨

經直（以臨期不參之由可申沙汰之由被仰下候間猶書載辨云々、）

出車

有定朝臣

大概如此歟之由示畢

〔薩戒記別記〕正長二年十一月八日、今日送鎮魂祭請文於藏人右少辨明豐許、其書樣、

鎮魂祭可參向之條、謹所請如件、

十一月八日　　參議定親

〔管見記〕永享十年十一月廿一日、今日鎮魂祭、內侍出車持明院少將獻之、借請予車了、牛飼（著直垂歟）直垂雜色男一人、綴松等用意之、副進云々、秉燭之間可廻車之由、奉行相觸之由羽林所語申也、

〔兼見卿記〕天正十四年九月十一日癸卯、關白（豐臣秀吉）○淀ヨリ御上洛、○中略後室數日相煩、祈念之義申來、一七日、此內神道大護摩修行之義申畢、入目此方次第之由申畢、十二石、鎮魂祭五石、以別義入目如此減之由申畢、

鎮齋戶祭

十二月ニ至リテ、神祇官齋院ニ於テ、鎮御魂齋戶祭ヲ行フ、中臣事ニ當ル、中宮東宮共ニ此祭アリ、

〔三代實錄（四清和）〕貞觀二年八月廿七日甲辰、夜偷兒開神祇官西院齋戶神殿、盜取三所齋戶衣幷主上結御魂緒等、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、齋戶神ハ神祇官ノ西院ニ奉齋セラレシコト、又齋戶衣御魂結等モ、此神殿ニ奉置セラレシコトヽ知ラルヽナリ、

又按ズルニ、此ニ三所トアルハ、天皇幷ニ中宮東宮ヲ云ヘルナラン、

〔延喜式二四時祭〕十二月祭

鎮御魂齋戶祭（中宮准此）

神殿

料物

絁一匹、五色帛各一尺、絲一絢、綿一屯、倭文一尺、調布三端、庸布三段、木綿麻各二斤、米酒各一斗、饇堅魚腊海藻各六斤、鹽二升、韲水盛各一口、坏八口、匏一柄、槲十把、食薦一枚、

東宮鎮御魂齋戶祭

絁三丈、五色帛各一尺、絲六兩、綿一屯、倭文一尺、調布一端、庸布一段、木綿麻各一斤、米酒各五升、饇堅魚腊海藻各三斤、鹽二升、韲水盛各一口、坏四口、匏一柄、槲五把、食薦一枚、

右於此官（○神祇官）齋院中臣行事

祝詞

〔延喜式八祝詞〕鎮御魂齋戶祭（中宮春宮齋戶祭亦同）

高天之原留神留坐須皇親神漏伎神漏美能命乎以氏、皇御孫之命波豐葦原能水穗國乎安國止定奉氏、下津磐根留宮柱太敷立、高天之原留千木高知氏、天之御蔭日之御蔭止稱辭竟奉氏、奉御衣波上下備奉氏、宇豆乃幣帛波、明妙照妙、和妙荒妙五色物、御酒波、横山置高成氏、獻留宇豆乃辛菜、青海原物波鰭廣物鰭狹物、奥津海菜邊津海菜留至萬氏雜物乎如横山置高成氏、獻留宇豆乃幣帛乎安幣帛能足幣帛止平久聞食氏、皇孫我朝廷乎常磐留堅磐留齋奉、茂御世留幸閉奉給氏、自此十二月始、來十二月留至萬氏平久御坐所令御坐給止、今年十二月某日齋比鎮奉止申、

附招魂祭

招魂祭ハ一ニタマヨバヒノマツリトモ云フ、遊離ノ魂ヲ招キ還スノ意ナリ、毎日之ヲ行フアリ、日ヲ限リテ行フアリ、事變ニ臨ミテ行フアリ、或ハ死後其人ヲ蘇生セシメン爲ニ行フアリ、或ハ重病ニ瀕シタル時行フアリ、コノ祭ハ多ク陰陽家ノ行フ所ナリト雖モ、要スルニ鎮魂祭ノ一種ナルヲ以テ此ニ附ス、

名稱

〔撮壤集上新禱〕招魂祭

〔神道名目類聚抄五祭祀〕招魂祭（シャウコンマツリ）　人死スル時魂散ズ、故ニ魂ヲカヘシモトヅクル祭ナリ、陰陽家亦（クマヒヨバヒノ）此行事アリ、招魂續魄ノ法ト云、

〔谷響集九〕招魂法

客問、眞言家有招魂法、招魂名目出何經軌耶、答、招魂名本出儒書、經名去識還來、然先達順世俗故或呼爲招魂、今時傳習多稱招魂法、實稱去識還來法爲正矣、中性瑜公眞俗雜記云、諸經要集第十九引准南子魂魄問答註以衣喚魂云招魂而三十卷敎王經說去識還來、准南子魂魄問答在第十六卷說山訓、非有招魂名招魂名出禮記、檀弓云、復盡愛之道、有禱祠之心焉、北面求諸幽之儀也、喪大記云、升自東榮、中屋履危、北面三號、捲衣投于前、司服受之、降自西北榮、凡復男子稱名、婦人稱字、

鄭玄註云、復招魂復魄也、敎王經第十名金剛安立第十四名去識還來、竝說印眞言、今略而不出之、又問、兼好法師徒然草云、喚子鳥啼時行招魂法之事、在眞言書中、此指何書耶、喚子鳥啼時行之義如何、答、非是流行之書、蓋古德記所傳之口訣者矣、用喚子鳥鳴時者、凡密法尙相應、怪鳥多夜啼、陰時相應、故亦喚名與鉤召相應故也、

楚辭招魂

楚辭有宋玉招魂一首、文選載楚辭註云、招魂者、宋玉之所作也、古者人死則使人以其上服升屋履危、北面而號曰皐某復、遂以其衣三招之、乃下以覆尸、此禮所謂復、而說者以爲招魂、復魂又以爲盡愛之道、而有禱祠之心者、蓋猶冀其復生也、如是而不生則不生矣、於是乃行死事、此制禮者之意也、而荊楚之俗、乃或以是施之生人、故宋玉哀閔屈原無罪放逐、恐其魂魄離散而不復還、遂因國俗、託帝命、假巫語以招之、以禮言之、固爲鄙野、然其盡愛以致禱、則猶古人之遺意也、

〔古今神學類編四十祭祀〕招魂

凡ソ招魂ト云事ハ、人死ル時、哀情ノ至誠ニ發ル事也、鎮魂モ招魂ト同致ノ趣、神記ニモ侍リテ、磐戸前奉招禱ノ謂レニ本クト云ヘドモ、本朝ニテハ鎮魂祭是舊來ニシテ、復ノ禮ハ神記國史ニモ不見、但シ同事ノ如ク云ヘル說モ亦多シ、天武天皇紀ニ、法藏法師獻白朮煎、是日爲天皇招魂之ト見エタリ、其或ハ白朮ヲ招魂ニ用ル本說ノ如キハ未詳、除夜ニ五條ノ天神ニ參ル人、白朮ノ餅ヲ受テ疫ヲ除クト云ヒ、或ハ首途出行ヲ祝ヒ侍ルト云フモ、此天神ハ少彦名命ナレバ、大己貴命ト共ニ、療病術禁厭ノ制ヲ定メ玉フトナレバ、有由ニ似タレド、白朮ヲ用ル事ハ神記ニ未考、延喜式鎮魂祭ノ用度雜贄中、又ハ江次第ニモ白朮ノ事ハ不見、或書ニ、異國ニ此夜五辛盤トテ、五辛ヲ茄フ、所以發五臟氣也、若シカヽル謂レニモ、似通ヒ侍ラム歟ト云ヘリ、（略）中異朝招魂ノ術ハ、檍弓下ニ云、復盡愛之道也、有禱祠之心焉、望反諸幽、求諸鬼神之道也、北面求諸幽之

義也ト、是ハ異國ニ、死者ノ服ヲ以テ屋上ニ上リ、向北招キテ復スル事アリト也、〇中略道反大神、又ハ與玉神、皆是招魂ニ有故、復ニ禱祠ノ理必ズアル所以也、生人ニハ鎮魂ノ法アリ、表裏同一ノ神理具ハル爾、總テ招魂ノ法ハ、陰陽家眞言家ニモアリト也、〇中略或記ニ云、天台眞言ノ兩家ニ、招魂ノ法ト云フ事アリ、是ハ神社遷宮ノ時、或ハ祭會ノ前夜門火ナド燒キテ、神輿ニ正體ヲ移シナドスル時是ヲ行フ事アリ、ツレ〴〵草ニ、喚子鳥ノ鳴ク時スル事モ口決アリト云々、予謂ラク、遷宮又ハ神輿ニ御正體ヲ移ス時、招魂ノ法ヲ修スルト云フハ、彼ノ磐戸前ノ故事ヲ摸スニヤ、又喚子鳥ノ鳴ク時修スルトノ事、古來ヨリ不分明、是モ魂ヲ招ブト云フ義ヲ取リ、喚子鳥ノ名ニ就キテ云フニヤ、春鳴ク鳥ナレバ、來復ナドノ義モ取ルニヤ、萬葉ノ歌ニ、吾瀨子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀨夜之不深刀爾トヨメル心モ是ニヤ、又ツレ〴〵草ニ、喚子鳥ハ、鵺ニ通ヒテ聞ユル由ヲ云ヘリ、玉迎鳥ト云フ異名モ、喚子鳥鵺ノ二說アリ、此鳥鳴ク時、必ズ招魂ストモ云ヘリ、理書ニ、鵺等ノ妖鳥ノ事ヲ、日爲神、夜爲鬼、且如妖鳥皆陰類、皆是夜鳴ト、又或記ニ云、招魂ノ二字ハ儒書ニ出ヅ、鄭玄ガ禮記ノ復ノ註ニ、招魂復魄也ト、佛經ニハ、敎王經ノ第十ニ、名金剛安立、十四ニハ、名去識還來、是則招魂ノ事也、喚子鳥ノ鳴ク時修スル事ハ古法ニヤ、今不傳ト也、密敎ニハ、相應ヲ尊ブ故ニ、怪鳥ノ鳴クハ夜陰也、陰ノ時ノ相應ト、又呼ブト云フ名目ニタヨルモノナラムト、又云、密家ニ招魂ハ大秘法也トス、高野ノ碩學衆ニモ會シテ尋子シニ、其家ナラデハ難知ト也、今此ニ載スル招魂ノ法ハ、一卷ノ內ニ見ユ、招魂法就延命法幷普賢延命法行之偈ニ曰、大哉一切正覺尊、諸佛大智無有上、能令死去有情身、去識還來得活命、裏書ニ曰、招魂作法、或云去識還來作法、又此作法七日用之殊有驗ト云々、又拾芥抄ニ、人魂ノ飛ブ時唱フベキ歌トテ、玉ハ三ツ主ハ誰トモ知ラヌドモ結ビヅ留ムル下ガヘノツマ、此歌ヲ玉結ビノ歌ト云フト也、想フニ此歌ノ詞、玉ハ見ツ也、三ニハ非ジ、是モ御玉結ビノ本說ヨリ讀メルニヤ、下ガヘノツマハ、順ヘノ義

ヲ取ル乎、衣ノツマヲ結ブ事モ、衣ヲ振フ故實ヨリ云ヘルニコソ、總テ遊魂離魂ノ沙汰ハ、異國ノ書ニモ往々見エテ、一身兩所ニ分體セシ例モアリ、婦人ニ離魂病ト云ヘル類アリ、俗ニ影ノ病ト稱スルハ是ニヤ、神記ニ於テ、幸魂奇魂分化ノ道理ハ、甚ダ謂ハレアル事ナリ、倩女ガ離魂ノ事ハ舊リタリ矣、〇中略又世ニ謂ハユル返魂香ノ說モ國史經書ニハ不見、白氏文集東坡文集等ニ出ヅト羅山子モ云ヘリ、

毎日招魂祭

〔日本諸手船〕愚〇度會光隆按、招魂死生俱在、禮記謂死時也、楚辭謂生時也、不可泥、一途、杜甫詩、南方實有未招魂、亦謂生時也、〇中略但本邦復魂、不詳何昉、管窺可憾焉、猶竢後考、

百日招魂祭

〔日中行事〕日ごとのせうこんの御まつり、今はさだまれる事也、日下臍の藏人、臺盤所にて御撫物を申出して、衞士をして陰陽師がもとにつかはす、

臨時招魂祭

〔吾妻鏡〕二十七安貞二年六月廿三日、將軍家百日招魂祭御撫物、鼠喰損之云々、

〔本朝世紀〕久安三年四月二日乙未、於內膳被行招魂祭、權天文博士安部晴通奉仕之、藏人俊憲隨身御衣向祭庭、

〔顯時卿記〕久安五年八月七日、今日〇中略高陽院〇鳥羽后藤原泰子被行招魂御祭云々、就待賢門院〇鳥羽后藤原璋子之例、所被行御祓也、祭物下ニ知レ

〔玉海〕嘉應二年七月五日、修鬼氣土公等祭、又小兒修招魂祭、

〔吾妻鏡〕二十一建曆三年〇建保元年八月十八日丙戌、子剋將軍家〇源實朝出御南面〇中略及丑剋、如夢而青女一人奔融前庭、頻雖令問之給、遂以不名謁、漸至門外之程、俄有光物、頗如松明、以宿直者召陰陽少允親職、親職倒衣奔參、直被仰事次第、仍勘申云、非殊變云々、然而南庭被行招魂祭、今夜所著給之御衣賜親職、

〔吾妻鏡〕二十六貞應二年十二月三日、丑刻奧州御亭有光物、仍卽時於大倉藥師堂被始行御祈、奉神

病中招魂祭

馬（號片岡名馬也）於鵄岡、又有七座招魂祭云々、

〔實隆公記〕長享三年八月廿九日乙卯、抑去廿三日勅語、今月十六日午下刻計、御坐議定所之處、如拍掌有物聲、諸人聞之云々、尤奇異也、仍被尋仰有宣卿處、人魂所爲歟、爲男女之愼之由申之、兼倶卿占文趣、家内鬼形之所爲云々、仍招魂祭、有宣卿勤之、

〔小右記〕萬壽四年十一月廿六日壬戌、禪閤（藤原道長）危急、　卅日丙寅、或云、禪室招魂祭、去夕守道朝臣奉仕、人魂飛來、仍給祿（桑絲）　十二月四日庚午、巳時許、成光來云、禪閤昨日入滅、而終夜有搖動氣云云、

〔吉記〕安元二年五月廿九日癸酉、女房所勞、今日更發、依令修泰山府君祭、在憲朝臣勤修之、又行招魂祭、職保有光物之由云々、

〔玉海〕建久二年八月廿四日庚子、早旦中宮（後鳥羽任子）女房告送云、宮自去夜聊不例御坐、（略）今日始祈等、　廿五日辛丑、中宮今日猶六借御坐云々、（略）今日召陰陽師七人、行招魂御祭也、

〔吾妻鏡脫闕〕嘉祿二年十月廿七日己酉、戌刻將軍家（藤原頼經）聊御不例、御濕氣歟云々、　廿八日庚戌、依御不例之事、招魂祭以下御祈等被始行、三條左近大夫將監親實爲奉行云々、　三年（安貞元年）十一月十八日癸巳、巳刻以後將軍家御不例、　廿二日丁酉、入夜鬼氣招魂祭等被行之云云、　廿三日戊戌、將軍家赤斑出現給、　廿五日庚子、今夜七座招魂祭、天曹地府、泰山府君等被行也、祭料結城左衛門尉土岐左衛門尉廣澤三郎等沙汰進之、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年（嘉禎元年）十二月十八日丙午、將軍家御不例事、御疱瘡有出現氣之由、良基朝臣申之、今夜又始行御祈禱等、及子刻平左衛門尉盛綱爲武州御使參御所申云、每日可被修御招魂祭之由云々、仍先七箇夜可奉仕之旨被仰國繼云云、

〔續史愚抄後桃園〕安永八年十月十八日戊辰、爲御惱（後桃園）御祈、自今日七箇日、陰陽頭泰榮奉仕招魂祭、

死後招魂祭

御魄祭於私第、

〔小右記〕萬壽二年七月廿九日己酉、義光朝臣云、尚侍（後朱雀后嬉子）瘡出卽熱氣散、仍今日修法被加持者、

八月三日壬子、義光朝臣從尚侍御許來云、今日兩三度有產氣色、上下經營、禪室以馬牛誦經神社、已似難產、八々歎息、　五日甲寅、黃昏隨身近衞信武從北野御會來云、尚侍不覺、被修誦經北野、其使右兵衞尉資孝今不參、烏帽下人懷絹四疋走問案內、申云、所々御讀經使也、其後秉燭間、關白權隨身府生保重馳來云、尚侍不覺、仍分手修誦、諸僧等加持六親、近衞兩三度、只今無音非常歟者、（略）宰相歸來云、從未時許如入鬼籙、遂以入滅、諸僧分散云々、　六日乙卯、故尚侍今夕移法興院、　七日丙辰、昨夜風雨間、陰陽師恒盛、右衞門尉雅孝、昇東對上（尚侍住所）魂呼、近代不聞事也、彼院者太后御座所、尤可有忌諱頻有不祥雲、亦尚侍移法興院之夕、同有此雲云々、　九日戊午、義光朝臣云、被著尚侍舊居、留守祇候、昨夜尚侍可蘇生是禪閤夢想、被行種々祭、僧俗男女擧首向法興院云々、　十五日甲子、今夜尚侍葬送（除云々）

〔左經記〕萬壽二年八月廿三日壬申、今朝大外記賴隆眞人云、陰陽師常守來問云、去五日夜、尚侍殿薨之時、依播磨守泰通朝臣仰、上東門院東對上、以尚侍殿御衣、修魂喚、而道上觸達、皆稱不見本條之由、可負被於常守云々、此事如何者、賴隆答云、有本條更不可負被、或書云、上自屋東方堂亡者上、以其衣向北方三度麻禰久（其詞云、姓某魂、後世可喚字云々）畢自西北角下云々、常守聞此事悅氣殊甚云々、

〔榮花物語二十六楚王の夢〕若宮（後冷泉）の御ゆどのもけふはとくなをそゝのかしおはせらるゝに辰の時ばかりに、こもちの御なへ（後朱雀后嬉子）いたううちわくばせ給て、いとくるしげなる御けしきおはしなすを、御前にさぶらふ人々いかに〳〵と見たてまつりて、殿のおまへ（嬉子父藤原道長）にかくときこえさすれば、僧なをものけたれば、御ものゝけのするなめりとて、御讀經をたさるべき僧をもみなをわりて、もろ心にいとおをろ〳〵しく、れいの物のけさま〴〵の人々めしいでゝ、おるは

そばよりさけびのゝしり出て、僧たちみなおあたり〳〵に加持すれば、れいのゆすりおひたるさまもどよみにたり、○中略されどすべてかぎりになりはてさせ給ぬ、御年十九おないみじ、おさまりしとおほしめす、どのゝ御前は、やがてさしのいてあさましくてふさせ給ぬ、主計のすけもりみち、おはしますたいのうへに御ぞをもてのぼりて、よろづを申つゞけまねきたてまつる、すべてかぎりにおはしませば、大かた殿ばらたゆむな〳〵と僧達をもたのもしういひおこなはせ給へば、僧もおなじ人なれば、なく〳〵いみじかなしとおもふ、観音〳〵と申ながらも、またいとなさけなう、佛をもうらみ申て、むげに心地たゆみたり、

〔伊勢物語下〕昔男みそかにかよふ女有けり、それがもとより、こよひ夢になん見え給ひつるといへりければ男、

思ひあまり出にし玉の有ならむよふかくみえば玉むすびせよ

〔源氏物語九葵〕もの思ふ人のたましひはげにあくがるゝものになんありけるとなつかしげにいひて、

なげきわび空にみだるゝわがたまをむすびとゞめよしたがひのつま

ひ、その人○上葵にもあらずかはりたまへり、

〔狭衣物語三下〕猶いかでいみじうむねいたきこゝろのうちをすこし聞えしらせて、思ふほいとげてやみなんとおもひつゝくるに、又なほしのぶもぢずりは、かこちきこえさせつべくおもひいでられ給ふもわりなしや、

わくがるゝわがたましひもかへりなんおもふあたりにむすびとゞめば

きすさびてそひふし給へるに、宮の中將參りたまへるに、衣をに色の御ぞのなよゝかなるに、草のかうのおり物のさしぬきばかりをき給ひて、物あはれとおぼしたるけしきにて、詠ふしたまへるさまの、いふかたなうめでたう見え給ふにも、人しれず思ひあつかはるゝ人の御事まづ思ひ出られて、この人の御あたりのちりともなさまほしう、此御手ならひを見るまゝに、

玉しひのかよふあたりにあらずともむすびやせましたがへのつまとかきつけたれば、人のまねびし事を、筆のすさびにとまぎらはし給ひて、何やかやと世の物がたりをしたまふ、

〔袋草紙四〕見人魂歌

たまはみつぬしはたれともしらねども結びとゞめよしたがひのつま

三返誦之、男左女右ノツマヲ結ビテ、三日ヲ經テ解之云々、

〔馬内侍集〕四月つごもりがたに、むかしさふらひしともたちのなど事をいひたれば、

今さらに忍びぞわぶるほどゝぎすもとつ人よとねのみなかれて

おなじところにすへてたましづめしてまいらすとて、

身からこそとにもかくにもあくがれめかよはむたまのをだみだにする

とてまいらせたれば

世にもみなあくがれにたるたまなればうらなきつまにとまる物かは

〔徒然草下〕喚子鳥は春の物なりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかにゑるせるものなし、ある眞言書の中に、呼子鳥なく時、招魂の法をばおこなふ次第あり、

鎮火祭

鎮火祭ハ、ヒシヅメノマツリト云フ、火災ヲ防ガン爲ニ火神ヲ祭ルナリ、太古伊弉冉尊、火神柯遇突智ヲ生ミタマヒシ時、火神ノ國土人民ニ害ヲ爲サンコトヲ慮リ、水神匏川栗埴山姫ヲ生ミテ以テ之ニ備ヘタマフコトアリ、鎮火祭蓋シ此ニ原ヅク、

名稱

〔令義解二神祇〕季夏鎮火祭（謂在宮城四方外角、卜部等鎮レ火而祭、爲防二火災一、故曰二鎮火一、）

〔公事根源六月〕鎮火祭

卜部氏の人火をうちて、宮城の四のすみにて祭事有、火災をふせがんのためとかや、此祭禮のおひだ、秘術おほく侍るよし承るなり、

〔標注令義解三〕道饗祭ハ、六月晦日に大祓事畢て後行ふ、道饗畢て同夜に鎮火祭行はる、（略）中火は日本武尊の向火と同意の祭なり、

祭日

〔小野宮年中行事六月〕廿五日鎮火祭事

弘仁神祇式云、於宮城四隅祭之、十二月准之、

〔師遠年中行事六月〕晦日鎮火祭事（宮城四隅祭レ之、陰陽寮勤レ之、）

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

鎮火祭事（或晦日）

〔拾芥抄（中末年中行事）〕六月撰吉日事

鎮火祭

〔師光年中行事十二月〕撰吉日事

鎮火祭事

祝詞

〔台記〕天養二年十二月三十日庚午鎮火祭、

〔延喜式八祝詞〕鎮火祭

高天原爾（神留坐皇親神漏岐神漏美能）命持氏、皇御孫命波、豐葦原乃水穗國乎（安國止）平久所知食止（天下所寄奉志）時爾、事寄奉志（天都詞太詞事乎）以氏申久、神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氏、國能（八十國島）能八十島乎生給比、八百萬神等乎生給比氏、麻奈弟子爾火結神生給氏、美保止被燒氏石隱坐氏、夜七日晝七日吾乎（奈）見給比（曾）吾奈妖乃命止申給比支、此七日爾波不足氏隱坐事奇止氏見所行須時、火乎生給氏御保止乎所燒坐支、如是時爾吾名妖乃命波、吾乎見給布奈止申乎、吾乎見阿波多志給比（止）津申給氏、吾名妖能命波上津國乎所知食（倍志）、吾波下津國乎所知食（平止）申氏、石隱給氏、與美津枚坂爾至坐氏所思食久、吾名妖命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氏來（奴止）宣氏、返坐氏更生子、水神匏川栗埴山姫四種物乎生給氏、此能心惡子乃心荒（比波）、水神匏埴山姫川栗乎持氏鎮奉（禮止）事敎悟給支、依此氏稱辭竟奉者、皇御孫（能）朝廷爾、御心一速（比）給波志止爲氏、進物（波）明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏、青海原爾住物者鰭廣物鰭狹物、奥津海菜邊津海菜（爾至）（萬氏爾）、御酒者瑞邊高知、瑞腹滿雙氏、和稻荒稻（爾至）（萬氏爾）、如橫山置高成氏、天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉（久止）申、

〔日本書紀纂疏一神代〕一書曰、伊弉冉尊生二火產靈一時、爲二子所一レ焦而神退矣、亦云二神避一矣、其且二神退一之時、則生二水神罔象女一、及土神埴山姫、又生二天吉葛一、

〔日本書紀纂疏上三〕伊弉冉尊、爲二火神所一レ灼而神退、是火之過也、過則理當禁制、故後世有二鎮火祭一、神祇令曰、季夏鎮火祭、謂在二京城四方外角一、卜部等鑽レ火而祭、爲二防火災一、故曰二鎮火一、延喜式鎮火祭祝詞、具載二伊弉冉尊爲二火神所一レ灼之緣一、夏月火旺、故用二季夏時一者、制於過也、

〔延喜式一四時祭〕六月祭（十二月准レ之）

鎮火祭（於二宮城四隅一祭）

幣帛

五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿五兩、麻一斤、庸布二段、鍬四口、米酒各四升、鰒堅魚各一斤五兩、腊四升、海藻一斤五兩、鹽二升、瓶坩坏各四口、槲四把、匏四柄、藁四圍、

祭使

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

雜載

鎮火祭事或曙日○中略

已上二祭、宮城京城四角四祭也、陰陽寮進勘文、瀧口爲使、

〔術水鎮火式〕鎮火之式

飾以前四方拜

神拜　如常

祓

奉幣

內札　奉鎮火產靈命

外　鎮火御札

內札　桃木札　奉鎮八雷天神

外　火雷天神守護所

內札　奉鎮荒神

外　鎮火御札

竈神酉ノ日酉ノ刻祭之

火鎮之口傳

是ハ庭ニテ飾ル也、八足机三尺八寸許ニシテ、四隅ノ柱ニ五尺ノ幣ヲ結付、机ノ中ニ木地ノ四方ニ五色ノ絹五匹置、兩脇モ四方ニ海ノ物ハ和布ナド、川ノ物ハ富士ノリスイセン等ノ類、山ノ如

クニ盛上ル、置樣如圖、○圖略　前ノ机ハ四五寸モ低クシ、是モ四方ヲ三膳スエル、中ハ高盛ノ食、汁ハ菜ノ葉ナド生ニテ置、上ニ味噌少シヅクヲ置、サイハ鮑ナドニテモ切置、各土器ニ盛也、左ハ瓶子二ツ、土器三ツ重、先ニアイキヤウ二ツ並ベ置如圖、○圖略　拜所ニ荒ゴモヲ敷、我身其ノ季ノ方ヘ向フヤウニ飾ル、

机ノ前兩脇ニ庭火ヲタク

先立テ四方ヲ其時ノ季ノ方ヨリ拜シ、宿德ノ拜ニシテ庭火ヲ消シ、鹽水打シヅムベシ、介添ハ月水ナキ女ヲスベシ、先絹ヲスエ、次ニ海ノ物神右ノ川ノ物神左ノ御膳瓶子土器ト段々ニスエル、次ニ立テ腰ヲカヾメテ拜シ、下ニ居拜シ、合テ四拜也、偖拍手二ツ、次ニ祝詞ハ、延喜式ニアル如クヨミ、次ニ幣使脇持來ルヲ少退テ請取、左右左、左右左、左右左トシテ幣ヲツキ立テ、四拜シテ幣ヲ机ニ立置ク、次ニ願文、次ニ返リ申シノ拍手四、又立拜シテ退去、

鎮花祭

名稱

鎮花祭ハ、ハナシヅメノマツリト云フ、卽チ季春ヲ以テ、大神狹井ノ二神ヲ祭リ、以テ疫氣ヲ鎮遏スルナリ、蓋シ春花ノ飛散スル頃ハ、疫神分散シテ癘ヲ行フガ故ナリト云フ、

〔伊呂波字類抄波諸社〕鎮花祭ハナシヅメノマツリ

〔令義解二神祇〕季春鎮花祭謂大神狹井二祭也、在春花飛散之時、疫神分散而行癘爲二其鎮遏一必有二此祭一故曰二鎮花一、

〔大三輪神三社鎮座次第〕祭禮之事

鎮華祭者式三月擇日、於二神祇官一奉レ敬祭、當社狹井社也、當社行之、春華飛散之時、疫神分散而行癘爲二其鎮遏一必有二此祭一故曰二鎮華祭一也、此祭自二大寶元年一而始矣、狹井社大己貴命之荒玉也、

〔公事根源三月〕鎮華祭

是は大神狹井の二祭をいふと神祇令にのせたり、春花の飛かふ比は、疫神分散して人をなやますが故に、かれをしづめん爲に、此祭は有とかや、神祇官にて行はる、

祭神

〔延喜式一四時祭〕三月祭

鎮花祭二座

大神社一座

狹井社一座

〔延喜式九神名〕大和國城上郡

大神大物主神社名神大、月次相嘗新嘗、

狹井坐大神荒魂神社五座鍬制

〔標注令義解三〕狹井は、神名式大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社これ也、厲を鎭む爲に、大物主の和魂大神社と、荒魂狹井社とを祭らせ給ふ、崇神紀に、五年多二疾疫一とありて、七年に大物主の敎に依て、大田々根子といふ者を以て、大物主の祭主とし給ひけるに、疫病始息とありしこの故事によりて也、

〔日本書紀五崇神〕七年二月辛卯、詔曰、昔我皇祖大啓二鴻基一、其後聖業逾高、王風博盛、不レ意今當二朕世一數有二災害一、恐朝無二善政一、取咎於神祇耶、蓋命二神龜一以極二致災之所由一也、於是天皇乃幸二于神淺茅原一而會二八十萬神一、以卜問之、是時神明憑倭迹迹日百襲姬命曰、天皇何憂二國之不一レ治也、若能敬二祭我一者、必當自平矣、天皇問曰、敎如レ此者誰神也、答曰、我是倭國域內所居神、名爲二大物主神一、時得二神語一隨レ敎祭祀、然於レ事無レ驗、天皇乃沐浴齋戒、潔二淨殿內一而祈之曰、朕禮神尙未レ盡耶、何不レ享之甚也、冀亦夢敎之、以畢二神恩一、是夜夢有二一貴人一、對二立殿戶一、自稱二大物主神一曰、天皇勿レ復爲レ愁二國之不一レ治、是吾意也、若以二吾兒大田田根子一令レ祭レ吾者、則立平矣、亦有二海外之國一、自當歸伏、八月己酉、倭迹迹神淺茅原目妙姬、穗積臣遠祖大水口宿禰、伊勢麻績君、三人共同レ夢而奏言、昨夜夢之有二一貴人一、誨曰、以二大田田根子一令レ祭二大物主大神一之主一、亦以二市磯長尾市一爲レ祭レ倭〇倭下一本有二大字一國魂神〇神下一本有二之字一主、必天下大平矣、天皇得二夢辭一益歡於レ心、布告二天下一、求二大田田根子一、卽於二茅渟縣陶邑一得二大田田根子一而貢之、天皇卽親臨二于神淺茅原一、會二諸王卿及八十諸部一、而問二大田田根子一曰、汝其誰子、對曰、父曰二大物主大神一、母曰二活玉依媛一、陶津耳之女也、天皇曰、朕當榮樂、乃卜使二物部連祖伊香色雄一爲二神班物者一、吉之、又卜便祭二他神一不レ吉、十一月丁卯〇十一月無二丁卯一恐誤、命二伊香色雄一、而以二物部八十手所作祭神之物一、卽以二大田田根子一爲レ祭二大物主大神之主一、又以二長尾市一爲レ祭二倭大國魂神之主一、然後卜レ祭二他神一吉焉、便別祭二八十萬群神一、仍定二天社國社及神地神戶一、於是疾病始息、國內漸謐、五穀既成、百姓饒之、

〔古事記中崇神〕此天皇之御世、疫病多起、人民死爲レ盡、爾天皇愁歎、而坐二神牀一之夜、大物主大神顯於御

夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而令祭我御前者、神氣不起國安平、是以驛使班于四方、求謂意富多多泥古人之時、於河内之美努村見得其人貢進、爾天皇問賜之、汝者誰子也、答曰、僕者大物主大神、娶陶津耳命之女活玉依毘賣生子、名櫛御方命之子、飯肩巢見命之子、建甕槌命之子、僕意富多多泥古白、於是天皇大歡以詔之、天下平人民榮、卽以意富多多泥古命爲神主、而於御諸山、拜祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命作天之八十毘羅訶、此三字以音也、定奉天神地祇之社、又於宇陀墨坂神祭赤色楯矛、又於大坂神祭黑色楯矛、又於坂之御尾神及河瀨神、悉無遺忘以奉幣帛也、因此而役氣悉息、國家安平也、

祭日

〔大三輪神三社鎮座次第〕祭禮之事

鎮華祭者、式、三月擇日、於神祇官奉敬祭、當社狹井社也、當社行之、

〔師遠年中行事三月〕晦日鎮花祭事（神祇官○又見師元年中行事、師光年中行事秘抄、拾芥抄、）

〔年中行事抄三月〕撰吉日事

鎮花祭事（或晦日）

幣帛

〔延喜式四時祭〕三月祭

鎮花祭二座

大神社一座

純一匹、絲一絢二兩、綿一屯、五色薄絁各三尺、倭文六尺、布一端一丈、木綿麻各三斤六兩、菜六兩、弓七張、箆二連、鹿皮十張（已上三種神祇官充）羽二翼、鹿角三頭、鐵三斤五兩、漆一升、黃蘗三斤五兩、茜十兩、黑葛廿斤、清酒五升、濁酒六斗五升、鰒二斤六兩、堅魚五斤五兩、腊八升、海藻五斤五兩、鹽二升、瓮一口、都婆波匝短女杯盞各一口、裹葉薦二枚、

狹井社一座

純二匹、絲三絢綿一屯四兩、五色薄絁各三尺、倭文六尺、布一端一丈、木綿麻各六斤十兩、菜八兩、弓七張、箆二連、鹿皮十張（已上三種神祇官充）羽二翼、鹿角四頭、鐵三斤五兩、漆一升、黃蘗三斤五兩、茜一斤、黑葛廿斤、清酒五升、濁酒六斗五升、鰒三斤、堅魚五斤五兩、腊八升、海藻五斤五兩、鹽二升、瓮二口、都婆波匝短女杯盞各一口、裹葉薦二枚、○中略

右○中略幣物依前件付祝等令供祭、

祭使

〔令集解七上神祇〕季春鎮花祭（釋云、大神狹井二處祭、大神者、祝部請受神祇官幣帛祭之、）

〔神祇官年中行事三月〕晦日鎮花祭也、件幣以本官請奏、兼日付官公文、

〔二十二社註式〕大神社

鎮花大神狹井

使五位一人、幣一前、宣命、黃紙

雜載

闕白前左大臣

〔新拾遺和歌集十六神祇〕貞和二年百首歌奉ける時

のどかなる春のなつりの花ぢめ風をさまれと猶いのるらし

〔神道名目類聚抄五祭祀〕鎮花祭（大和國狹井社ニアリ）三月ニアリ、疫ヲ鎭ル祭ナリ、○中略按ニ狹井社ハ三輪神ノ荒魂ナリ、三輪ノ社ヲ去コト二町許北ニアリ、今ハ社斷絕ス、又三月十日山州上賀茂ノ里俗、紫野今宮ノ社ニ踊來是ヲヤスラヒ花ト云、鎭疫ノ祭ナリト云リ、ヤスラヒ花ハ、ヤスラフ花ニシテ、鎭花ノ儀ナラン、

〔倭訓栞前編二十四波〕はなしづめ　鎭花祭をいへり、祇令にのせたり、又松尾の神社にあり、和州三輪山の内にも鎭花の社あり、花のちりかふ春の比は、疫神分散して人をなやますゆゑに、此祭ありといへり、又花鎭宮乙訓郡上久我村にあり、

道饗祭　四角四境祭 併入

名稱

道饗祭ハ、ミチアヘノマツリト云フ、六月十二月ノ兩度、京城ノ四隅ニ八衢比古、八衢比賣、久那斗ノ三神ヲ祀リテ鬼魅ノ外ヨリ來ル者ヲ京城外ニ驅逐セシムル祭ナリ、京城ノ四隅ニテ疫神ヲ祭ルヲ四境祭ト云フ、共ニ鬼魅ヲ驅逐スル所ニシテ、陰陽道ノ祭ト同ジテ云フ者アレド是ナラズ、鎌倉幕府ニ於テモ亦此祭アリ、

〔伊呂波字類抄見諸社〕道饗祭　ミチアヘノマツリ

〔令義解二神祇〕季夏道饗祭謂下部等於二京城四隅一道上而祭レ之、言欲レ令二鬼魅一自外來者不レ致二入京師一故預迎二於道一而饗遏也、

季冬道饗祭

〔古史傳六〕義解文に、鬼魅自外來者云云、豫迎二於路一而饗遏也とありて、其饗を外より來る鬼魅に備るよしに解れしは背へり、其はこの御祭の祝詞に、八衢比古、八衢比賣、久那斗神に、御饗を奉らるゝ由は見えたれども、鬼魅に備ふるよしは、見えざるにて知られたり、然れば義解文は、既く此祭の古意を心得誤れるものとこそ思はるれ、然るに祝詞考に、此道饗祭は、令義解に、鬼魅の來るを、道にて饗遏といへれば、却て祟神祭の如く、その惡神を饗し和して、かへすことをも云べきに、たゞ衢神を祭ることのみあるはいかに、文の拙くして、言のゆかぬ故に、洩たるにや、と云れしは、疑ひの本末たがへり、はた此文に、何の拙き所か有らむ、縣居大人の祝詞の文を論はれし說どもには、凡て信がたきこと多かり、

〔公事根源六月〕道饗祭　卅日

是は疫神の祭なり、毎年に必行はるべき事なり、近比は絕て侍にや、是も卜部の人、京城の四角の路にて、鬼魅の他方よりきたるを、京路に入ざらしめん爲に、路上に供物をそなへてまつるなり、

鎭火道饗の祭をば、四角四堺の祭とも申也、

〔標注令義解三〕道饗祭は、六月晦日に大祓事畢て後行ふ、〇略中道饗は、伊弉冉尊の黃泉にて崩ませる時の穢より起れる事にて、穢になれる邪神を、京師に入ざらしむる祭なり、

〔祝詞考下〕道饗祭

此祭の事、〇略中是と鎭火を卜部のみして、祭らしめらるゝは小祭故か、又皇朝の祭ならざりしか、且四隅同時に祭ればト部四人を用ゐらる、仍等といふか、かの京城四隅とは、京の外郭の外の四隅なり、また國に疫病などおこるときは、國の堺にて祭、京に疫なき時は、宮城の四隅にて祭る、是をば後に四角四堺の祭といふ、令には常例をのみ擧たれば、京城四隅の祭のみ有也、實は疫神と見え、臨時祭式にも、畿內堺十所疫神祭あり、又天平七年八月の紀にも、畿內諸堺祭云、長門以還諸國司守、若介專齋成道饗祭祀と有、諸國にても行ふ事知るべし、

祭日

〔小野宮年中行事六月〕廿五日道饗祭事

弘仁神祇式云、於京城四隅祭之、十二月准之、

〔師遠年中行事六月〕晦日道饗祭事宮城四隅〇又見二師元年中行事一

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

道饗祭或晦

〔拾芥抄中末年中行事〕六月撰吉日事

道饗祭

〔師遠年中行事十二月〕道饗祭事承和五年十二月十九日始レ之

〔師光年中行事十二月〕撰吉日事

道饗祭事

〔台記〕天養二年十二月三十日庚午、道饗祭、

〔延喜式八祝詞〕道饗祭

高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉、大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久、八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氐辭竟奉久、根國底國與里罷備疎備來物爾相率相口會事無氐、下行者下乎守理、上往者上乎守理、夜之守日之守爾守奉齋奉止禮進幣帛者、明妙照妙和妙荒妙爾備奉、御酒者瑞邊高知瑞腹滿雙氐、汁爾母顙爾母、山野爾住物者、毛能和物毛能荒物、青海原爾住物者、鰭乃廣物鰭狹物、奥津海菜邊津海菜爾至萬氐、横山之如久置所足氐、進宇豆乃幣帛乎平氣久聞食氐、八衢爾湯津磐村之如久塞坐氐、皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉、茂御世爾幸閉奉給止申、又親王王等臣等百官人等天下公民爾至萬氐平久齋給部止神官天津祝詞乃太祝詞事乎以氐稱辭竟奉止申、

〔令集解七上神祇〕季夏道饗祭釋云、京四方大路最極、下部祭等、牛皮并鹿猪皮用也、

〔延喜式一四時祭〕六月祭十二月準此、

道饗祭於二京城四隅一祭

五色薄絁各一丈、倭文四尺、木綿一斤十兩、麻七斤、庸布二段、鍬四口、牛皮二張、猪皮鹿皮熊皮各四張、酒四斗、稻四束、鰒二斤五兩、堅魚五斤、腊八升、海藻五斤、鹽二升、水盆杯各四口、槲八把、笴四柄、調薦二枚、

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

道饗祭或晦日小野宮年中行事廿五日○中略

已上二祭、宮城京城四角四堺祭也、陰陽寮進勘文、瀧口爲使、

祝詞

幣帛

祭使

臨時疫神祭

〔續日本紀聖武〕天平七年八月乙未、勅曰、如聞比日太宰府疫死者多、思欲救療疫氣以濟民命、是以奉幣帛彼部神祇、爲民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺讀金剛般若經、仍遣使賑給疫民、幷加湯藥、又其長門以還諸國守若介、專齋戒或道饗祭祀、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月癸酉、大祓、遣使奉幣於伊勢神宮及天下諸神、以皇太子不平也、又於畿内諸界祭疫神、

〔延喜式三臨時祭〕宮城四隅疫神祭若應祭二京城四隅一準此、

五色薄絁各一丈六尺、等分四所、已下準此、倭文一丈六尺、木綿四斤八兩、麻八斤、庸布八段、鍬十六口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各四張、米酒各四斗、稻十六束、鰒堅魚各十六斤、鹽二斗、海藻雜海菜各十六斤、鹽二斗、盆四口、坏八口、匏四柄、槲十六把、薦四枚、藁四圍、楉棚四脚、各高四尺五寸、長三尺枋一枝、

畿内堺十處疫神祭山城與二近江一堺一、山城與二丹波一堺二、山城與二攝津一堺三、山城與二河内一堺四、山城與二大和一堺五、山城與二伊賀一堺六、大和與二伊賀一堺七、大和與二紀伊一堺八、和泉與二紀伊一堺九、攝津與二播磨一堺十、

堺別五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿麻各一斤二兩、庸布二段、金鐵人像各一枚、鍬四口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張、稻四束、米酒各一斗、鰒堅魚海藻滑海藻各四斤、雜海菜四斤、腊五升、鹽五升、水盆一口、坏二口、匏一柄、槲四把、薦一枚、藁一圍、輿籠一脚、枋一枝、擔夫二人、京職差充之、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年六月甲寅、祭疫神於京師四隅、畿内十堺、

〔朝野群載十五陰陽道〕四角四堺祭使等歷名

右辨官下二山城國一

和邇堺

使薩子橘兼舒　　從三人

陰陽允中原善益　　從三人

四角四境祭

祝少屬秦春連　　從三人
奉禮陰陽師布留滿樹　　從二人
祭郎學生四人　　從一人
左衛門府生美努定信　　從二人
看督長一人　　從一人
火長一人

會坂堺　同前
大枝堺　同前
山崎堺　同前

右今月廿七日、爲レ祭二治郊外四所鬼氣一、差二件等人一、充使發遣者、國宜承知依レ例供給、官符追下、

天曆六年六月廿三日　　大史阿蘇宿禰

右大辨藤原朝臣

〔西宮記臨時六〕臨時御願

四界祭陰陽寮向二四界一祭、以二藏人一爲レ使、四角祭陰陽寮向二宮城四角一祭、有レ使所レ人、已上天下有レ疫之時、陰陽寮進二支度一、料物官宣

〔侍中群要七〕御祭等事

四角四堺四角使所衆　四界使瀧口

仰上卿行之

〔神祇官年中行事四月〕四角四箇祭○中略

已上件祭之幣物等、以二本官請奏一、兼日付官請之、本官史生持參也、件用途祈知下宣旨、近代無二其沙汰一歟、

〔小右記〕長和四年四月廿七日丙子、來月一日、又高山海若、幷四角四堺等祭事、依二光榮朝臣上奏一所レ被レ行也、四角四堺祭事、頭資平奉レ勅仰二中納言行成一者、　五月六日乙酉、今夜吉平奉レ仕四角祭、枇杷殿四方者、　九日戊子、今日公家被レ行二四堺祭一、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年○嘉禎元年十二月廿日戊申、爲二御不例御祈一、於二御所南庭一、被レ行二七座泰山府君祭一、○中略　及二黃昏一被レ行二四角四境祭一、御所艮角、陰陽大允晴茂　巽角、圖書助晴秀　坤角、左京權亮經昌　乾角、雅樂助清眞　小袋坂、雅樂大夫泰房　小壺、近江大夫親眞　六浦、陰陽少允以平　固瀨河、縫殿助文方

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年四月廿六日丙申、今度被レ行二四角四堺鬼氣祭一、是近日咳病温氣流布、貴賤上下無レ免之間、將軍幷公達以下御祈禱也、兩君有二此御患一、若君○賴嗣藤原于レ今無二御平減一云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年八月廿三日乙亥、依二御惱事一、被レ行二四角四境鬼氣祭一、晴賢晴茂爲親等朝臣、晴秀以平晴尙晴盛茂氏等奉仕、今日御平減云云、

〔後深心院關白記〕延文五年五月九日甲子、明日四角四堺祭延引云云、祭料不足之故也、　十六日辛未、依二天下疾疫一被レ行二四角四堺鬼氣祭一、

四角

艮前左京權大夫在實朝臣　　巽前陰陽頭定秀朝臣　　乾前雅樂頭泰宣朝臣　　坤權天文博士有世朝臣

四堺

會坂權曆博士清周　龍華宮內權少輔俊忠　　大枝權陰陽博士在音　　山崎曆博士在引

〔康富記〕寶德二年五月二日乙巳、今夜四角四堺祭被レ行之、依二天下疾疫流布一御祈禱也、幣料御訪都合四千匹、自二武家一被二下行之一云々、

寶德二年五月二日、四角四堺祭參勤人々、

皇居四角

艮正三位賀茂在貞卿　巽從三位安倍有鄉卿　坤從三位賀茂在康卿　乾陰陽頭安倍有季朝臣

堺外四堺

會坂賀茂在長朝臣　大枝賀茂在盛朝臣　龍華安倍有正朝臣　山崎安倍有信

此間天下疫癘流布之故被行之、奉行職事廣橋綱光、官方兼行、官務成遣宣旨於四堺了、武家奉行

飯尾肥前入道也、□四千匹被下行之云々、

名稱起原

祭神

大殿祭

大殿祭ハ、オホトノホガヒト云フ、屋船久久遲命、屋船豐宇氣姫命、及ビ大宮賣神ヲ祭ル、宮殿ノ災異ナカランコトヲ祈ルナリ、此祭ハ、太古瓊瓊杵尊ノ時、齋部ノ齋斧ヲ以テ材木ヲ伐採シテ、瑞ノ御殿ヲ造リシニ起リ、神武天皇ノ時、手置帆負彦狹知二神ノ孫、正殿ヲ與シ、モノ之ニ繼グ、故ニ古ヨリ齋部氏ノ掌ル所ナリシニ、中間中臣氏ニ移リシカドモ、清和天皇ノ貞觀ニ至リテ又舊ニ復ス、凡ソ此祭ハ、神今食新嘗祭大嘗祭等ノ前後、若シクハ皇居ノ遷移、齋宮齋院ト定ノ後等ニ於テスルモノナリ、

〔延喜式三十　大殿祭（此云二於保登加比一）〕

〔古語拾遺〕殿祭門祭者、元太玉命供奉之儀、齋部氏之所職也、雖然中臣齋部共任神祇官、相副供奉、故宮内省奏詞稱將供奉御殿祭、而中臣齋部候御門、至寶龜年中、初宮内少輔從五位下中臣朝臣常、恣改奏詞曰、中臣率齋部候御門者、彼省因循、永爲後例、于今未改、所遺五也、

〔古語拾遺〕逮神武天皇東征之年、〇略　中建都橿原、經營帝宅、仍令天富命（太玉命之孫）率手置帆負、彦狹知二神之孫、以齋斧、齋鉏、始採山材、構立正殿、（所謂底都磐根宮柱布都之利立、高天乃原而搏風高知之、古語、正殿也、）御戸排開皇孫命乃美豆乃御殿乎造本仕也、故其裔今在紀伊國名草郡御木麁香二鄉、（謂二之麁香一、採材齋部所居、謂二之御木一、造殿齋部所居、謂二之麁香一是其證也、）又令天富命率齋部諸氏、作種種神寶、鏡玉矛盾木綿麻等、楯明玉命之孫、（古語、美保伎、）造御祈玉、（古語、言二祈齋一也、）玉言二其物既備、天富命率二諸齋部一、捧持天璽鏡劍、奉安正殿、并懸二瓊玉一、陳二其幣物一、殿祭祝詞、（其祝詞文在二於別卷一）

〔延喜式八祝詞〕大殿祭

夜女（能伊須須伎、伊豆都志伎事無久、平氣久安久奉レ護留）神御名乎白久、屋船久久遲命（是本屋船豐宇氣姫命靈也）

氣姬命（登、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋、以二御名一乎波奉レ稱利氏、○類也、置二於戶邊一、乃以レ米散二屋中一之、中略）

詞別白久、大宮賣命（登御名乎申事波皇御孫命乃、同殿能裏爾塞坐氏、參入能出入能選比所知、志、神等（能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志、古語云、坐氏、○下略）

祭日

〔年中行事（賀茂氏保隆所傳、）六月十二日曉大殿祭事

十一月卯日新嘗祭

同曉還御以前大殿祭事（雖レ無二行幸一猶祭レ之）

十二月十二日曉大殿祭事

〔年中行事秘抄六月〕十一日月次祭事

神今食事

大殿祭事（曉奉二仕之一、神祇官、）

〔年中行事秘抄十二月〕十一日月次祭事

神今食事

大殿祭事

〔拾芥抄（中末年中行事）〕六月十一日大殿祭

十一月中卯日大殿祭

祭式

〔儀式一〕大殿祭儀

神祇官以レ筥四合（一合納レ玉、一合納二切木綿一、一合納二酒瓶一、）居二八足案二脚一、令二神部四人一舁レ之、中臣忌部官人宮主史生神部等（著二木綿鬘一、木綿襷、）左右相分前行、御巫列二於案後一、至二延政門外一、置二案於簀子上一、（掃部寮預設レ之、）大舍人叫レ門如常、闈司奏云、大殿（比賀保能）事申賜乎止、宮內省官姓名叫レ門故爾申、勅曰令レ申、闈司傳宣云、姓名乎令申、宮內省進就レ版奏云、大殿（比賀保能）供奉乎止、神祇官姓名候止申、勅曰喚レ之、宮內省稱唯還出喚、神祇官稱唯、中臣忌部官人、著二木綿鬘一、木綿襷一、立二案前一、直進二御殿一、先是御巫等入二自宣陽門一、候二於內裏一、隨レ案共入至二殿東簀子一敷上、御巫等執レ筥、中臣忌部御巫等、以レ次入二仁壽殿一、（御巫一人進二案宸殿散米一、忌部執レ玉懸二殿四角一、次御巫等散二米酒切木綿於殿內四角一退出、中臣候二仁壽殿南一、忌部向二巽徵聲一讀レ祝詞一訖至二於浴殿一、懸レ玉於四角、次懸二廁殿四角一、御巫等散二米酒一如レ初、自二陰明門一退出、次宮主引二神部一至二炊殿一、懸二木綿一、散二米酒一訖於二神祇官賜一レ祿、但御巫料送二內侍司一、令レ賜、（神今食、大嘗會等祭前者不二奏聞一、亦無二賜祿一、）

〔延喜式四時祭〕大殿祭（中宮准レ此）

右神今食明日平旦、以レ筥四合（盛レ玉、一合盛レ米、一合盛二切木綿一、一合盛二酒瓶一、）置二一案一、八足案二脚一、令二神部四人一執、著二木綿鬘襷一、中臣忌部官人、宮主史生神部等左右前驅、御巫列二於案後一、至二延政門一置二案於門前一、大舍人叫レ門、宮內省官人退出召二中臣一稱唯、即兩官人著二木綿鬘一、（忌部更加二立案前一、直進二御殿一、先是御巫等自二宣陽門一入候二於內裏一、共入至二殿東簀子一敷上、即御巫等各取レ筥、中臣忌部御巫等以レ次入二御殿一、忌部取二玉懸二殿四角一、御巫等散二米酒切木綿殿內四角一退出、中臣侍二御殿南一、忌部向二巽徵聲一申二祝詞一、畢次至二湯殿一懸二玉四角一、次懸二廁殿四角一、次懸二御厨子所四角一、次懸二紫宸殿四角一、御巫等以レ次散二米酒一、（御巫一人進二承明門一散二米酒一、）如レ初、自二陰明門一退出、次引二宮主忌部一至二御炊殿一懸二木綿一、散二米酒一、如レ初畢內藏寮賜レ祿有レ差、（數見二內藏式一、）還至二本司一、引使部已上就二宮內省一解齋所、（事見二儀式一、）

祝詞

〔江家次第七六月〕大殿祭（藏人一人相副令レ奉二仕之一、）

神祇官人、（中臣忌部、）先石灰壇、次經二御帳一、後奉二仕夜御所一、次朝餉、次御湯殿、次御樋殿、次御膳宿、次御厨子所、次南殿、御膳宿散供畢插二土錢一、（以レ絲貫レ之、）

〔延喜式八祝詞〕大殿祭

高天原爾（坐須）神留坐皇親神魯企神魯美之命以（氏乎）奉二持賜天一、言壽（古語云、許止保企、言志壽詞、如二今壽觴之詞一、）宣久、皇（我）宇都御子皇御孫之命、此乃天津高御座（爾）坐氏、天津

日嗣乎萬千秋乃長秋爾、大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久所知食止、古語云、志昌志女須、志言寄奉賜比、以二天津御量一、事問之磐根木乃立知草能可岐葉乎言止氏、天降利賜比志食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎、今奥山乃大峽小峽爾立留木乎、齋部能齋斧乎以伐採氏、本末乎山神爾祭氏、中間乎持出來氏、齋鉏乎以齋柱立氏、皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿古語云、阿良可、汝屋船命爾天津奇護言乎、古語云、久須志伊波比許登、以氏言壽鎮白久、此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美、下津綱根古語、番繩之類謂二之綱根一、波府虫能禍無久、高天原波青雲乃靄久極美、天乃血垂飛鳥乃禍無久、堀堅多留柱桁梁戸牖乃錯比、古語云、動鳴事無久、引結磐葛目能緩比、取葺許波佐草乃噪岐、古語云、蘇岐、無久、御床都比能佐夜伎、夜女能伊須須伎、伊豆都志伎事無久、平氣久安久奉護留神御名乎白久、屋船久久遲命、是木靈也、屋船豐宇氣姬命登、是稻靈也、俗詞、宇賀能美多麻、今世產屋、以二藁席一圍之類也、御名乎白久、奉稱利氏、皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利、五十槻御世乃足寸志御世爾田永能御世止奉福爾依氏、齋玉作等我持齋波利持淨麻波利、造仕禮留瑞八尺瓊能御吹伎乃五百都御統乃玉爾、明和幣古語云、曜和幣乎附氣氏、齋部宿禰某我弱肩爾太繩取懸氏、言壽伎鎭奉事能漏落武事乎波、神直日命大直日命聞直志見直志氏、平久安氣久所知食登白、

詞別白久、大宮賣命登御名乎申事波、皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氏、參入罷出人能選比所知志、神等能伊須呂許比阿禮比坐乎、言直志和志、古語云、坐氏、皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流、比禮懸伴緒緒懸伴緒乎手躡足躡古語云、麻我比、不レ合爲氏、親王諸王諸臣百官人等乎己乖乖不レ合在、邪意穢心無久、宮進米爾進宮勤爾勤之米、咎過在乎波見直志聞直坐氏、平久安氣久合二仕奉一坐爾依氏、大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久白、

〔延喜式一四時祭〕大殿祭中宮准レ此

絲四兩、安藝木綿一斤、筥四合、各徑一尺五寸、米四升、酒二升、瓶一口、盞二口、案二脚、

臨時大殿祭

〔延喜式三臨時祭〕行幸時祭、若不レ經レ宿不レ祭、

大殿祭

安藝木綿八兩、八足机一脚、米酒各一升、筥一合、瓼坏各一口、

〔新儀式四臨時〕天皇遷御事、國史、外記日記、今々可レ合、御日記并所日記抄等一、

從二陣外一可レ還二御本宮一前七八日、遣二使伊勢大神宮幷十一社一奉レ幣、告以遷二御內裏一、〇中略前一日、上卿召二仰行幸事一、今夜神祇官依レ例奉二仕御殿祭一、

〔延喜式五齋宮〕大殿祭野宮伊勢齋宮准レ此

絲二兩、安藝木綿七兩、米酒各二升、瓶一口、筥四合、小坏二口、案二脚、高三尺給祿中臣忌部各絁二匹、宮主一匹、執レ案神部四人、各給二調布一段一野宮給二二人一、

〔江家次第十二齋王卜定事〕

大殿祭家司一人捧二脂燭一、前行、神祇官二人、

懸二玉御所四角柱一、御湯殿進物所等也、或於二御湯殿後一祭、御則然而件事無レ之、其御湯殿、幷進物所等皆四角懸レ之、

〔江家次第十七立后事〕

神祇官奉二仕大殿祭一或先レ是奉二仕之一、宮司一人引道可レ令レ奉レ仕、

〔神祇官年中行事臨時〕一神社行幸

大殿祭、內宮內頭、中臣忌部祭レ之參勤也、

一御方違行幸

大殿祭中臣忌部祭レ之、還御之時於二內裏又有一レ之、

一朝覲行幸

大殿祭中臣忌部勤之
一齋宮卜定
大殿祭（中臣忌部）祭之
一齋院卜定
大殿祭、中臣忌部參勤之、
一本官差進使事（差文公文史生書上之、長官加署、）
踐祚
當日大殿祭
宮主已上本官差進之、
御卽位行幸
大麻　大殿祭
大嘗會日
大殿祭（中臣忌部）

〔本朝世紀〕久安五年二月五日戊午、今夕天皇（衛）近行幸八條殿、依御方違也、（略）中今日中少辨有故障、仍藏人頭右大辨資信朝臣行大殿祭事、希代事也、

〔顯廣王記〕長寬三年（永萬元年）○八月十六日壬辰、裏書云、今日依大衆之亂、可有行幸六條烏丸大納言入道家（海立）橋而臨剋限停止了、（略）中抑昨日藏人辨消息云、諒闇穢中有行幸之時、大殿祭有否事、召問官人、可被示仰了、召問之處、明友申云、

久安四年十二月八日、高陽院姬宮御非常、同十一日神今食大殿祭被停止了、
同六年九月廿日、坊門殿御非常、依后宮御祖母、十一月中卯新嘗會、幷鎭魂大殿祭等被停止了、

久壽三年正月日、權中納言經定卿薨、依爲春宮御外戚、二月十六日田中殿御所有行幸、隨有大殿祭、中臣親隆忌部明友參陣、御服日數內之由申上之處、今朝御除服了、宮主兼盛下向伊勢國了、依召代官兄神祇祐兼友仍參勤御祓了、右不可有憚之由被仰下、有大殿祭、

久壽二年鳥羽院崩御、御忌日諒闇之間、當院行幸東三條殿、依催忌部明茂所參入、依諒闇幷穢中不可有大殿祭、仍忌部退出了、追被仰下云々、註此由觸申藏人辨了、

〔續史愚抄（後水尾）〕元和十年（寬永十一年）○十一月廿八日己卯、女御源朝臣和子（十九歲、右大臣忠前公女）冊爲中宮、（略）中有大殿祭、（於中宮御所歟、祭主神祇權少副友忠奉仕云、）

〔鹽尻十〕二條亭行幸次第　二條第行幸、御上洛之節、寬永三年九月六日、前一日儲御所大殿祭、祭主神祇權少副大中臣朝臣友忠勤仕之、

〔基量卿記〕延寶三年十月七日、祭主景忠朝臣入來、今度新造御所行幸、獻御麻大殿祭等、神祇大夫卜部兼長競望、依款狀一通持參於家君（基賢）○東園披見之間、爲後世書付者也、

大殿祭者、大中臣氏之所掌、祭主累代之家勤也、近者
一寬永元年十一月廿八日、女院中宮宣下之時、大殿祭、祭主神祇權少副友忠勤之、（略）中
十四日、大中臣氏奉進御麻事、（略）中
凡大殿祭幷奉進御麻之義、祭主大中臣氏累代之勤、唯授一人之事、雖爲同姓、不傳庶流者也、尤異姓之人非所掌以上、

延寶三年十月日　　景忠

十一月六日、依當番參內、今日行幸御沙汰有之、關白（鷹司房輔）○左大臣（九條尙實）○右大臣（近衞基熙）○內大臣（近衞房）○武家傳奏五人之老輩等伺公、先去月令言上、祭主大殿祭獻御麻等之事、神祇大副卜部兼魚雖令競望、大殿祭獻御麻等之事、必定大中臣之沙汰也、卜部氏無所據之由、今日御沙汰決定、故祭主神

祇權少副大中臣景忠朝臣被仰出、抑此義先日以後度々及沙汰之處、兎角大中臣家業之由先例度度也、於下部者、先年新院〇後西院遷幸之時、下部兼長勤之、此節祭主依幼年、兼長へ被仰出了、以其例今度競望之處今日決定、重而不及所存由也、

〔續史愚抄 中御門〕享保十三年七月廿八日丁丑、於春宮坊弘御所前庭有大殿祭、神祇少副壬長朝臣伊勢大宮司也、祭主和忠朝臣重褒故也、奉仕、奉行宮司亮實全朝臣、

〔續百一錄〕元文五年十月廿三日、來廿六日大殿祭被行候、其節服者之輩、南殿邊無徘徊之樣可覺悟之者、

〔大江俊章記〕元文五年十月廿五日、明日大殿祭御見物所、紫宸殿北庇中央之間、如大殿祭、紫宸殿母屋中央之間祭主勤仕、是來月就新嘗會、以件殿依可被用神嘉殿代歟、

〔公卿補任 光格〕寛政二年十一月十六日、新造內裏大殿祭、奉行神定朝臣、

〔公卿補任 孝明〕安政二年十一月十五日甲戌、於新造內裏被行大殿祭、奉行光愛朝臣、

廿六日、辰刻有

古事類苑

神祇部三十一

郊祀

名稱　五六七
祭祀例　五六九

雜祭

宮咩祭　五七二
宮咩祭祭日　同
宮咩祭神供　同
宮咩祭祭文　五七三
宮咩祭例　五七五
宮咩祭雜載　五七六
月待日待　五七八
代待　五八四
酉待　五八五
巳待　五八六

初卯　五八七
初午　同
甲子祭　五九三
十日惠美須二十日惠美須　五九五
吹革祭　五九六
棟上祭　五九九
箭祭　六〇八
雷公祭　六一二
風神祭　六一四
鎭祭　六一五
井祭　六一六
產井祭　同
御川水祭　同
高山祭海若祭　六一七
山神祭　同
田祭　六一八
遣外國使祭　同
外國使送迎祭　六二〇
御靈會　六二一
紫野今宮祭　六二二
紫野今宮夜須禮祭　六二四
新日吉祭　六二五
活速祭死杖祭　六二八
太秦牛祭　六三五
筑摩祭　六三六
鵜坂祭　六三八
和布苅神事　六四〇
淺草三社柏板祭　六四一
王子神社柏板祭　六四二

淫祀 淫祠附入

淫祀　六四三
禁淫祀　六四六
毀淫祠　同
論淫祀淫祠　六四七
雜載　六四八
　六五六

目四

古事類苑

神祇部三十一

郊祀

名稱

郊祀トハ、郊野ニ圓丘ヲ築キテ昊天ヲ祭リ、其祖ヲ天ニ配祀スルヲ云フ、故ニ又圓丘祭トモ云フ、支那ノ祭法ニ仿フナリ、我邦ニ於テハ、神武天皇四年、天神ヲ鳥見山中ニ郊祀スルコト見エタレド、固ヨリ支那ニ仿ヒシニアラズ、其支那ノ法ニ依リテ郊祀ヲ行ヒ給ヒシハ、歴朝ノ間ニ於テ、桓武文德ノ兩天皇ノミ

〔伊呂波字類抄加疊字、郊祀（カウシ）〕

〔古今神學類編十五宗廟〕郊祀

按ニ、本朝ニ於テ、郊祀明堂望秩宗類等ノ諸祭、五嶽等ノ沙汰アル事ハ、本致禮奠共ニ少同大異ノ事ナレド、唯是モ漢事ヲ假借シテ文字ヲ寄セ、聊其意ヲ曉ン爲ニ、國史ニモ往々見ユ、（中略）郊祀ノ事相似タレバトテ、必シモ異朝ノ禮ヲ移スニ非ル證ハ、此文字始テ神武天皇祖祭ノ事ニ假用シニモ可ㇾ知、此朝ノ神祭ニ、始テ自出ノ天神ヲ祭リ、大孝ヲ以テ神恩ニ報ントノ禮奠郊原ニ於テシ給儀禮、彼異朝ノ郊祀、南郊ニ於テスルニ彷彿セル故ニ、國史ヲ修スルノ時、此文字ヲ寄タル事ト可ㇾ知、且又靈時ノ字ヲモ假用テ相似タルヲ示スト云ヘドモ、和訓ハマツリノニハト附タレバ、是亦必ズ異朝ノ祭ニ符合トモ亡定、總テ此例ハ國事ニ於テ多端也、カヽル辨知ナキ、則國朝ノ祭奠半ニ過テ、佗法ノ如ク心得ル說多シ、想フニ夫レ先考ノ神靈ヲ饗シ、推シテ天

神ニ配享スルノ禮ナレバ、和漢萬邦、共ニ同一理ニ歸セン事ハ更也ト云ヘドモ、方域殊致ノ習義、豈混同スベキヤ、○中略　夫郊禘ハ大祭徴妙ノ理リヲ顯シ、其源意ノ亡、測事ハ、仲尼既ニ指掌ノ諭シニ示シ給ヒキ、程子曰、天子曰禘、諸侯曰給、其禮皆合祭也、禘者禘其所自出之帝、爲東向之尊、其餘皆合祭於前、此謂禘、予按ニ相嘗祭此心アリ、郊トハ神ノ交接スル謂レニシテ、南郊ニ於テ地ヲ掃ヒ天ヲ祭ルニ、我ガ自出ノ元祖ヲ以配シ、禘ハ宗廟ニシテ、天帝ヲ祭ルニ是モ始祖ヲ以配ストナレバ、報本ノ至誠、天理流行、天人ノ間ニ不絕ノ玄妙、其理リニ於テハ聖賢ノ外、孰カ得テ可辨知乎、而ルヲ想フニ神武天皇、鴻荒草昧ノ世ニ於テ、天地ノ賾ヲ觀察シ給ヒテ、大孝ノ神奠ヲ始メ給ニ、暗ニ異朝ノ郊祀ニ符合セシトノ記文ヲ見ルニモ、國朝神道ノ玄徴言語筆端ノ盡スベキ事トモ覺侍ラズ、然レドモ神武紀ノ外、史中ニ郊祀ノ沙汰ヲ不見、唯是事ノ相近キヲ以、文字ヲ寄タル事明ケシ、

〔禮記註疏二十六〕郊之祭也、迎長日之至也（言迎長日者、建卯而晝夜分、分而日長也、○中略）大報天而主日也（大猶徧也、天之神曰爲尊、兆於南郊、就陽位也、日太陽之精○中略）掃地而祭、於其質也、器用陶匏、以象天地之性也、（觀天下之物、無可以稱其德、於郊故謂之郊、牲用騂尚赤也、用犢貴誠也、尚赤者周也○中略）郊之用辛也、周之始郊、日以至、（言日以周郊天之月而至、陽氣新用事、順之而用辛日、此說非也、郊天之月而日至、魯禮也、三王之郊、一用夏正、夏正建寅之月也、此以建子之月郊天、示先有事也、用辛日者、凡爲祭天於圜丘之事、是以建子之月、冬至祭圜丘之禮、盡在魯、因推魯禮、以言周事、○中略）萬物本乎天、人本乎祖、此所以配上帝也、（言倶本可以配）郊之祭也、大報本反始也、

〔文獻通考十二郊祀宗廟考〕鄭氏註祭法曰、禘郊祖宗、謂祭祀以配食也、此禘謂祭昊天於圜丘也、祭上帝於南郊曰郊、祭五帝五神於明堂曰祖宗、祖宗通言耳、有虞氏以上尚德、禘郊祖宗、配用有德者而已、自夏以下、稍用其姓氏先後之次、有虞氏夏后氏宜郊顓頊、殷人宜郊契、郊祭一帝、而明堂祭五帝、小德配寮、大德配衆、亦禮之殺也、正義曰、鄭玄以祭法有周人禘嚳之文、遂變郊爲祀、感生之帝謂東方

青帝靈威仰、周爲木德、威仰木帝、言以后稷配蒼龍精也、王肅駁之、謂漢世英儒、自董仲舒劉向馬融之倫、皆言周人祀昊天於郊、以后稷配、無如玄說配蒼帝也、周頌思文后稷、克配彼天、昊天有成命、郊祀上帝、則郊非蒼帝、通儒同辭、肅議以爲惟郊是祭天、禘者宗廟之殷祭、郊即圜丘、圜丘即郊、以所在言之謂之郊、以所祭言之謂之圜丘、於郊築泰壇、以丘言之、本諸天地之性也、祭法所謂燔柴於泰壇、即圜丘也、郊特牲曰、周之始郊、日以至、此言冬至祭圜丘、而謂之郊者、以圜丘在郊故也、

〔日本書紀三神武〕四年二月甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天神、用申大孝者也、乃立靈時於鳥見山中、其地號曰上小野榛原下小野榛原、用祭皇祖天神焉、

〔續日本紀三十桓武〕八延曆四年十一月壬寅、○十日、此日冬至、祀天神於交野柏原、賽宿禱也、

〔續日本紀三十桓武〕九延曆六年十一月甲寅、○五祀天神於交野、其祭文曰、維延曆六年歲次丁卯、十一月庚戌朔甲寅、孝子皇帝臣謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩敢昭告于昊天上帝、臣恭膺睠命、嗣守鴻基、幸賴穹蒼降祐、覆燾騰徽、四海晏然、万姓康樂、方今大明南至、長晷初昇、敬采燔祀之義、祇修報德之典、謹以玉帛犧牲粢盛庶品、備茲禋燎、祇薦潔誠、高紹天皇（仁○光）配神作主、尚饗、又曰、維延曆六年歲次丁卯、十一月庚戌朔甲寅、孝子皇帝臣謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩敢昭告于高紹天皇、臣以庸虛、忝承天序、上玄錫祉、率土宅心、方今履長伊始、肅事郊禋、用致燔祀于昊天上帝、高紹天皇慶流長發、德冠思文、對越昭升、永言配命、謹以制幣犧齋粢盛庶品、式陳明薦、侑神作主、尚饗、

〔唐書十禮樂〕凡歲之常祀二十有二、冬至、正月上辛祈穀、孟夏雩、祀昊天上帝于圜丘、

〔文德實錄八〕齊衡三年十一月辛酉、遣權大納言正三位安倍朝臣安仁、侍從從四位下輔世王等、向後田原山陵、（仁○光）告以配天之事、策命曰、天皇大命掛畏平城宮（閑天下所知閑志倭根子天皇御門閑申賜閉止）奏、今月廿五日、河內國交野乃原（閑昊天祭爲止志掛畏御門乎主止定奉天可祭事乎畏美畏美申

賜久止奏、壬戌大祓於新成殿前、諸陣警戒、帝進出庭中、大納言正三位藤原朝臣良相跪授郊天祝板、左京大夫従四位下菅原朝臣是善捧筆硯、帝自署其諱、訖執班北面拜天、乃遣大納言正三位藤原朝臣良相、右大辨従四位上清原眞人岑成、左京大夫従四位下菅原朝臣是善、右中辨従四位上藤原朝臣良繩等、向河内國交野郡柏原野、設瘞習禮、祠官盡會、甲子、〇二十五日有事圓丘、夜漏上水一剋、大納言藤原朝臣良相等歸來獻胙、

〔本朝續文粹二記〕朔旦冬至詔

詔、珠緯連輝、明王受迎祚之祥、銅管正律、哲后顯履長之慶、是以圓丘迎日、賀南至於一隅、靈臺觀雲、懷子來萬國、誠是上協天符、下從人望者也、〇略中

嘉承二年十一月廿九日　御暨

雜祭

宮咩祭ハ、不祥ヲ退ケ幸福ヲ求ムル爲ニシテ、正月十二月ノ初午ノ日ヲ以テ之ヲ祭ルコト普通ナルガ如シト雖モ、此外ニ行フコトモアリ、其祭神ハ高御魂命、大宮津彦、大宮津姫、大御膳津命、大御膳津姫及ビ笠間ノ神ノ六柱ナリ、供物此數ニ從フ、又此男女ノ神ノ形ヲ作リテ、染絹ノ衣ヲ著セシム、而シテ宮主ノ座ハ斗ヲ伏セテ其上ニ砥ヲ置ク、宮主之ニ尻ヲ懸ケテ祭文ヲ讀ムナリ、

月待、日待、代待、酉待、巳待ノ待ハ、マツリト云フ語ノ約マリテマチト爲レルナリ、卽チ月待ハ月ヲ祭リ、日待ハ日ヲ祭リ、代待ハ、人ニ代リテ祭リ、酉待ハ（俗間酉ノマチト云フ）十一月酉日ノ鷲神社ノ祭祀、巳待ハ己巳ノ日ニ辨才天ヲ祭ルナリ、庚申ノ日三尸ヲ祭ルヲ庚申待ト云フ、方伎部ニ收メタリ、初卯ハ正月初卯ノ日ノ祭ニシテ、攝津國住吉神社、江戸本所妙義社ニ於テシ、初午ハ二月初午ノ日ヲ以テ稻荷神ヲ祭リ、甲子祭ハ、甲子ノ日ヲ以テ大國主神ヲ祭ルヲ云フ、十日惠美須ト二十日惠美須トハ、俱ニ惠美須神ヲ祭ルモノニシテ、一ハ正月十日ヲ以テシ、一ハ十月二十日ヲ以テス、十月二十日祭ヲ又惠美須講トモ云フ、酉待ヨリ以下ハ、皆祭日ヲ擧ゲテ之ヲ稱スルモノナリ、」吹革祭ハ、鍛工ノ祭ル所ニシテ、棟上祭ハ工匠ガ人ノ爲ニ家屋ヲ新築シ、上梁ノ時ニ祭ル所ナリ、箭祭ハ、武人初メテ狩獵シテ獲ル所アルニ由リ、山神ヲ祭ルヲ云フ、又矢開トモ云フ、雷公祭風神祭ハ、豐稔ヲ祈ルニ外ナラズ、

鎭祭ニハ多種アリ、水神ヲ鎭メ、御在所ヲ鎭メ、山陵及ビ山岡崩壞ヲ鎭メ、宮地ヲ鎭ムル等アリ、

田祭ハ、春時ニ田ヲ祭ルヲ云フ、此日鄕飮酒ノ禮ヲ行フ、田神祭ハ、十一月丑日ニ行フ、田祭ノ

餘風ナルベシ、凡ソ此篇ニ載セタル所ハ此ニ止ラザレドモ煩シケレバ一々辨ゼズ、

宮咩祭

〔伊呂波字類抄 見諸社〕宮咩奠（ミヤノマツリ）　院宮諸家祭之、正月十二月初午日、

宮咩祭祭日

〔執政所抄 上正月〕上午日宮咩奠事

〔政事要略二十九〕年中行事

十二月午日宮賣祭事 事見正月、依日不定、只付二月終、

〔東宮年中行事十二月〕かみのむまの日みやなべのまつりの事 同二正月一

宮咩祭神供

〔執政所抄 上正月〕上午日宮咩奠事

供物六前 在高坏、正目折敷、前別四坏、飯餅魚菜、

餅六坏 坏別六枚、坏別上置二橘一果一、

飯六坏 坏別一升、

菜六坏 合盛大根、蔓菁、芹、薤、紫菜、芥子、伴六種合盛、坏別上置二橘一、

魚六坏 生鯛、鱒、鰒、鯉、堅魚、伴六種合盛、坏別上置二蠣一、

已上料米三石、下家司任二御所宛旨一勤之、

北政所六前色目同レ上之

繖料

四丈絹一匹 各二匹 綿子二枚 各六枚

糸二兩 各口兩

納殿請之

裝束男女形五具 自二御臺盤所一下レ給之一

北政所同レ之

八節竹五本

砥一果

斗一

已上旬出納進レ之

件事政所厨女請勤レ之、張蓋懸綿糸人形、連二八節竹一備二東向一御妻戸前一、家令存而著二衣冠一、以二祭文一祝申、但近代政所加二催其期一、殿下御方給二備藏人所一、北政所御方給二備侍所一、藤氏懸レ手之後給二松出納一、令レ堪二請所一之、

〔執政所抄 下十二月〕上午日宮咩奠事 料米三石

供物 下家司所課

甲女形、自二御臺盤所一下給、

繖料 納殿

已上如二正月色目一

八節竹

砥一果

斗

已上旬出納進レ之

件事、家令著二衣冠一、以二祭文一祝申如レ常、

○按ズルニ、執政所抄ニ載スル所ノ正月十二月ノ宮咩祭ハ、其年代ヲ記セザレドモ、同書ニ載スル所ノ祭文ニ、維天治二年トアルニ據レバ、此正月十二月ハ、共ニ此年ノ事ナランカ、

宮咩祭祭文

〔拾芥抄 上本世間不靜時方〕宮咩祭文

維永承某年歲次某月壬午、年ガ中ニ月遠擇ビ、月ガ中ニ日ヲ擇ビ、日ガ中ニ時ヲ擇テ、掛畏支宮咩五柱笠間ノ廣前ニ、從四位上行官姓名恐美恐見モ申給ク、絹ハ乍編綿ハ乍結、進物ハ高坏ガ彌高ニ、飯ノ於毛利加ニ、清酒ノ早ニ、堅酒ノ堅ニ、橘ノ忽ニ、餅ノ持テ榮ニ、鯛ノ平ニ、鱒ノ彌益益ニ、鰯ノ好ミ好ニ、鮑ノ片思、蠑ノ掻寄テ、薺ノ庭佐良須、嚴ク聞食シ受納給テ、壽長ク身全シテ、天地不祥、内外ノ惡事、未萌以前ニ、兼ハ遠ク拂セ退ケ給テ、官爵如意ニ叶シメ給テ、萬世ニ子孫繁昌ノ門ト有シメ、夜守ト日守ニ、常磐堅磐ニ守リ幸ヘ給ヘト恐ミ恐申ス、

【玉手繦】拾芥抄に、宮咩祭文と云を載られたる其文に、○中略宮咩四柱笠間乃廣前（中略大宮咩神に配せ祭る神三柱ありて、其を總て笠間神と申すに云を見るべし、四柱を五柱とあるは誤なり、）○中略猶下とあり、）○中略さて此祭文に、宮咩、四柱笠間乃廣前とあるに就て考ふるに、藤原實方朝臣の集に、あめに坐す笠間の神の無りせば舊にし人をいかで問まし、と詠る歌あり、○中略右の祭文に思ひ合すれば、宮咩神と餘に三柱を合せて、笠間神と申すことと知られ、然る疎き中を結び和する功の有こと、大宮賣命の事によく符へり、斯て宮咩四柱と申せるは、神名式に、造酒司坐大宮賣神社四座、並大、月次新嘗、とある社を申せり、（文德天皇紀、齊衡三年九月の下に、造酒司酒甕神、從五位下大邑刀自小邑刀自神等、並預二春秋祭一とあるは、即相殿の三柱を云ひ、宮咩神を合せて四柱なり、）然れども此を笠間神とも申す由は、未思ひ得ず、（中略）彼祭文の四柱を五柱とある本をも捨すて、後人なほ能く考ふべきなり、

【執政所抄下十二月】宮咩奠祭文

維天治二年歲次乙巳、某月吉日乃良辰、金銀乃花開留時、掛毛畏き高御魂命、大宮津彦、大宮津姫、大御膳津命、大御膳津姫、五柱乃皇大神乃廣前ニ、（カタテマツシノ）中立申乃笠間乃大刀自爾申給久、前太政大臣從一位藤原朝臣○忠實恐畏毛申給久、年乃中爾月遠擇比、月乃中爾日を擇ビ、日乃中爾時を擇氐、獻給布獻物ハ、御飯御酒綿布、津々志與呂比仁、御酒ハ瓶乃邊高知リ瓶乃腹滿知雙、山野の物ハ甘菜辛菜、青海の原の物ハ鰭の廣物鰭の狹物、奥津海藻邊津海藻仁至天、雜々物を如橫山仁置高成天、御服衣蓋等を備儲氐進留事を平久開食給倍、皇乃朝廷仁令奉仕牟事ハ、御飯乃於茂良カニ、餅乃持榮給比、清酒乃速仁、堅魚乃堅良加仁惠慈給比、鯛乃平久、鰯魚乃好仁好美（ヨシ）鎰乃吉名を授給比、蠑乃加支寄て、堅魚乃加知仁加知、鮑乃加太與利仁、蠑乃加木登利給比、鱒乃彌益々爾、高菜の高位を授給比、大根乃大奈留幸を授給比、和布乃仁支良加仁、薺乃奈津奈津志支、土器乃加和羅加仁、高坏乃彌高高爾、橘乃立榮給比、宮進女仁進給比、宮急仁急キ給比、常磐堅磐仁伊ヤ高仁伊ヤ廣仁、夜乃守日乃守仁守令幸女給倍止申、

言別氐申久、大和歌讀申佐牟、

百國乃、美乃乃白綿、安具太都支、但後乃句ハ正一位仁上給倍牟時仁讀申牟ヒ、

【水左記】承保四年十二月六日壬午、今夜有二宮咩事一、先例服者祭之、仍所企也、

【執政所抄下十二月】宮咩祭

清實朝臣記、寬治七年正月四日壬申、初有二此御祭一、殿下○藤原師實著二御衣冠一、（依二彼始一御祭也、又其座是依二彼始一行也、）一所料高坏物五前、衝重物一前、衣笠二具、比々奈七人、（男形三人、女形三人、召一人、）如此之物等所二相具一也、比々奈七人於二大盤所一被レ調、於二衣笠二具一政所雜仕女所調進也、

【殿曆】永久四年正月五日、○庚午今夜內府○忠通藤原始行二宮咩祭一、東三條寢殿東面妻戸也、（辰巳角）內府著二直衣冠一見之、始祭時會之云々、仍令會也、件祭于今遲々、返々不便歟、

【執政所抄下十二月】宮咩祭

永久四年十二月十一日丙午、有二此儀一、無二御出一、於二三條殿一於二東西妻戸一氐先政所立二物具一、次置二砥幷斗一於簀子上、次予參上讀二祭文一畢退出、次恪勤者取二出物具一了、次北政所御料居之、予亦讀二祭文一了、著二衣冠一勤之、

【知信朝臣記】天承二年○長承元年十二月八日甲午、宮咩祭也、不レ入二分配公事一也、晚頭侍所司信親率侍等

調供祭物、其儀東面妻戸（不レ開、本自レ於二東向一妻戸一被レ行二此儀一故實也、）左右柱下、寄立竹葉各一枝、付二色々繒幷男女形等一（男形、帶二東件人形一、料色々染絹切等、雖レ非二例日一、召二御服所一、進二大盤一、所二女房一、調下給也、）弘庇迫二長押下一、南北妻敷二葉薦一（別納之、）一枚、居二饗六前一、（五前折敷高坏一前、衝二川一樣器一、）重、牛飼料云々、已上、饗饌別納所課也、）其前東去四許尺伏レ斗、其上尻置二砥一果一爲二宮主座一、廳官召使等取二松明一列二立砌頭一、次宮主著座讀二祭文一、事了撤レ之、別納所相折云、宮咩御祭料米三石、入夜神司供二御贖物一給レ祿、如レ去月八日、

〔兵範記〕保元三年正月九日庚午、裏書云、殿下（藤原忠通）宮咩祭如レ例、右大臣（藤原基實）殿御方初有二此儀一、自二御所一調給人形、政所備二祭物一、家令大舍人允紀宗頼爲二祝師一、

〔後三條相國抄〕家内恒例臨時篇目

一宮咩祭、十二月正月初午日有レ之、其儀主人垂二公卿座御簾一（此時許レ垂レ之、）室家同座之侍所司（納言以下時六位所司、大臣之時、五位所司、）於二寢殿東面妻戸前一（西禮ノ屋一面妻戸前、）縁、西斗量（稱レ米斗也、）ヲウツブセテ、其上ニ尻ヲ懸テ、北面ニ天讀二祭文一、（祭文同二書入一、）讀了、退去、次自二靑侍下蔀一至二五位諸大夫一、入二中門廊車寄戸一、於二廊中一、饗二廻雲之袖一（稱二万歲樂一、）舞之、各一人、舞了各進出又舞之、次諸大夫、祭物直會ヲ折敷高坏ニ居テ、供二簾中上蔀女房陪膳一也、侍所司著二衣冠一、自餘諸大夫侍等布衣也、公卿座前ニ下家司立明スル也、

〔延喜式（二十八兵部）〕凡伊勢齋宮寮宮、賣祭馬三匹、大祓馬八匹、以二下總國牧馬一送充、

〔袋穗物語（圖讀上）〕そん王の君、藤つぼに、ゐるゆふ暮にかはなれて、くろき水おけのおほきやかなる、よついつゝかさねて、女ともさしいれていぬ、つぼねの人々あやしき物かな、御せんにかゝる物をさしいれていぬるとてみれば、おほきなるくぼてを、しろきくみしてゆひて、いつゝさしいれたり、とりいれたれば、ほそはをけのおほきさなり、わけてみれば、ひとつには、ねりたるきぬをいひもりたるやうにいれたり、いまひとつには、あやをおなじやうにいれたり、いまひとつには、かつをさけなどのやうにてぢんいれたり、くぼてのふたになま女のてにてげふならむからうじて、一つづゝのりつるひらでくぼてには、なをか、

ねぎこともきかずなりにしかさなには神のおほかるくぼてとりくゝ、と有をそん王の君たれば、かれいの人のすさびにこそあめれ、ひさしくかやうの事なかりつるをとのたまふ、めのとさとにおはしまするほそをおぼしたるなめりといふ、君はいかでかこれが返事聞えむと思へど、さるべき事もをりもなければ、おまへにとりいでゝ御らんせさすれば、いときよげなる神のおろしかなどの給、かつをなどくばり、ついぼくぼてはもたり、

〔實方朝臣集〕ためたふの辨、なかよりが家にたえそめしとし、ことしばかりとて宮のべのうへの御ぞのはし、らひたりけるけしきをみて、をりうごとに、

ゐめにまするかさまのかみのなかりせばふりにし中をいかでとは、まし

〔神名帳考證士代附攷〕かさまの神

春村案に、此うた（上文實方朝臣集所載）はし詞ともに誤字おほくして解しがたし、ためたふは爲任にて、實方中將の伯父、小一條贈右大臣濟時の嫡男、正四位下伊豫守、寬德二年月日被二射殺一と尊卑分脈に見えたる人なり、職事補任（一條院條）には、右少辨從五位下藤爲任、正曆六、正、十一、補、長德五、七、從四位下（侍從右中辨正五位下）と見えたり、なかよりは、仲頼か永頼かをりがたしといへども、恐らくは永頼なるべし、爲任朝臣の舍弟（濟時三男）中納言通任卿の男、參木師成、母從二位永頼女とあるをみるに、此永頼卿の女ははじめ爲任朝臣のかよはれたりしが、絕てのち通任卿かよはれけるなるべし、たゞそめしはたえそめしの誤字なるべし、宮のべのうへの御ぞのとあるところ誤字脫字おほかるべしさるからにかさまの神のゆくりなく聞ゆるなるべし、はしらひは耻らひなり、ゐめにまするはさすの誤字なり、かさの枕詞なり、式内越前國坂井郡、加賀國石川郡に笠間神社あり、

月待
日待

○按ズルニ賓方朝臣集ノ詞書ノ宮のべハ、宮の賣ナリ、うへの御ぞハ、上ノ御衣ニテ、宮賣命ノ人形ノ衣ナラン、はしハ端ニテ衣ノ端ナルベシ、らひハこひノ誤ナラン、卽チ其衣ノ端ヲ分ツハ、福ヲ求ムルタメナルベシ、爲任ハ毎年此衣ノ端ヲ求メタリシニ、今ハ既ニ疏遠ニナリタレバ、今年ノミハトテ乞ヒシナリ、歌ノ心めにますハ天ニ在スナリ、笠問ノ笠ノ緣語ナリ、ふりにしモ同ジ、

〔運歩色葉集津〕月待（ツキマチ）

〔日次記事一正月〕初三日　俗間三日月待

〔時令類聚乾〕月待（つきまち）、廿三夜待、

今世に月待日待といふ事あり、その事いつのころよりはじまりしにや、未だ詳ならず、然るに二川分流記に、此事有、永正の比なれば、既此時より前より此事世に有しとみゆ、其前の事はいまだ見あたらず、

〔倭訓栞前編十六〕つきまち　俗に十七夜待、廿三夜待なといへり、

〔桂林漫錄〕月待日待

待ハ祭ナリ、津利ノ反、知トナルニテ明ナリ、子待ハ子祭、巳待ハ巳祭、餘ハ推シテ知ルベシ、

〔二水記〕永正元年十月十五日壬申晴、今夜日待、禁中御連歌、

〔二川分流記上〕永正二乙丑年夏の比、六郎澄元御迎の爲とて、藥師寺三郎左衞門御使にて、阿波國へ被下ける、御約束の事なれば、澄元御上洛、御供には三好筑前守之長高畠與三等を召連させ給ひ、御上洛有ければ、京童共是を見て、これこそ細川の二つにならんずる基とさゝめごと申ける、去程に九郎殿へ丹波國を參らせられて、彼國へ下し被申ければ彌無念に思召ける所に魔のわざにてや有けん、政元四十二歳の時、永正四丁卯年六月廿三日の夜、御月待の御水めしける所を、御内の侍福井四郎、竹田孫七新名ともが藥師寺三郎左衞門、香西又六兄弟同心して、政元を誅し奉る、

〔實隆公記〕永正三年十月廿三日己巳、○略中了庵爲月待來臨、政爲卿來臨、

〔藤原爲和卿集〕故入道殿御前に奉り侍る歌

廿日あまり見し夜の月を待えてや心のやみの雲はらふらん

一期之間月待をさせ給ひて、看經に歌六首心經千卷念佛六萬反づゝ、每月廿三日毎に、させ給ひしゆゑやらん、七月○大永六年廿三日身まかり給ひける、

〔言繼卿記〕天文十一年正月廿三日、中御門へ月待に罷向、田樂にて一盞了、

〔日次紀事一正月〕日待　今夜○十五日於吉田卜部家修禁裏之日待、御撫物來、有下行、凡五月九月十月同然、

〔日次紀事一正月〕凡良賤正五九月、淸吉日、主人齋戒沐浴、自暮至朝不少寢、其間親戚朋友聚其家雜遊、今醒主人睡、或倩僧侶陰陽師、分誦經咒、待朝日出而獻供物祈所願、是謂日待、或三日、十七夜、廿三夜、廿七夜、有待月、其式粗同、凡日待之遊戲、高貴家有管絃拍子、十炷香競物香、貝合、雙陸、圍碁、將棊等遊樂、或詩歌連歌加留多、十種茶、十種酒、或謠謳、舞曲、琵琶法師、平家談等之遨興、若民間則淨瑠璃、說經、狂言、歌念佛、三美線、或作三絃、一節切、尺八、淨土雙陸、加留多、枕引、手相撲、頸引、腕推、髷推、居相撲、力持、福引、賦引、或繫繩於兩人之脚而互引之、是謂透逃子、凡百般戲樂無不爲之、

〔日本歲時記二正月〕此月及五月九月には、世俗かならず日待月待とて、日月の祭をする事あり、○中略今の世俗、士庶人にいたるまで、僧を請じ經をよませ、神位をまうけ、飲食をそなへて、日月の祭をなし、日待月待と號す、天子にあらずして日月を祭る事、なことに僭踰の罪のはなはだおそき事、何事かこれにゑかんや、○中略又神道家の說には、日待とは天照大神を拜するなり、月待とは月讀尊

を拜するよしいへり、天照大神は日の神、月讀尊は月の神なれば、かくいへるなり、もし吾邦の法に左たがひ、日月を拜せんとならば、あらかじめ沐浴齋戒し、未明に起て淨衣を著出る日を拜し、夕に月を拜すべし、日を拜するには十五夜を用ゆべし、かくのごとくにして拜するは、理において害なかるべし、かならず饌具をそなへ、神位を設くべからず、天子にあらずして日月を祭る事はおそるべき道理あり、凡非禮の祭をなす人は、福なくしてかへつて禍あり、いはんや天地日月を徹賤の家に祭るをや、我日月を久しく祭る人を見るに、家に禍おほきものあり、其身と子孫とを保ざるものも有、天道神明はおほやけなれば、かならず此人を罰し給ふにはあらねど、しかれどもかくのごとき僭妄の罪かさなりなば、なほか不善にわざはひするの道理なからんや、おそれつゝしむべき事なり、

〔古今神學類編五十一祭祀〕日待月待

按ルニ、日月ヲ祭ル事ハ、和漢ニ有之ト云ヘドモ、待拜ムト云フ事ハ、神記ノ所在未考、〔略〕〔中〕或記云、五十二代嵯峨天皇御宇、天照大神ノ託ニヨリテ、卜部氏祖、智治麿社務トナリテ、王城ノ東山如意嶽ニテ魚味ヲ備ヘ、日待ト云フ事ヲ始ム、此時ヨリ日待月待ハアル事也ト、又云、日待ト云事ハ、天照大神、天磐戸ヲ出給ヲ緣トシテ、今日曉天ハ則是磐戸ヲ開キ給時也、日沒ハ是入磐戸賜フニ一般ナレバ、人一生此神恩ヲ得ル事ヲ壽ガ故也、月待ト云事モ、夜明ノ恩ヲ不忘ノミニ非ズ、神代ニ天照大神ト月讀尊ト、一日一夜ヲ隔離テ住給フト侍ルヨリ以來、晝夜ノ神恩永蒙リ、且又人ノ魂魄兩眼皆是此二神餘光ヲ照ス、其神恩擧テ不可言ト、其理リハ然リ、其待拜ム事ハ僭禮ニ亘ル法式多シ、然レドモ、本朝ハ神國トシテ、神祭ノ差等其制法強チ異朝ノ如クニモ不聞事アリテ、一方ノ神習也、習合家說與テヨリ、和光同塵ノ語ヲアヤマリテ、日月共ニ穢中ニモ拜スルニ至リ、延テ佛菩薩トシテ、十三夜二十三夜ノ說、正五九月ノ說區々也、是皆神記ノ傳來ニ非ズ、〔略〕〔中〕異朝ニモ日月ヲ祭ル事ハ周禮ニ太宗伯以實柴祀日月星辰、〔略〕〔中〕兩朝共ニ尤可祭ノ最禮也ト云ヘドモ、今世ノ如ク汚穢中ニ供祭シ、或ハ歌舞遊宴シ、瞽者不潔ノ族ヲ招キテ醉沈シ、覺睡事ハ流弊ノ至テ甚ク褻瀆ノ尤キ者也、〔略〕〔中〕大神宮續秘傳問答ニ、今時參宮ノ前夜ヨリ、日ヲ待テ、瞽者ヲ招キテ、終夜絲竹ノ聲ヲ聞テ、夜明ケテ參詣スル事アリ、物音ハ參宮ノ前ニハ嫌フ事也、如何、答曰、音樂ハ六色ノ禁法ノ其一ニシテ、齋ノ內ニハ倭姫命重キ御誡ナレドモ、末代ノ凡慮ニ對シテトカク云難シ、心アラン人ハ愼ムベキ義也ト云々、想フニ、日待月待精進ト稱シテ、素食而已ヲ事トシテ、居所忌火衣服ニ至テハ一事モナシ、齋モ分限相應ナルハ可也、酒盃亂舞ニ至テハ、鬪爭ノ基、深可誡爾、

〔民間〕年中故事要言　日待月待

日待月待ノ事、或人云ク、是ハ神道ニ發ル、御託宣ニモ日月回四洲、雖照六合、當照正直之頭ト云々、人皇五十二代嵯峨天皇ノ御時、天照大神ノ御告ニ依テ、卜部氏ノ祖、春日大明神ヨリ二十七代ノ孫、知治丸ト云社務ニ勅命アリテ、王城ノ東山如意ガ嶽ニテ、日高見宮ヲ造テ魚肉ヲ供、別火シテ日待ヲナサシム、此時ヨリ日待月待ノ事起ナリ、日待ノ前七日潔齋スベシ、但シ七日ト限リテ勤ガタキ人ハ、一日ニテモ心ヲ淸淨ニシテ、己ガ代ニ神道ヲ心得タル人ヲ賴テ法ノ如ク勤ベシ、內淸淨トテ一心ヲ淸直ニシ、外淸淨トテ眼耳鼻舌身ニ穢ヲ觸ベカラズ、シカシテ當日ノ朝、日天ヲ拜ベシ、尤塀ヲ構、神酒御供ヲ供、燈ヲ立ベシ、心中ノ所願ヲ詞ニアラハシテ、謹請再拜スベシ、月待星待同前ナリ、マタ魚鳥ノ肉ヲ食スル事穢ナリトテ、精進ヲスル事僻事ナリ、神道ヲ尊ミ日天ヲ拜ニ、肉ヲ忌コト有マジキコト也、肉食ヲセヌハ佛者ノワザナレバ、日待神事ノ前ニハ沙汰ナキコトナリ、今ノ世、神道ニ背テ、出家沙門ヲ以テ、日月ヲ待コトアレバ、精進ノ事起侍ベリ、更ニ神道ノ沙汰ニ非ズ、マタ座頭猿樂サマザマノ遊圍碁雙六ナドシテ夜ヲアカシ若左ナケレバ、一夜ノ日待月待庚申待ニ退屈シテ、夜ノ明ヲ待兼、明日ハ前後ヲ忘レテ寢タグヒアリ、カヽル類ノ者、ナド